ジュニア日本の歴史

4 戦国の争い

朝尾直弘編

4 戦国の争い
朝尾直弘編

ジュニア日本の歴史

ジュニア
日本の歴史
4
戦国の争い

京都大学教授
朝尾直弘編
小学館

ジュニア日本の歴史 全6巻

1 日本の誕生
相愛大学教授 直木孝次郎
千葉大学教授 加藤晋平
奈良国立文化財研究所 佐原眞
大阪大学助教授 都出比呂志

2 貴族のさかえ
井上光貞
名古屋大学教授 早川庄八
国際日本文化研究センター教授 村井康彦

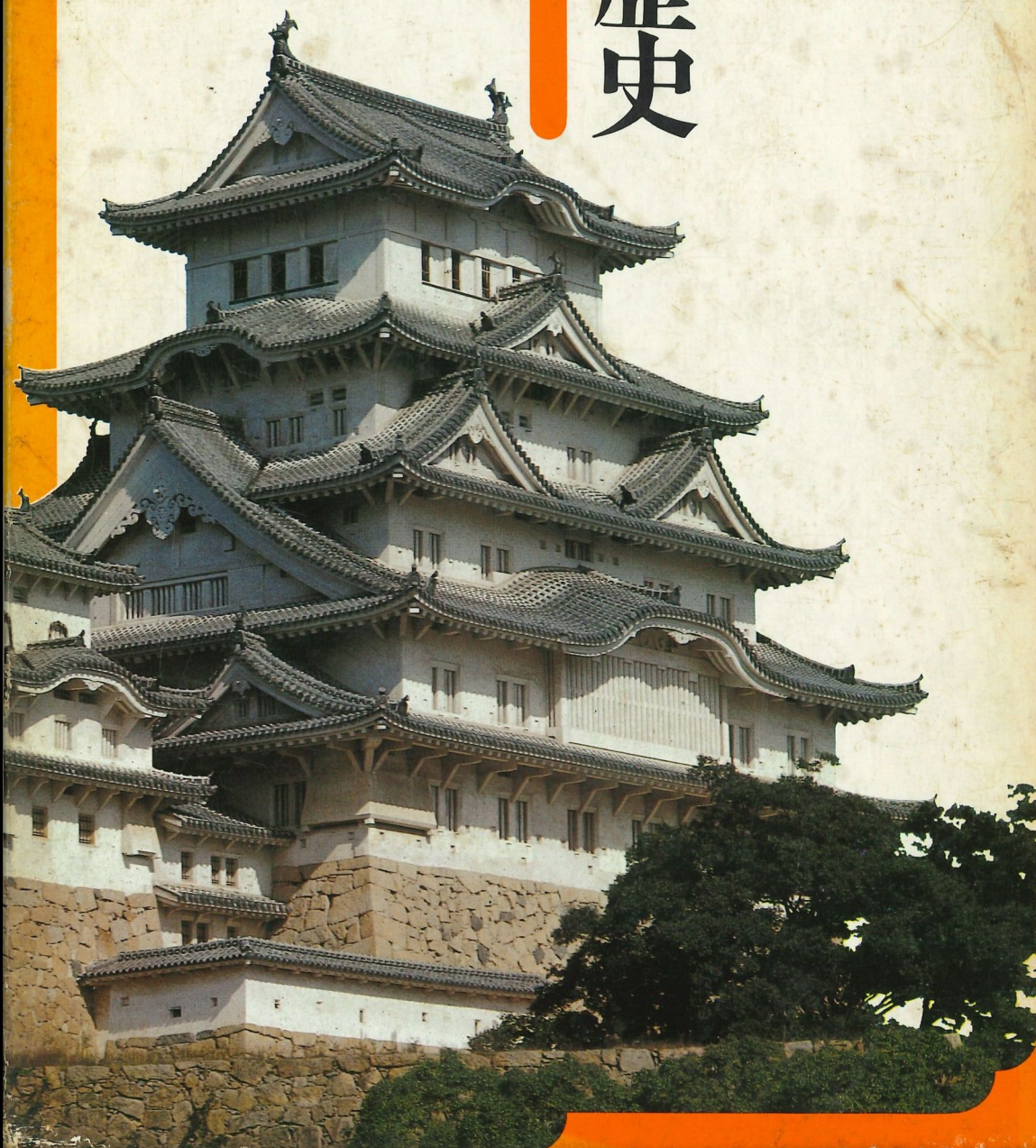
3 武士の実力
和光大学教授 永原慶二
東京大学助教授 五味文彦
筑波大学助教授 田沼睦

4 戦国の争い
京都大学教授 朝尾直弘
京都府立大学教授 藤井学
高崎経済大学教授 北島万次
東京成徳短期大学教授 池上彰彦

5 武家と町人
学習院大学名誉教授 児玉幸多
東京都教育庁主事 宮沢嘉夫

6 近代の日本
早稲田大学教授 鹿野政直

小学館

定価1000円（本体971円）
ISBN4-09-293004-6 C6321 P1000E

ジュニア

日本の歴史

4

戦国の争い

朝尾直弘編

小学館

小学館

法隆寺西院

ジュニア

日本の歴史

4

戦国の争い

京都大学教授　朝尾直弘
京都府立大学教授　藤井　学
高崎経済大学教授　北島万次
東京都立九段高校教諭　池上彰彦

小学館

はじめに

戦乱から平和へ

一五世紀後半から一七世紀前半までの二〇〇年たらずは、日本の歴史でも、もっとも波乱にみちた変革の時代であった。それは、戦乱にはじまり平和でおわる二〇〇年であった。

応仁の乱から一〇〇年のあいだは、ふるい権威とそれをささえた世のしくみが、音をたててくずれていった。社会の上から下まで、あらゆる階層の人びとは、ただ自分の実力をたよりに生きるほかなかった。戦乱のなか、死ととなりあわせの日常で、人びとはゆたかな生活をさがしもとめて、さまざまな動きをしめした。一方に、一向一揆や堺の町に代表される民衆の自治があり、他方に、軍事力と法の力によって領国支配をすすめる、戦国大名がいた。やがて、織田信長があらわれて、大名の手による天下統一をめざし、豊臣秀吉がこれをうけついだ。秀吉のおこなった太閤検地によって、あたらしい世の中の骨ぐみがかたちづくられる。関ケ原の戦いののちに成立した江戸幕府は、全国の大名と朝廷・寺社をきびしく統制し、士農工商の身分制度にもとづく、きわめてととのった封建支配を完成した。それが二六〇年にわたる平和をもたらすことになった。

■企画委員
学習院大学名誉教授　児玉　幸多
東京大学名誉教授　井上　光貞
一橋大学教授　永原　慶二

■執筆者
京都大学教授　朝尾　直弘
京都府立大学教授　藤井　学
高崎経済大学教授　北島　万次
東京都立九段高校教諭　池上　彰彦

明治大学教授　堀　敏一
東京大学教授　木村尚三郎
東京都立国立高校教諭　桑島　良平
日本海事史学会　石井　謙治
群馬大学教授　西垣　晴次
文化庁　大島　暁雄

■編集協力
東京都文京区立第五中学校　唐沢　勝敏
奈良市立二名中学校　古川　吉彦
府中市立第六中学校　渡辺　猛
千葉大学付属中学校　並木　茂文
東京都文京区立第一中学校　飯島平八郎
東京学芸大学付属小金井中学校　高山　博之

同志社高校　菊地　登

■資料提供・写真掲載協力（アイウエオ順）
愛野美術館　秋月郷土館　井伊家　厳島神社　上杉家　上杉神社　大分市　大阪城天守閣　大津賀家　岡山美術館　学習院　喜多院　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　京都大学　玉鳳院　宮内庁　久能山東照宮　建設省国土地理院　建仁寺　高台寺　光福寺　神戸市立南蛮美術館　国文学研究資料館　酒井家　佐賀県立博物館　持明院　浄願寺　上智大学　信松院　水府明徳会彰考館　静嘉堂　世良田東照宮　仙台市博物館　早雲寺　大東急記念文庫　高槻市立埋蔵文化財調査センター　致道博物館　長興寺　東京国立博物館　東京大学史料編纂所　東慶寺　東洋文庫　徳川黎明会　名古屋市　南蛮文化館　西本願寺　日光東照宮　日本民俗資料館　根津美術館　林家　福井県教育庁　朝倉氏遺跡調査研究所　前田育徳会　前田家　三井家　妙喜庵　大和文華館　竜泉庵　輪王寺　倭城址研究会

■写　真　岡本好明　亀田邦平　斎藤政秋

■絵　中西立太

■地　図　池田弘　高木守　永吉忠夫　毛利彰介

■装　丁　田辺誠＋桜井達之

■ケース写真　姫路城

ひろがる世界

この時代は、また、日本人がヨーロッパの人と文化にはじめて接触した時代であった。種子島に漂着したポルトガル人は、アジア以外にもひろい世界があり、そこにすぐれた文化のはぐくまれていることをおしえた。

このひろがった世界に自分をどう位置づけ、どのようにつきあえばよいのか、という問題があらわれる。国内統一のいきおいを、そのまま外へ拡張したような秀吉の朝鮮侵略があり、アジアの各地に日本町をつくった貿易商人たちの活躍がおきる。やがて、キリスト教をひろめる宣教師の、熱烈な活動にうたがいをいだいた江戸幕府は、鎖国への道をたどりはじめる。

都市と貨幣

天下統一は、都市と大商人の力をかりることなしには、不可能であった。

一五世紀には、人びとの日びのくらしをささえる市町が各地にさかえ、戦国大名は、領国内の商工業をさかんにしようとつとめた。京都は、堺や奈良とともに全国経済の中心となった。信長・秀吉・家康のもとで大商人が活躍する。

一六世紀には、日本の銀が世界に進出し、国内でも史上はじめて金銀貨が鋳造された。ついで銅銭も発行され、中国からの輸入にたよらなくてすむようになった。

江戸・大坂などあたらしい都市が、世界でもずばぬけた人口をもつ大都市として発展し、城下町や鉱山町などとともに、都市生活をひろめる役割をはたした。

外来文化と日本文化

現在の日本で伝統文化とよばれるものは、ほぼこの時代にできあがった。能・歌舞伎・茶の湯・生け花・各種の風流、あるいはわび・さびとよばれる芸術観。これらは、いずれも農村や都市の民衆生活のなかからうまれた。南蛮や、朝鮮・明の文化のうけいれ、東南アジア諸地域との交流が、世界のなかでの日本文化の独自性に目をひらかせ、伝統とよぶにふさわしい型をつくりだした。

信長以後、仏教の影響がうすれたところへ、ヨーロッパの技術や自然科学的知識がつたわり、儒教の合理主義とともに、人びとの物の考えかたをいちじるしく現世的にした。建築・絵画・彫刻に、この傾向がよくあらわれている。

民衆のあたらしい位置

一七世紀になると、世の中のしくみは、はっきりとかわってきた。百姓や町人は、かつては戦乱と凶作・病気などの不安にさいなまれながら、実力一本の自由なくらしをおくっていた。それがいまは、生活は安定にむかっているが、政治に手をだすことはできず、うまれながらの職業にしばられて生きなければならぬ。

しかし、武士団は城下町にあつまり住み、消費するだけの階級となった。この世をうごかす生産と流通は、百姓と町人のにぎるところである。そこに、つぎの時代をうみだす力のみなもとがあった。

もくじ

動乱の時代

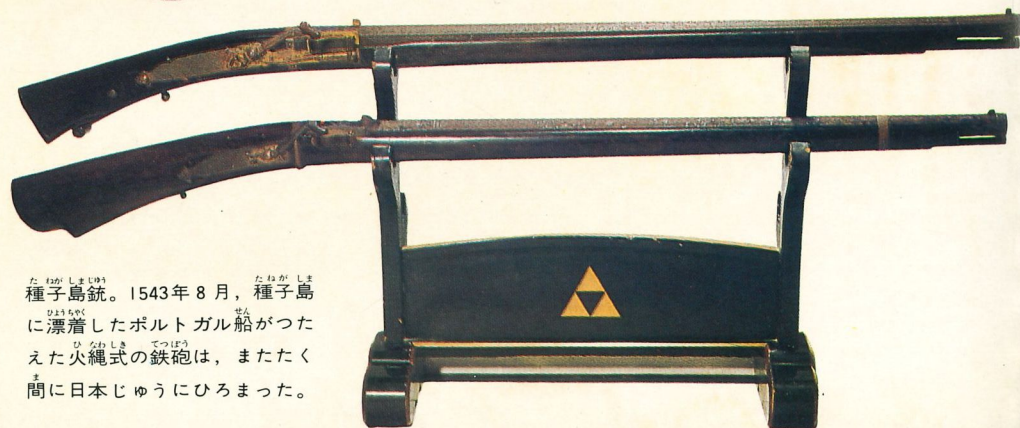
応仁の大乱をはじめ、うちつづく戦乱に、力をうしなった室町幕府と守護大名。かわって実力をたくわえた大名の家臣や土地の豪族が、戦国大名として登場してくる。住みよいこの世をめざす民衆は、一向一揆・法華一揆の旗のもとにあつまる。そんななかに、ヨーロッパからつたわったあたらしい文化。こうして、一六世紀の日本は大きくかわっていく。

頬当もあらあらしい、戦国武将の甲冑。徳川四天王酒井忠次の胴丸といわれる。

●この本の構成と、使いかた

1. **本文**　日本の歴史の流れを，豊富な例や，エピソードをもりこんで，わかりやすく書いた。
   i) (→P100) は関連する事がらが，100 ページにあることをしめす。
   ii) 年号は，ふつう西暦だけをしるしたが，必要なばあいには，日本年号をいれた。
   iii) 史料や和歌を引用するときは「　」をつけ，そのあとの(　)の中にその意味をしるした。
2. **上の欄**　本文をおぎなう写真・図解・地図・年表・系図などをのせた。また，本文中のむずかしい言葉や事がらの説明・人物の小伝記・史料などをのせた。
   各節の最初のページに，その節であつかわれているたいせつな内容のまとめをしるした。
3. **カラー口絵**　各時代の最初にはいるように配列し，その時代の代表的な文化遺産や，人びとの暮らしをあらわす絵画や遺品をのせた。
4. **かこみページ**　各時代の最後では，そのころの子どもの生活に関連した記事をあつかい，また，本文中には，第一巻…日本の神話，第二巻…船の歴史(1)などの記事をおさめた。
5. **世界の歴史**　日本と直接に関連する世界の動きは，本文中のその部分でふれた。いっぱん的な世界の動きは，巻末に世界の歴史をもうけて，まとめた。
6. **日本・世界の歴史年表**　日本の政治や文化のできごとを中心にまとめ，世界のできごともくわえた。巻末引き出しページの「生活文化史年表」では，人びとの暮らしを，絵や写真を入れて時代順にしるした。
7. **身近な博物館・資料館**　身の回りの歴史や，祖先の暮らしを調べる手引きとして，各地の博物館・資料館をかかげた。
8. **索引**　調べたいこと，知りたいことがどのページにあるか，一目でわかるように工夫した。
9. **巻末引き出し**　その巻に関連した実地で役だつ歴史散歩の地図，理解を助ける地図を入れた。

上陸した南蛮人

南蛮人と洋犬を蒔絵であらわした鞍(上)と，花模様のクルスをかざり，聖画をおさめた首かざり(左)。南蛮趣味の流行をよくものがたっている。

種子島銃。1543年8月，種子島に漂着したポルトガル船がつたえた火縄式の鉄砲は，またたく間に日本じゅうにひろまった。

交易する南蛮船

ヨーロッパ文化の渡来

一六世紀のなかばに，ポルトガル・スペインからつたえられた南蛮文化，なかでもキリスト教と鉄砲は，日本に大きな影響をあたえた。宣教師の力でキリシタンはふえ，鉄砲や貿易の利益をもとめる戦国大名や商人は，南蛮人を歓迎した。

フランシスコ＝ザビエル。イエズス会の創立者の一人で，1549年，日本にはじめてキリスト教をつたえた。口からでていることばはラテン語で，「十分なり，主よ，十分なり」。下の日本語は，「聖人ザビエル」の意味。

たくましい民衆

戦乱のうちにも日びのくらしはいとなまれる。ひたいに汗して物をつくる農民や職人、商いこそ自分のしごとと誇りをもつ商人。実力の世が彼らの夢を大きくそだてた。

ふすまや屏風の絵にも、人びとの生活や流行の風俗、町のにぎわいをえがいたものがあらわれる。

上流の町衆が紅葉狩りをたのしむようすをうつした高雄観楓図。

下剋上の世の中

この節を読むにあたって

応仁の乱のあとの約百年のあいだを、戦国時代とよんでいる。

この時代は、戦乱が全国にひろまり、実力のある者が、政治や経済や文化など社会のあらゆる面で頭をもたげ、これまでのふるい秩序や権威やいろいろのしくみがつぎつぎとこわされて、あたらしいものがうまれてきた。

歴史の主人公は、天皇や公家や将軍や荘園領主ではなくなった。あたらしい主人公は、百姓や商人やたくましい地方の武士であった。

おとろえゆく室町幕府

将軍義輝の最期

一五六五年（永禄八年）五月一九日、京都は、朝からむしむしとしていた。一三代将軍の足利義輝の住む室町御所は、ふだんのとおりの平和なたたずまいをみせていた。だが、午前八時ごろ、この室町御所をめざして、ひたひたとおしよせ、包囲をかためる軍勢がいた。松永久秀・三好長逸・三好政康らにひきいられた軍勢である。もとより彼らは将軍の家来である。

室町御所は、四方に堀と土塁がめぐらされているが、門の扉はまだできていない。義輝は完全に不意をつかれた。気がついたときには、ときの声をあげ、鉄砲を打ちかけ、松永方の軍勢がやすやすと門を突破し、御殿の中になだれこんできた。

義輝をまもるお供の武士は、一三、四歳の小姓までいれても数十人、あとは女や子どもである。だが、ひるむことなく、お供の衆はけんめいに切りむすんだ。

義輝自身も、塚原卜伝に剣をまなんだという伝えがあるほど、剣法の達人であった。みずから剣をとって、切ってでる。あるだけの刀を畳に突きたて、義輝は刀をとりかえとり

戦国時代の京都

かえ、屈強の敵兵をつぎつぎと切りふせた。人を切ると、刀は具足で刃こぼれができ、また人の脂がついて切れなくなる。柄には血のりもたまる。だから、剣法の心得がある義輝は、刀をとりかえとりかえ、切りむすんだ。

だが、相手は多勢である。母の慶寿院も自害した。家来もつぎつぎとたおれた。

激闘すること四時間、正午ごろ、最後の一人となった義輝は、もえさかる御殿の中で、障子もろとも槍で突きさされ、壮烈な最期をとげた。幕府と京都を支配する実権は、こうして完全に松永久秀らの手におちた。

白昼、公然と、将軍が家来におそれて虐殺される。どうして、このような事件がおこるような世の中に、なったのだろうか。

流浪する将軍

義輝の悲惨な運命は、応仁の乱後の足利将軍の生きかたをたどるとき、大なり小なり、どの将軍にも共通する運命だった。

足利義政の子の九代義尚は、近江（滋賀県）の守護六角高頼を討つため、近江へ出陣中、その陣中で、志をとげることなく二五歳のみじかい一生をおわった。遺骸が京都におく

足利義輝(1536〜65) 13代将軍。名ばかりの将軍だったが，実権をとりもどそうとして松永久秀に殺された。

室町（足利）幕府将軍の系図（数字は代数）

られて盛大な葬式がおこなわれただけ、あとの将軍にくらべると、まだしあわせだった。

一〇代義稙は、家来の細川政元のために追放されて西国にのがれ、一度は復職したが、またもや家来の細川高国に追われて淡路島ににげ、最後は阿波（徳島県）の片いなかで死んでいる。人びとは彼の流浪の一生を評して、「流れ公方」とよんだという。

義稙が細川政元に追われたあと、将軍になった一一代義澄は、こんどは中国の大大名の大内義興に追われて、近江ににげ、再挙を夢みながら、三二歳の生涯を、近江岡山の地でさびしくとじる。

将軍はロボット

義輝の父であった一二代の義晴は、細川高国にあと押しされて将軍になる。在職こそ二五年とながかったが、高国の失脚と、しばしば阿波の三好氏と対立したため、京都を追われて近江へにげ、国内の有力な武将をたよって転々とした。けっきょく京都に安住することなく、琵琶湖畔の坂本で世をさった。

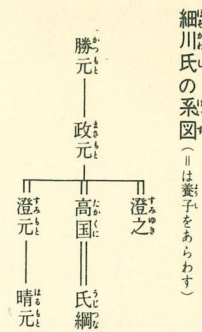
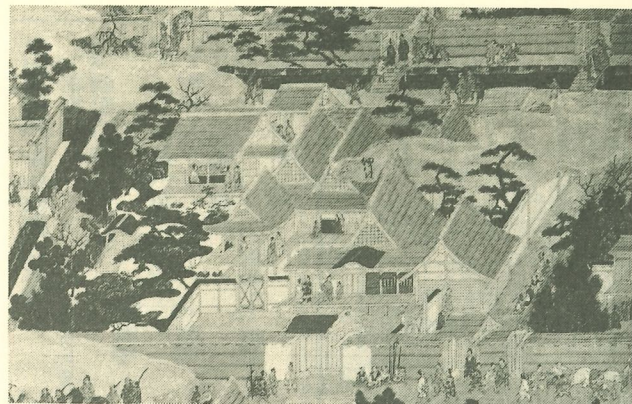
義輝の暗殺のあと、松永久秀が阿波からむかえて将軍にした一四代義栄の運命も、あわれである。義輝の弟の義昭を奉じて、織田信長が入京すると、久秀にもみすてられ、阿波にのがれて病没した。将軍在職一年たらず、二〇歳の若さで阿波の土となった。

信長に後援された一五代の義昭も、あとでのべられるように、やがて信長と対立し、都を追われて流浪し、将軍復職を夢みるが、最後は秀吉の家来となって大坂で没している。

このように、戦国時代の足利将軍は、だれ一人として、将軍にふさわしい人生をおくった人はいない。将軍になるもならぬも、すべて有力な大名や部将まかせである。つよい意

細川氏の系図（＝は養子をあらわす）

勝元—政元
- 澄之
- 高国＝氏綱
- 澄元—晴元

→細川氏の屋敷　信長時代の洛中洛外図屏風にみえる豪壮な住居。武士がまもりをかためている。→③巻P191

志をもつと、義輝のように殺される。まるでピンポン玉のように、役にたたなくなるとすてられる。しかし、かつぎあげるだけの効果は、やはりある。このような将軍のすがたは、戦国時代の幕府の政治を、まさに象徴するものであった。

幕政は実力者へ

幕府のなかで、将軍についでえらかった管領家も、将軍家とおなじ運命をたどった。家督争いからきた同族間の争いで、応仁の乱後、三つの管領家のうち斯波氏と畠山氏がはやくも勢力をうしなった。細川家だけが、摂津(兵庫県・大阪府)・丹波(京都府)・阿波(徳島県)・和泉(大阪府)・讃岐(香川県)・備中(岡山県)などの守護職を一族でにぎり、本家を中心にまとまりをみせて、幕府の実権をにぎっていた。

だが、修験にこって、「空にとびあがったり、空中に立ったり」して天狗のわざを修行したという一風かわった細川政元が、一五〇七年家臣に殺されると、細川家も本家の家督をめぐって分裂した。女ぎらいの政元に実子がなく、澄元と高国の養子二人が、家督をあらそいだしたからだ。中国一の守護大名、大内義興を味方につけた高国が、澄元を追って本家をつぎ、将軍に義稙、ついで義晴をかついで管領となり、幕政を牛耳った。

だが、この高国も、澄元の子の晴元とその部将の三好元長にひきいられた四国勢にせめられて、ほろぼされた。晴元が本家をつぐが、一五五二年、けっきょくその部将の三好長慶に追われ、幕府の実権は長慶の手におちた。長慶は、畿内と四国の八か国を領したが、晩年には、家臣の松永久秀をおさえることができなくなる。

こうして、戦国時代の幕府は、将軍に実権がなく、実力者がめまぐるしくかわった。細

三好長慶(1523〜64)
文化的教養もあった。

管領家　将軍を補佐する最高の役職である管領になれる家柄のことで、斯波・細川・畠山の三家があった。室町幕府の、やはり重要な役職である侍所の所司(長官)になれる赤松・一色・山名・京極の四家とあわせて、三管四職とよぶことがある。

川本流から細川支流へ、さらにその部将で阿波の豪族であった三好氏、ついでその家臣の松永久秀と、実力ある者が勝ちをしめ、幕府の実権は、下へ下へとうつっていった。

将軍も管領も、どうしてこのようにもろく、下の者に実権をうばわれたのだろうか。

没落する守護大名

まず、将軍は直属の家来が意外にすくない。必要なとき、守護大名に命じて、彼らに領国の軍勢をひきいて出陣させていたからである。だから、守護大名がそむいたり、軍勢を動員する力をうしなうと、たちまち将軍の軍事的な実力は、ほとんどなくなる。

有力な守護大名である管領家は、幕府の要職につくため、京都に住む。都の洗練された文化になれることができるが、領国の支配は、有力な部将を守護代にしてまかせている。まさかのときには、守護代にひきいられた領国の軍勢を、よびよせる。これでは、自分の領地に密着した支配はおろそかになり、領国にいる多くの家来との主従関係が、つよくなるはずがない。部将の三好氏に実権をうばわれたわけは、ここにある。

守護大名の代表である管領家がこのありさまでは、ほかの守護大名のたどる運命も、知れている。領国経営をおろそかにした報いは、彼らの上にもやってきた。

一五世紀後半から約一世紀の戦乱期を戦国時代というが、この時代、都よりとおい地方の、薩摩(鹿児島県)の島津、豊後(大分県)の大友、駿河(静岡県)の今川、甲斐(山梨県)の武田など数家をのぞいて、守護大名はつぎつぎとほろんでいった。

かわって、地方で実力をたくわえた守護代クラスの部将や、国内の武士が、守護の領国

守護大名と戦国大名—16世紀はじめ—

三管領家　四職家　守護　その他が戦国大名

をうばって、あたらしい大名に成長した。彼らのなかには、前身が商人や浪人であった者もいる。彼らは戦国大名といわれ、新時代の政治の主人公となった。

おちぶれる伝統の権威

朝廷の衰微　戦乱がつづいた戦国時代、社会のあらゆる面で、これまでの制度や秩序がこわされた。実力をもった下の者が、実力のない上の者をたおす下剋上の風潮は、武家社会だけでなく、時代の潮流となった。

すでにくずれはじめていた荘園制度も、戦国時代、わずかの地域をのぞいて、全国的に有名無実となった。この制度を保護した幕府の支配が全国におよばなくなり、それにつれて、荘園の武士や百姓が、中央の領主への年貢などの税を、実力でへらしたり、おくらなくなったからである。そのうえ、戦国大名は、荘園そのものの存在さえみとめなかったので、この傾向はますますつよまった。

そのため、荘園を多くもち、その収入にたよっていた皇室や公家や中央の大社寺は、経済的に大きな打撃をうけた。あいつぐ戦乱による被害も、これに拍車をくわえた。

戦国時代、皇居でさえ建物は貧弱で、周囲の築地はくずれ、昼は近所の商人や子どもが自由に出入りして、天皇の御座所ちかくで商売をしたりあそんだり、また夜ともなると、皇居のともし火がはるかとおくからも見える、というありさまだった。経費がないため、

武家の酒宴　当時の日記によると，毎日のように酒宴をひらく武士もおり自信にあふれたそのすがたがうかがえる。つまみをおいて冷やのまま飲んだらしい。

天皇になっても、即位の大礼を何十年もおこなうことができなかったり、また、なくなった天皇の葬礼の費用にこと欠くこともあった。

天皇でさえこのようなありさまだから、公家たちの生活も、らくではなかった。現地の荘園にくだったり、娘を地方の大名にとつがせたり、古典や和歌や学問を、京都の町人や地方の武士におしえて礼銭をもらったりして、体面をたもつ公家もあらわれた。

ある中流の公家は、秋風が吹きだすとかや（蚊帳）を質にいれ、翌年の初夏に、これをうけだした。腰刀や衣類もかたっぱしから質にいれ、ときには、近所の米屋から借金をしたと、その日記にしるしている。

反逆は武士の意気地　なにしろ、実力の世の中である。武士の社会では、主君が主君としてふさわしい才能と仁徳（これを器量といった）をそなえていなければ、家来は自分でその行動をきめた。主君が自分にふさわしい待遇をしてくれないと、家来はさっさと主君をかえた。主君に器量がなければ、家来は実力で主家をとりしきった。あるいは、反逆して主君を殺すことさえ、しばしばあった。

武士は、「男道」とよばれたつよい意気地を、なによりもおもんじた。よわい心は、なによりも武士の恥である。主君や仲間から不当にあつかわれたり、恥辱をこうむると、相手がだれであれ、それを力でぬぐうのが武士であり、勇者である。

主君が器量なくして家来を不当にあつかえば、反逆という武士の意気地でその恥辱をはらしても、この時代の武士にとって、不名誉なことではなかった。

地方の行商　近江国坂本(滋賀県)の町屋にたちよった行商人。わらじを買おうとしている。

座　平安末から鎌倉・室町時代にかけての商工業者・芸人などの、同業者の特権的な団体のこと。朝廷・有力貴族・大寺社を本所とあおぎ、製品の献上や労働奉仕の見返りに、本所の権威によって、独占的な販売権や、税の免除をうけた。

江戸時代の武士道は、これとちがう。たとえ主君にふさわしい器量がなくとも、武士はおのれをすてて奉公にはげんだ。それは、自己を犠牲にした従者の道徳であった。戦国の武士は、けっしておのれをすてない。下剋上も反逆も、恥ずべき行為というよりは、ときによってはつよき武士の意気地である。

主君のがわからいえば、一族であれ家来であれ、反逆の心をもつ者がいると、謀反されるまえに、すばやく処罰しなければならない。そして、日常にはつねに家来に忠節奉公をもとめねばならない。あるいは利益をもって、あるいは武威をもって、あるいは法をもって、つよい主従関係をうちたてた大名だけが、この時代に戦国大名として成長し、生きのこれたわけである。

新興の商人

実力による新旧勢力の交代は、公家や武士などの支配者のがわだけではない。都市や農村の住民のなかにも、おこっていた。ここでは商人のばあいをみてみよう。

朝廷や公家や大きな社寺を本所にして、諸国での販売の独占権をあたえられていたこれまでの座の商人の活躍が、応仁の乱をさかいに、にぶってきた。座の商人の特権を保護してきた本所そのものの権威が、おとろえたこともあるが、商工業の発達につれて、座に属さないあたらしい商人が活躍しだしたからである。

彼らは、これまでの座の商人にたいして、「新儀商人」といわれる新興の商人であった。彼らは、庶民信仰をあつめた新興の寺院をたのんで、あたらしい座をつくり、ふるい座の

説　法　武士・庶民もまじって，僧の話を熱心に聞く光景。写真は天台宗の寺だが，新仏教ではさらに多くの信者をあつめていた。

商人と対抗したり、また、地方の戦国大名に保護されて、その御用をつとめたりして、京都と地方のあいだを大手をふってあるきまわり、商売にはげんだ。

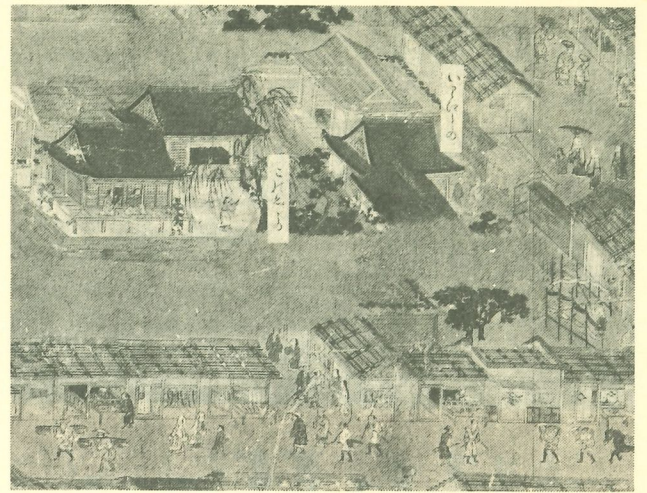
この新儀商人は、京都でもいなかでもおこり、この時代の全国的な商品流通の高まりに、大いに貢献した。それにおうじて、都市や農村で、これまでの市のほか、新興の商人によるあたらしい市が、多くたつようになる。こうして、ふるい社会のしくみが、どんどんとこわれていった。

ひろがる民衆仏教

庶民仏教の広まり

戦国時代になると、朝廷や幕府の権威がおとろえ、また、全国に多くの荘園をもっていた京都や奈良の南都六宗や天台宗・真言宗の大寺院の力がよわまった。荘園から年貢がとれなくなったり、戦火で伽藍が焼けたり、また焼けても朝廷や幕府が復興を援助できなくなったからである。

これら旧仏教といわれる諸宗にかわって、いわゆる鎌倉新仏教とよばれる浄土真宗（一向宗）・法華宗（日蓮宗）・禅宗などが、新興の武士や台頭する庶民のなかに、大きく勢力をのばしていった。

この時代の人びとは、いまの日本人とちがって、来世の存在をほんとうに信じていた。人生は五〇年だけではない。前世があり、来世がある。応仁の乱後の下剋上の風潮のなか

大都会京都　写真は，上京のにぎわいをしめす洛中洛外図屏風。往来のさかんなようす，店先の魚や刀・焼きものなどが見える。

で、武士や庶民の社会的地位はあがったが、彼らの生活はつねに不安定で、死の恐怖は日常のありとあらゆるところにひそんでいた。

生活がくるしく、死の恐怖につねにさいなまれていればいるだけ、来世への期待は大きくなる。僧や知識人によって説かれる、地獄の荒涼として悲惨な世界、それと反対の極楽浄土のたのしい生活。貴賤や貧富や男女の差別なく、平等に極楽への往生ができると説く鎌倉新仏教の諸宗の教えは、この時代の人びとの心をとらえて、大きく全国にひろがっていった。

法華宗は西日本へ　たとえば、一三世紀に日蓮がひらいた法華宗は、そのはじめ、せいぜい数百人の僧や信者が東国にいるだけの力しかなかった。それが、鎌倉末期に京都へ、南北朝内乱期に瀬戸内海沿岸から九州・北陸へひろがり、一五世紀にようやく全国にひろまった。テレビも新聞もない時代に、一つの宗教が全国にひろまるには、このように幾世紀もの歳月がかかる。

多くのお経のなかで、法華経だけが釈迦の真実の教えをつたえ、このお経の功徳を信じて、「南無妙法蓮華経」という題目をとなえるだけで、人びとは社会的身分や職業や貧富や男女の差別なく、この世では種じゅの利益が、あの世では往生が保証されると、法華宗は説く。きわめて現世的で、現実的でやさしいこの教えは、乱世を生きぬくこの時代の人びとの気持ちをよくとらえることができた。

そして、他宗をきびしく批判する法華宗の僧たちは、あるいは他宗と宗論し、あるいは

これを改宗させて、急速に信者をふやしていった。

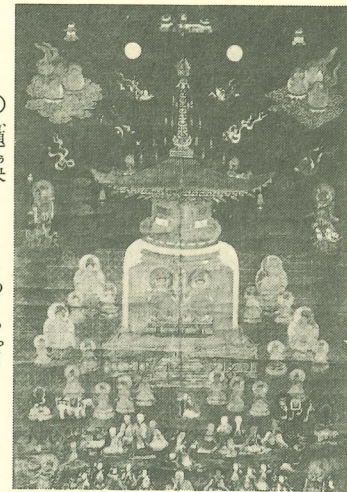
地方では、戦国大名やその家来、また、商人や農民たちに、多くの信者ができてきた。農村では、村長を中心に一村あげて法華宗になるという、一村皆法華という現象が、房総半島・山陽地方・阿波（徳島県）・肥前（佐賀県）など、法華宗がさかんな地域のそこかしこに、うまれてきた。

だが、戦国時代、法華宗がとくに勢力をもったのは、京都の町のなかであった。とびぬけて日本最大の、そして世界でも屈指のこの大都会の繁栄をささえた、町衆とよばれる商人や工人たちを、信者としてつかんだからである。応仁の乱の直前、京都の町衆の半分は法華宗であった、という史料もある。戦国時代になると、この大都会のまん中に、二一の法華宗の本山がたてられた。この本山を拠点にして、僧たちがつぎつぎと地方布教に旅だち、布教に成功すると、そこに末寺をたてて定住した。京都の本山を頂点に、地方末寺とその信者が組織され、戦国期の京都は法華宗のいわばメッカとなった。

日親の足跡　あたらしい信仰を未知の地方に布教していくことは、いつの時代でもたいへんな努力がいる。「なべかむり日親」については、すでに第三巻でふれているが、この時代の法華宗の広がりをまなぶうえで、いま一度、彼に登場してもらうことにしよう。

日親は六〇年におよぶ活躍期、旅から旅へ、布教にあけ、布教にくれた。京都を中心にして、東は房総から鎌倉、西は九州の諸国、転じて山陰は出雲地方、また畿内でも教え

禅天魔・真言亡国・律国賊・念仏無間　法華宗が他宗を批判するときのことば。禅宗や真言宗・律宗や浄土（真）宗を信じたり、ひろめたりすることは、地獄におちたり国をほろぼすもとだという意味である。

日蓮も、他の鎌倉新仏教をはじめた人とおなじく、天台宗の総本山比叡山延暦寺（滋賀県）で修行をしたが、その天台宗がはぶかれているのが、興味ぶかい。なお、天台宗も、法華経を根本教典にしている。

法華宗の絵曼荼羅（右）「南無妙法蓮華経」の題目を中心に諸仏，中央前に日蓮をえがく。

『立正治国論』 日蓮の『立正安国論』になぞらえて（→③巻P82），日親が義教に献じた。

を説いた。この巡路を幾度となく往復し、数十の寺をこれらの地方にたてた。

彼は他宗にたいして宗論をいどみ、それに勝ち、相手をつぎつぎと改宗させた。だが、成功もするが、反発もはげしい。日親が布教した肥前国では、他宗の寺が宗論に負けてつぎつぎ改宗し、国内の寺がすべて法華宗にかわったと、当時の記録にある。他宗のうらみはそれだけはげしく、幕府にうったえられたため、とらえられて京都におくられ、投獄されたこともある。

法難にもくじけず

他宗からの非難と法難は、つねに彼の布教につきまとった。禅宗びいきの将軍足利義教を改宗させようとしたため、日親はとらえられ、ふたたび投獄された。

牢屋は四畳の広さで、高さは一メートル三〇センチほど、そこに三八人の罪人がおしこめられたというから、すさまじい。そのうえ、天井からも壁からも、大きな釘がつきでている。うごくこともできない。苦しさは想像にあまりある。「南無阿弥陀仏」とたったひとこと念仏をとなえて転宗すれば、牢からだしてもらえる。だが、日親はいわない。おこった将軍は、日親を牢からひきだして、まっかに焼けた鍋を頭にかぶせ、舌の先を切り、「念仏をとなえろ！」とせまったが、それでも日親はいわない。

この迫害をのりきった彼は、ことばが不自由になり、頭は焼けただれていたが、都の人は「なべかむり日親上人」と、彼の不屈の精神をたたえ、かえって人気が増したという。彼のわかいころの話である。

南都六宗 奈良時代までにうけいれられた三論・成実・法相・倶舎・華厳・律の六つの仏教の派をいう。平安初期に成立した天台宗・真言宗にくらべ、信仰の集団というよりも、教典研究の学派の性格がつよかったが、のちに、宗派的な宗団を形づくる。

華厳宗の総本山が奈良東大寺であるように、奈良（平安京へ都がうつってからは、南都とよばれるようになる）に中心をおくものが多かったので、南都六宗といわれるようになった。

名仏の巡拝 武士も商人も乳飲み子をもつ母親も，それぞれの願いに手を合わせた。

貴族仏教の庶民化

いっぽう天台宗や真言宗、あるいは南都六宗などの旧仏教の寺のすべてが、手をこまねいて衰微の道をあゆんだのではなかった。

貴族というふるくからの後援者をうしなうと、これらの寺は、それにかわって武士や民衆の信仰をあつめ、庶民社会のなかで生きのこる道をさがした。貴族の寺から庶民の寺へのうまれかわりである。また、そうしなければ、乱世のなかで、これらの寺は生きのこれない。

浄土・法華・禅などの新仏教の寺は、仏像を重視しない。だから、よい仏像がない。しかし、旧仏教系の寺は、仏像崇拝が中心だから、天平仏・平安仏・鎌倉仏のすぐれた仏像が、いくらでもある。いままでは貴族にしかおがませなかった仏像を、寺は積極的に庶民に開放した。

釈迦や観音・不動・薬師・地蔵・文殊など、さまざまな仏像について、その仏の役割にふさわしく、病気・災害・火災・長寿、はてはなくしたものの発見まで、いろいろの霊験と御利益が寺のがわから世に宣伝され、庶民の信仰をあつめだした。

庶民の信仰をあつめた仏像は、その地方地方で、名釈迦・名地蔵・名薬師・名観音とたたえられ、それらを巡拝する巡礼の風習が、戦国時代から庶民社会のなかにはじまり、やがて江戸時代にさかんになった。巡礼たちは、巡拝した寺でらにいろいろの願いを書いた札をおさめて、仏に御利益をいのった。

北は津軽三十三カ所観音霊場、南は九州三十三カ所観音霊場まで、全国いたるところ

に巡礼の風習が分布するが、なかでも、「お遍路さん」とよばれて、弘法大師のゆかりの寺をまわる四国八十八カ所霊場と、名観音を巡拝する西国三十三カ所観音霊場巡礼が、こんにちもなおさかんである。

寺でやすむ巡礼　野宿も覚悟の上，途中でたおれることも多かった。

巡礼札　いまは紙札だが，当時は木札を寺の壁や柱に打ちつけた。

百姓のもちたる国

ひろがる一向宗

戦国時代、そのころ一向宗といわれた(浄土)真宗の広まりかたは、めざましかった。本願寺に蓮如がでたからである。

鎌倉時代に親鸞がおこした真宗は、武士・農民・商人などという職業や身分に関係なく、すべての民衆は阿弥陀仏の本願を信ずるだけで、だれでも極楽往生ができる、と説いた。だが、この教えが一度に全国にひろまったわけではない。親鸞の没後、幾世紀ものあいだ、東国を中心に、いくつかの門徒集団ができあがりつつあるにすぎなかった。

親鸞が晩年に住んだ場所であり、またそのお墓をおもりした御堂から発達した本願寺は、はじめ、京都東山の大谷にあった。いまの知恩院の境内の一画である。大谷本願寺といわれ、蓮如がうまれた室町時代中期には、まだ天台宗に属し、さびさびとした小寺にすぎなかった。参詣の人もすくないこの貧乏寺の寺の子として、蓮如はうまれる。浄土真宗だけは、他宗とちがって、親鸞いらい、僧でも結婚することができ、寺は、親から子へという血脈によって相続されていたからである。

蓮如の手紙(上)　加賀国(石川県)の講からよせられた年貢と志にたいする礼状。
蓮如兼寿(1415～99)(左)　本願寺8世。

蓮如の布教

蓮如は、八五年のそのながい生涯を、熱心な地方布教にささげた。近江(滋賀県)・摂津(大阪府・兵庫県)・三河(愛知県)・河内・和泉(以上大阪府)・越前(福井県)・加賀(石川県)などの諸国へ、布教の旅がつづいた。この間の一四六五年、大谷本願寺は、比叡山の山徒によって焼かれてしまったが、この法難にも、彼はくじけなかった。

応仁の乱のさいちゅうの一四七一年から五年間は、彼はとおく越前の吉崎に寺をたて、ここを拠点にして、北陸に多くの門徒をつくった。

蓮如の布教は農村に重点をおき、まず村のリーダーである武士や乙名百姓といわれた有力な農民を教化し、ついで一般百姓を信者にした。村長の屋敷や村の中心に堂をたて、本願寺の末寺とした。村長が末寺坊主となるばあいも多かった。村をあげて本願寺の門徒であり、末寺は村びとの信仰の寄合の場であるとともに、まさかのときにはたてこもる城となった。彼らは、村の末寺を中心に、講とか組とよばれる信仰の組織をつくって団結し、末寺の坊主をつうじて、本願寺に支配された。蓮如が布教に成功した諸国の郷村に、このような組織ができあがった。

本願寺と農民

蓮如は、村を去っても、かつて宗祖の親鸞が東国門徒に説いたように、やさしいかなまじりの書状を各地の門徒にあたえ、たえまなく信仰の道を説いた。門徒たちは、末寺をつうじて、志納銭といわれたお布施を蓮如におくった。

一四七八年から、蓮如は、京都の郊外の山科盆地に、本願寺再建をはじめた。いわゆる

この世の仏国　写真は現在の西本願寺大広間。金碧のふすま絵にとりかこまれ，あざやかならんま彫刻をほどこした代表的な書院建築。（→口絵P92）

山科本願寺である。

周囲を堀でかこんだ城郭づくりで、寺内には、地方門徒の参詣の便宜をはかって、多くの町屋や宿坊がたてられた。六町におよぶ商業地域もでき、中心には、阿弥陀堂と親鸞の像を安置した御影堂、それに蓮如の住む寝殿など、壮麗な建物がつくられた。おとずれた都の貴族ですら、境内の広大さと伽藍のうつくしさにおどろき、あたかもこの世の仏国のようだと、賛嘆したほどであった。

諸国の末寺の坊主や門徒の参詣がつづき、境内はたいへんなにぎわいである。蓮如は、後世御免（極楽往生の保証）をもとめてはるばる本願寺に参ってきた彼らと、あぐらをかいてむかいあい、したしく話しかける。冬には燗をした酒が、夏には冷や酒が、門徒の前にさしだされた。

酒をすすめる蓮如の足首には、近江から東海、東海から北陸へ、そして畿内の諸国を布教しつづけたその労苦を語るかのように、わらじをむすんだひものあとが、くっきりとのこっていた。旅から旅への民衆への語りかけが、地方門徒の心を確実につかんだのだ。

地方農村の門徒の寄合である講を底辺にして、その上に、村の末寺とその末寺の坊主がいる。末寺坊主は村のリーダーの一人である。いくつかの末寺は、地域ごとに、有力な寺を中心にまとまる。この有力末寺に、蓮如は、彼の子どもを住持として配置した。一門一家衆とよばれる地方の有力な真宗寺院が、これである。この頂点に山科本願寺があり、蓮如が法主として全国の末寺を支配する。

一向一揆の力　「南無阿弥陀仏」のむしろ旗をおしたて，一団となっておしよせる農民たち。刀や弾丸をおそれない門徒の大群に，いくさの専門家である武士たちもなすすべがなかった。

蓮如は、戦国時代の一四九九年、八五歳の高齢で、山科本願寺で世をさった。だが、このときの本願寺はもはや、かつて蓮如がそだった、衣食にもこと欠き、勉学の燈油もままならなかったあの貧弱な大谷本願寺では、けっしてない。諸国の幾十・幾百万の農民門徒を信仰の力で支配する、日本屈指の農民の法城になっていた。

一向一揆

本願寺の門徒たちは、いろいろの仏のなかでただ一つ、阿弥陀仏をひたぶるに信じ、念仏をとなえた。ひたぶるにということを、そのころ一向といった。だから本願寺門徒は一向宗とよばれた。

農村の門徒たちの講は、末寺坊主や村の有力者である武士や大百姓の門徒が指導した。農村の日常生活のリーダーが、すなわち信仰のリーダーである。

しかし、現実の村の生活では、京都や奈良の荘園領主や大名たちが、年貢とか公事といわれる雑税・兵糧米・夫役などの名目で、彼らの収穫物や労働力を、たえまなくとりあげている。生活がきびしければそれだけ、一粒の米でも麦でも、村の住民は自分たちの手もとにのこしたい。領主の税のとりたてにたえきれなくなったとき、一般の村では、住民が団結して領主にたいして一揆をおこす。これが、いわゆる土一揆である。

本願寺門徒が多い地方でこの一揆がおこると、それはふつうの土一揆とはちがう。門徒たちが住む一つの村、いやその地域の住民こぞっての一揆であり、本願寺を頂点とする全国的な組織をつうじて、他国にまでよこの連絡がひろがる。しかも、内部の

安芸門徒の旗　信長に抵抗した毛利氏の安芸水軍には，一向一揆の勢力もくわわっていた。「進むは往生極楽 退くは無間地獄」と，一歩もひかない決意がみえる。

年貢・公事・段銭　この時代、荘園領主や幕府・大名によって課せられた税金には、田畑にかけられる年貢と、人ごとにかけられる公事とがあった。このほかに、幕府や大名は、国家的な行事をおこなう臨時の出費を名目に、田の面積におうじて（段別）段銭をかけたり、家の棟数におうじて棟別銭をかけたりした。段銭・棟別銭は、もとは臨時のものであったが、だんだんといつでも課せられるようになっていった。

団結は、阿弥陀への信仰という、つよい信心によってむすばれている。荘園領主である東大寺や興福寺や延暦寺の宗教的権威も、まして大名の世俗の権勢も、けっしてこわくはない。彼ら門徒が信ずるのは阿弥陀一仏であり、その本願によって極楽往生はすでに保証されている、という信念もある。本願寺門徒が急増した地域では、寺社の荘園の年貢の上納が、たちまちにしてとだえると、当時の記録にのこっている。門徒たちは、確信をもって、荘園領主や大名の支配に抵抗しはじめた。

加賀一向一揆　本願寺門徒の一揆を一向一揆とよんでいるが、その最初の大規模なものは一四八七年、加賀（石川県）の門徒がおこした。

蜂起した門徒は一〇万とも二〇万ともいわれ、守護の富樫政親の軍勢におそいかかった。国内の他宗の寺院をつぎつぎと破壊し、一揆のいきおいはすさまじい。政親は、ついに翌年、高尾城でせめほろぼされてしまった。一国の守護が、農民を中心とする一揆のためにほろぼされたのは、前代未聞のことであった。刀・槍・弓矢・竹槍・鍬・鎌、はては石までが、彼らの武器となる。後期の一向一揆には、すばらしい鉄砲隊もあらわれてくる（→P111）。

一向一揆には、よろい・かぶとに身をかためた騎馬武者はすくない。大名の軍勢にくらべると、装備は格段に見おとりがする。しかし、なんといっても、人数は多い。何万、何十万という雲霞のような一団である。女や子どもも、まじっている。女や子どもも、大名の城攻めには、土やごみをはこんで堀になげこみ、これをうめる手助けをする。

守護の富樫政親にひきいられる精兵も、これではたまったものではない。騎馬でけちらしても、一揆は際限なくせめてくる。城をすててにげても、郷村も野も山も、一向一揆の旗じるしばかりである。政親をほろぼしたあと、加賀の一向一揆は、越前（福井県）にはいって朝倉の軍勢ともたたかい、また能登へもいきおいをのばそうとした。

百姓のもちたる国　加賀では政親滅亡のあと、「百姓のもちたる国のや（よ）うになり。」と、当時の記録にみえるように、実権は百姓たちの手におちた。ここでいう百姓は本願寺門徒のことである。

大名でもなく、荘園領主でもなく、百姓門徒が支配する国、それが一向一揆が勝利したあとの加賀国のすがたであった。この門徒の上には、京都の山科本願寺がある。これ以後約一〇〇年間、加賀に荘園をもつ領主も、またこの国になにかの税をかけようとする幕府も、本願寺の了解なしには、年貢も公事も段銭も、なに一つとれなくなった。加賀は本願寺の領国となったのである。

一向一揆は戦国時代の特色である。だが、それは加賀だけでおこったのではない。本願寺門徒が多い地方では、どこでも、いつでもおこりうる。能登（石川県）でも、越前でも、三河（愛知県）でも、伊勢（三重県）でも、大和（奈良県）でも、近江（滋賀県）でも、また飛騨（岐阜県）の奥地でも、戦国大名とたたかう一向一揆の輪がひろがりだした。

国内の農村支配をもとにして権力をうちたてようとする戦国大名と、その農村に蜂起する一向一揆との対決は、やがてさけられないものとなるのである。

石山の鉄砲隊　一向門徒最後の拠点石山本願寺にこもる鉄砲隊。鉄砲で全国統一をすすめてきた信長も，ここの鉄砲隊には手をやいた。

この節を読むにあたって

戦国大名は、実力によって、一つの地方ぜんたいを支配する。

実力といっても、いろいろな実力がある。武力もあれば、知力もある。商売の才能があれば、軍事的な能力もある。人をまとめ、ひきいていく力も必要だ。

多くの戦国大名が、自分のもつ力をふりしぼって、領国支配をつくりあげようと、しのぎをけずった。

そこへ、あたらしい武器である鉄砲があらわれ、戦闘や戦術に変化をおよぼす。

世の中のしくみも、すこしずつかわりはじめる。

戦国大名の登場

あらわれた群雄

一向一揆の百姓たちは、自分たちの住んでいる村むらを中心にして、一人一人はよわくても、一村みんなの団結と、阿弥陀如来にすくわれるという信仰をもとに、自分たちの生活をまもろうとし、そのためには、自分たちの国をもとうとさえした。

自分の力量ですすめる政治

これにたいして、自分の腕と実力にたより、自分の器量によって家来をひきつれ、武力や政治力を基礎に、国づくりをしようとめざした一群の人びとがいた。戦国大名としてのしあがったのは、この人びとである。

駿河国(静岡県)の戦国大名今川義元は、はっきりのべている。

「ただいまは、おしなべて、自分の力量をもって国の支配をおこない、平和をたもとうとする時代である。」

武力をもとに国をおさめ、平和をたもとうとすれば、百姓や町人が生産したものや、商売によってえた利益を、年貢や税金のかたちで、うんととりあげなくてはならない。

まむしの道三 ほぼおなじころ、やはり戦乱にあけくれたイタリアでは、ニッコロ＝マキァベリという人が『君主論』を書いている。この本のなかで、マキァベリは、国をまとめ、おさめるには、君主は目的のためには手段をえらんではならないとのべている。

斎藤道三(一四九四〜一五五六)の生涯は、この『君主論』を地でいったようなところがあり、人びとから「まむし」とあだ名をつけられ、おそれられていたといわれるのも、なるほどとおもわれる。

百姓も戦国大名も、おなじく平和をねがいながら、ものの考えかたと行動は、まったくぎゃくであった。いずれは両者の対決はさけられないであろう。ここでは、しばらく、大名たちの動向を追うことにしよう。

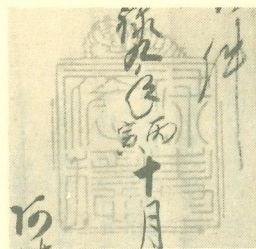
油売りから大名へ

織田信長の夫人濃姫の父で、美濃(岐阜県)の大名であった斎藤道三は、実力一本でのしあがった戦国大名の典型といえよう。

道三は、山城国西岡(京都市郊外)の地侍の子で、幼名を峰丸といった。他のきょうだいとは母がちがったので、京都の法華宗の寺である妙覚寺にいれられた。武芸にはげむため、まもなく寺をでて還俗(僧侶から俗人にもどること)したというから、あるいは軍坊主として、一向一揆との戦いなどにかりだされていたかもしれない。

そのころ、松波庄五郎と名のったが、油商人の婿となって山崎屋庄五郎となり、油売りの行商をしながら、一五二〇年ごろ、妙覚寺時代の友人をたよって美濃にはいり、ここで店をもった。

ところが、美濃国の守護大名土岐氏は、家督争いがつづいて、家来たちも対立しあい、領民は困窮し、一揆の反抗もしばしばおきていた。庄五郎は、土岐家の重臣長井氏の家来にちかづき、油屋を廃業して武士となり、松波新九郎と名をあらためた。やがて、長井氏の信用をえた新九郎は、美濃の国人西村家をついで、西村勘九郎となり、守護大名土岐政頼の弟頼芸をもりたて、兄政頼を討たせ、頼芸を美濃の守護とした。

一五三三年になると、勘九郎は長井新九郎規秀と名のっている。恩人の長井氏を頼芸に

北条早雲(1432～1519)・氏綱・氏康(左ページ右から)　無名の身から関東をおさえた早雲と，子・孫。上は北条氏の虎の印。

稲葉山城　長良川をのぞむ海抜338ｍの稲葉(金華)山頂にある。道三の孫龍興のとき信長にせめられて落城。

中傷し、殺させて、そのあとをついだとつたえられている。

五年後、守護代斎藤氏をついで、斎藤左近大夫利政と名のった道三は、ついに、頼芸を追いだし、稲葉山（岐阜市）に城をきずき、山城入道道三と号して、美濃一国の主人公となった。

五度六度と名をかえるたびに、由緒のある家をのっとり、ついに「国盗り」に成功した道三こそ、はげしくうごくこの時代の一面を代表する人物であった。もっとも、そのあまりにあくどいやりかたには、家来や領民の反発も大きく、晩年は孤立し、長男義龍に殺されねばならなかったのだが。

北条早雲

道三よりすこしはやく、関東地方に活躍の場をきずき、戦国大名の時代をきりひらいたのが、北条早雲である。

早雲の出身も、はっきりしない。もとは伊勢新九郎長氏と名のり、備中（岡山県）に領地をもつ武士で、室町幕府の重臣伊勢氏の一族であったらしい。妹が今川義忠の側室となったことから、駿河にきて、今川氏につかえた。義忠死後の家督争いのなかで、妹のうんだ氏親をささえ、今川氏が戦国大名としての基礎をうちかためるのに、早雲は大きな役割をはたしたとみられる。

しかし、早雲が歴史の舞台に登場するのは、彼が六〇歳になってからのことである。当時、関東で室町幕府を代表する地位にあったのは、足利義政の弟で、堀越公方とよばれた政知であった（↓P15系図）。早雲は、一四九一年、政知が病死すると、たちまち駿河から伊豆に侵入し、かわったばかりの堀越公方の足利茶々丸を殺し、韮山城を占領した。

四年後には、相模にはいって、小田原城から城主の大森氏を追いだし、周囲の敵とたたかいながら、じっくり伊豆と相模の領国経営にあたった。やがて、鎌倉を手にいれた早雲は、ときに八一歳になっていたが、

「枯るる樹に　また花の木を　植ゑそへて　もとの都に　なしてこそみめ（してみせよう）」

と、鎌倉幕府の再興をめざす、意気さかんな歌をよんでいる。

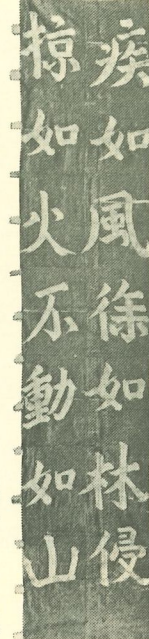
早雲は、八九歳で死ぬまで、へいぜい身をつつしみ、用心ぶかく、こまやかな心づかいをもって人に接した。家来たちには、早寝早起きをすすめ、正直と率直を愛し、「上下万民にたいし、一言半句にても虚言（うそ）を申すべからず」、うそをつけば、かならず人にみかぎられる、と教訓をのこした。

そのせいか、道三とちがって、息子の氏綱から孫の氏康へと、早雲の志はうけつがれ、北条氏は、西関東一帯にいきおいをふるう大戦国大名へと発展した。これを鎌倉幕府につかえた北条氏と区別して、後北条氏とよんでいる。

武田信玄と戦国の政略

北条氏康と、ときにたたかい、ときに同盟をむすんだ好敵手が、武田信玄である。戦国大名は、みながみな、成りあがりであったわけではない。ふるい由緒をもつ家にも、社会のうごきにおうじた変化がおよんでいた。

武田信玄は、名を晴信といった（「信玄」は、頭をまるめたあとの法名）。甲斐（山梨県）の守護

武田信玄(1521〜73)と風林火山の旗印　「疾きこと風のごとく，徐かなること林のごとし，侵掠こと火のごとく，動かざること山のごとし」。上は龍の印。

の家柄で、将軍家とのつながりもふかく、晴の一字は、一二代将軍足利義晴からもらったものであった。

信玄は、二一歳のとき、父信虎を追放し、甲斐国の実権をにぎった。信虎の政治に不信をもっていた家来や領民たちが、信玄のこの処置をかげでささえたといわれる。守護でも、人びとの信望をえられない者は、その地位をたもつことのできない時代になっていた。

信玄は、国内を統一すると、「甲州法度之次第」という領国支配の法をさだめた。そこには、「もし信玄の支配のしかたが、この法にそむくとおもわれたら、身分の上下を問わず申しでよ。」と書かれてあり、自分自身も法にしたがうことを、あきらかにしている。

信玄はまた、「天下は戦国の世である。」と、自分の生きている時代を、正確につかんでいた。生きのこるためには、ときに隣国と同盟し、ときにすきをみてせめほろぼした。

父信虎は、今川氏とむすぶため、信玄の姉を義元にとつがせた。彼女が死ぬと、信玄は義元の娘を長男の妻にむかえた。今川氏がおとろえると、織田信長の養女を二男の妻とし、自分の七歳になる娘と、信長の長男で一一歳になる信忠との婚約をむすんだ。

これは政略結婚であって、信玄だけでなく、すべての大名がおこなった。自分をまもるために、相手の力を一時おさえたり、利用したりするためのものであるから、ときには家族を犠牲にしなければならないこともあった。信玄が妹のとついでいた諏訪頼重をほろぼし、織田信長が妹お市の方の夫浅井長政をほろぼした(→P103)のは、その一例にすぎない。

上杉謙信(1530〜78)と毘の旗　宿敵信玄に塩をおくり，その死後は甲斐をせめなかったといわれる義の武将。毘はいくさの神，毘沙門天。上は獅子の印。

川中島の戦い

やがて信玄は、信濃(長野県)に侵入し、小笠原・諏訪の諸氏をやぶり、北にすすんで村上氏をせめた。村上氏が越後(新潟県)の上杉謙信に助けをもとめたため、信玄と謙信は、川中島(長野市)でたたかうことになる。

上杉謙信は、越後守護代の家にうまれ、もと長尾景虎といった。兄や一族の者とたたかって国内を統一し、ちょうど北条氏康に追われた上杉憲政から、上杉の家督と関東管領の職をゆずられたため、上杉氏を名のって、北条氏と対立し、はるか関東にねらいをさだめ、一度は北条氏の本拠小田原城までせめこんだこともあった。

信玄に川中島をとられると、謙信は、関東への連絡を絶たれることになる。ぎゃくに、信玄には、越後にせめこむ突破口となる。

こうして、一五五三年から六四年にかけて、五度におよぶ戦いがおこなわれた。とくに第四回の六一年の戦いは、信濃守護となった信玄が、海津城をきずいたことにはじまり、妻女山の本陣をおりた謙信が、乱戦のなかをただ一人、信玄の本営に切りこむという、はげしい戦いとして知られている。

まっすぐな気性の謙信と、政略にたけた信玄の対決は、それぞれの好みにしたがって、後世の日本人にさまざまに評価され、語りつがれた。

二正面の戦い

このほか、全国各地方において、地元の武士である国人たちをしたがえた大名が、ふるい権力をたおし、まとまった領域の支配をつくりあげようとして、たがいにしのぎをけずっていた。

彼らは、国人や農民の勢力をおさえて、領内の安定をはかるとともに、すきをみて領外から侵入しようとする隣国の大名とたたかい、よりひろい領域を確保するという、二正面作戦にたちむかっていた。だれが勝利者となるか。まだ、わからなかった。

戦国大名の国づくり

毛利元就の教訓　このころ、中国地方では、尼子・大内・毛利三氏による、はげしい戦いがくりひろげられており、そのなかから、毛利氏がしだいに頭角をあらわしてきた。

尼子氏は、出雲（島根県）の守護代の家柄で、経久が守護の京極氏に反抗して、山陰に勢力をはり、月山富田城に本拠をおいた。大内氏が、周防・長門（以上山口県）の守護として、幕府政治にも大きな力をおよぼしたことは、第三巻でもとりあげられている。

これにたいして、毛利氏は、安芸国吉田荘（広島県高田郡）の一領主から出発した。毛利元就は、はじめ尼子氏につかえ、ついで大内義隆の家来となり、尼子と大内がたたかうあいだに、安芸国に勢力をのばした。

そのうち、大内義隆が重臣陶晴賢の反逆にあってほろびたのを機会に、たくみに晴賢を厳島におびきよせ、一五五五年一〇月一日、嵐をついて島に上陸、急襲をくわえ、主力部隊を全滅させ、陶氏をほろぼした。

元就と三本の矢の教え　伝説によると、毛利元就はある日、三人の子にそれぞれ矢を一本ずつわたし、折るように命じた。三人は、みなわけなく矢を折ってしまった。つぎに元就は、三本の矢を束にしたものをあたえたところ、こんどは、兄弟のだれもがどんなに力をいれても矢は折れなかった。

元就は、おなじ三本の矢でも、ばらばらであれば折られてしまうが、三本がしっかり束になっていれば折れることはないと、兄弟三人が力をあわせて毛利家を繁栄させるようにおしえた。

隆元は早死にをしたが、元春・隆景は父の教えをまもり、隆元の子輝元をもりたてて毛利家をさかえさせた。

厳島　陶晴賢の5分の1の軍勢しかもたない元就は、平野での戦いをさけ、ここ厳島（広島県）に城をかまえて決戦場とした。

元就が、隆元・元春・隆景の三人の子に、三本の矢の教訓をあたえたという話は、有名である。じっさい、元就は、「三人が対立すれば、三人ともほろびる。力をあわせて、毛利の家をもりたてよ。」と、教訓状をのこした。

元就は、また、「毛利家のことをよくおもっている者は、この安芸国にさえ、一人もいないだろう。」とのべている。これが戦国大名の統一の内容であり、領国の実情であった。一族が協力してにらみをきかせていなければ、いつ、実力のある家来があらわれて、その地位をくつがえされるかしれない。

水があってこそ船はうかぶ　毛利氏の家来に、志道広良という者がいた。この広良が、隆元にむかってのべている。

「殿様は船、家来は水であります。水があってこそ船はうかぶのです。船があっても、水がなければ、どうすることもできますまい。」

当時の家来たちには、一般に、このような考えかたがつよかった。戦国大名たちが、たがいに自分の力をはかり、相手のでかたをうかがいながら、たたかいあい、利用しあったように、大名の領国内においても、国衆とよばれた武士たちが、それぞれ自分の領地をひろげようと、力量をきそいあっていた。

彼らにとって、あまりつよい大名があらわれて、上から権力をふるわれるのは、めいわくであった。せいぜい、たがいの利益が対立したときに、調停してくれるぐらいの力をもっていればいい。

だが、各地方に戦国大名が成立して、領国の拡大をねらっている時代に小さな山あいの領主の利害だけにかかずらわっていると、まるごと他国の大名にうばわれてしまいかねない。国内では、一揆などに結集する百姓の力も、あなどれないものをもっている。

家臣団づくり

毛利元就は、系譜や出身のことなる家臣団を一つにまとめようと、苦心した。そして、親類衆・年寄衆・御家人衆と、国衆・外様衆その他の、家臣団編成を編みだした。

親類衆は、元就の親類一門で、家臣団のなかでは最上位にあった。このうち、おもだった実力者が年寄衆とよばれ、家臣団をとりしきる役割をはたした。御家人衆は、譜代ともいわれるように、はやくから毛利氏につかえていた直臣グループで、軍事力の中心部隊であった。

国衆は、安芸・備後の国人で、もとは毛利氏と同格の武士であったが、しだいに、家来としてつかえるようになったもの。外様衆は、毛利氏が戦国大名として成長するなかで征服した、周防・長門（以上山口県）、石見・出雲（以上島根県）の国人である。

このほか、独立の地侍や小領主たちを与力として、戦争のさい上級家臣につけ、その指揮のもとにはたらかせるようにした。

北条・上杉など、他の大名のばあいも、一門・譜代を中心に、これを寄親とし、地侍などを寄騎・寄子に編成し、ほかに国衆・外様衆をおくのがふつうであった。

毛利元就(1497〜1571)**と鎧**
家紋は一文字三星。間者をつかって敵の大軍のようすをしらべるのが得意だった。

「甲州法度」 分国法の代表的なもので，国内の集権化をはかる条項が多い。写真は，そのはじめとおわりの部分。

実力主義をおさえる

武田信玄が「甲州法度之次第」という法をつくったことは、すでにみた（→P36）。戦国大名のなかには、家来を統制し、領内をおさめるために、分国法とよばれる法をさだめたものが、いくつかある。

武士にたいしては、けんか・口論をきびしく禁じ、けんかをしたばあいは、理由がどうであれ、両方とも死罪となった。これを「喧嘩両成敗」といっている。

武士のけんかは、領地にかんするものが多く、意地にかけても戦いによって決するのがこれまでのならいであった。戦国大名は、家臣団の統制をつよめるため、これをやめさせようとした。そして、たとえわるいほうでも、おとなしくがまんした者をよいとした。

これまでは、こういう実力主義は、武士だけではなかった。百姓や町人のあいだでも、たとえば、国質・所質といって、ある人が借金をしてかえさないばあい、その人とおなじ国や、おなじところに住んでいるべつの人の財産を、私の実力でさしおさえることも、一般におこなわれていた。しかし、戦国大名は、これも禁止している。こういうことは、争いの種になりやすく、国のみだれをまねくからである。

だれよりも自分の力をたのんで、実力で他とせりあった戦国大名が、その実力をつよめるために、国内では、家来や領民の実力主義をおさえこんでいった。

分国法でかわる世の中

ここでは、国という考えがつよく主張されている。国内の商業は活発にするが、他国の商人にはもうけさせないよう、いろいろの手段をとる。他国の人とかってに結婚することを、ゆるさない。他国の武士に、か

ってに助けの手をのばしてはならない。他国の人に、かってに返事をすることは禁止、などなど。

甲斐の武田領では、百姓の家に棟別銭という税金をかけた。百姓が、他の村へ家をうつしても、うつった村までいって棟別銭をとれ、百姓が、家をすてるか売るかして、にげていったばあいは、国じゅうどこまでも追いかけていって、徴収せよ。武田信玄はこういっている。

また、北条・武田・今川などの諸氏は、領内で検地(→P130)をおこない、その範囲をすこしずつひろげていった。大名にかくしていた田畑、村の有力者の手にのこされていた収穫物などが、しだいに摘発され、大名の手に吸いあげられていった。武士と農民の身分をはっきりわけようとするうごきもでてきた。

大名領国ができてくるにつれ、百姓は、だんだんにげ場がなくなってきた。ゆっくりと、世の中がかわりつつあった。

越前一乗谷の朝倉館

戦国大名の城は、一般に、領内を一望のもとに見わたす山の上にあった。そのふもとを、領国内の交通をおさえることのできる幹線道路がはしっている。道にそって、川がながれているばあいも多い。

福井市の東南八キロ、足羽川の支流である一乗谷川にそった小さな細い谷間に、朝倉氏のきずいた一乗谷城と、その城下町が眠っている。一九六〇年代の後半から、発掘と整備がすすめられ、しだいにその全貌がうかびあがってきた。

朝倉館跡からの出土品　将棋の駒と小さな木の人形。

一乗谷　上城戸のほうから見る。中央右手の台地状のところが館跡。館のむかい、川をへだてて重臣の屋敷がならんでいた。城は、館の背後の山の上にあった。

朝倉氏は、越前(福井県)の守護代からのしあがった大名である。一五世紀の末に、朝倉孝景が基礎をきずき、一六世紀の末、義景が織田信長のためにほろぼされるまで、約一世紀のあいだ、たえず一向一揆におびやかされながら、大名の地位をたもった。

谷は、南北に二キロ弱、くしのような形をした、両端のいちばん細いところに、上城戸と下城戸をきずいている。いずれも高さ四メートル以上の大きな土塁で、いざというときは、ここで敵をふせげるようになっている。この内部が、「城戸ノ内」である。谷の中央部、上城戸寄りの南がわに、朝倉氏の本館がある。前面が約九〇メートル、三方を堀と土塁でかこまれ、後ろの山がわにも空堀をめぐらして、防備をかためている。

本館の裏手のけわしい山路を登っていくと、ところどころ平らにならした場所があり、石垣が見える。本丸跡は、標高四〇六メートルの平坦地にある。その真下に、水源となる泉がわいている。城山の頂上は四七三メートルの地点で、そこまで一の丸・二の丸・三の丸と、尾根づたいに城郭のあとがつづく。

本館の前方、川をへだてて、重臣たちの屋敷がならんでいる。谷の方向にそって、幅四・五メートル(みぞをふくめ)の道路を、まず川をはさんで一本ずつはしらせ、それにあわせて屋敷割をしたらしい。この道路と直角方向に、幅三メートルの道がいくつか交差し、それぞれ、柳馬場、遊楽寺の前、三輪小路、木戸の前などと、辻の名がつけられていたとかんがえられる。

発掘がすすむにつれ、りっぱな庭園がつぎつぎとみつかり、本館の周辺からは、壺・

種子島　当時，鉄砲はポルトガル人が最初につたえた土地にちなんで，みな種子島とよばれていた。上はポルトガル人がもってきたもの。下はそれをまねて，清定がつくったといわれるもの。

南蛮　中国人は、自分たちが世界の中心（中華）であるとかんがえ、周辺の諸民族を一段ひくいものとみなした。このことは文字にもあらわれ、東・西・南・北の異民族にたいし、よい意味をもたない夷・戎・蛮・狄の字をあてている。中国人からみれば、日本人も東夷の一種ということになる。日本でも中国のこの言いかたをまね、室町時代には、シャムやルソンなど南方にあたる地域を南蛮とよぶようになり、のちには、この地方をへて日本にくるポルトガル人、スペイン人を南蛮人というようになった。なお、オランダ人は紅毛人とよんだ。

茶碗・皿・鉢・甕から、下駄・くし・椀など、日常生活の品や、将棋の駒、人形、おもちゃの小舟など、遊びの道具も発見され、城下に住んだ人びとのくらしに思いをはせることができる。

尼子氏の月山富田城の城下町からは、鍛冶屋のあとと推定される遺構が発見されている。こうして、いままでじゅうぶんあきらかでなかった職人や商人の生活も、やがて地下からすがたをあらわすことになるかもしれない。

鉄砲の伝来

ポルトガル人あらわる

武田信玄が、父信虎を追放して二年後、一五四三年の八月二五日、前夜の台風がすぎさった種子島に、どこからともなく一そうの大船がながれついた。船は中国のジャンクのようであったが、一〇〇人あまりの船客は、顔形も異常で、ことばもちろんつうじない。

この船客のなかに、「西南蛮種」といわれた商人、すなわちポルトガル人がいた。日本人とヨーロッパ人の、最初の出会いであった。ポルトガル人の二人の隊長は、このとき、一つの武器をいつも手からはなさず持っていた。

「それは、長さ八〇センチほどの、まっすぐな鉄の筒である。その中に小さな鉛の玉をいれ、火薬に火をつけると、いなずまのような光と、雷の鳴るような大きな音とともに、

鉄砲伝来の碑　種子島最南端の，門倉岬にたつ。この地から，戦国時代は，あたらしい道をあゆみはじめた。

その玉がとびだしてゆく。聞く人はおもわず耳をおおってしまうけれど、玉は百発百中、しかも鉄壁さえも突きとおす。」

と、この武器をはじめて見た日本人が、そのおそろしさをつたえている。これが、のちに種子島銃といわれた鉄砲の伝来である。

ところで、当時の日本人は、鉄砲という火器を、じつはこれよりまえに知っていた。

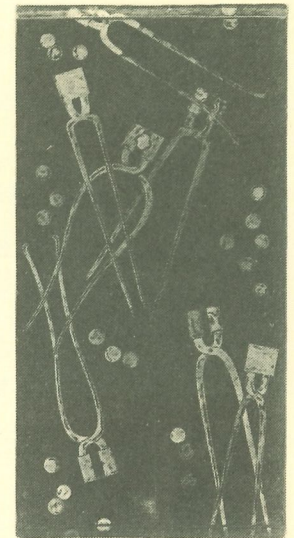
銅製の鉄砲と鉄製の鉄砲

そもそも火薬をもちいた火器は、ヨーロッパではなく、中国で発明された。それがしだいに改良され、明の太祖のころには、「火竜鎗」とよばれる小銅銃がつかわれはじめた。これが、鉄砲とよばれて日本につたえられたのは、おそくとも一五一〇年のことであったという記録がある。そののち、甲斐の武田勢が、銅製の鉄砲を実戦にもちいたという話が、のこっている。しかし、この小銅銃は、命中率はひくく、あまり戦力にならなかったようで、ひろまらなかった。

これにたいして、ポルトガル人がつたえた種子島銃は、銅製でなく鉄製であり、引き金のついた火縄による発火装置をもち、命中の精度もひじょうにたかかった。中国で発明された火器がヨーロッパにわたり、そこでめざましく進歩して、日本につたえられたのが、種子島銃だった。

鉄砲の生産が国内で

島の領主の種子島時堯は、大金をつんで鉄砲二ちょうを買いもとめた。そして、島の刀工八板清定に命じ、おなじ鉄砲をつくらせ

鉄砲の普及　右は鉄砲玉をつくる鋳型をデザインした蒔絵。左は当時流行の南蛮趣味を反映する火薬入れ。こうした道具も必要だった。

ることに成功した。このとき、清定は、どうしてもできなかった銃身の底をふさぐ技術をききだすため、一七歳のわが娘を、異国船の船長にとつがせたという話がのこっている。それからの鉄砲の普及は、すばらしくはやかった。

種子島時堯が家宝にした二ちょうの鉄砲のうちの一ちょうが、たまたま種子島にきていた津田算長という武士にゆずられた。算長の手から、これが紀州（和歌山県）の根来寺の杉坊につたわり、門前の鍛冶師、芝辻清右衛門が、鉄砲の製作に成功した。根来はたちまち鉄砲の生産地となり、寺の僧たちも鉄砲をたくみにつかい、やがて根来鉄砲衆の名が天下に鳴りひびいた。

また、これとはべつに、堺の商人の橘屋又三郎という人が、種子島にわたり、清定のもとで製作法をまなび、これを堺にもちかえった。日本最大の鉄砲の産地となる堺の歴史が、こうしてはじまった。

さらに一五四四年、将軍足利義晴は、管領の細川晴元をつうじて、近江の国友村（滋賀県長浜市）の鍛冶職人たちに、種子島銃の製作を命じ、その年、はやくも製作に成功した。堺のほか、いま一つの鉄砲の生産地、国友鉄砲鍛冶のはじまりである。

いずれも、種子島に鉄砲がつたわって、二、三年のうちのことである。この短期間に、鉄砲は畿内につたわり、さっそく日本人の手で生産が軌道にのりだしたわけである。

実戦にもちいられる鉄砲

伝来から八年目の一五五〇年、管領細川晴元と三好長慶の軍勢が、京都でたたかった。このとき細川方は、鉄砲を使用して、名ある侍を討ちとっている。いま知られているかぎり、これが畿内の実戦で、鉄砲がつかわれた最初である。

数年のちには、薩摩（鹿児島県）の島津の軍船が、実戦で鉄砲をつかったという記録がある。種子島時堯の娘が島津義久にとついでおり、島津氏が鉄砲をはやくもちいたことは想像される。島津氏と九州を二分するいきおいで対抗した豊後（大分県）の大友宗麟の城下でも、比較的はやく鉄砲がつくられはじめ、一五六四年、彼が毛利の軍勢とたたかったとき、一二〇〇ちょうの鉄砲隊がいたという話もある。

宗麟はキリスト教の宣教師を手厚くもてなし、ポルトガル船から、大砲や、火薬の原料となる硝石を輸入した。九州地方の大名のなかには、軍需品を手に入れるために、キリスト教徒になる者もいた。

鉄砲が実戦にもちいられた影響は、すぐにあらわれた。これまで、牛の皮をおもにもちいた甲冑は、鉄胴を中心としたものにかわった。城も、土塁から、石垣を何段もつみかさねたかたちにかわる。その上から鉄砲を打ちかけられると、たいへん威力があり、せめおとすのがむずかしい。ぎゃくに、下から上にむけて打っても、あまりとばず、あたりにくい。鉄砲は、武具や戦術のありかたを一変した。

越後の上杉氏が、はるばる堺の鉄砲鍛冶を自分の城下によびよせたように、戦国大名は、きそってこのあたらしい武器を手にいれ、研究し、みずからつくりだし、つかいこなそうとこころみた。

堺の鍛冶屋敷跡　堺はいちはやく鉄砲製造の中心となり，諸大名からも，特別な関心をはらわれた。

合戦のしかた ——戦国時代の戦い——

戦闘のかたちの変化

「やあやあ、遠からん者は音にも聞け、近くばよって目にも見よ、われこそは……」

馬上の武者が名のりでるこういう戦いは、鎌倉時代までである。室町時代に足軽があらわれてから、集団的な戦闘がひろくおこなわれるようになった。戦国時代は、それをさらに発達させた。

まず鉄砲と弓で

鉄砲がつたえられてからは、まず両軍の鉄砲戦がはじまる。当時、鉄砲の玉は七〇〇メートルくらいとんだが、これではあたってもけがもしない。じっさいに相手をたおすには、一〇〇メートルぐらいまでちかづかないといけない。つまり、この距離まできて、打ちあいがはじまるのである。

しかし、火縄銃は打つのにてまがかかる（→P106）。これよりちかづくと、まにあわないので、弓の組がでて、矢を射る。距離は五〇メートル以内になっている。矢いくさである。

また、鉄砲のあいだに弓をならべ、鉄砲に玉をこめているあいだ敵がちかづけないよう、かわるがわる矢を射るという戦法もとられた。

槍でたたく

両軍の間合いがさらにせばまって二〇メートルぐらいになると、槍の戦いとなる。鉄砲と弓の組は左右にわかれるか、それができないときは、左へよけて、敵の右がわから打ったり、射たりする。右がわは、ふせぎにくいからである。

さて、槍は相手を突き刺す武器であるが、ここででてくるのは長柄といって、四・五〜六・五メートルもあるながい槍の部隊である。いっせいにそろえて、肩からふりおろし、相手の槍を上からたたく。

これを上槍といって、たたかれた相手は上体がそり、足腰に力がはいらなくなる。そこをいっきょにおしこんで、相手の態勢をつきくずす。こうなっては負けだから、たがいに上槍をとろうと、たたきあう。

長柄の役割は、もう一つある。敵が突進してきたとき、密集して槍をかまえ、槍ぶすまをつくって、これをふせぐのである。騎馬部隊がつっこんできたときなどは、石突（槍先とは反対がわのはし）を土にさしこみ、地面に腰をおとして、柄にしがみつくようにして、必死でささえる。

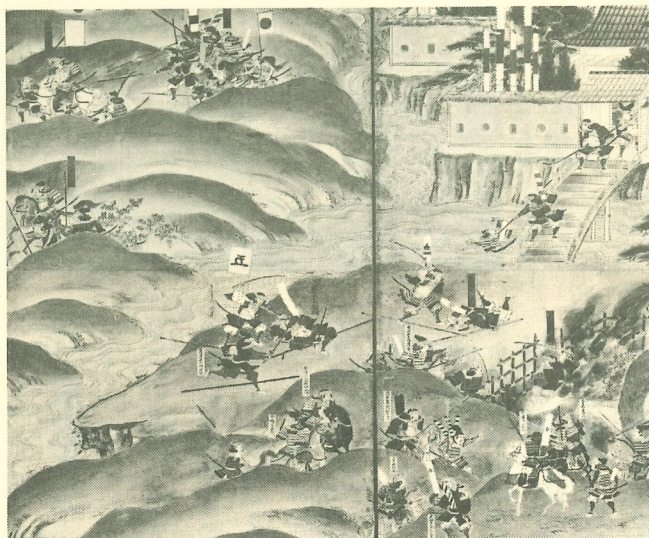
長柄は、集団戦闘の花形であった。

接近の白兵戦

いよいよ両軍いりみだれての戦いになる。「一番槍」ということばがあるように、ここでも中心は槍であった。

個人の侍がもつ槍は、長柄の約半分の長さのものが多かった。ふりまわすのにながくては不便である。

しかし、鉄砲がつたわってから、鎧・具足が鉄などをもちいるがんじょうなものになったため、やはり突くよりは、たたいて相手をたおすことが多くなった。

刀も、切るよりは、打ちつけるのであるが、鎧・具足にたいしては槍よりよわく、折れるかまがるかするのがおちであった。そこで、もっぱら相手の手か足をねらった。相手がたおれたら、組みうちとなり、ときにころげまわりながら、脇差をぬいて、首を切る。だが、こんなばあい、すばやく刀をぬくのはなかなかむずかしかったようである。

合戦場　騎馬武者・長柄・組みうちが見える。長篠合戦図屏風。

この節を読むにあたって

乱世のくるしい生活のなかで、民衆は団結の力をいままで以上に知った。自分の村や町や家や、家族の生命をまもるため、農民や町衆が団結して一揆をおこした。信仰によって団結した一向一揆や法華一揆もおこった。

一揆のなかで、彼らは村や町を自分たちの力でおさめられることを知った。

都市の豪商たちは、たくましく富をもとめ、日本の経済をにぎり、なかには海外貿易にしたがう者もでてきた。

あたらしく登場した戦国大名が、全国を統一するためには、ぜひとも、このような民衆の力をおさえ、豪商の経済力を支配下にくみいれなければならなかった。

民衆勢力の台頭

たくましい民衆の生活力

戦国の争いは、しのぎをけずる武士だけが、苦難の人生をあゆんだのではない。民衆にとってこそ、うちつづく戦乱は、無限につづくかとおもわれる苦難の日びであった。

死ととなりあわせの民衆

放火・殺人・暴行・略奪が、兵士が乱入すればいたるところでくりかえされ、兵糧の徴発がつづき、戦術のためには、田畑の作物や村が遠慮会釈なく焼かれた。人災ばかりでなく天災も彼らをみまう。人が餓死することは、この時代にはふしぎなことではなかった。甲斐(山梨県)の武田氏は、信玄が生きているうちは、一歩たりとも敵兵を国内にいれなかったというが、その甲斐でさえ、「人びと餓死候こと無限」という現象が、毎年のようにつづいていた。

疫病も、一四八九年、山陽・山陰・北陸・関東に赤痢が流行し、また一五二二年のはしかの全国的な流行も、多くの犠牲者をだした。

都では、応仁の乱後も、足軽集団の略奪はやまず、夜ともなると辻切りや盗賊団が横行し、夜歩きは勇気がいるありさまである。

女子どもをさらう「子取者」や、これを買いとって都から地方へ、地方から都へ売りあるく「人商人」も、横行した。能の『隅田川』は、わが子をさらわれた母の悲しみをテーマとして、いまもわれわれの心をうつ。また、人買い船のあわれさは、「人買い舟は沖をこぐ、とても売らるる身を、ただしずかにこげよ、船頭殿」と、当時の小唄にうたわれて、彼らの苦しさをよくあらわしている。

能『隅田川』 目の前にいるのが母親とは知らず，船頭が自分の目にしたことのある子どもの悲劇をかたる場面。面をつけているのが母親を演じるシテ。

このくるしい社会を生きぬくためには、民衆は、みずからの力にたよるしかない。

村や町の自衛

村の有力百姓の寄合であり、村の自治組織である惣が、すでにまえの時代からよく発達していた畿内の農村では(→③巻P208)、「乙名」とよばれた村のリーダーにひきいられ、数か村の農民が連合して、おそってくる大名の軍勢や野盗を撃退するようになった。

一五〇一年、和泉国(大阪府)の日根野荘では、農民二〇〇人あまりが素肌のままで、具足をつけた守護の軍勢千人あまりとたたかい、これと激闘すること六時間、彼らを村から追いはらったこともある。これは一例にすぎないが、乱世の中に、村は自分たちで自衛するという農民の意識が、そだてられた。

こうして畿内から近国にかけ、惣はますます発展した。農民たちが団結して、領主にたいして年貢の半減を要求し、成功した例もある。あるいは、村の入会地(薪や牛馬の飼料をとったりするための、村びとの共有地)や用水や道路を管理したり、また、村内の犯罪を彼ら

上流の女性の通行姿　小袖に細い名古屋帯をひくくしめ，白地のひとえをかつぎにして，侍女にかさをさしかけさせている。

侍所　室町幕府が、支配下の武士をとりしきるためにおいた。長官は所司といって山城の守護をかねることが多く、京都の市政にふかくかかわった。江戸時代には、侍所はなくなったが、京都にはその役目をつぐ所司代がおかれた。

がつくった掟でさばくなど、農民の自治のうごきもたかまった。

都では、町衆とよばれた商人や工人たちが、みずからの生命や財産、また彼らの町を、自衛するうごきもでてきた。

金持ちの町衆のなかには、武器をたくわえたり、武士をやとったりする者もいた。防備のため、町ごとに柵をめぐらし、堀をほり、町の入口に木戸をつけ、なかには周囲に土塁をめぐらしたところもある。野盗や悪党がおそってくると、町衆総出で武器を持ち、切りむすぶのも、まれではない。おとろえた幕府の侍所（↓③巻P186）の力だけでは、市中の平和が維持できなくなっていたからである。

とらえた放火犯人や盗賊は、幕府にひきわたさずに、町衆たちの集会で裁判し、成敗してしまうこともあった。

有徳は男の甲斐性

難波の里の小さな子どもが、お椀の舟に箸の櫂で、都にのぼり、鬼から打出の小槌をとりあげて、うつくしい若者となり、三条の宰相の姫を妻にして、ついに「有徳」の人となる。お伽草子の『一寸法師』の話である。

伊勢（三重県）の阿漕ケ浦のまずしい一人の鰯売りが、都にのぼって商いに成功し、富をたくわえ、有徳の人になりあがった。五条の橋でみそめた美女を、関東の大名にばけて、やっとのことで手にいれる。都一番という評判をとった美女である。鰯売りは、この美女をつれて阿漕ケ浦にかえり、子孫繁盛して富みさかえた。これもお伽草子の話である。

戦乱の世でも、庶民には夢があり、この夢が実現し、たくましく成功する者もいる。財

お伽草子　室町時代，庶民にひろく読まれ，立身出世の話が多い。写真は福富草子。おならで成功した主人公をまねて失敗する，おろか者の場面。

産も名誉もないいなかの者が、裸一貫で、自分の才能だけを元手にして、富と美女を手にいれる。お金持ちのことを有徳といい、有徳こそ、男の甲斐性をしめす誇りである。

京は日本の経済の中心である。戦乱で焼けても焼けても、町衆は焼けあとにわが家を復興する。京は全国から物資があつまり、「面白の花の都」とたたえられ、「何がさて、都に無いと申事が御座ろうか」と、当時の庶民の小唄にうたわれたように、金さえあれば、ほしいものはなんでも買える都会である。

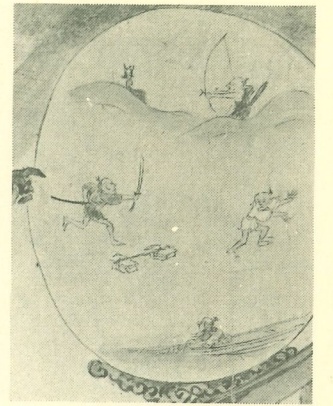
また、「京の町のやさい（優）女」と、都にはいなかではみられない美女がいる。「東男と京女」ともいわれて、いまもむかしも、京の女性は評判がよい。

戦国時代、京へ京へと上洛をあらそったのは、地方の大名だけではない。そこはいくら盗賊がはびこっても、地方の民衆にとって、富をきずき、いまのくるしい日常から解放される、あこがれの都会であった。武威ばかりではなく富もまた、乱世の男の実力だった。

七福神の信仰

財宝を崇拝し、金もうけをみとめるのは、戦国乱世の潮流となった。

金箔瓦をその城にもちいた信長、黄金の茶室と茶道具で茶の湯をたのしんだ秀吉、金箔濃絵の障壁画が流行したその時代が、すぐそこまでやってきている。士農工商という封建的身分制度が確立し、商人が四民の最下位におかれてさげすまれた江戸時代は、まだまだ一世紀ほどのちのことである。

だから、乱世の商人は、自信をもって商いにはげんだ。大名と対等に取り引きをする者もある。有徳になるため、彼らは富と生命をかけ、万里の波濤をこえて、中国・朝鮮にも

追いはぎ　戦国時代は盗賊の世でもあった。図は，えんま大王の鏡にうつしだされた，ある人の生前の罪。

土倉・酒屋　この時代の高利貸し業者のことを土倉というが、豊富な資金をもつ造り酒屋が土倉をかねることが多く、土倉・酒屋とまとめてよばれることがある。

土倉は多いときには京に三五〇軒、奈良に二〇〇軒もあったといわれる。

とより、はるかシャム・安南まで、珍奇な品じなをもとめて、貿易にせいをだした。国内の商売も、江戸時代のように安全ではない。海賊や山賊や野盗から商品をまもるため、ときには、みずから武器をとり、また武士をやとった。命をかけた商いである。

こうして、富の蓄積をもとめる信仰がたかまった。すなわち、以前からあった七福神信仰が、戦国時代、農村でも都市でも、庶民の信仰をあつめた。恵美須・大黒・弁財天・毘沙門天・布袋和尚・福禄寿・寿老人など、いまも庶民にしたしまれる福の神が、それである。彼らはすべて、財宝の神である。

農村でも都市でも、祭礼のとき、福の神に扮装した人が行列にくわわって、人びとの喝采をえた。流行とはいえ、七福神の身なりをした盗賊が乱世の都に出没し、おそわれた家人がこれをありがたがった、というユーモラスな話もある。

社寺の境内にも、七神神をまつる祠がたてられ、民衆の信仰をあつめたり、家いえのかまどの棚に布袋和尚を形どった紙がはりつけられたりしはじめるのも、この時代である。

一揆の世

京都の繁栄　戦国時代、幕府の威信は地におち、その威令は京都とその周辺におよぶにすぎず、政治の中央都市としての京都の役割はうすれた。だが、この時代の京都は、文化の面はもとより、商業と手工業で、いぜんとして日本の中心であった。

洛中のくらし　それぞれ家紋ののれんをつるした店。板ぶきの屋根をなおす人や，町屋の裏のようすもわかる。

近代以前において、金利（利子）は、資金回転の悪さや返済の不安定なことなどによって、一般に高利で、年に一〇割というのもめずらしいことではなかった。

諸国の産物は京都にいったんあつめられ、また諸国に売られてゆく。京都のなかでは、すぐれた武具や織物、いろいろの手工業品が大量に生産され、これも地方へ売られてゆく。京都は、地方市場のかなめの位置にあり、全国の商品の流れを支配する商工業の都であった。

当時、京都のことを洛中、その郊外を洛外といったが、最近の研究によると、洛中だけの人口が、一五世紀末で十数万、一六世紀には二〇万をこえると推定されている。奈良や堺・博多・鎌倉で一万から数万どまり、一〇〇〇軒も家があれば、その国で有数の町といわれた時代の話である。おなじころのロンドン・パリ・リスボンよりも大きく、まさにこの時代の京都は、世界的にもずばぬけた大都市であった。

繁栄する土倉　この都市の繁栄をささえたのは、公家や武家ではなく、町衆といわれた商人や工人たちであった。商品流通の発達は、さらに金融業の発達をうながす。

京都はもとより、奈良・堺などの都市では、金融業をいとなむ土倉や酒屋の活躍が、戦国時代になるとさらにさかんになった。社寺の僧のなかにも、土倉をいとなむ者が多くみられた。彼らこそ有徳人であり、町衆社会の富の中心であった。戦国時代の幕府は、地方からの税の徴収が困難となったので、彼らに酒屋役・土倉役などの税をさかんにかけ、棟別銭（家いえの棟ごとに課した税金）とともに、幕府の重要な財源となった。

長者の家　畳をしきつめ，屏風や豪華な家財にかこまれた女長者が，大勢の家人に仕たくをさせて酒宴をひらいている。当時のゆたかなくらしを代表している。

彼らは、文化的教養もたかかったが、経理にたけ、複雑な利子の計算を日本伝統の和算法だけで正確にはじきだし、たかい利子で貪欲に富をもとめた。多くの使用人をかかえ、用心のために武士をもやとい、金融のほかにも海外貿易に投資したり、なかには、農村の田畑を農民からやすくとりあげて、大地主になる者もいた。

弱者からも貪欲に富をもとめる土倉のこのような態度は、都市に住むまずしい人びとや一般農民のなかに、反感をそだてた。

激化する徳政一揆

強力な戦国大名が成長すると、その領国内では、土一揆が弾圧されておとろえたが、畿内では事情がちがっていた。惣を中心とした農民の自治活動がさかんであり、いっぽうで、おとろえたりとはいえ、荘園領主がまだ力をもっていて、強力な戦国大名が成長していなかった。このため畿内では、土一揆はこの時代にもさかんにおこっていた。

農民たちは、幕府の主導権をめぐる大名のあいだの争乱や、あるいは荘園領主と大名の不和をたくみに利用して、ひんぱんに蜂起した。領主に、年貢の減免や半減をみとめさせたこともある。

だが、この時期の土一揆の大きな特色は、幕府にたいして借金棒引令（徳政令）の発布をもとめた、いわゆる徳政一揆が多かったことである。畿内の農民たちが、貨幣経済の進展と金融業者の搾取に、いかにくるしめられていたかを、ものがたるものである。

土一揆はたびたび京都に乱入し、土倉や社寺をおそい、実力で質物や借用証文をうばいとり、放火や略奪をおこなった。放火略奪がはじまると、被害は土倉や社寺だけですむものではない。町ぜんたいが被害をうける。こうして、土一揆の都市への乱入にたいして町衆たちのなかにも、自衛のために、土一揆とたたかう現象があらわれてきた。

寺内町　畿内や北陸地方では，一向宗の発展にともなって各地に道場がうまれた。道場を中心に，集落を堀や土塁でかこんだ町を寺内町という。寺内町のおもかげをのこす奈良県橿原市今井町の一角。

一向一揆は畿内でも

おりしも一五三二年、畿内ではじめて、大規模の一向一揆がおこった。参加の門徒は、摂津（大阪府・兵庫県）・河内・和泉（以上大阪府）・大和（奈良県）・近江（滋賀県）・山城（京都府）におよび、総勢一〇万とも二〇万ともいわれた。ほとんどが本願寺の農民門徒である。

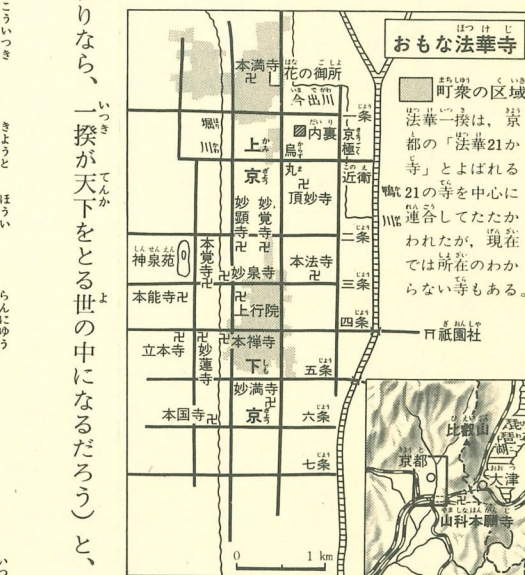
まえにのべた加賀一向一揆は（→P30）、本願寺蓮如の指令によるものではなく、現地の門徒のなかから、いわば自然発生的におこった一揆であった。だが、この畿内の一向一揆はちがう。蓮如の孫にあたり、このときの本願寺の法主であった証如が、門徒に上から指令して蜂起させた一揆である。つまり、法主が先頭にたった一揆である。

それだけに、動員は大規模で、行動も組織的、証如の指令のもと、堺からはじまって、河内・摂津・大和・山城へと、一揆はまたたくまにひろがった。

畿内の大小名の城が一揆にせめられ、名ある大名が討ちとられ、幕府管領の細川晴元の精兵も苦戦した。一揆は、さらに他宗の寺を焼き、また堺や奈良の都市をおそい、放火略奪をおこなった。奈良の興福寺では、多くの伽藍が焼かれ、財宝がもちさられ、仏像やお経が路上になげすてられ、殺生禁断の猿沢の池の魚も、一揆衆がつかまえてたべてしまったというありさまだ。

一揆の旗印　本願寺の指令のもと，全国の一向門徒は地域をこえて団結した。写真は，加賀国の門徒がのちの石山合戦に参加したときの鶴丸の旗。

殺生禁断　ふるくから、寺院の境内や神社の社域、特定の山や森などでは、鳥や魚やけものをとることが禁止されていた。このような場所を殺生禁断の地といい、人びとはそのようなところが、血でけがされるのを忌みきらった。

一向一揆といっても、実質は、農民がおこした土一揆とおなじである。本願寺という指揮者をもつだけ、ふつうの土一揆よりも強烈で、荘園領主や大名や畿内の都市住民に、つよい衝撃をあたえた。興福寺炎上をきいた一人の都の公家は、この一向一揆の猛威について、「風聞の如くんば、天下一揆の世たるべし。」（うわさのとおりなら、一揆が天下をとる世の中になるだろう）と、その感想を日記にしるしている。

町衆の法華一揆　やがて、この一向一揆は、京都を包囲して乱入のけはいをみせた。一揆の根拠地の本願寺は、このころ、京都からすぐ東の、東山連峰をこえた山科にあった。

京都の町衆は武装して、自衛のために蜂起した。当時の町衆の信仰は、まえにのべたように、法華宗が主流である。そして、法華宗は、念仏をとうとぶ一向宗と、平素から仲がわるい。町衆たちは、洛中の法華宗の寺を中心に団結し、武器をとり、「南無妙法蓮華経」の題目の旗じるしのもと、一揆をおこした。法華一揆である。

おもな法華寺
町衆の区域
法華一揆は，京都の「法華21か寺」とよばれる21の寺を中心に連合してたたかわれたが，現在では所在のわからない寺もある。

風呂屋　発達した都市は，町衆による独特の風俗をうみだした。ここに見る風呂屋（むし風呂）もその１つ。たすきがけの女が客の体をながしているところ。

一向一揆が洛中に乱入しても、幕府には、町衆の生命や財産をまもる力はない。このときの町衆の法華一揆は数万といわれ、彼らは、幕府の軍勢とともに一向一揆とたたかい、すすんで山科本願寺をせめほろぼし、ついに一向一揆の洛中乱入をふせぐことに成功した。そのため、本願寺は大坂の石山にうつった。石山本願寺のはじまりである。

町衆の台頭

町政は町衆の手で　法華一揆がおこったころ、京都では町衆による自治活動がたかまった。土倉や酒屋など、有徳な町衆を中心に寄合をひらき、洛中の年貢や公事や地子銭（宅地にかかる税金）の納入額を自分たちできめたり、実力で半減したり、あるいは町の治安の維持につとめたり、ときには、まえにのべたように犯罪人をとらえ、その裁判さえおこなった。

一五三六年、荘園領主や幕府は、このような町衆のうごきをおさえるため、叡山の僧兵を主力とする軍勢を動員して、町衆たちの拠点である京都のすべての法華宗の寺を焼きはらったが（法華の乱）、京都町衆の自治活動は、その後もおとろえなかった。

各町ごとに、月行事・年寄といわれる代表者がおかれ、その町がいくつかあつまって、町組を組織した。さらに、数個の町組が連合して、上京と下京を形づくった。上京と下京には、宿老という世話人が一〇人ずつおり、これらの世話人が中心になって、町の掟をつ

堺の堀　イエズス会の宣教師が「市街の三方はふかい堀をもってかこまれ，つねに水をみたしている」と書いている。自由都市堺の自治をものがたるが，豊臣秀吉にうめられ，現在のこるのは江戸初期に掘ったもの。

くったり、日常の町政をとりきめた。幕府や大名が、洛中に、酒屋役・土倉役、あるいは棟別銭をかけるときも、しだいに、このような町衆の組織と話しあわねば、税をとりたてることが困難となった。

東洋のベニス

「堺は日本全国でもっとも富み、町はひろびろとして多くの富商が住み、かつ自由都市で、大きな特権と自由をもち、共和国のような政治をおこなっている。他の都市や城が戦争のさなかにあるとき、堺だけは平和にすごしている。」キリスト教をひろめるために日本にきていたバテレン（宣教師）は、堺のすがたをこのようにつたえている。

戦乱の世に、なぜ堺だけが、平和と自由と富にめぐまれたのだろうか。

京都の外港で、海外との貿易港としてさかえた堺は、各地のめずらしい品物があつまって、商業の都市として発達した。町政は、納屋衆とか会合衆とよばれた豪商の代表たちが、相談しておこなうことになっていた。

堺は、ふだんから町をまもるため、周囲に堀をめぐらし、武士たちをやとっていた。ちかくで戦争がおこると、経済力にものをいわせ、あるいは献金により、戦いが町におよぶことをふせいだ。堺会合衆の総意として、戦争の仲裁をしたこともある。軍勢から無理難題をふっかけられると、堺衆は団結して、堀をふかくし、櫓をかまえ、いつでもたたかう覚悟をしめした。

こうして堺は、安全と自由をまもり、商人や武士が各地からあつまってさかえた。

魚屋通り　下京の錦小路か今小路あたりの魚屋町であろう。店先には鮮魚がならび，江州米を運ぶ馬，てんびん棒で荷をかつぐ商人など，通りはにぎわっている。

豪商を中心とした町衆の自治は、京都と堺だけではない。城下町をのぞいて、博多・平野・桑名・宇治山田など、貿易や商業でにぎわったこの時代の都市では、どこでもおなじような現象がみられる。

都市の実力と戦国大名

京都や堺・博多の町衆の自治町政の高まりは、とうぜんのことながら、彼らの社会的地位をたかめた。そのリーダーであった上層の町衆たちは、公家や大名や一流の僧侶と、堂どうと対等にまじわった。富商の子女が公家や武家と結婚することも、この時代にはめずらしくなかった。彼らの教養はたかく、なかには、これまで公家が独占していた古典や和歌や学問にはげむ者も、あらわれた。貿易に関係した町衆は、海外へのふかい知識とひろい視野をもっていた。

だが、なんといっても彼らの実力は、蓄積された巨大な富をもち、全国各地の物資の流通をにぎり、また都市でつくられる手工業品を支配していたところにある。

地方の群雄があらそってほしがったよろい・かぶとや刀剣などの武具にしても、絹織物や蒔絵や屏風、華麗な装身具などのぜいたく品にしても、京や堺でつくられた「都もの」は、「国もの」といわれた地方産を、質・量ともに圧倒した。唐物といわれた貿易品、それに鉄砲・火薬も、京や堺の商人たちの手中にあった。

まさに、畿内の都市は、地方の大小名たちにとって、戦争をささえる巨大な物資補給の基地であった。こうして、各地の戦国大名と豪商たちのあいだでは、かけひきをふくんだ取り引きがおこなわれた。この取り引きなしに、大名の分国の経済の発展も、戦争も、

博多と福岡　博多は現在の福岡市であるが、ふるくは那ノ津ともよばれ、朝鮮や中国との交渉、貿易の港としてさかえた。
　ところで、現在でも国鉄の駅名は博多であり、福岡という駅は福岡市にはない。どうして、こういうことになったのであろう。
　福岡という地名のおこりは、関ケ原の戦い後、博多をふくむ筑前（福岡県）の領主になった黒田氏が、自分たちの故郷にちなんだ福岡城をきずき、博多をその城下町としたことによっている。いま岡山県にある福岡が、黒田家のもともとのふるさとなのである。
　ところが、博多っ子は領主によって上からおしつけられた福岡をこのまま、国鉄の駅名をつけるときになって伝統ある博多の名をのこしたため、福岡市には福岡駅がないということになった。

島井宗室(1539～1615)　博多の豪商としてだけでなく，茶人としても有名。秀吉の九州統一に協力したり，朝鮮侵略にも一役かった。死後間もなくえがかれたとおもわれる。

できなかったからである。
　だが、全国統一をめざす政権があらわれると、この畿内の都市の巨大な富と、発達した商品流通のしくみを、完全に手にいれることが、どうしても必要となってくる。
　はたして信長は、畿内に進出すると、まず最初に、堺と草津に代官をおいて自分の手もとにおくことをくわだてた。その後、信長も秀吉も、京都と堺を直轄都市として、他の大名へわたさなかった。
　自由都市の存在は、もちろんゆるされるはずはない。信長は、あるいはばくだいな軍用金をいいつけ、あるいは反抗する豪商を切り、京都や堺を、圧倒的な武力でねじふせ、その支配下にくみいれたのである。

豪商の商人道　戦国時代から江戸時代のはじめまで生きぬいた、島井宗室という一人の商人がいた。海外貿易もおこなった博多第一の豪商である。この宗室が、日常の生活の心得を遺言状にして、子孫にのこしている。
　商人は、一生涯、貞心で律義であれ、と彼はいった。そして、貞心で律義とは、親をたいせつに、きょうだい仲よく、知人を尊敬し、ことばすくなく、礼儀ただしく、正直なことである、と説明した。いまもつうじる美徳である。
　また、五〇歳になるまで、「後生ねがい候事は無用候。」という。商人にとってたいせつなことは、毎日毎日の商いである。それなのに、死後の極楽往生をねがって信仰にはいると、それだけ現在の商いがおろそかになる。信仰は年をとってからにすればよいという、強烈な現世主義の人生観である。
　そして、宗室は、分際をこえた思いあがりとぜいたくは悪である、と断言する。だが、「商事、れうそく（料足＝銭のこと）まうけ（も）候事は、人にもおとらぬようにかせぎ候ずる、専用候。」と、つづいていう。商売と金もうけについては、分際をこえても、他人に負けずにかせぎまくれ、というのである。商いも、こうなると執念だ。
　そして彼は、商いの根本は元手だという。元手のない商人は、領地なき武士にひとしい。武士ははたらかずとも、秋になると領地から年貢がとれる。だが、商人の元手は、はたらかねばすぐへってしまう。武士は領地をうしなっても浪人であるが、商人が元手をうしなうと、こじきになってしまう。だから、金もうけは「生中の役」、つまり商人に課せられた人生の業であり、いわば義務である、と宗室はいう。
　元手をうしなうのは、かせがずして、ぜいたくをするからである。だから宗室は、華麗と時間の浪費を、徹底してきらった。夜話や物見遊山や寺詣りを禁じ、薪・炭・米・味噌の一日の消費量まで指図して、あくことなき倹約を、美徳として子孫にさとした。
　律義で倹約をまもり、ぜいたくを排し、ただただ、一心に商いにはげむことが、商人のあゆむべき人生だという商人道が、ここにみられるのである。

豪商の意気地　やや時代はさがるが、一五八七年ごろの話である。
　ある日、博多の陣中で、秀吉は、この宗室と神屋宗湛の二人の豪商をま

ねいて、茶の会をもよおした。茶の湯がすんで、雑談となった。秀吉は宗室にたいして、
「なにか望みのものはないか。」
とたずねた。宗室の答えは、秀吉の意表をついた。彼は、茶室の窓から、かなたにひろがる渺びょうとした博多の海を指さして、
「この海を拝領したい。」
とこたえた。

博多の海――それは玄界灘をこえて朝鮮につらなる。西に万里の波濤をこえれば、大唐明国へ、南はとおくルソン・安南、南洋の島へとつうじる。海外に目をむける商人にとって、そこには無限の富と夢がある。秀吉は、さらに宗室に問いかけた。
「よくも坊主(宗室のこと)、のぞみたり、しからば武士になるか。」
「武士は嫌らい候。」
これが宗室の返事である。

天下統一を目の前にした秀吉の面前で、宗室は、武士よりも商人をえらびとった。権力よりも、商いの「富」に、みずからの人生を賭け、戦国乱世から桃山期を生きぬいた豪商の意気地を、ここにみることができるだろう。

倭寇の活躍

大内筒　明貿易に力をいれた西国の大名大内氏が輸入したといわれる，宋代の青磁花生。

倭寇　明時代末の倭寇はほとんど中国人だったが，ここではすべて日本人のように，えがかれている。(→③巻P174,195)

日明勘合貿易のおわり

応仁の乱後、日本と明のあいだの勘合貿易(→③巻P197)は、しだいにその実権が大内氏と細川氏にうつっていった。この両氏に保護されて、じっさいの経営にくわわったのが、大内氏とむすんだ博多商人と、細川氏とむすんだ堺商人であった。日本からは硫黄・銅・刀剣などが輸出され、明からの輸入品は、はじめ銅銭が、のちに生糸がいちばんとなった。

大内氏と細川氏は、貿易の権益をめぐってあらそい、大内氏が勝つが、遣明船そのものは、戦国時代のさなかの一五四七年を最後にとだえてしまう。このあとしばらくして、山口の大内氏が、家臣の陶晴賢にそむかれ、せめほろぼされてしまったからである。

明の貿易鎖国政策

いっぽう明は、一五、六世紀、諸外国からの朝貢貿易(皇帝へのみつぎものにたいして国内の産物をあたえる)だけをみとめたが、国内では、民間の海外交通や私貿易をきびしくとりしまる方針をとっていた。しかも、せっかくみとめた朝貢貿易も、国ごとにその回数を制限し、東アジア諸国の貿易の需要をみたすものではなかった。明は、貿易鎖国政策をとっていたわけだ。

日本も、ほかの東アジアの国ぐにも、明を中心としたおたがいの貿易の拡大をのぞんでいた。その方法が公式であれ、密貿易であれ、貿易のもたらす利益が各国の経済の発展に、ぜひとも必要だったからである。アジアの諸国にとって、先進国の明は、無限の富をもつゆたかな国に感じられ、「唐物」といわれたすぐれた中国製品は、アジア全域の人びとのあこがれの的になっていた。こうして、一五、六世紀の東シナ海は、私貿易や中継貿

王直の井戸　王直一党の飲み水用として掘られたとつたえられる。五島の福江島。

北虜南倭　明の政府は、モンゴル人の侵入と、海岸地帯の倭寇になやまされた。そのため、北虜南倭（北のモンゴル、南の倭寇）ということばができたくらいである。秦の時代からあった万里の長城をなおしたり、自由な海外渡航を禁じる海禁政策をとったりして、なんとかこれらをふせごうとした。

易にしたがう船が、活発にゆきかうようになった。

　こうした情勢のなかで、日明間の正式の貿易がおとろえ、ついにとだえると、ふたたび倭寇が朝鮮から中国の沿岸にかけて、さかんにあばれまわるようになった。とくに、一五五二年から一〇年間ほどは倭寇のピークで、大陸の沿岸一帯で猛威をふるい、被害は内陸部にまでおよんで、明の政府に大きな衝撃をあたえたこともあった。

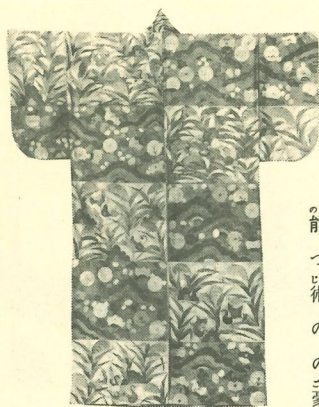
倭寇の正体

　だが、明の官憲が倭寇をとらえてみると、日本人は一割から多くて三割、残りは中国人であったという。

　たとえば一五五七年、大陸で王直という明人の倭寇の頭目がつかまって、首を切られた。彼は三〇〇人の部下をつれて大船にのり、東シナ海であばれ、党類は二〇〇〇人におよんだという。この王直は、ふだん肥前の五島（長崎県）に住み、根拠地はこの島や平戸であったといわれる。また、陳東という倭寇の頭目が、かってに薩摩の殿様の弟だと名のって、その部下に薩摩の人を多くくわえてあばれたという話もある。どうして、このようなことがおこるのだろうか。

倭寇と大名

　当時、明は国内で民間の貿易をきびしく禁止していた。だが、その統治力がおとろえてくると、どうしてもばくだいな利益をもたらす貿易にのりだす海の商人（海商）たちがあらわれる。彼らは、大陸をでて、日本や南洋の各地に住み、そこを拠点に東シナ海の貿易にのりだしたのだ。

なお、倭寇とは、倭人――中国ではふるい時代には日本のことを倭とよんでいた――の侵入、という意味である。

能衣装　日明貿易は，高級衣料につかわれる生糸と，大陸の染織技術をもたらした。写真は金糸銀糸のぬいとりで，葦に水鳥，山に菊のもようを，たがいちがいにした，豪華な能衣装。

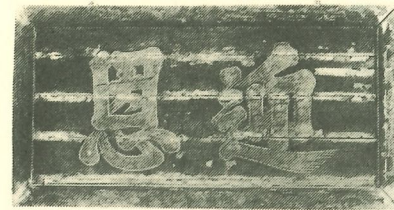
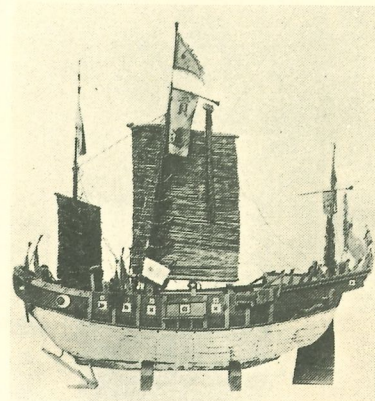
戦国時代の山口や九州の沿岸には、明からの海商や流浪人が、あちこちに住んでいたという記録がある。

　この明の海商やその仲間が、日本の商人と手をむすび、日本人もくわえて武装した、いわば国際商船隊をつくり、大陸沿岸であばれまわった。これが、この時期の倭寇である。そして、彼らの背後には、陰に陽に、これをかばう九州の大名や商人たちがいた。大名たちは、明や東アジア諸国との実質的な交易を、倭寇をつうじておこなう必要があったからである。

　こうして倭寇は、平和な貿易に成功すれば海商となり、交易をおさえられると、勇敢な日本人を先頭に、武力をもちいてあばれまわる海賊となって、おそれられた。

日本の銀、中国の生糸

　いっぽう、一六世紀になると、東シナ海の交易の花形に、日本の銀がうかびあがった。日本産の銀が、朝鮮や大陸に大量に輸出されだしたからである。銀と交換するのにいちばんよいのは、中国産の生糸である。生糸は日本にはこべば、一躍一〇倍の値で売れた。それほどこの時代の日本では、生糸の需要がたかかった。絹織物が発達し、絹を身にまとうことが、なによりも上流の人びとの社会的地位をしめすものとして、支配者層に珍重されたからである。

　だが、その日本は、当時まだ、大量の商船隊を組織しておくりだす遠洋航海の技術が、発達していなかった。明も、貿易鎖国の政策をとっている。だから、法の目をくぐって明の海商が活躍し、これに日本人も参加した私貿易や中継貿易が、一五、六世紀の東シナ海

迎恩額　琉球では王位の任命を明にもとめた。明の使いをむかえた迎恩館の額。

琉球の進貢船　国書やみつぎものをたずさえて明（清）に朝貢した琉球の船。

の花形だった。日本の銀をもとめて、明の海商が日本列島へと北上し、それがこの時期に倭寇が活躍する経済的背景にもなっていた。

スペインやポルトガルの商船が、東シナ海にあらわれてくるのも、この倭寇が活躍したおなじ時期のことである。

活躍する琉球船

このころ、琉球（沖縄）の人びとも、小船団をくんで、さかんに海洋にのりだしていた。彼らは、海洋の民として、明や日本や南海諸国の産物を東アジアの国ぐにのあいだで交換する、中継貿易にしたがった。戦国時代、博多や九州の港に、あるいは朝鮮の港に、これらの琉球船がさかんに入港してきた。沈香・丁子・竜脳・犀角などのめずらしい南方産の香料や薬種を日本にはこび、日本から銅・銀・硫黄・刀剣などを輸出した。

琉球の人のなかには、アジア諸地域の港町に住みついて、とおくマラッカまで、勇敢に貿易にしたがう人もあらわれた。こうして、琉球王国は交易を中心としてさかえ、独自の文化をそだてた。琉球の伝説・神歌・英雄・戦争・航海などの古謡をあつめた、有名な「おもろそうし」も、この時期にできあがった。

しかし、一六世紀も後半にはいると、ポルトガルや日本の商船が直接南海地域に進出するようになり、琉球船の活躍はしだいにおとろえていった。

この節を読むにあたって

ヨーロッパ人の来航とともに、日本は東アジアの一国から、世界のなかの国になった。その結果、南蛮文化といわれたヨーロッパの文化が移植され、日本人は世界に目をむけだした。

ほんのみじかい期間であったが、キリスト教の信仰がひろまり、西洋のすぐれた自然科学や文物がつたえられ、庶民の生活のなかにも南蛮趣味が生かされるようになった。

民衆の地位の向上とともに、開放的で健康な、さまざまの文化が発達し、庶民の生活文化として定着したのも、この時代のことであった。

南蛮文化と庶民文化

バテレンとキリシタン

大航海時代の東アジア

まえにのべたポルトガル人の種子島漂着は、嵐がもたらしたぐうぜんのようであって、じつはそうではなかった。

このころの世界は、大航海時代といわれるにふさわしい、冒険にみちみちた海洋の時代であった。ポルトガルの東洋進出は、一四九八年、バスコ＝ダ＝ガマが東インド航路をひらいたのにはじまり、一六世紀のはじめにはゴア、ついでマラッカを占領し、さらにマカオに進出して、アジア諸国間の中継貿易にのりだした。当時の東シナ海は、倭寇とともにポルトガル人をのせた貿易船が、さかんに往来していたのである。

スペイン（イスパニア）は、一六世紀のはじめの、マゼランの艦隊によるフィリピンの発見をきっかけに、ポルトガルにややおくれながらも、アジアの海にのりだしてくる。

このような情勢のもとでは、おそかれはやかれ、ヨーロッパ人のわが国への来航は、かならず実現するところだった。

とおく一四世紀に、マルコ＝ポーロが『東方見聞録』のなかで、「黄金で屋根をふいた

ゴアの町　インドのゴアは，16世紀初めから，ポルトガルの東洋進出の基地として，さかえた。

宮殿に王の住む国」と書いたジパング（日本）は、ポルトガル人の種子島への漂着をきっかけに、彼らヨーロッパ人にとって夢の国でなく、現実の市場となった。日本と西洋の交渉は、これ以後、急速に発展することとなった。当時、ポルトガルとスペインの人を、南蛮人とよんだ。

だが、ポルトガル人の日本発見は、ぎゃくにいうと、日本にとってもヨーロッパの発見だった。本朝（日本）・唐（中国）・天竺（インド）というこれまでの伝統的な世界観は、根本からくつがえされた。日本人は、ここに第四番目の世界、つまりヨーロッパを知り、正確な世界観をもつこととなった。

キリスト教の伝来　鉄砲伝来から六年後の一五四九年の秋のとある日、鹿児島についた中国のジャンク船から、一人の長身の神父がおりてきた。

この神父こそ、「顔色は白く、いきいきとし、はれやかで、ひじょうに人なつこい。両眼は黒く、額はたかく、ひげも頭髪も黒い。」と、そのさわやかな風貌がつたえられている、カトリックのイエズス会（耶蘇会）の創始者の一人、フランシスコ＝ザビエルその人だった。

「日本人は、現在までに発見された人民のなかで、いちばん善いものである。未信者のなかで、日本人にまさるものを発見できないとかんがえる。」と、ザビエルはその第一報の書きだしで、日本人をすぐれた国民であるとほめちぎった。彼は日本人の性質について、善良で名誉と高潔をおもんじ、知識欲に富むなどと、賛嘆をもって、ゴアにのこした神父

ジパング　英語では日本のことをジャパン（Japan）というが、これはマルコ＝ポーロのジパングからきている。

では、マルコ＝ポーロはなぜ日本をジパングとよんだのかといえば、彼がおとずれた一四世紀の中国では、日本をジッポンと発音していたことによるらしい。日本→ジッポン→ジパング→ジャパンというようにかわってきたとかんがえられている。

大友宗麟（1530〜87）
九州のキリシタン大名。

につげた。

彼は鹿児島から平戸をへて山口へ、そして堺から京へのぼったが、天皇や将軍に会い、布教の許可をえようとした望みは、かなえられなかった。ザビエルは九州にもどり、滞在すること足かけ三年、日本を去った。布教の時間もみじかく、成果はあまりあがらなかったが、キリスト教の種は、確実に日本にまかれた。

ふえつづけるキリシタン　ザビエルのあと、バテレン（神父）たちがつぎつぎと布教のためにやってきた。彼らは清貧と禁欲と献身の精神に富み、日本人にふかい理解をしめし、忍耐づよく布教につとめた。

やがて、信長がキリスト教に手厚い保護をくわえると、いちだんと布教の成果があがった。京都では、一五七六年、信長の保護と信者の奉仕によって、広大な敷地に、三階建ての堂どうとした南蛮寺ができあがった。屋根はかわらをふき、部屋には畳がしきつめられて、寺のような教会だったが、西洋文化に接する窓口として、都のあたらしい名所となった。安土城の城下にも、信長が寄進した土地に、おなじような建物がたてられた。

このころ、西日本では、豊後の府内（大分市）の大友宗麟、肥前（長崎県）の大村純忠や有馬晴信、摂津（大阪府）の高山右近らの大名が、あいついでキリシタンになった。

北九州や中国や畿内のあちこちに教会ができ、バテレンやイルマン（修道士）が滞在し、武士や商人や農民のなかで、キリシタンになる者が多くあらわれた。豊後の府内には、コレジヨ（キリシタンの大学）や教会・病院もできた。この病院には、とくにこれまでは町や

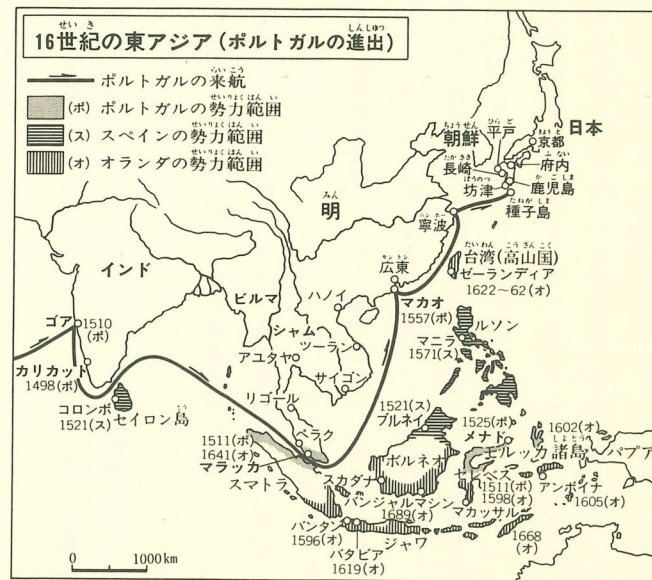
村からもみすてられ、はじきだされていたハンセン氏病（らい病）患者の病棟が付属してもうけられた。キリスト教が医術とむすびつきながら布教したのは、一つの特色だった。

大村純忠は、まずしい漁村であった長崎をイエズス会に寄付し、長崎はこののち、教会を中心としたキリシタンの町として、発展しはじめた。

こうして、キリシタンの人数は、一五七九年ごろに一五万人、慶長年間（一五九六～一六一五年）で七〇万人になったといわれる。もはや、キリシタンの勢力は、社会的に無視できないものになった。一五八二年（天正一〇年）、伊東マンショら四人の少年が、九州の大友・大村・有馬の三人のキリシタン大名の命をうけて、バチカンへと旅だったのも、時代のあたらしいすがたのあらわれであった（→P170）。

西洋医術の記念碑　大友宗麟の本拠大分市にたつ。

イエズス会　キリスト教では一六世紀ドイツを中心に、カトリック（旧教）教会にたいする批判がおこり、プロテスタント（新教）が成立した（宗教改革）。カトリックのがわでは、これに反発し、キリスト教がつたえられていない地域に、その教えをひろめようというごきがおこった。旧教国のスペイン、ポルトガルの海外進出はこのうごきとふかいつながりをもっている。スペインのイグナチウス＝ロヨラによってつくられたイエズス会も、カトリックをひろめるため全世界にのりだした。

南蛮寺　図は京都にたてられたもの。山口にはじまり各地にたてられた。ものめずらしい建物や風俗は，名所として多くの人をあつめ，それが信心のきっかけとなることも多かった。

胡椒と霊魂のために

バテレンたちの真剣な布教にもかかわらず、当時のイエズス会の布教そのものに、一つの問題があった。それは、「胡椒と霊魂のために」といわれるように、キリスト教の伝道は、ポルトガルのアジアの植民地支配とつらなっていたからである。だから、バテレンの活躍は、ポルトガルの貿易の利害とも、密接な関係にあった。

ザビエルでさえ、「ヨーロッパの品を日本の金銀と交換すれば、多くの利益をあげえよう。」と報告したように、伝道は貿易の露はらいの役をはたしていた。

ポルトガルの貿易船は、大名がキリスト教の布教をゆるさない港には、けっして入港しようとしなかった。バテレンたちも、大名たちに貿易船の入港の利益を説いて、その地での布教のゆるしを得ようとした。

貿易の利益に着目した大名たちのなかには、たとえば九州平戸の松浦隆信のように、自分が洗礼をうけることとひきかえに、貿易船の入港をたのみこむ手紙を、はるかインドまでおくった者もあらわれた。だから、大名たちがキリシタンになる動機は、信仰よりも貿易の利益だった。彼らは、南蛮船がはこんでくる生糸・唐物、めずらしい西洋の文物、それになによりも、鉄砲と火薬をほしがった。

キリシタン大名の有馬晴信が、バテレンのなかだちで、ポルトガル船から鉄砲と火薬を買いいれ、佐賀の龍造寺氏の軍勢を、大いにうちやぶったという例もある。

こうなると、キリシタン大名が多かったとはいっても、のちに信仰をまもってマ

キリシタン　写真左には，神にいのりをささげる武士と女性。右には，宣教師の手をおしいただく武士が，えがかれている。

ニラに追放された高山右近ら二、三人をのぞいて、心の底から神を信じていた大名は、ほとんどいなかったとかんがえるほうが、よいだろう。しかし、キリシタン大名の城下町には、西洋の文物や文化が移植され、時代のあたらしいうごきをよくしめしていた。

キリシタンの倫理道徳　だが、一般のキリシタンの多くは、心から神を信じた。キリスト教の教えが、日本の社会や思想にあたえた影響は大きかった。

神の前での平等が説かれ、身分ある侍やゆたかな商人が、教会の中では、貧者とともにひざまずいた。自殺が禁じられて、キリシタンの武士は切腹をしなくなった。当時の封建社会で、とうていふつうにはみられないことだった。

よわい者への慈悲の教えは、救貧と救療の事業をそだてた。教会の前に喜捨箱がおかれ、よせられた銭と米が、まずしい者にわかちあたえられた。各地の教会が、孤児院や病院を経営する例も多かった。

とくに有名なのは、豊後の府内にたてられた孤児院で、そこには二人の乳母と二頭の乳牛がおり、やがて内科・外科・らい科・小児科がそれぞれ病棟をもつ病院も、そばにつくられた。バテレンやイルマンが治療にあたり、近隣への回診もおこなって、大ぜいの人がつめかけた。金持ちからは治療費をとったが、貧者はもちろん無料であった。

バテレンたちは信者にたいして、離婚を禁じ、堕胎の罪悪をおしえ、人身売買の罪を説き、一夫一婦の健全な夫婦制をまもるようおしえた。これらの教えは、当時の日本の風習や封建道徳とはあきらかにことなるもので、しいたげられた弱者や女性のキリシタンに、

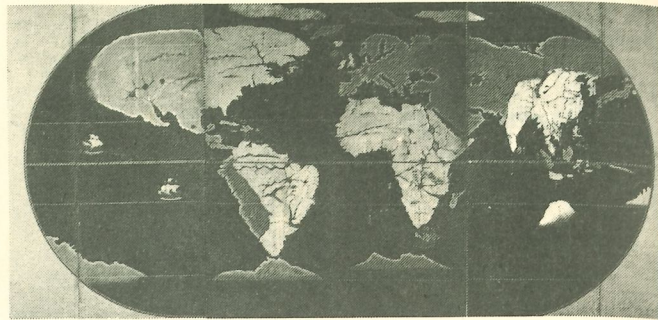
南蛮文化の影響　右は南蛮人のすがたをした織部焼の燭台。帽子のてっぺんにろうそくをさす。左はＦＲＣＯの文字を模様にした蒔絵の鞍。左はしは上杉謙信がもちいたといわれる，紅色のビロード製のマント。

大きな福音となった。

ここに一つの話がある。このような教えのもと、キリシタンの女性には、貞操観念がおのずとつよまった。島津征伐のとき、秀吉は、キリシタンが多かった九州の有馬晴信の領内で、美女をもとめた。ところが、天下人のお声がかりにもかかわらず、だれ一人おうじない。大いにいかった秀吉は、女ですら自分の命令にそむくのなら、キリシタン大名は将来どんな行動をおこすかもしれないと、たいへん心配をしたという。神の教えが、民衆の倫理道徳のなかに、しっかりと根をおろしつつあることをしめす話である。

南蛮文化のうけいれ

流行する南蛮風俗　南蛮人との交渉によって、西洋のめずらしい文化が、とうとうわが国にながれこんできた。南蛮風の趣味が、キリシタンの増加とともに、当時の風俗や文化の流行となった(→口絵P10)。信者でもないのに洗礼名をつけたり、ローマ字で署名をする人もあらわれた。キリシタンたちが太陽暦をつかったので、日・月・火……という曜日のかぞえかたも、知られるようになった。

クルス(十字架)やメダイ(メダル)やロザリオ(数珠)を、キリシタンはもとより、一般の人びとまで、このんで身につけるありさまである。とくにクルスは、漆器や陶器、鏡や刀

← 世界図屏風(左) 南蛮船の来日とともに、世界地理への興味がつよまった。
洋人奏楽図(左はし) キリシタン画家が模写したもの。

→ かるた 南蛮船が持参したトランプをもとにしてつくった、洋風のかるたである。

剣、はては家紋や旗じるしなどにまでもちいられ、流行の先端をゆくデザインとなった。

服装では、南蛮笠・眼鏡・帽子・合羽・襦袢・カルサン(もんぺ)が、上は織田信長ら武将から、下は町人にまでこのまれ、戦場では、がんじょうな南蛮鎧や南蛮具足が幅をきかせた。ボタンをもちいるようになったのも、南蛮衣裳からきたものである。織物も、ビロード・サントメ・ベンガラ縞・メリヤス・ラシャ・サラサなどが輸入され、南蛮渡りの猩々緋や印伝皮でつくったはでな陣羽織が、部将たちに愛好された。

南蛮趣味は、食物・嗜好品にまでおよんでゆく。カステイラ・コンペイトウ・アルヘイトウ・パン・テンプラなどの珍味を、日本人ははじめて知るようになった。ポルトガル商人の喫煙の風習も、またたくまに全国にひろまった。

人びとの遊びにも、ウンスンカルタといわれたトランプがはやりだした。こうして、これまでの伝統的な生活文化に、あたらしい国際的な風俗や趣向が、とりいれられだした。

南蛮画の登場

絵画の分野にも、その手法と図柄にあたらしい傾向があらわれた。絵のたくみなバテレンや、その指導によってそだてられたキリシタン画家の手で、油絵と銅版画がはじめられたからである。

油絵では、教会や宗教行事につかわれた信仰の絵のほかに、西洋の人物や風景、南蛮船やバテレンのすがたをえがいた作品が、いまにつたえられてのこっている。有名な「ザビエル聖人像」をはじめとして、「泰西王侯騎馬図屏風」や「西洋武人図屏風」などが、それである。これらの多くは屏風にしたてられ、南蛮屏風とよばれている。

徳川家康も枕屏風にして愛用したという、世界地図を図案化したいわゆる「世界図屏風」が、数多くつくられて流行しだしたのも、このころのことだった。

その図案と構図の雄大さにおいて、これまでの日本の画壇には、けっして見ることができなかった画題である。まさに、世界に目をひらいたこの時代の人びとの心情と、時代のあたらしい息吹を、いまによくつたえる作品である。

地球はまるい

いっぽう、バテレンたちがもたらした西洋科学の知識は、わが国の学問の発達に大きな影響をあたえた。

彼らがもたらした学問は、鉄砲傷の治療を中心とした南蛮外科ほか、本草学・農学・数学・兵学・地理学など、じつに多彩であった。なかでも天文と航海と造船についての知識が、わが国にあたえた影響は、ずばぬけて大きかった。

バテレンたちは、地動説こそ知らなかったが、地球が球形であることを知っていた。仏教がいう須弥山思想と、儒教が説く天円地方説しかきいたことがなかった日本人にとって、西のはてが東であり、東のはてが西であるという、バテレンが説く地球説は、ほんとうに天地がひっくりかえるほどのおどろきだった。

バテレンたちは、あるいは地球儀をもちい、あるいは彼らの世界一周の経験を語り、あ

泰西王侯騎馬図　キリスト教国とイスラム教国の王の戦い。渡来の原画を，日本人のキリシタン画家が模写したものと，いわれている。

るいは日食や月食の現象を、理論的に説明して、地球説の正しさを説いた。そして、一部の頑迷な人びとをのぞいて、聡明な日本人はしだいにこれを理解した。信長がバテレンから地球儀で天文地理の説明をうけ、地球説を理解したという、有名な話もある。ザビエルは、地球説をきいた日本人のすがたを、つぎのように本国へ書きおくっている。

「日本人は、質問は際限ないくらい、知識欲に富み、われわれの答えに満足すると、それをまた他の人びとに熱心におしえてやまない。地球のまるいことは、彼らに知られていなかった。そのほか、太陽の軌道についても知らなかった。流星、稲妻、雨・雪などについても、質問がでた。」

こうして、南蛮天文学の知識をえた日本人は、科学にうらづけられた合理的な世界観をもち、さらに目を宇宙へと拡大させていったのである。

航海術と造船術の発達　南蛮天文学がつたわれば、当時の世界の一流をゆく西洋の航海術と造船術の吸収も、とうぜんのこととなってくる。

勇敢な日本人は、南蛮船にのりこんで、南蛮人のもつ最新の海図、あるいは天文航海術を、実地で勉強した。造船の技術でも、船そのものは伝統的な和船ではあったが、ポルトガル船を手本として、遠洋の航海にたえうる大船がつくられだした。ヨーロッパ人の指導のもと、西洋式の帆船さえつくられた例もある。

信長・秀吉・家康も、軍事と貿易の両面から、大船の建造には熱心であった。

一五七八年、信長は七そうの「鉄砲、とおらぬ」鉄甲の軍船を建造し、大阪湾をおさえ

南蛮船と航海用の観測器具　左の船は，日本にむけて外国の港を船出する南蛮船。上は船の位置をしらべ，針路をさだめるための四分円儀と，その使いかた。

て本願寺に大打撃をあたえたことがある（→P111）。このような大船の造船は、南蛮造船術の知識があってはじめてできることであった。

こうして、わが国の遠洋航海術と造船技術は急速に発達した。そして、このことが、やがてまもなくアジアの海ではじまる、あの朱印船貿易のめざましい活躍にむすびついてゆくのである。

もりあがる庶民文化

庶民芸能の広がり　このころ、庶民社会では、町衆や農民の地位の向上をものがたるかのように、開放的でたくましい庶民の文化が発達した。

芸能では、猿楽と田楽、それに幸若舞といわれる曲舞が、とくにもてはやされ、多くの見物人でにぎわった。都市でも農村でも、盆踊りや念仏踊りがさかんになり、正月や神社のお祭りなどには、操り人形をたくみにつかう傀儡子師や、猿まわし・獅子舞・神楽・奇術・相撲などの、ありとあらゆる芸人があつまって、戦乱にくるしめられた民衆の生活に、たのしい色どりをそえていた。

色とりどりのはなやかな装いをつけ、苦心して細工をしたのぼりや出し物を手に持って、みんなで行列をつくっておどりあるく風流踊りが流行したのも、この時代のことだった。有名な風流踊りには、村と村、町内と町内が競演する

相撲(上)　信長がすきだったので，さかんになった。
曲芸師(右)　道ばたで，通行人を相手に茶わんをまわす。

踊りもあり、とおくからも見物人がおしかけて、拍手かっさいする光景が、あちこちでみられた。

全国の各地で、庶民参加の特色ある祭りがおこった。なかでも、真夏におこなわれる京都の祇園祭は、下京の町衆たちが、町内ごとにかざりたてた山鉾をつくって参加した（→口絵P89）。戦国の争乱のなかでも、この祭りは町衆の心意気をしめしてにぎやかにおこなわれ、その山鉾に、南蛮趣味ゆたかな、高価にして華麗なゴブラン織や、ペルシャ渡来の花もうせんをかざり、町衆のゆたかな富とその趣向をよくしめした。

このように、集団でたのしむさまざまな庶民芸能が、まえの時代よりもさらに発達し、庶民の四季の生活のなかに根をおろしたのが、この時期の文化の特色であった。

語りの文芸

文芸の世界では、連歌が、公家・武家・僧はもとより、地方の大名や農村の地侍たちにも、前代につづいて流行した。都から諸国へ、農村から都市へ、「旅わたらい」の連歌師が、連歌の会の指導者になって活躍した。山崎宗鑑があらわれて、俳諧連歌をおこし、のちの俳諧の基礎をつくったのも、戦国時代のことだった。

「旅わたらい」といえば、猿楽・幸若・田楽などのいろいろの芸人たち、それに平曲を語る琵琶法師が、村や町にやってきて、それはたのしいことであった。彼らは、本職の芸のほか、都の公家の文化を地方につたえ、また農村の武士や農民たちの文化を都へとひろめ、両者の文化を交流させる役割をはたした。

読み書きがにがてだった民衆は、『平家物語』や『太平記』、それに曾我兄弟の話など、

祇園祭　上はいまもよびものになっている，祭のクライマックス，山鉾の巡行。左は災難よけの母衣をせおって，祭に登場する武者。

琵琶法師や「語りの僧」が読むものを、耳できいてたのしんだ。民衆の文芸や歴史の教養は、書物ではなく、まだ「語り」によって耳からはいってくる時代だった。

民衆のそぼくな夢や教訓をたくしたお伽草子がつぎつぎとつくられ、また庶民が口ずさんだ小歌をあつめて『閑吟集』ができあがったのも、このころのことである。

地方にひろがる都の文化

うちつづく戦乱の巷となった都から、公家や臨済五山の禅僧のなかで、戦火をさけて、地方にくだる者が多かった。彼らの手で、都の洗練された文化が、地方にさかんに移植されだした。

なかでも、大内氏の城下であった周防の山口（山口市）は、都の文化人を歓迎し、「西の京都」といわれるほど、文化がさかえた。公家や禅僧はもとよりのこと、都から連歌師や画僧、儒者や神官、管絃や有職（古来からの礼式）の専門家まで、つぎつぎとやってきて、勘合貿易でにぎわうこの町に、多彩な文化をそだてあげた。

このように、京都の文化をよくうつした都市を、こんにち、「小京都」とよんでいる。山口のほか、土佐の中村（高知県中村市）は、一条兼良の子孫がおもむいて、代だい住みつき、土佐の小京都として文化がさかえた。京都をまねたごばんの目のような町すじ、東の山なみを東山とよび、石見寺を延暦寺にみたて、南流する後川を鴨川とよび、祇園の社までもつこの町の景観は、まことに小京都というにふさわしいものがある。

小京都とよばれる町はどこでも、鴨川と東山にみたてた川と山なみがあるの

正月の遊び　画面上は，羽根つきをたのしむ人びと。中央の長ばかまに刀をさしているのは父親であろうか。画面右では男の子たちが，杖でまりを打ちあう毬杖をしている。下のほうでは，杖のかわりにひもをもちいた，ぶりぶり毬杖をしている。

が、共通した特色である。なかには、祇園祭や大文字の送り火など、京都を代表する行事まで、うつしていることもある。山口や中村のほか、山陰の津和野（島根県）や出石（兵庫県）、美濃（岐阜県）の郡上、飛騨（岐阜県）の高山、伊予（愛媛県）の大洲など、いまも小京都として名だかい。

公家と民衆の文化が、京都と地方の文化が、そして都市と農村にそだった文化が、たがいに孤立して存在した時代は、すぎさった。これまでのどの時代よりも、両者ははげしく交流し、影響しあって、いまにのこる多彩な民族の伝統文化の源流をかたちづくった。これが、中世末期のこの時代、歴史の大きな潮流の一つだった。

年中行事の定着　こんにちのわれわれの、四季をいろどるたのしい年中行事が、庶民のあいだに根づいたのも、この時代のことであった。

正月。元旦には門松をかざり、若水をくみ、餅をたべて一年の健康をねがい、外では人びとが、羽子板で羽根つきに興じる。いまとちがうところは、羽根つきは女の子だけの遊びでなく、男の子も、またおとなたちも、いっしょにあそんだことである。

節分の日。豆まきの風習はずいぶんとひろまっていた。公家や武士の家でも、庶民の家でも、また寺でも、住んでいた鬼たちが、「福は内、鬼は外」のかけ声で、部屋ごとにまかれたいり豆をひろいひろいしながら、家の外へでていった。

三月三日はひな祭りである。白酒をたのしみ、草餅を味わった。いまとちがうのは、この日は「鶏合せ」の日でもあった。雄のにわとりをたたかわせる、賭けをともなうこの遊びは、人びとを興奮させ、やんやんやのかけ声が、町や村をおしつつんだ。

雪だるまつくりと，こま回し　いまも子どもになじみぶかい遊び。こま回しをのぞきこむ坊さんは，鳥かごをもっている。

五月五日は端午の節句である。粽をつくり、家の軒には菖蒲をふき、菖蒲をいれた湯にはいり、男児は菖蒲のかぶとに菖蒲の刀でいくさごっこに興じていた。「印地打ち」といって、川原にでて石合戦をする悪童が、幅をきかせたのも、この日である。

七月七日は七夕の祭りである。習字や手芸がじょうずになるようにと、「たなばた様（七夕）」に笹竹をたむける風習もできていた。七月は盂蘭盆の月でもある。家いえでは一年に一度亡者の精霊をむかえ、盆燈籠の燈が村や町の夜をかざり、仕事もおやすみである。

八月一日は「八朔のおたのみ」の日である。つね日ごろ、おせわになっている人にあいさつにいく日で、いまのお中元のもとになる。

一〇月の最初の亥の日は、「亥の子」である。この日の亥の刻（午後九時〜一一時）、無病息災をいのり、また秋の収穫を感謝して、亥子餅をたべた。いまのぼた餅（おはぎ）のおこりである。そしてこの日から、冬の到来をつげる火鉢やこたつの使用がはじまる。

いよいよ一二月になると、どの家でもすす払いがはじまって、家の内部がきよめられ、たのしい正月をむかえる用意が、つぎつぎとおこなわれる。

これらの年中行事のなかには、ふるくからのものもあるし、公家や武家の社会からおこったものもあるが、いずれもこの時代に、庶民の生活のなかに、彼らの文化として根をおろすようになった。

天下統一へ

みだれにみだれた戦国の世も、織田信長の出現で、統一の方向へとむかう。信長は、各地にむらがる戦国大名たちを、つぎつぎにうちやぶった。宗教によってむすびついた一向一揆や比叡山などの勢力も、信長によってたおされた。

日本の統一は、信長のあとをついだ、豊臣秀吉の手で実現した。国内を平定した秀吉の目は、中国・朝鮮へむけられたが――。

南蛮やアジア諸国の文化とのふれあいのなかで、活力にみちた時代の空気が、はなやかで、力づよい桃山文化をうみだした。

秀吉の陣屋におかれたといわれる唐獅子の屏風。天下人の威厳を、よくあらわしている。

おちつきと優雅さ

――戦国時代の子ども――

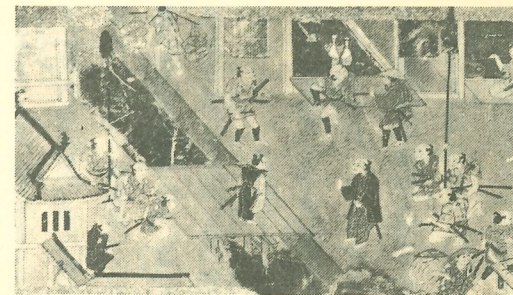
「ヨーロッパの子どもは、青年になってもなお使者となることはできない。日本の子どもは、一〇歳でも、それをはたす判断と思慮をもち、まるで五〇歳のおとなのようにみえる。」

なにごとにもつよい好奇心をもち、すべてのことを記録してやまなかった宣教師のルイス＝フロイスが、こう書きのこしている。

ここでいっているのは、武士の子のことで、使者とは、他国への交渉にでかけたり、他国からきた使者をむかえ、主人にとりついだりする役目をさしている。

一つまちがえば、戦争がおこり、ばあいによっては腹を切って死なければならぬ。武士の子は、小さいときから、そういう場所にだされることによって、人前での礼式を身につけるよう、しつけられた。

彼らも、元服するまでは幼名でよばれ、髪も、後ろでたばねてたらす稚児髪か、肩のあたりで切る、いまのおかっぱにちかいすがたで、はしりまわっていた。

しかし、一〇代になって元服すると、名をあらため、烏帽子をつけ、刀と脇差をさし、一人前の男としてあつかわれるようになる。それだけの責任も自覚される。

おとなの代理　お供をしたがえ，たいせつな客をむかえる。

フロイスは、さらにいう。

「われわれの子どもは、その立ち居ふるまいにおちつきがなく、優雅をおもんじない。日本の子どもは、その点ひじょうに完全で、まったく賞賛にあたいする。」

さて、諸君はどうおもうだろうか。

織田信長像。くつろいだすがたのなかにも，非凡なまなざしが読みとれる。

長篠合戦図屏風。武田の騎馬武者を打ちやぶる鉄砲隊の活躍がえがかれている。

織田信長 ——あたらしい考えの持ち主

わずかな兵で、大敵の今川義元を討ちとり、天下統一への道をあゆみはじめた信長は、合理的でとらわれない考えの持ち主だった。

足軽部隊に鉄砲をもたせ、それまでの騎馬武者を中心とする戦法を、一変させてしまった。

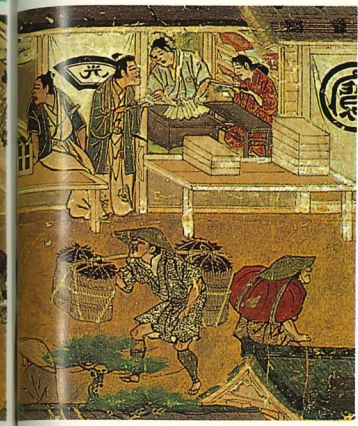
また、琵琶湖のほとりにきずいた安土城の城下町は、だれでも自由に商売ができるようにして、町のにぎわいをはかったりもした。

農民生活のひとこまをとらえた大和絵。堅田図。

都市と農村

統一にむかう活気は、都市をさかえさせた。商売は繁盛し、職人も注文に追われた。

いっぽう、農村では検地がおこなわれ、農民は土地にしばりつけられたうえ、武器もとりあげられた。

弓をつくる職人。

京都の町屋。扇子をつくって売る店や，荷をかつぐ人びとでにぎわう往来のようすが見える。

洛中洛外図屛風。祇園祭にわく、町衆の中心地京都下京の四条通り。いまにつたわる山鉾巡行が、狩野永徳の筆に、いきいきとえがかれている。

豊臣秀吉像。名もない生まれから，関白になった秀吉の天下人ぶりを，よくあらわしている。

豊臣秀吉
——天下統一から大陸へ

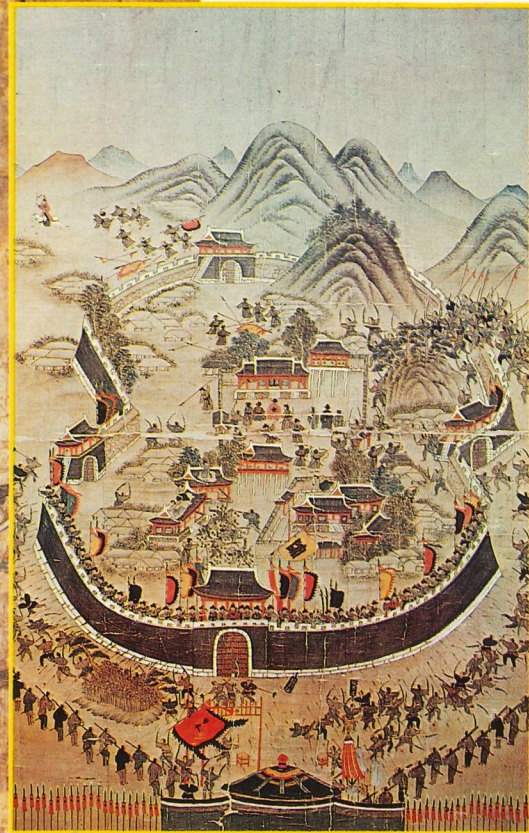
主君の織田信長のかたき、明智光秀を討って、あとをついだのは、豊臣秀吉であった。

柴田勝家をやぶり、徳川家康とたたかった秀吉は、大坂城をきずき、関白となった。

秀吉は、検地・刀狩など、天下統一への政策を着ちゃくとすすめながら、金銀の鉱山を自分の領地としておさえ、大商人と手をむすんで富をたくわえていく。

やがて、九州の島津氏、関東の北条氏を征服して天下人となった秀吉は、大陸の中国・朝鮮へと野心をひろげた。

二度にわたる朝鮮への出兵は、朝鮮の人びとをくるしめたばかりでなく、日本の武士や農民にも、大きな負担となった。この侵略戦争は、秀吉が死んだこともあって、失敗のうちにおわった。

秀吉の権勢をしめすきらびやかな聚楽第。

東萊城の戦い。朝鮮にせめこんだ日本軍と，朝鮮軍の抵抗。

朝鮮では，海上の戦いも重要だった。写真は，当時の日本水軍の船と同型の模型船。

この節を読むにあたって

一世紀つづいた戦国時代をおわらせ、天下統一にむかう大きな動きがおこる。統一への道をきりひらいたのが、織田信長である。尾張（愛知県）の戦国大名であった信長は、京都をおさえ、あたらしい武器をとりいれ、大胆な戦術をつかって、統一のじゃまになる勢力を、つぎつぎにうちやぶった。

延暦寺を焼き、将軍を追放し、一向一揆をたたきつぶし、信長がめざしたものは、大名の力を中心とする統一であった。

信長の政治は、わずか一五年でおわった。この短期間に、これほど大きな変革をすすめた例は、歴史にも数がすくない。彼が中途でたおれた原因も、あるいはそのへんにあるのかもしれない。

織田信長の十五年

濃尾平野の風雲児

地下にうもれていた城

一九七五年（昭和五〇年）夏、京都市の地下鉄建設の工事現場である烏丸通椹木町のかどで、地下に大きな石垣の列のあるのが発見された。京都はふるい都で、町じゅうがすべて遺跡といってもいいすぎではない。このため、建設にさいして、考古学の発掘調査が、並行してすすめられていた。

東西方向にはしる石垣は上部はくずされていたが、七段以上つまれ、高さは一・七メートルあり、その下に犬走りがあって、堀につづいている。堀は、平安京の中御門大路をほぼいっぱいに利用した、幅二六メートル以上もある大規模なものであった。この場所は、織田信長が足利義昭のためにつくった室町御所（→P14地図）のあたりとされている。発掘がすすむにつれ、これがその一部にまちがいないことが、あきらかとなった。

注目をひいたのは、石垣につまれた石材の中に、多数の石仏や五輪塔・板碑・燈籠などが、発見されたことである。これらの石造物がぜんたいの半数以上をしめ、石仏の七〇〜八〇パーセントが、阿弥陀仏であった。なかには、石垣として、一定の大きさにそろえる

城と書院

戦国時代から江戸時代はじめにかけての、力づよい時代のうごきは、建造物によくしめされている。なかでも、大名の威厳をあらわす城と、豪華な書院は、その代表といえよう。

白鷺城の別名をもつ姫路城の天守群。

やや時代はあたらしくなるが，書院づくりのけんらん豪華さを代表する西本願寺対面の間。

町を歩く宣教師　長い黒マントをつけたイエズス会の宣教師。

信長と宣教師　信長は、先入見をもつことなく宣教師と接した。みずから食膳をもって、「なにもないが、おあがり。」とすすめた。安土では、宣教師から世界の知識やキリスト教についてきき、ビオラやクラボなど楽器の演奏をたのしんだ。

京都で、はじめて黒人を見たときは、ほんとうに肌の色かどうか、たしかめるために上着をぬがせ、自分の目でしらべ、子どもたちにも見学させている。

ため、首などを欠いたものもあった。

イエズス会の宣教師ルイス＝フロイスは、すくなくとも二〜三年はかかるとおもわれたこの御所の工事を、信長はわずか七〇日間で、しあげてしまったと書き、そのために信長は、あちこちから多数の石の仏像をとりこわしてはこばせた、と記録している。

フロイスによれば、人びとは、石の祭壇を破壊し、仏像をたおし、これを手押し車につんだり、または首に縄をかけて、工事場まで引いてきた。彼らは仏像をとうとんでいたので、おどろきとおそれをかくすことができなかったが、信長がみずから籐の杖を持って指揮し、命令をくだすので、おそるおそるしたがったのである、と。

フロイスの記事はふるくから知られていたが、文字どおり、それを証明する石垣を目のあたりにして、信長の伝統破壊にかけたエネルギーのすさまじさに、人びとはあらためて目をみはったのである。

統一の時代へ　下剋上と群雄のあいあらそう戦国時代をおわらせ、統一された国家をつくりだす仕事は、織田信長が手をつけ、豊臣秀吉がこれをうけつぎ、徳川家康の手でしあげられた。「織田がつき　羽柴（秀吉）がこねし　天下餅　すわりしままに　食うは徳川」の歌は、この関係をよくいいあらわしている。

たんにみだれていた世の中が統一されたというだけでなく、世の中のしくみががらりとかわってしまった。信長が京都へはいってから家康が死ぬまで、わずか四八年とはいえ、日本の歴史でもまれな変革の時代であった。

石垣につかわれた石仏　最近，室町御所のあとから発掘された石仏の数かず（左）。右から，首だけの石仏，首のかけた石仏，板碑。

信長は、「鳴かぬなら　殺してしまえ　ほととぎす」といわれるように、統一のじゃまになる中世社会のふるい勢力を、かたはしからたたきつぶしていった。秀吉は、「鳴かしてみよう　ほととぎす」とばかり、大きな革新政策をつぎつぎとうちだした。家康は、「鳴くまでまとう」とじっくりかまえ、最終的に徳川氏を中心とする統一国家の制度をまとめあげて、死んでいった。

三人とも、尾張と三河（いずれも愛知県）の出身でありながら、性格はずいぶんことなっていた。年齢は信長がいちばん上で一五三四年（天文三年）のうまれ、秀吉はその二年後、家康は八年後にうまれている。ヨーロッパ人があいついで日本へやってきて、鉄砲をつたえ、キリスト教の布教をすすめはじめた時代である。アジアでは、明の勢力がおとろえ、周辺の国ぐにがそれぞれ独自の道をさぐり、なかにはヨーロッパに屈服して植民地となるものもあらわれた。日本をうごかす三人は、この国をどこへもっていこうとしたのであろうか。

桶狭間の奇襲　一五六〇年（永禄三年）五月一八日の夜、尾張国清洲城の一室で、織田信長は一人、謡曲「敦盛」を口ずさみながら、舞っていた。

「人間五十年　下天のうちをくらぶれば　夢まぼろしのごとくなり　ひとたび生を得て滅せぬもののあるべきか」

人生わずか五〇年、この世をながめても、すべて夢かまぼろしのようなもの、うまれたものは、いずれは死ぬのが運命ではないか。信長は、この歌をこのんでうたった。いまも、

織田信長の関係図

二六歳の彼は、その生涯のわかれめになった一つの決断に、かけようとしていた。

このとき、駿河・遠江・三河の三国（静岡県から愛知県東部）を支配する戦国大名今川義元が、二万五千の大軍をひきいて尾張に侵入し、清洲をめざしてすすんでいた。今川氏は足利氏の一族で、戦国大名のなかでも名門であるだけでなく、指折りの力をもっていた。義元は、武田信玄や北条氏康と手をむすび、背後からおそわれる心配をなくしたうえで、信長をいっきょにもみつぶそうと進軍してきた。義元のねらうところは、京都にはいり、天皇や将軍の権威を利用しつつ、全国の大名に号令することであった。

信長は舞いおさめると、ただちに出陣の命令をくだし、みずから馬を駆って、まっさきにとびだした。熱田で集結した軍勢は二千人であったという。一九日午後、今川勢が桶狭間の北のくぼ地、田楽狭間に本陣をおいたとの情報をえた信長は、はげしい夕立ちのなか、三百騎の騎馬隊をしたがえ、義元の本陣に突入した。

かねてから、信長は、大軍が行動しにくいこの狭間を、決戦の場所とひそかにかんがえていた。案のじょう、味方の多さと最初の勝利にゆだんしていた今川軍は、織田軍の突撃で大混乱におちいり、総大将義元は首をうちとられ、総くずれとなって敗走した。

この勝利が、織田信長を、天下統一への最短距離の地点にたたせることとなった。

織田家のルーツ　織田氏は、越前国（福井県）丹生郡織田荘の荘官の出身である。越前と尾張の守護をしていた斯波氏につかえ、守護代にとりたてられて尾張に住みつき、斯波氏の力がおとろえると、尾張国の実権をにぎった。

←**砲術の秘伝書**　信長が天下統一をすすめることができたのは，鉄砲の力が大きかった。鉄砲の技術は，家代だいの秘伝とされることも多かった。これは，徳川家につかえた稲富一夢が，祖父の代からつたえられた秘伝を，書きしるしたもの。

茶筅まげ　抹茶をたてるときにもちいる，茶筅ににたまげ。伝統にとらわれない，自由な気風の，当時の若者のあいだで流行した。

守護代の織田家は、当時二つにわかれ、一方は岩倉にいて尾張の上四郡をおさえ、他は清洲にいて下四郡を支配した。信長の父信秀は、清洲織田氏につかえる三奉行の一人であった。だから、足利将軍の家来である斯波氏の、そのまた家来の家来ということになり、武士としては、それほど名門というわけではない。

信秀は知略に富んだ人物で、彼の時代に主家の織田氏の勢力をしのぎ、尾張国内にいくつも居城をうつしながら、しだいに力をのばした。東は三河国境で松平氏や今川氏とたたかい、西は斎藤道三の支配する美濃へたびたびせめいったが、どちらも決定的な勝利をえることなく、やがて、道三の娘を信長と結婚させることによって和をむすんだ。

尾張の大うつけ　わかいころの信長は、毎日のように弓・鉄砲など、兵法のけいこをし、鷹狩りに山野をかけめぐった。

服装はすこしかわっていて、着物の袖をはずし、みじかい革の半袴をはき、腰には、火打ち道具をいれた袋やひょうたん、そのほかいろいろの必要なものをさげ、髪は茶筅まげに結い、それを紅や萌黄色の糸で巻きたて、大刀は朱ぬりのさやをもちい、つきしたがう近習（側近）の家来たちにも、そろいの朱色の具足をつけさせ、往来を肩をくんであるくというしまつであった。

このため、人びとは信長のことを、「大うつけ」（ぼんやり者）とか「大たわけ」（ばか者）と、ひそかにうわさしていた。

斎藤道三が娘婿の人物をしらべてみようと、富田の聖徳寺（愛知県一宮市）で信

正親町天皇(1517〜93)　うちつづく戦乱のために金がなく，毛利元就の献上金を得て即位。皇居をつくったり修理するのも，信長・秀吉らの援助をうけた。

岐阜のいわれ　稲葉山城のあたりは、もと井ノ口とよばれていた。信長は、古代の中国で周という国が岐山を中心におこり、中国を統一したことにちなんで、岐阜（阜は丘の意味）という名前にかえた。ここにも、信長の天下統一への意欲をみることができる。

長と対面したことがある。そのときも、信長はいつものいでたちによりをかけ、大刀・脇差の柄に縄を巻き、腕に苧縄をつけ、はでなかっこうで、七、八〇〇人の家来をひきつれてやってきた。しかも、五メートルから六メートルはある朱ぬりの長槍五〇〇本、弓・鉄砲五〇〇ちょうをそろえ、先遣隊をはしらせ、つけいるすきをみせないかまえであった。

ところが、いざ対面となると、いつのまに用意したか、髪はきちんと結い、ちゃんとした長袴をはき、上品な小刀を腰にさしてあらわれたので、なみいる人びとは、さてはふだんの「たわけ」はわざとしておられたのか、とおどろき、しだいに心服するようになった。

道三は、信長の人物がただものでないことを知り、

「自分の子どもの代には、美濃はあのたわけに支配されてしまうだろう。」

とのべた。

道三の予言したとおり、桶狭間の勝利の七年後、信長は美濃にはいり、道三の孫龍興のたてこもる稲葉山城をおとし、ここを岐阜とあらため、大きな城をきずいて本拠とした。

将軍追放

天皇と将軍が助けをもとめる

ちょうどこのころ、京都の朝廷は、うちつづく内乱のために年貢がとだえがちであるうえ、頼みとする室町幕府の力がよわかったので、台所がくるしく、朝廷の行事はもちろん、日びの生活もままならぬあり

京都御所　室町時代のはじめの後小松天皇(在位1382〜1412)のときこの地を御所とさだめ，明治の東京遷都までつづいた。図は，紫宸殿の南庭でおこなわれている雅楽をえがいた，洛中洛外図屏風。

さまであった。そこで、正親町天皇や側近の公家たちは、財政の援助を、地方の大名や土豪にもとめることが多かった。

たまたま信長の父信秀が、以前に禁裏御所（天皇の御所）の修理費を献上したことがあり、天皇は、信長にも、御所の修理と朝廷の領地の回復のほか、一宮誠仁親王の元服の式をおこなう費用をだしてくれるよう、綸旨（天皇の意志をつたえる書状）をくだした。

いっぽう室町幕府は、一三代将軍足利義輝が、三好義継・松永久秀らの反乱によって京都で殺され（→P13）、従弟の義栄がかつがれて一四代将軍の位についた。義輝の弟義昭は、奈良興福寺一乗院の僧侶となっていたが、ここを脱出し、越前の大名朝倉義景をたより、兄のかたきをうって将軍職をとりかえす計画をねっていた。そのうち、信長の勢威の大きいことをつたえきいて、助けを借りる決心をし、岐阜にきた。

天皇も将軍も力はなかったが、天皇は朝廷の官職をあたえる権限をもち、将軍は鎌倉時代いらい、武士団の棟梁としての地位をうしなっておらず、いずれも地方武士たちのなかには、その権威にあこがれをもつ者も多くいた。天皇と将軍をたすけることによって、信長が全国を統一する仕事は、やりやすくなるであろう。

京都にはいった信長

一五六八年九月、行動をおこした信長は、ただちに近江（滋賀県）にはいり、南近江の大名六角氏を追いだし、月末には京都にはいった。将軍義栄はたたかわないでにげ、三好・松永ら

足利義昭(1537〜97)
室町幕府の最後の将軍。

朝廷の官職　朝廷では、官位相当といって、ある官職にはどの位階（天皇からもらう位のことで、正一位から小初位下まで三〇のランクにわかれている）の者がつくかがきめられている。弾正忠は、役人の不正をとりしまる弾正台という役所の、三番目の役人のことで、位でいえば六位の者がなる役職である。この位では、御所へでかけても、直接天皇には会えないのがきまりであった。

の軍勢もすがたをけした。一〇月、義昭は征夷大将軍となり、その望みをはたした。

信長の軍隊は規律ただしく、心配していた京都の人びとも胸をなでおろした。信長は、朝廷や公家のために御所を修理し、献金をしたり、領地をとりかえしてやったりし、義昭のためには、室町通で旧平安京の二条にあたる地に御所を建設した。ここは、かつて兄義輝の御所のあったところである。義昭はよろこび、岐阜にかえる信長があいさつにきたとき、わざわざ門の外まで見送りにでて、信長のすがたが三キロもはなれた粟田口の山かげにきえるまで、石垣の上に立ちつくしていたという。

信長は、「天皇と将軍の御用のためである。」といって租税を徴収し、地方の大名たちには、京都にでてきて「御用」に奉仕するようもとめた。禁裏御所や室町御所の工事は、それによって、十数か国の武士や農民が動員されたものである。

足利義昭は、信長を副将軍か管領にしようといったが、信長はことわった。また、知行地をあたえるというのも辞退して、ただ、堺などに代官をおくことのゆるしだけを得た。

信長は、義昭の家来になる気はなかった。朝廷の官職も、弾正忠という六位相当のひくい官に、いつまでもついたままで、岐阜と京都のあいだをたえず往復していた。

反信長連合戦線

信長には、むかしのように強大な室町幕府を復興する気はなかった。義昭の御所をつくるにさいし、彼は掟をさだめ、御所の中での将軍と直臣・公家たちの関係、勤務のしかた、裁判のありかたや、裁判をするときの原則となる考えかたなどを、きびしく規定し、義昭にみとめさせた。かたちは義昭が将軍でも、じっ

将軍の住まい　狩野永徳の洛中洛外図屛風にえがかれたもので，最後の将軍，義昭が住んだ御所。室町御所といわれる。

さいの主人は信長であり、信長がすべてをきめるのであった。

幕府の再興を夢みる義昭がこれに不満をもったのは、いうまでもない。彼はしだいに、信長にかくれて、将軍の権威をたよりに、地方の大名、比叡山延暦寺や石山本願寺などの僧兵・一揆に、はたらきかけるようになった。

信長はこれに気づいて、よそへ手紙をだすときは、かならず信長に見せるように、これまでだしたぶんはとりけすように、だれかに知行をやりたければ、信長の支配地からいくらでもわけてやるから、など、天下の支配者は信長であることをしめす手紙をおくった。両者のあいだのひびわれは、しだいに大きくなっていった。

当時信長は、尾張・美濃のほか、およそ西は但馬（兵庫県北部）、東は伊勢（三重県）まで兵をすすめ、畿内を中心に勢力をつよめていた。しかし、その範囲内でも、まだ多くの敵をかかえていた。

全国をみわたすと、東国には甲斐（山梨県）の武田信玄、小田原（神奈川県）の北条氏康がおり、北に越後（新潟県）の上杉謙信、その西に越前の朝倉義景がいる。中国地方へいくと、もっとも大きな勢力をはっていたのが毛利元就、四国には土佐（高知県）の長宗我部元親、九州は南北にわかれ、北に大友宗麟（義鎮）と龍造寺隆信、南に島津義久がいて、たがいに相手を圧倒しようとあらそっていた（→巻末引き出し地図）。

義昭は、とくに武田氏のほか、朝倉・浅井・毛利の諸氏を頼みとし、そのほかの諸勢力とともに、反信長連合戦線をつくりあげようとした。

姉川の戦い

越前の朝倉義景は、信長にくらべると家柄もよく、信長よりはやく義昭を保護しながら、信長にさきをこされ、おもしろくおもっていなかった。

一五七〇年四月、信長は、義景が将軍の命令にしたがわないという理由で、雪どけの道を越前にせめこんだ。ところが、信長が妹お市をとつがせ、味方にしたとおもっていた浅井長政が、長年の縁故から朝倉方について兵をあげたため、はさみうちにあい、ほうほうのていで京都ににげかえった。

しかし六月、態勢をたてなおした信長は、まえから盟約をむすんでいた徳川家康の応援を得て、北近江の姉川で朝倉・浅井連合軍とたたかい、ついにこれを大敗させた。姉川での勝利によって、岐阜と京都をむすぶ道は、ほぼ信長の手に確保された。

延暦寺焼き討ち

しかし、このころが信長にとって、もっともくるしい時期であった。大坂で本願寺が信長打倒にたちあがり、優秀な鉄砲隊をそろえて、信長をくるしめた。背後から、いきおいをもりかえした朝倉・浅井勢や、六角氏の残党が京都をねらい、これを延暦寺の僧兵がたすけた。

102ページ右から
朝倉義景(1533～73)　浅井とともに信長とたたかって敗れ，一乗谷で自殺した。
お市の方(1548～83)　信長の妹で浅井長政の妻。のち柴田勝家の妻になる。
浅井長政(1545～73)　はじめ信長に味方をしたが，のちに朝倉方についた。

比叡山　琵琶湖ごしに見た比叡山。山上の延暦寺は，古代から中世の一大勢力。

一五七一年九月、信長は比叡山を包囲すると、延暦寺全山の堂塔・坊舎に火をはなった。火は三日間にわたって天をこがし、京都の町からもよく見えた。にげる僧侶や一般の男女は、すべて首をうちおとされた。なかには老人や子どももいたが、有名な者、無名の者いっさい容赦せず、死体は数千にのぼり、延暦寺は廃墟となった。

僧侶のくせに修行をせず、ぜいたくなくらしに日をおくったうえ、武器をとって敵対するのはけしからぬ、というのが信長の言いぶんであった。

伝教大師最澄いらい、七〇〇年の歴史をほこる延暦寺は、王城鎮護の寺として京都にかくれた支配力をもち、近江にも荘園や所領をおいて、大きな影響力をおよぼしていた。信長は、焼き討ち後、坂本（滋賀県大津市）に城をきずき、明智光秀にまもらせて、琵琶湖をがっちりとおさえこみ、やがて朝倉・浅井の両氏ともせめほろぼしてしまった。

室町幕府ほろぶ

ところが、まもなく信長にとって、もっともおそろしい瞬間がやってきた。武田信玄が、京都にむかって進軍を開始したのである。三万二千の武田軍は、徳川家康の領内に侵入し、浜松の北にある三方ケ原で、徳川軍と応援の織田軍を粉砕した。徳川勢は壊滅的な打撃をうけ、にげた家康は、恐怖のため、気がついたら馬上に便をもらしていた、という話がつたわっている。

この情勢をみた足利義昭は、一五七三年、ついに公然と信長打倒の兵をあげた。信長は、いったん頭をさげて和睦をねがったが、義昭がききいれないとみると、室町御所をとりかこみ、上京の町と西の京一帯の村むらを焼きはらった。ここでも数千の人が死んだ。

じっとしていない信長　信長は、すこしもやすむことのない人であった。岐阜や安土から京都へくると、たいてい公家があいさつにくる。会うこともあるが、会わないこともある。

翌日は、東山や西山に鷹狩りにでかける。鷹狩りは信長のすきなもので、ときには二日つづけていく。とおもうと、つぎの日は本願寺との戦いに出陣し、一〇日ぐらいかえってこない。かえったとたん、その日に北山へ鷹狩りにいったこともある。そして翌日は、もう安土へむかうのである。

義昭はおそれて、御所から一歩もでることができなかった。

ちょうどこのとき、三河にきていた武田軍が、しずかに退却をはじめた。信玄が病死したのである。信長は、運もつよかった。七月、またもやうごきだした義昭を宇治槇島城に追いつめ、命だけはゆるして追いはらった。義昭は河内から堺へのがれ、さらに紀伊（和歌山県）から備後（広島県）へと、流浪の旅にでる。

足利尊氏いらい二三〇年、一五代にわたった室町幕府はここにほろびた。

足軽鉄砲隊

せめるもにげるもはやい信長　それにしても、信長の軍隊はつよく、難局をつぎつぎときりぬけていった。その秘密はどこにあったのだろう。

まず第一にあげなければならないのは、指揮官である信長の、すぐれた判断とすばやい行動力である。信長は、せめるときは、桶狭間のように、つねに先頭きって駆けた。朝倉攻めのとき、にげる敵を追ってとびだした信長に、部下の武将たちが追いつけず、途中でまたねばならなかったため、きびしくしかりつけたことがある。佐久間信盛という部将は、このとき、言いわけがましく口答えをしたというので、のちに追放されてしまった。

しかし、信長はにげ足のほうもはやかった。敦賀までせめこんでいながら、浅井長政が蜂起したときくと、ただちに全軍に退却命令をくだし、みずからはただ一騎、数人の供を

← **馬上の信長（右）**　騎馬隊の武田勝頼軍と，鉄砲隊の織田軍がぶつかった長篠の合戦を見まもる信長。

信長の鎧（左）　紺糸でおどされた，当時流行の実用的胴丸具足。

つれただけで、京都まで駆けに駆けた。もし、にげるのがおくれていたら、退路を絶たれた織田軍は、越前と近江国境の山中で、全滅していたにちがいない。

橋と舟　大軍が機動力をもってうごけるように、瀬田川に舟をならべ、鎖でつないで橋をかけた。この鎖を、なんと禁裏御所の中にもうけた工作場で、ふいごをすえ、鍛冶職人四〇人をあつめてつくらせた。また、琵琶湖の北の佐和山（彦根市）で大船を建造し、いざというときに、大部隊をいっきょに坂本や大津まではこべるようにした。

さらに信長らしいのは、のちに勢力が安定して、この大船の用がなくなると、たちまち解体し、こんどは、湖上をスピードをだしてはしりまわる早船に、つくりかえさせてしまったことである。

足軽を鉄砲隊に編成する　第二の秘密は、足軽鉄砲隊である。足軽は、馬にものれない身分のひくい侍で、室町時代の末ごろから、畿内を中心に活動がめだってきた。が、このころはまだ、ゲリラ的なうごきにとどまっていた。農村でくいつめた農民たちのうち、腕に自信があり、一旗あげて侍にとりたててもらおうという者が、多く足軽となってはたらいた。

信長は、これにながい槍を持たせ、集団で行動させるようにした。それまでは、ながい槍はふりまわしにくく、戦場での一騎打ちには、みじかい槍のほうが有利だとかんがえられていた。しかし、これが隊列をくんでくりだすと、みじかい槍ではとてもかなわない。斎藤道三が感心したのも、このこと

であった（→P98）。

それだけでなく、信長は、この足軽部隊に鉄砲を持たせた。鉄砲が日本につたわって約三〇年。鉄砲は各地にひろまったが、生産の中心は堺や近江（滋賀県）の国友など、かぎられた地域に集中していた。海外との結びつき、ゆたかな資金、たかい技術をもった職人の存在などが、その条件であった。信長は、堺や国友を直轄領とし、堺の商人今井宗久を代官にすえて、鉄砲と火薬の調達にあたらせた。

集中された火力が、信長の危機を何度すくったことか、かぞえきれない。

長篠の戦い　最新式の武器である鉄砲にも、泣きどころがあった。射程距離が九〇メートル前後、玉は先込め式といって、一発ごとに銃口からつめ、そのつど筒の掃除をしなければならず、時間がかかる。火縄で火をつけるから、雨によわい。雨はしかたがないとして、信長は、まえの二つの欠点をおぎなう戦術をかんがえだした。長篠の戦いがそれである。

一五七五年五月、信玄のあとをついだ武田勝頼は、二万余の軍勢をひきつれて三河に侵入しようとし、徳川方のまもる長篠城をかこんだ。信長は、徳川家康の頼みにおうじて出兵し、城のちかくの設楽原で、両軍の決戦となった。

武田の騎馬部隊は、信玄いらい天下無敵といわれ、一三隊にわかれて、信長・家康連合軍の前に陣をしき、いっきょにもみつぶそうとのかまえであった。

信長は、これにたいして、陣地の前に柵をもうけ、柵の内がわに三千人の鉄砲隊を三隊

→**長篠の合戦**　前面におしよせた武田軍を，小川を前にして，鉄砲でうちはらう徳川軍。たおれた馬のすがたも，えがかれている。

鉄砲足軽　柵のうちから武田軍をねらいうちする，織田軍の鉄砲足軽。武田軍の騎馬武者は，柵に行く手をはばまれたところを打たれて，有名な武将が多数死んだ。

にわけて配置し、敵がちかづけば、一隊ずつかわるがわる一斉射撃をするように命じた。柵が騎馬の突入をふせぐうえ、銃弾をこめるあいだの危険をなくすことができる。

戦いは、午前六時から午後二時にかけて八時間にわたったが、武田方のくりだす騎馬隊は、つぎつぎと鉄砲隊のえじきとなり、名のある武将があいついで戦死し、ついに総くずれとなって敗走した。

この戦い以後、足軽鉄砲隊が戦闘の主力となり、戦術のありかたは一変した。

石山戦争

くつがえされた支配　各地の大名をつぎつぎに制圧した信長が、もっとも手こずった相手が、じつは武士団ではなかったといえば、読者はふしぎな感じをもつであろう。しかし、事実であった。

この時代、土民・百姓とよばれた人びとは、武士の支配をなくそうとして、はじめの章でのべたように、彼らにとって、よりましだとかんがえられた寺院の権威を頭にいただき、一揆をむすんで対抗した。なかで、もっとも強力であったのが、石山の本願寺をいただく一向一揆である。

本願寺は、全国に散らばる一向宗門徒の信仰の中心であったが、法主の顕如は、義昭の頼みをいれて、信長との戦いにたちあがるよう、門徒に指令した。

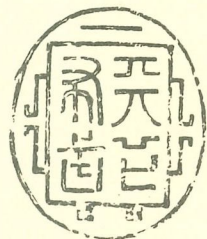
長島輪中　川や水路にかこまれた輪中は，交通の便がよいばかりでなく，自然のとりででもあった。写真の長島輪中を中心とする一向一揆は，信長をなやませた。

伊勢長島は、木曾川と長良川にはさまれた川口の三角州にある、輪中集落である。ここの一向門徒は、本願寺の指令をうけて、尾張にいた信長の弟信興をせめ、自殺させた。信長にとっては本拠地にちかい場所であるが、四方八方に敵をひきうけ、うごきがとれず、見殺しにしなければならなかった。翌年、かたきをとろうとせめこんだが、海賊衆が一揆がわにつき、苦戦のあげく、敗北をきっするしまつであった。

越前では、さきに朝倉氏をやぶって部将を配置しておいたところ、一向一揆がおこって、その部将を殺し、本願寺から僧侶をむかえいれて、自治政治をしいた。信長のいれた部将の政治が、あまりにきびしく、自分本位の勝手気ままをしたせいである。

一揆みな殺し　一五七四年、長島一揆の総攻撃にとりかかった織田軍は、九鬼嘉隆の水軍が、安宅船以下の大船で海上を封鎖するなか、おもいおもいに大船をのりまわし、水路のあちこちに散らばる一揆の拠点をとりかこんだ。

数百せきの船から大鉄砲を打ちだし、とりでの塀や櫓を破壊し、戦意をうしなった一揆が降伏を申しでてもゆるさず、こらしめのためといって干殺し（飢え死にさせる）にした。にげようと舟にのった者には鉄砲の玉をあびせ、ひるむところを、かたはしから川の中へ切りすてた。風雨にまぎれて逃亡をはかった者も、男女千人ばかり、切りすてられた。

血判の阿弥陀如来　長島の一揆にあつまった人びとが署名して，自分の血で判をおし，阿弥陀如来にしたがうことをちかったもの。

天下布武の印　信長が斎藤氏をやぶり，岐阜城にうつった翌年もちいた印。

三か月にわたる包囲で、餓死する者は数知れず、最後に男女二万人が二つの城にこもった。信長は、城のまわりに幾重にも柵をつくらせ、にげられないようにしたうえ、四方から火をはなって、全員焼き殺しにした。

翌年夏、こんどは越前（福井県）へ三万あまりの軍を陸海から侵入させ、一揆のたてこもるとりでをつぎつぎとせめおとし、首謀者である本願寺の僧侶や国人衆（↓P37）の首をはねた。それぱかりか、一揆にくわわったとみられた者は差別なく、すべて殺された。『信長記』は、八月一五日から一九日までの四日間だけで、とどけられた首の数が一万二二五〇余、としるしている。

信長自身、京都の所司代村井貞勝にあてた手紙の中で、「府中（武生市）の町は、一円（すべて）死かい（骸）ばかりにて、あき（空）所なく候。」とのべ、大量無差別殺人のおこなわれたことをみとめている。

天下布武　信長は、岐阜に本拠をうつしたときから、自分のだす手紙や文書に、「天下布武」としるした朱印をもちいていた。天下を武力で統治する、という意味である。だが、その武力は武士団の力であって、それ以外の勢力がもつ武力ではなかった。とくに、土民・百姓が武力をもつことをきらった。

おなじ武士団でも、中世の武士団は、たがいに武士どうしでたたかい、名のある相手に勝ち、その首をもちかえることを名誉と功績のしるしとし

た。土民・百姓の首などは恥とされ、たとえ切っても「切りすて」といって、わざわざもちかえらないのがたてまえであった。織田軍のみな殺し作戦にも、もちろん大量の「切りすて」られた百姓の男女がいたとおもわれるけれども、越前でとどけだされた一万二二五〇余の首が、すべて武士のものであったかどうかは、うたがわしい。

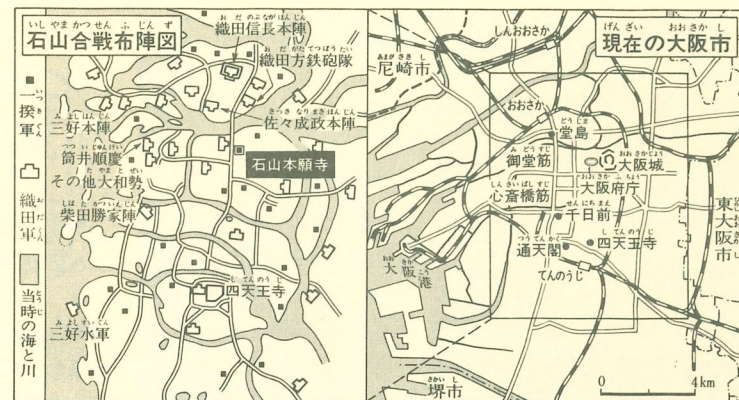
さすがの信長も、すこしは気がひけたか、伊達輝宗にあてた手紙で、「百姓などを相手にするのはどうかとおもうが、こうしないと天下統一のじゃまになるので……」という意味のことを弁解している。

土民・百姓は、信長にとっては支配される民なのであり、その点では同情がなかった。百姓が政治にかかわることは、武士団にとっても、信長にとっても、がまんのならぬことであった。じっさい、たびかさなる一揆によって、武士団は存在することすらあやうい状態におかれたことが、幾度となくあった。

たびたびの焼き討ち・みな殺し作戦で、親きょうだいをうばわれ、住む家をうしない、たべるものをなくして餓死した百姓・町人は、数も知れなかったが、信長は、あたらしい天下をつくりだすうえでじゃまになるとみれば容赦せず、人も物も区別しなかった。ただ、こうすることだけが武士団の生きのこる道だ、と家来たちにおしえたのである。

本願寺の降伏

一向一揆の中心である石山の本願寺は、淀川と大和川の流れをとりこみ、しぜんにできた巨大な城郭そのもので、内部に寺内町（→P57）をもち、水陸の交通によって諸国とむすばれていた。伊勢や越前などの一揆が鎮圧されてから

顕如（1543～92）　本願寺の11世。一向宗の信者を一向一揆として立ちあがらせ，信長の天下統一のまえに立ちふさがった。一揆勢は，長島の戦いでは信長の弟を戦死させ，大坂の石山本願寺では，11年間もたたかいつづけた。

も、本願寺が抵抗をつづけられたのは、二つの有力な支援ルートがあったからである。一つは、紀伊（和歌山県）の雑賀衆で、ここには優秀な鉄砲隊と水軍をもつ門徒集団がいた。他の一つは、安芸（広島県）の毛利氏である。瀬戸内海の水軍を支配し、その力で、海上から本願寺に軍需品や兵糧米をはこびこんだ。このため信長は、石山のまわりに多くの城やとりでをきずいて包囲していたが、あまり効果がなかった。

一五七七年、信長は雑賀へせめこみ、一か月あまりの戦いののち、降参させた。翌年、かねて九鬼嘉隆らに命じてつくらせていた大船七そうを、熊野浦から堺の港にまわし、大坂へ海上から補給しようとする毛利水軍にそなえさせた。

この船は、長さ二一メートル余、幅一二メートルあまりあり、鉄板でおおわれた、わが国最初の甲鉄艦であった。やがて、毛利勢が六〇〇そうの舟を動員して、大坂の川口にせまると、九鬼の大船は、これをまぢかにひきつけたうえ、いっせいに大鉄砲を打ちかけ、さんざんにうちやぶった。毛利氏は、この敗北にくわえ、国もとで反乱がおきたため、本願寺から手をひいてしまった。

孤立した顕如にたいし、信長は、正親町天皇の手を借りて降伏をすすめさせた。顕如は一五八〇年、ついに本願寺をあけわたし、紀伊へとしりぞいた。

本願寺の降伏によって、長年にわたる一向一揆との戦いはおわりをつげた。信長は、公家・武家・僧侶のほかに、はじめて土民・百姓をおさえこみ、名実ともに天下統一の基礎をかためることとなった。

安土山の遠望(上)と山上の石垣(右)　安土山は，滋賀県蒲生郡の琵琶湖ぞいにある小高い山で，交通の要地。安土城は，信長の死後，明智軍のために焼かれた。右は，天守閣の跡。

安土山の城

安土城の建設　足利義昭を追放したのち、政権のありかたをいろいろとかんがえていた信長は、近江（滋賀県）の安土山に城をきずき、ここを政治の中心とすることにした。

全国統一のためには、天皇の権威を利用するのが便利であった。安土は京都へ、騎馬でも、船でも、一日でいける。東海道と中山道の両方に、にらみをきかせることができる。湖上をとおして、北陸から日本海がわへの交通路もおさえられる。淀川をくだれば大坂にでるし、瀬戸内海によって、道は西日本一帯にもつうじている。

一五七六年から工事にかかり、石組みなどのおもな部分は、その年じゅうにできた。かつて六角氏の城であったとなりの観音寺山などから、大石をどんどんとりくずして、はこびあげた。一五七九年、天守閣が完成した。

天守閣は、石垣の高さが二一メートル余、その上に、約三二メートルの七重の建物がそびえたった。最上階の壁は、内も外もすべて金でおおい、屋根がわらにも金をかぶせ、柱は黒漆をぬった。その下の六重目はめずらしい八角堂で、外の柱は朱色、内の柱はすべて金をはりつけた。壁は白である。内部は、狩野永徳をはじめとする画家が、墨絵や極彩色の絵をえがき、かずかずの宝物や名器があつめられ、かざられていた。

LAC D'OITS

安土城　上は，18世紀初めのフランスの本のさし絵。左は，近年発見された絵図で天守閣を復原。

琵琶湖の朝日・夕日に、この天守閣がてりはえるありさまは、まったくこの世のものとはおもえなかったであろう。信長は、その主人公であることによって、これを見る人びとに、天下統一のすばらしさを、目に見える形でしめそうとしたのである。

城下に家来を住まわせる　信長は、安土山の中腹からふもとにかけて、部将の大名や家来たちの屋敷をつくり、ここに住まわせることとした。石垣でかこまれ、いざというときは、城をまもるとりでになった。

信長の軍隊は、濃尾（美濃・尾張）地方の出身者が多かったので、なかにはまだ妻子を郷里におき、一つの作戦がおわるとそこにかえる者もいた。しかし、これではいざ出陣というときに、ひまがかかる。

あるとき、一人の家来の家から火がでた。信長は、妻子がいないからふしまつがおきたのだとし、尾張に妻子をおいていた一二〇人の家来をあつめ、その尾張の家をすべて焼きはらい、全員の妻子を安土に移住させた。さらに、一二〇人の家来たちは、罰として、湖の入江をうめたて、道路をつくる作業につかせられた。

こんな強引な方法をとりながら、湖岸の湿地帯に堀割をとおし、橋をかけ、道路を縦横にはしらせて、あたらしい町づくりがすすめられた。

楽市と楽座　町ができても、町人がいなければなにもならない。たくさんの武士団とその家族をやしなうために、商工業者が必要であった。これもつくりだすわけにはいかないので、あつめることにした。

銭屋　金銀と銭の両替をする。銭はひもに通してある。

楽市・楽座　楽市は、もともと、どのような権力からも自由であるというのがたてまえで、座の特権もないのがふつうであった。戦国大名は、城下町をはじめとする町づくりに、これをとりいれた。六角氏・今川氏・北条氏など、いくつもの例がある。しかしそれとともに、町は、ほんらいの楽市でなく、大名権力の統制をうけるようになった。信長の方針は、それを大きくおしすすめたものといえる。

一五七七年、信長は安土の町に一三条の掟をくだした。その中には、「安土の町は楽市とし、商売にかんしては、いっさいの税は免除する。」とか、「領内で、借金証文が無効となる徳政(→③巻P109)があっても、この町には適用せず、貸金は保証する。」「他国からの移住者でも差別しない。」など、町人にとって有利な条件が、いろいろ書かれていた。

室町時代いらい、商業がさかんになるとともに、各地に楽市といって、商売はだれでも自由にできる市場町がさかえた。信長は、これを自分の城下町にあてはめ、町の繁栄をはかったのである。

いっぽう、「中山道をとおる商人は、かならず安土で泊まること。」とか、「近江国じゅうの馬の売買は、安土以外でしてはならない。」といった強制的な条項もあった。

こうして、安土は、各地からあつまった商工業者のため活気をおび、数年のうちに、六〇〇〇人の人でにぎわう町となった。

楽市とならんで座(→③巻P69)をやめさせたのが、楽座である。信長は、安土城をつくるとき、大工など各地で座に属していた職人をよびあつめ、すでに事実上、座を解体していたが、これを商人にもおよぼした。楽市も楽座も、信長が岐阜にいたころから、積極的におしすすめていた経済政策であった。

金・銀・銅銭の相場をきめる

信長の経済政策で、いま一つ注目されるのは、貨幣流通への対策である。商業がさかんになるにつれ、貨幣が大量に必要となり、個人がかってに鋳造した質のわるい銅銭や、使いふるしてすりへったり、われたりした悪銭がでまわって、経済の混乱がはなはだしかった。商人は悪銭での取り引きをさけ、なるべく良銭をえらぼうとする。室町幕府は、とくべつの悪銭以外は銭をえらんではならないと、撰銭禁令を発していた。信長は、悪銭を三つにわけ、良銭の二分の一の価格で通用するもの、五分の一、一〇分の一と、それぞれ等級におうじて通用させることとした。これは、銅銭の不足にみあった、現実的な対策といえよう。

さらに、生糸や薬などの輸入品は金銀で取り引きすることとし、金一〇両は銭一五貫文、銀一〇両は銭二貫文と相場をきめ、交換のばあいのめやすとした。のちに、江戸幕府が金銀銭三貨の相場をきめるが、そのさきがけともいえる方針であった。

このころ、国内での産出が急激にふえた銀は、信長の天下統一のたいせつな財源でもあった。信長は京都にはいるとすぐに、但馬(兵庫県)にせめこみ、当時指折りの銀山であった生野銀山を占領し、堺の商人今井宗久に命じて経営にあたらせた。大量の鉄砲の代金などは、このへんから支出されたとおもわれる。

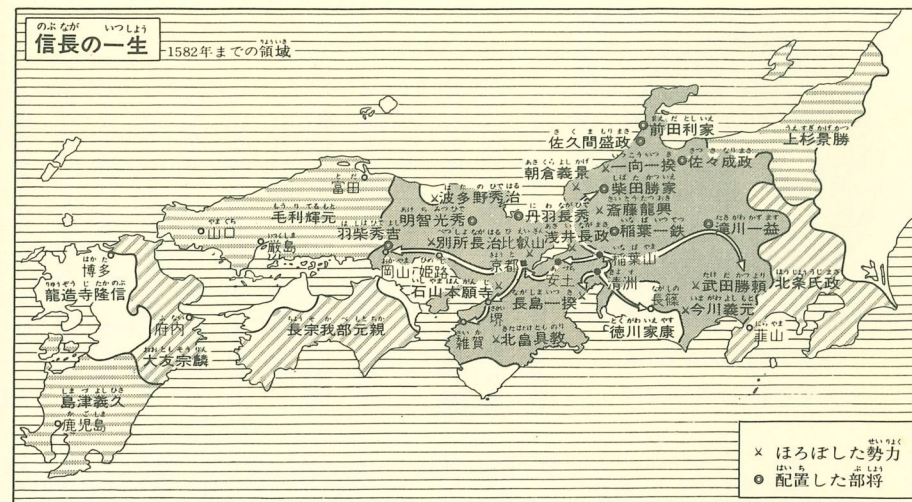
将軍任官をしぶる

朝廷では、信長の功績にむくいようと、一五八二年、彼を征夷大将軍に任命したいと申しいれた。しかし、信長はこれをすぐにうけず、いろいろと口実をもうけたうえ、勅使を船にのせておくりかえしてしまった。

信長がまもなくなくなったので、はたして彼が、武士として名誉ある征夷大将軍の職を将来うけるつもりであったかどうか、それはわからない。しかし、つぎのような事実から、一つの推測はできる。

永楽銭のつば　明でつくられた永楽銭をデザインした信長愛用の刀のつば。

金銀のかぞえかた　この時代、金銀は重さであらわした。ふつう、金一両は四匁五分、銀一両は四匁三分で、金銀とも一〇両を一枚といった。一匁とは、唐の開元通宝という銅銭一個の重さときめられていた(約三・七五グラム)。

重さをはかる秤は、天秤か皿秤をもちいたが、その基準は、国や地方によってまちまちであった。たとえば、金のばあい、四匁や四匁二分を一両とする地方もあった。信長以後、しだいにこれが統一されていった。

足利義昭が追放になったのち、朝廷はそのあとをうめようとして、信長を公家にし、正二位右大臣・右大将の官位にまですすませた。しかし、信長は一五七八年、朝廷の官職をすべてことわり、やめてしまった。朝廷では、なんとか信長をひきつけておこうとして、さらにその上の左大臣にしようと申しいれた。信長はそのとき、

「正親町天皇が譲位され、誠仁親王が天皇の位につかれたなら、あらためてかんがえましょう。」

とこたえている。

誠仁親王は、信長が元服の費用を負担して、皇太子となった親王である（↓P99）。安土城の建設と並行して、信長は、京都二条に自分の屋敷をつくらせたが、まもなくこれを親王御所として献上し、親王はじめ皇子をみなここに住まわせていた。彼は、さきに義昭をロボットにしようとしてにげられたが、こんどは、自分の意志で自由にうごかすことのできる天皇を、つくりたかったのである。

もし誠仁親王が即位していたら（その費用はもちろん信長がだすのだが）、信長は、形のうえでは大いに尊敬の色をみせながら、自分は将軍となって、実権をふるったかもしれない。のちに、豊臣秀吉や徳川家康がおこなったことは、まさにそれであった。だが、朝廷が「もうすこしまってほしい。」といったので、その話は実現しないままにおわった。

明智光秀（一五二八—八二）　美濃（岐阜県）の土岐氏の一族といわれ、信長にとりたてられ部将となる。当時、近畿地方ぜんたいの武士団の指揮官であった。

光秀の反乱の原因は、信長からその地位と領国をとりあげられたとか、徳川家康のもてなしに失敗して信長にしかられたとか、いろいろの説があるが、はっきりはわからない。彼も、戦国の大名として、天下をねらう気持ちはじゅうぶんもっていたのであろう。

本能寺の変

将軍任命の勅使をおくりかえして半月ほどのち、信長は、京都本能寺（京都市中京区）の宿舎にはいった。二条屋敷を親王に献上してからは、もっぱら大きな寺院を宿としていたのである。

畿内とその近国をかためた信長は、さらにその外がわにむかって勢力をのばそうとしていた。東へは、さきに徳川・北条両氏とむすんで甲斐の武田勝頼をせめ、ついにこれをほろぼしたばかりであった。こんどは、西の大敵毛利勢をおさえようというのである。

織田軍のおもな部将たちは四方に散って、京都周辺には、だれもいなかった。羽柴秀吉は、さきに因幡・伯耆（いずれも鳥取県）を征服し、備中（岡山県）に兵をすすめていた。柴田勝家は、北陸すじにあって上杉勢のうごきにそなえていた。丹羽長秀は、四国へわたろうとして、部隊を大坂に集結中であった。ただ、徳川家康だけが、東国平定の疲れ休めであろうか、わずかな家来をつれて遊びにきていた。

いや、もう一人いた。一五八二年六月一日深夜、中国出陣を命じられた明智光秀の軍は、丹波（京都府中部）亀山城をでると向きを東にかえ、ひそかに桂川をわたって、信長のねむる本能寺に殺到した。二日のあかつきであった。

不意をつかれた信長は、どうすることもできなかった。みずから矢をはなち、弓の弦が切れると槍をとり、わずかな小姓たちとともにたたかったが、やがて寺が敵兵のはなった火につつまれると、もえさかる室内にはいって自殺した。かぞえの四九歳。彼のこのんで口にした謡曲「敦盛」（↓P95）の一節には、一年たりなかった。

この節を読むにあたって

本能寺の変のあと、秀吉は明智光秀を山崎の合戦で討ち、八年後には日本全国をおさえて、信長のめざした天下統一をなしとげた。

よく知られているように、この秀吉は百姓のせがれである。彼はどのようにして、天下を統一していったのだろうか。関白になったいきさつ、それまでの戦国大名にはみられなかった兵力の組織、検地と刀狩によるあらたな社会のしくみ、商人の力をも利用した政治のしくみ……これらがどのようにしてつくられたのか。

この節ではこうした問題をかんがえてみる。

豊臣秀吉の統一政策

百姓から関白へ

山崎の合戦、光秀の誤算　一五八二年（天正一〇年）六月、信長の有力な部将の一人、羽柴秀吉は、毛利氏の部将清水宗治がたてこもる備中高松城（岡山県岡山市）を水攻めにしていた。そこへ、本能寺の変の知らせがはいった。

信長の死を秘密にしたまま、秀吉はいそいで毛利氏と講和をまとめ、その二日後には姫路城にもどって、光秀を討つ準備にかかった。そのあと、摂津富田（大阪府高槻市）まですすんで、陣をかまえる。このとき、キリシタン大名として知られる高山右近らの参陣もあって、秀吉の兵力は約二万六千ほどとなった。

いっぽう、光秀の兵力は約一万六千といわれている。光秀は、娘玉（のちの細川ガラシア、→P182）のとつぎ先の細川幽斎（藤孝）・忠興父子や、大和の筒井順慶らを味方にさそったが、ことわられた。それどころか、彼らも秀吉に味方してしまった。

これは光秀の誤算であったが、さらに大きな誤算は、毛利氏が光秀のさそいにおうじなかったことである。光秀とすれば、高松からひきかえす秀吉の背面を、毛利氏がつくもの

山崎の合戦陣立表

陣立	秀吉軍	光秀軍
第1隊	2,000	2,000
第2隊	2,500	3,000
第3隊	4,000	
中央	10,000	5,000
その他	8,000	6,000
合計	26,500	16,000

豊臣秀吉（1536～98）　めずらしい表情の肖像画。しかし，猿面といわれた面影をどこかにのこす。

とふんでいたが、毛利氏はその期待にそわなかった（→P121）。

このことにより、秀吉は兵力をととのえつつ、約二〇〇キロの道のりをスムーズにひきかえし、山崎（京都府乙訓郡大山崎町）の合戦にのぞむことができたのである。毛利氏と講和をむすんで、九日目のことであった。

ここで秀吉は、光秀にたいし、すでに心理的に優位にたっていた。そして、兵力の数で圧倒した秀吉は、山崎の合戦を一日でかたづけてしまった。光秀の首となきがらは、本能寺の前にさらされた。それにしても、一〇日まえに信長を討った光秀の末路は、あわれというほかはない。

山崎の合戦のあと、秀吉は、自分の手による最初の検地（→P130）を山城でおこない、あらたな政権づくりのスタートについた。

それではつぎに、秀吉の人となりについてみてみよう。

永楽銭一貫文　一五三六年、秀吉は尾張国中村（名古屋市中村区）でうまれた。幼名は日吉丸。父木下弥右衛門は織田信秀の鉄砲足軽であったが、戦いで負傷してからは、百姓をいとなんだ。そして、秀吉八歳のとき、父はこの世をさった。

一六歳のとき、秀吉は、父の形見であった永楽銭一貫文をもって家をでた。永楽銭一貫文といえば、だいたい米一石（約一五〇キロ）が買える。その永楽銭を清洲城下（愛知県）で木綿針にかえ、行商しながら遠江（静岡県）にきた秀吉は、今川氏の家臣松下加兵衛のもとで武家奉公をした。しかし、今川氏の空気になじまなかったらしく、ふたたび放浪のす

薪炭奉行秀吉　信長のもとでの武家奉公を草履取りからはじめた秀吉は、やがて燃料をあつかう薪炭奉行になった。そのいきさつを、『太閤記』はつぎのように書いている。

あるとき、費用節約のため、信長は薪や炭の費用が一年でどれほどかをしらべようとした。係の奉行が、それは米にしてだいたい千石ほど、とこたえたところ、それを不満とした信長は、薪炭奉行を秀吉にかえた。秀吉は自分で火をたいてみて、一年ぶんの薪炭量を計算し、その費用は米千石の三分の一ですむといった。

正確な数字に裏うちされたこの財政手腕は、やがて石田三成など計算の能力をもつ家臣をそだてあげ、太閤検地などに応用された。

え、一五五八年、二三歳のとき、新進気鋭の信長につかえた。

信長のもとでの秀吉の武家奉公は、草履とりからはじまった。そして、信長の家臣のなかにあって、秀吉は軍事と行政・財政の面で、その能力をじょじょに発揮していく。なかでも有名な話として、墨股砦（岐阜県）の構築がある（→P.96地図）。

一五六六年、信長が美濃の斎藤龍興とたたかったさい、信長勢は、木曾川・長良川・揖斐川のデルタ地帯にさえぎられて、作戦がおもうようにすすまなかった。信長方の軍議では、長良川の上流に砦をきずくことこそが、兵力の移動をすみやかにし、戦いを有利にみちびくかぎであるとされていた。

砦づくりの仕事を命ぜられた秀吉は、かねてから気脈をつうじていた蜂須賀小六らの野武士一二〇〇名を動員し、その三分の一にあたる四〇〇名を斎藤勢とたたかわせ、残り三分の二の八〇〇名を砦の工事にむけた。墨股砦はみるみるうちにできあがり、これが信長の美濃平定の足場となった。

陣地をつくりながら戦いをおこなうやりかたは、一人一人に責任をもたせることによってできるものであり、秀吉には、人を組織する才能があった。その後も、こうした方法は、秀吉の全国平定のなかでじゅうぶんに生かされる。

さりとてはの藤吉郎

秀吉のこの才能は、信長の家中だけでなく、他の大名のあいだにも知れわたっていた。一五七三年、毛利氏の外交僧として秀吉に会った安国寺恵瓊は、「信長の代は五年三年はもつであろう。来年あたりは公家になるか

信長の系図

- 信秀
  - 信長
    - 信忠 ― 秀信（三法師）
    - 信雄
    - 信孝
    - 秀勝
  - お市の方

秀吉の手紙　柴田勝家をほろぼした直後のもの。秀吉の手紙は，おもうままを無邪気に書いたことで有名。手紙は二つ折にして右上から書き，最後までいくと，さかさにして反対がわから書いた。

もしれぬ。そのあと、高ころびに、あおのけにころぶであろう。」といい、秀吉については、「藤吉郎さりとてはの（なかなかの）者に候。」と、たかく評価し、これこそ信長のあとつぎであるとみぬいていた。毛利氏の内部でこのような評価があるからこそ、山崎の合戦のさい、毛利氏は光秀のさそいにのらなかったのである。

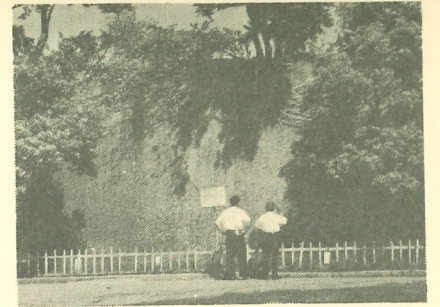
賤ケ嶽に勝家をやぶる

山崎の合戦のあと、尾張清洲城で会議がもたれた（清洲会議）。出席者は信長の重臣、羽柴秀吉・柴田勝家・丹羽長秀、それに信長の子の織田信孝であり、議題は、信長のあとつぎをだれにするかということと、そのこした領地をどのようにわけるか（遺領配分）、ということであった。

会議の議長は勝家であった。勝家は、山崎の合戦がライバル秀吉によっておこなわれたので、かなりあせっていた。会議ははじめから紛糾した。秀吉と長秀が、わずか二歳の三法師（信長の孫）を信長のあとつぎにしようとしたのにたいし、勝家は信孝を推した。はげしい論議のすえ、信長のあとつぎは三法師となった。

また、信長の遺領配分については、北国の勝家が、畿内への足がかりとして、秀吉の長浜領（滋賀県）をほしがっていたので、秀吉はさっさとそれを勝家にわたし、自分は京都のまわりの山城国をおさえてしまった。この清洲会議の結果、勝家がえたものは、長浜のみであった。

いっぽう秀吉は、勝家・信孝をわざとはずして、大徳寺（京都市）で信長の葬儀をおこない、自分こそが信長の事実上のあとつぎであることを、天下にしめした。そのあと、長浜

石ひきの図　車にのせた大石を綱でひく。石の上では景気づけの声をかける。蒔絵の盆の図である。

大坂城の蛸石　39畳敷(5.8×11.2ｍ)という巨石。城の規模の大きさをしめす。

城をまもる勝家の一族柴田勝豊を味方につけ、岐阜の信孝には信長の葬儀の不参加を責めるなど、秀吉は勝家を挑発した。

はたして、一五八三年三月、勝家は近江（滋賀県）にむけて出陣した。秀吉は上杉景勝と連絡をとって勝家の背面をつかせ、四月に勝家を琵琶湖北岸の賤ケ嶽でやぶった。勝家は越前北庄（福井市）にのがれたが、そこでお市の方（→P102）とともに自殺した。賤ケ嶽の戦いののち、秀吉は、石山本願寺（→P110）のあとに大坂城をきずいた。信長の安土城は平山城であったが、この大坂城は平城である。

天下とりの巨城、大坂築城

大坂は、五畿内の経済と交通の要所であり、古代には難波の都もつくられたところである。淀川をさかのぼれば京都につうじ、また、瀬戸内海をへて中国・四国・九州にらみをきかしえたのが、大坂であった。そして、なによりも秀吉がこの本願寺のあとを居城としてえらんだ直接のきっかけは、その難攻不落な地理的条件であった。石山本願寺が、ながいあいだ信長との戦いにもちこたえられたことが、よくそれをものがたっている。

大坂城の築城工事は、一五八三年九月からはじまった。天守・櫓・石垣・濠からなる城郭普請には、それぞれ専門の土木・建築技術がもちいられた。

夜を日につぐ突貫工事により、同年一一月には、天守閣の土台ができあがった。そして、それから約一年五か月後の一五八五年四月に、天守閣が完成した。天守閣の構築は、信長にかわって秀吉が全国を統一するのだという武威のほどを、天下にしめしたものであり、この年、秀吉は四九歳で関白になっている。

空から見た大坂城　南方から撮影したもので，写真中央左よりの外堀にかかる橋をわたると大手門。山里丸は，天守閣の後ろがわにあたる。大坂城は，豊臣氏滅亡のときに焼けおちたが，その5年後から10年間にわたり，徳川氏の手で修理されて，いまのようになった。

石垣づくりの技術

大坂築城で注目しておきたいことは、城郭普請の基礎となる石垣づくりである。石材は、河内や摂津の山やま、あるいは小豆島などからあつめられた。運搬は、水上では石釣り船、陸上では板の上に石をのせ、丸太をコロにしてはこんだ。石切りと石垣づくりは、石工の仕事である。石工といえば、近江の穴太者がよく知られている。彼らは、近江坂本の穴太町にいたことから、このようによばれているが、もともと、比叡山延暦寺が命ずる土木工事をおこなっていた者たちである。大坂築城のさいには、秀吉の家臣にひきいられて、石垣づくりにたずさわる。

彼らの仕事には、石切り道具をつくる鍛冶屋がつく。きちんと計算された設計によって、勾配をつけた石垣積みがおこなわれる。とくに、石垣のすみの部分は、長方形に切った石をたがいちがいにつみあげて、勾配をつける方法（算木積み）がとりいれられた。

こうしてきずかれた石垣に、壮大で華麗な天守閣をはじめ、山里丸などの郭がつくられた。宣教師ルイス＝フロイスのイエズス会への報告によれば、大坂築城の大工事には、日夜三万人ほどの職人や人足が動員されたという。

勝敗をあずけた小牧の対陣

一五八四年三月、尾張の北部で、秀吉と家康のあいだに戦いがおこった（小牧・長久手の戦い）。

家康は、本能寺の変のあと、三河・遠江のほか、駿河（静岡県）・信濃（長野県）・甲

斐（山梨県）をおさえ、東国の雄としてその勢力をかためていた。全国統一をねらう秀吉の目に、この家康は、もっとも強大な敵としてうつったことであろう。いっぽう、家康としても、信長にかわって天下統一をおしすすめる秀吉に、自分の実力をはっきりしめしておく必要があった。

しかし、二人は、直接にたたかいあおうとしなかった。戦いには名目が必要である。それを信長の二男織田信雄がつくった。信雄は、清洲会議のあと、尾張一国しかあたえられなかったので、かねてから秀吉に不満をいだき、家康にちかづいていた。そこで家康は、信長の旧恩にむくいるという名目で、秀吉に対抗しようとした。

戦いは家康が先手をうった。彼は作戦上有利な小牧山に陣をとったので、秀吉は犬山城にはいり、やがて小牧山にちかい楽田に陣をうつした。戦いは、小牧山のまもりがかたいので、持久戦にはいってしまった。

ところが、小牧山の北方にある羽黒で陣をはっていた秀吉軍の一部が、家康軍にやぶられた。いらだった秀吉は、家臣池田恒興の進言をとりいれ、家康を小牧山にくぎづけにしておいて、軍の一部を三河にいれ、家康の背後をつこうとした。この作戦を知った家康は、長久手で南下する秀吉軍とたたかった（長久手の戦い）。これが両者の最大の戦いであり、池田恒興は戦死し、秀吉軍は完敗した。

そのあと、秋まで対陣がつづいたが、秀吉が伊勢長島に陣どった信雄をかこんだため、信雄は秀吉に講和を申しいれた。ここで、家康としても、信雄を名目上の大将にした関係

後陽成天皇（1571～1617）　秀吉・家康の助けで、皇室の力をもりかえそうとした。学問をこのみ古典を印刷させた。

関白秀吉の花押（サイン）

→**長久手の合戦**　秀吉と家康がたたかったが，右がわにえがかれた勝った家康軍の整然とした陣と，負けてにげだす左がわの秀吉軍の違いが，かきわけられている。

上、秀吉と和をむすぶにいたった。

この小牧・長久手の戦いでは、大きな戦闘はなかったが、秀吉も家康も相手の実力をみとめあったところに、意味があった。

関白太政大臣になる

小牧・長久手の戦いが手いたい敗北におわった翌年、秀吉は三月に内大臣となり、七月には姓を藤原とあらためて関白となった。

関白とは、天皇を補佐して、天下の政務をみる重職である。このころ、武家最高の地位である将軍職には、いまだ足利義昭（→P100）がついていた。しかし、室町幕府は事実上ほろびており、それにかわるあらたな権威として、秀吉は関白の地位をのぞんだのであろう。

ところで、この関白職は、まえの巻からみてきたように、藤原氏以外の者が任ぜられることはまれであったので、秀吉はとりあえず藤原の姓を名のった。そして一五八六年一二月、秀吉は太政大臣となって、後陽成天皇から豊臣の姓をうけた。秀吉は藤原という他の姓を借りるのを満足とせず、むしろあたらしい姓をこれからはじめるのだとして、豊臣の姓をのぞんだのである。

また、太政大臣は国政をあずかる者の最高の地位であり、秀吉は信長の死後わずか四年で、鉄砲足軽のせがれからこの地位にのぼった。

聚楽行幸

秀吉は、関白と太政大臣の位を手にいれたいま、自分こそが天皇をたすけて全国に命令をくだす者だという、正当な根拠をもつこととなった。その

権限を発動したものとして知られるのが、一五八八年の後陽成天皇の聚楽第行幸である。

聚楽第は、秀吉が関白になった翌年、京都の内野（旧平安京内裏跡）にたてられた。工事にあたっては、材木・檜皮・石材・釘などの建築用材をほうぼうから徴発し、すぐれた職人をあつめて、建築技術の粋をこらした。さらに、名木・奇石を庭にならべ、御殿には七宝を散りばめた。

こうして関白の城館がつくられ、後陽成天皇が行幸することとなった。それにさきだって、秀吉は天皇に行幸のための費用（支度料）をだし、諸大名たちに、たとえば駿河大納言家康卿など、公卿の資格をあたえておいた。

後陽成天皇の行幸がおこなわれた。秀吉は、徳川家康・前田利家・宇喜多秀家ら二九人の大名たちに、天皇をとうとび、関白の命令にしたがうことをちかわせた。長久手の戦いで、いたい目にあった秀吉は、このとき、その地位のうえで、家康を大きくひきはなしていた。

天下統一なる

海外にも目をむけた九州征服

秀吉が関白になったころ、九州はいぜんとして戦国動乱のさなかにあった。南九州の島津氏、北九州の大友氏と龍造寺氏が、三つどもえとなってたたかっていた。やがて龍造寺氏はおとろ

天下統一後の九州
宗義智
毛利輝元
101
小早川秀秋 36
平戸
黒田長政 18
松浦鎮信
鍋島直茂 36
加藤清正 25
小西行長 20
加藤領
56
島津義久
← 秀吉軍の進路
数字は征服後の石高（万石）

信長時代の九州
宗義智
毛利輝元
波多親
筑紫広門
松浦鎮信
博多
城井親房
千葉胤連
宇久純堯
府内
臼杵
龍造寺隆信
大友宗麟
大村純忠
有馬晴信
長崎
相良忠房
島津義久
鹿児島
0―50km

→ **飛雲閣**　西本願寺の一画にあり、ふるくは聚楽第の建物をうつしたといわれていた。

むねがわら　聚楽第の屋根をかざるために試作したといわれる唐獅子。楽焼の祖の長次郎の作。

え、大友氏は島津氏に敗北をかさねていた。

秀吉は、関白の立場から、彼らに停戦と国わけを命じた。もっとも秀吉のばあい、これはあくまで名目であって、ほんとうのねらいは、九州そのものを征服することにあった。当時、九州は明・朝鮮・琉球との貿易の拠点であり、関白になったころから海外進出をかんがえていた秀吉は、ぜひとも九州をおさえたかったのである。

そこで秀吉は、九州の雄島津氏と交渉のある細川幽斎と千利休に、関白の命令をつたえさせたが、島津氏は、

「島津家は頼朝いらいの名家である。羽柴のような者が関白になったとて、その命令はきかれない。」

とつっぱねた。秀吉は、

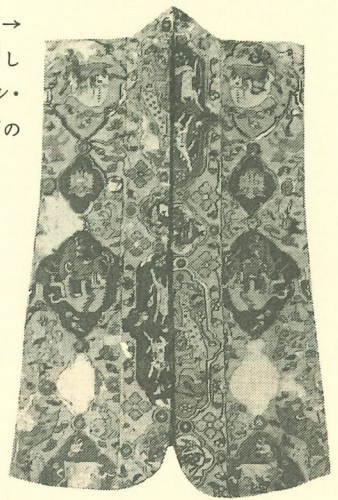
「そろそろ明まで兵をだそうとおもっていたところ、島津が自分にさからったので、ちょうどいい時期だ。」

といって、一五八七年に九州に兵をだし、島津氏を降伏させて九州を征服した。ここで秀吉は、海外進出の足場をかためた。

小田原攻め

いっぽう、関東では、北条氏政・氏直父子が勢力をひろげていた。聚楽第行幸のあと、秀吉は氏政・氏直父子にたいし、上京をうながした。家康のすすめもあって、北条氏は、とりあえず氏政の弟氏規を上京させた。

上京した氏規に秀吉はつぎのことを命じた。㈠氏政・氏直のいずれかが、かさねて上

陣羽織　秀吉が愛用したとつたえられ，シシ・トラ・クジャクなどの模様もめずらしい。→

←小田原城の石垣　五代にわたり関東に実力をほこってきた北条氏も秀吉に打ちやぶられた。

京すること、㈡信州（長野県）上田の真田昌幸が占拠している上州（群馬県）沼田領については、その三分の二を北条氏のものとし、三分の一は真田氏のものとせよ、と。しかし、北条氏はもう一度上京するどころか、沼田領ぜんぶを、実力でとってしまった。その通報をうけた秀吉は、一五九〇年に北条氏をほろぼした（小田原の役）。

そのあと、秀吉は家康の領地五か国をとりあげ、彼を北条氏の旧領地にうつした。そして、家康の旧領地を織田信雄にあたえようとしたが、信雄は尾張・伊勢の領地を手ばなしたくないとがんばったので、秀吉は下野（栃木県）那須に信雄を追放した。このことは、領地をあたえる権限が秀吉にあることを、かさねて天下にしめしたものであり、家康も秀吉の命令にはだまってしたがった。

統一の完成

小田原の役のあと、秀吉は東北に兵をすすめた。これと前後して、常陸の佐竹義宣は、いちはやく小田原へ参陣して、秀吉から常陸一国の領地を保証された。しかし、佐竹氏と対立していた東北の雄伊達政宗は、会津（福島県）の蘆名氏をほろぼしたり、北条氏ともむすんでいたこともあって、ためらいながら参陣した。政宗は会津を没収されたものの、もともとの領地である米沢（山形県）の領地は保証された。

ついで秀吉は、蝦夷地（北海道）の蠣崎安弘らをも服属させた。それにたいして、秀吉の統一政策に反対した勢力は、機動性のある秀吉の軍事力によって、容赦なくつぶされた。ここに秀吉の全国統一はおわった。

黒田孝高（1546〜1604）
秀吉の軍師役としてつかえその全国統一・朝鮮侵略に大きな役わりをはたした。

秀吉の鞍　狩野永徳が芦の穂をデザインしたもの。大胆な構成には，時代の特色がよくあらわされている。

商人までいれた秀吉の軍事力

秀吉がわずかの期間に全国を統一することができた大きな理由は、その軍事力のしくみにあった。それはつぎのようにまとめられよう。

㈠　兵糧・武器・弾薬など、軍需物資の輸送についてである。

九州征服のさい、堺の商人小西隆佐は、息子の小西行長に軍需物資をはこばせている。それを、前線にいる黒田孝高や安国寺恵瓊がうけとって、諸大名に配分した。

また、小田原の役のとき、秀吉は、長束正家を兵糧奉行として、二〇万石（約三万トン）の米を駿河の清水に用意させ、黄金一万枚をもって、東海地方から兵糧米を買いいれさせた。そして、城をつくり、陣中に商人をあつめ、つねに軍需物資を補給でき、いつでもたたかえるしくみをとっていた。

そればかりではない。陣中には茶室もつくり、側室ちゃちゃ（のちの淀殿→P198）をむかえるなど、長期の生活にもこまらないだけの用意をした。

㈡　諸大名に負担させる兵力の数が合理的にきめられたことである。

小田原の役のばあい、関東にとなりあわせた家康軍は、高一〇〇石につき七人、小田原からとおい中国・四国の軍勢は、高一〇〇石につき四人の兵力をださせることとした。このことは、領地の大きさをしめす石高と、諸大名の領地と戦場への距離を基準にして、兵力を動員する、合理的な方法であった。

これにたいし、北条氏は、農民まで兵力にくわえた軍事力であった。そして、さきに上杉氏との戦いのさい、籠城による持久戦で勝った経験があったので、秀吉にたいしてもお

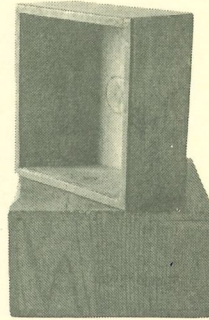
なじ戦法をとった。
しかし、こんどは相手がちがっていた。北条氏でも上杉氏でも、その兵力は農民まで動員した組織（農兵組織）であり、田植えや刈り入れどきになると、農民を田畑の耕作にむけなくてはならない。だから、上杉氏のばあい、農繁期にはかこみをといて越後へかえったが、秀吉の軍勢は、ひきあげなかった。ここに北条氏は力つきてしまう。

検地と刀狩

太閤検地と石高制

秀吉の軍勢が、機動力をもっていつまでもたたかえたもう一つの理由は、秀吉の統一政策にあった。それは、「検地と刀狩」として知られていることがらである。
秀吉は、山崎の合戦のあと、山城で検地をおこなったが、その統一がすすむにつれ、全国に検地を実施した。
検地とは、田や畑の面積をはかり、その耕地にどれほどの収穫があるか、耕作人はだれかをしらべることである。この田畑の調査は、戦国大名や信長もおこなったが、それは服属した者が領地の内容を申告する指出であった。
ところが、秀吉のばあいは、検地奉行を直接派遣して徹底的な調査をおこなった。その検地基準は、つぎのとおりである。

田おこしと種まき　戦国の合戦のなかでも農作業はやすまずつづけられていた。田おこしにはからすき（上）と，備中ぐわ（左）をもちいている。右は種まき。

京ます　この時代までおなじ一升ますでも，大きいものも小さいものもあった。秀吉は，京都付近でふるくからもちいられているますを基準に，全国のますの大きさを統一した。写真は1574年のもの。

検地尺　太閤検地のときにもちいた物差し。×印と×印のあいだが1尺（約30.3cm）にあたる。こんにちしらべてみても，その正確さにはおどろかされる。

(一)　これまで地域によってばらばらであった面積のはかりかたを、六尺三寸（約一九一センチ）四方を一歩、三〇〇歩を一反（約一〇アール）に統一した。
(二)　米など穀物の量をはかる枡を、京枡に統一した。
(三)　田や畑を上田・中田・下田、上畑・中畑・下畑などの等級にわけ、上田一反は一石五斗（約二二五キロ）、中田は一石三斗と、収穫のめやすをさだめた（石盛）。

この基準によって検地をおこない、一つ一つの田畑の面積・石盛・耕作者を、検地帳に書きあげた。
そして、じっさいに耕作する農民に年貢をおさめる責任をもたせる（一地一作人の原則）とともに、これまで村のなかで農民のうえに勢力をふるっていた土豪が、よこあいから年貢をとることを禁じた（作合の否定）。さらに、農民はその土地から、よそにうつってはならないとした。これが秀吉の検地、つまり太閤検地の原則といわれるものである。
また、年貢はこれまで、米のほかいろいろな畑作物でおさめられていたが、すべて米でおさめるものとされた。これにより、村の規模は石高でしめされるとともに、大名に領地をあたえたり、大名から兵力をださせる基準も、石高でしめされるようになった。こうして社会の富を石高に換算したしくみを、石高制という。

検地反対一揆

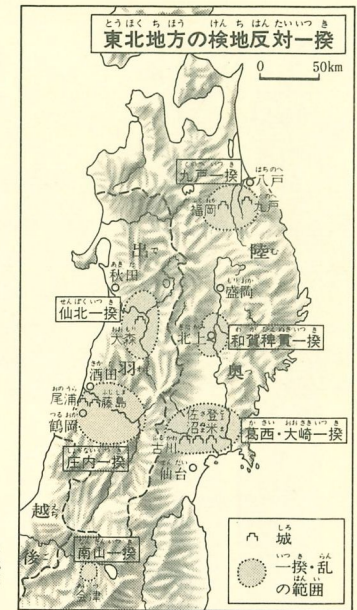
太閤検地の原則は、秀吉の権力の基礎となった畿内農村のようす、つまり農民がひとりだちして耕作をおこなえるような実情をもとにして、つくられた。

東北地方の検地反対一揆

石盛（1反≒10アールあたり）

上田	中田	下田	上畑	中畑	下畑
一石五斗	一石三斗	一石一斗	一石二斗	一石	八斗
約二二五キロ	約一九五キロ	約一六五キロ	約一八〇キロ	約一五〇キロ	約一二〇キロ

畝積

一歩＝（一坪）＝約三・三㎡
三〇歩＝一畝＝約一〇〇㎡
一〇畝＝一反＝約一〇アール
一〇反＝一町＝約一ヘクタール

しかし、九州や東北のように、じっさいに耕作する農民が土豪の力にたよっているところでは、実情にあわなかった。また、土豪にとっても、太閤検地をやられると、これまで農民を支配していた特権がうばわれることになり、検地には反対であった。

一五八七年、九州を平定したさい、秀吉は、肥後国（熊本県、球磨・天草をのぞく）を越中（富山県）の佐々成政にあたえた。そのとき、土豪のつよい反発を予想して、秀吉は、三か年のあいだ検地をしてはならぬ、と成政に命じた。ところが、成政はそれを無視して、土豪たちの領地を検地した。これをきっかけとして、肥後国一帯に検地反対一揆がひろまった。

知らせをうけた秀吉は、ただちに九州・中国の大名に出兵を命じて、一揆を鎮圧した。そのあと、この一揆の原因をしらべてみると、成政がはやまって検地をしたことによるものであることが、あきらかとなった。成政は摂津尼崎で自殺したが、秀吉はその罪状をあげたなかで、「これから唐・南蛮まで兵をだそうとし、九州は畿内と同様に重要地点とかんがえている。そこで一揆をひきおこしたことは、けしからぬ。」といっている。

また、一五九〇年、東北を平定し、あわせて検地をおこなったさい、検地反対一揆がいっせいにおこった。会津の南山一揆（福島県）、出羽の庄内一揆（山形県）、そして陸奥では葛西・大崎の一揆（宮城県）、和賀稗貫一揆（岩手県）、九戸一揆（同）などが知られている。

これらの一揆にたいし、秀吉は、検地に反対する者はことごとくなで切りにする方針をもって、検地を強行した。

方広寺の大仏殿　秀吉が刀狩であつめた武具を，くぎなどにするという口実にした。京都市の東山区にあり，のちに，この寺の鐘にきざまれた銘文が，大坂の陣の原因となった(→P197)。

百姓は農具だけもてばよい

肥後国一揆の翌年、秀吉は、諸大名や寺社に刀狩令をだした。それはつぎの三か条からなっていた。

(一) 百姓は武器をもってはならない。武器をもてば一揆をおこし、年貢をおさめなくなるので、百姓から武器はすべてとりあげよ。

(二) 百姓から没収した武器は、むだにはしない。ちかぢか京都に大仏殿をつくるが、その武器は鋳なおして大仏殿の釘やかすがいにする。だから、百姓は死後も仏の慈悲によってすくわれる。

(三) 百姓は農具だけもって農耕にはげめば、いつまでも繁栄する。

たとえば、加賀国（石川県）江沼郡では、刀・脇差・槍など合計四六〇〇ほどがあつめられたが、刀狩が徹底しなかった島津氏のばあいは、秀吉からきびしい催促をうけた。

下剋上をおさえた身分統制

刀狩令をだしたのとおなじ日に、秀吉は、海上の統制を目的とした海賊取締令もだした。そして、一五九一年には身分統制令をだして、下級の武士が百姓や商人になったり、百姓が商人になることを禁止し、違反した者は、その村や町ごとの連帯責任をとらせることとした。

刀狩令をはじめとするこれらの政策は、いっぽうでいつでも戦いができる「戦い専門の武士団」をつくりだそうとするものであった。これまでの時代は、武士はまた農民でもあり、農繁期には農村にかえって農作業にいそしんだ。秀吉の父弥右衛門が、鉄砲足軽であ

川舟(上)　底のあさく平たい川舟は，小さな川でも利用できた。
長者町(右)　白壁・かわらぶきの京都の豪商の家がたちならぶ。

ったり百姓であったりしたことが，よくそれをものがたっている。

ところが，刀狩令や身分統制令は，武士はあくまで武士，百姓はあくまでも百姓であるとする兵農分離にもとづく，あらたな身分制をつくった。この身分制は明治維新までつづくものであり，鎌倉時代や室町時代の身分制とはまったくちがっていた。

黄金の力

都市と豪商

全国を統一する過程で，秀吉は都市をおさえ，豪商と手をむすんだ。都市については，信長がふかい関心をしめしていたが（↓P114），秀吉も，信長の部将のころから，その重要さをみとめていた。

一五七四年，秀吉は近江の北部にある浅井氏の旧領をあたえられ，琵琶湖に面した長浜に城をたてた。そして，この城下繁栄のために商人を歓迎し，租税免除の保護をくわえている。秀吉が必要とする武器・兵糧・生活必需品を，彼らに調達させるためであった。

全国統一がすすむにつれ，秀吉は，博多や長崎などの港湾都市を直轄地とし，そこの豪商とふかい結びつきをもつようになった。

宣教師の記録によると，堺の小西隆佐は秀吉の財務長官であり，茶の湯の道具の保管者であった。またその息子行長は海の司令官であって，小豆島や室（兵庫県揖保郡）など，瀬戸内海の港をおさえていた，としるされている。さきにものべたように（↓P129），この

秀吉の時代の貨幣　貨幣をつくることは，平安時代以来とだえていたが，秀吉が復活させた。左から大判・小判・金銀貨。

父子が，秀吉の九州征服のさい，軍需品調達にたずさわった。また，文禄の役（↓P147）で秀吉が肥前名護屋におもむいたとき，隆佐は全軍の財務を指揮している。

博多の豪商としては，神屋宗湛と島井宗室が知られている。宗湛は，山陰の石見銀山（島根県）の経営をして資金をたくわえ，宗室は，高利貸し金融でこれまた資金をたくわえ，はやくから海外貿易にたずさわっていた。彼らは，文禄・慶長の役のさい，博多の倉庫を秀吉に貸し，武器や兵糧米の補給を担当した。

このほか，秀吉は，越前敦賀の豪商高島屋などの船をつかって，日本海がわの材木や米や鉄を名護屋にはこばせた。このように全国を統一するなかで，秀吉は，軍需物資の調達ばかりでなく，財政の管理にも豪商の手を借りたのである。

金銀山と大判・小判

豪商とならぶ，秀吉の財政のもう一つの柱は，貨幣である。秀吉は全国の主要な金銀山をおさえ，貨幣を鋳造した。その金銀山は秀吉のものとされたが，経営にはつぎのような方法がとられた。

その第一は，石見銀山や，但馬（兵庫県）の生野銀山のように，代官をそこにおくって直接経営する方法である。第二は，越後（新潟県）・佐渡・常陸（茨城県）をはじめとするほとんどの金銀山のばあいであるが，諸大名にその金銀山をあずけおくことによって，一定の金または銀を，秀吉のもとにおさめさせる方法である。

こうしてあつめられた金銀は，秀吉政権の大判座頭人をつとめる金工，後藤徳乗のもとで，判金として鋳造された。ここでつくられた天正大判は，日本で最初の定量貨幣（目方

マリア十五玄義図　中央にマリア，まわりにはキリストの一生が，えがかれている。中央下右はザビエル。ふるい家の屋根うらに，竹筒にまきこんだまま，かくされていた。

でねうちをきめるのでなく、はじめからさだめられたねうちをもった貨幣）であった。この大判は、貿易用・軍事用・贈答用として利用され、一般の通貨としては小判がもちいられた。

室町時代までは、中国で鋳造された貨幣にたよっていたが、秀吉が統一貨幣を鋳造したことは、これによって、権力による経済の統制をたやすくすることができ、また、日本が中国から自立する道をひらいたことをも、意味しよう。

最初のキリシタン禁令

一五八七年六月、博多で九州諸大名の領地をさだめ、博多の町の再興に力をいれていた秀吉は、そのさいちゅうに、とつぜん、国内のキリスト教徒にさまざまな制限をくわえる布告をだした。

(一)　民衆がキリスト教徒になるのは自由であるが、領地をもっている武士は、領民にキリスト教を強制してはならない。

(二)　もし、キリスト教を強制し、領地ぜんたいがキリスト教徒ばかりでしめられたばあい、それは一向一揆より危険となるので、上層の武士がキリスト教徒になるばあいは、許可を必要とする。

(三)　日本人の売買や、牛馬肉をたべることを禁ずる。

さらに翌日、宣教師追放令がだされた。神国である日本にとって、キリスト教は邪教であり、それをひろめる宣教師は国外へ追放する、というのがその趣旨であったが、南蛮貿易だけは奨励する、という但し書きをつけることを、秀吉はわすれなかった。

聖餅箱（右ページ）　キリスト教の儀式にもちいられた容器。ふたのＩＨＳの文字は，イエズス会の紋章。

二十六聖人の殉教　京都・大坂と引きまわされた宣教師と信者は，長崎の西坂で，はりつけにされた。おさな子も，槍でさされながら，神のもとへいける喜びをあらわして，えがかれている。日本最初の殉教であった。

このように、秀吉がキリスト教抑圧にでた背景には、キリシタン大名大村純忠が、長崎の茂木を教会領として寄付してしまったり、ポルトガル商人が、日本人を奴隷として売買していた事実があった。

そして、秀吉のことばによれば、日本の神社・仏閣をこわし、キリスト教をひろめるそのいきおいは、かつて秀吉が信長の部将であったころに体験した一向一揆よりも、おそろしいものとおもわれたのであろう。みずからの手による日本の統一が完成にちかづきつつあるとき、その日本の人びとが、秀吉よりも上の大きな権威（デウス）をみとめ、信仰することは、秀吉にとってゆるしがたいことであった。

このキリスト教抑圧によって、キリシタン大名高山右近は、信仰をすてるか領地をすてるかとせまられ、けっきょく明石城を没収された。

サン＝フェリペ号事件と、二六人の殉教

一五九六年、スペイン船サン＝フェリペ号が、土佐（高知県）の浦戸港にながれついた。船長は、世界地図をひろげ、スペインは宣教師をつうじてキリスト教徒をふやし、領土もひろげている、といった。

それを耳にした秀吉は、船と荷物を没収した。そのうえ、のっていた宣教師ばかりでなく、日本にいた宣教師や信者あわせて二六人をとらえ、長崎につれていって処刑した。これが、日本がわによるキリスト教徒処刑のはじまりである。

→**荷あげ**　南蛮屏風にえがかれた，船荷の荷あげのようす。宣教師のほかに見物の日本人もみえる。

ポルトガル人をテーマにした盆　珍奇な南蛮人のすがたは，当時の日本人をおどろかせ，絵画・塗物・陶器などの図案になった。

ところで、秀吉は、宣教師は追放するが南蛮貿易だけはゆるす、という。これほど身がってな話はない。もともとポルトガル商人の貿易とキリスト教の伝道は、一体となっていた。だから、キリスト教をおさえようとしても、南蛮貿易を奨励する以上、キリスト教禁制は徹底しなかった。

貿易の独占をはかる

それでも、貿易の統制はちゃくちゃくとすすめられた。一五八八年、秀吉は、長崎を直轄地にして、肥前佐賀の新興大名鍋島直茂を代官にするとともに、さきにみたように海賊取締令をだして、民間の貿易をおさえはじめた。

そして、翌年には、長崎にきたポルトガル船の生糸九万斤（約五四トン）を小西隆佐に買占めさせた。さらに、薩摩（鹿児島県）の片浦についたポルトガル船の生糸についても、石田三成が片浦へいくまでその買い入れを禁じ、三成に銀二万枚でそれを買占めさせ、よぶんの糸があれば、ふつうの商人が買ってもよろしい、とさだめた。

こうして貿易の利益を手にいれた秀吉は、その財力をもって、諸大名をしたがわせるのに役だてた。

豊臣政権のしくみ

五大老と五奉行

さきに、秀吉がその政権をかためるうえで、財政関係などについて豪商たちの手を借りた、とのべたが、じつは政権のはじめのころほど、よりつよく豪商にたよっている。堺の豪商千利休のばあいがそうである。

一五八六年、豊後（大分県）の大友宗麟が、大坂城で秀吉にあいさつしたあと、利休は宗麟に、

「表むきのことは秀長（秀吉の弟）に、内うちのことは宗易（利休）にまかせよ。」

といった。ここに、利休が、たんに秀吉の財政だけでなく、政治にふかくかかわっていたことが、知られる。

しかし、このように豪商が政権のなかでしめていた位置はしだいによわまり、それにかわって、五大老・五奉行の制度がかたまってくる。

話はすこしさきにすすむが、一五九八年（慶長三年）八月、病床にあった秀吉は、その最期をさとったのであろう。彼は、あとつぎの秀頼の将来を、徳川家康・前田利家・毛利輝元・上杉景勝・宇喜多秀家ら「五人の衆」にたのみ、さらに具体的なことは石田三成ら「五人の者」に申しつけてある、といった。この「五人の衆」が五大老であり（上杉景勝は小早川隆景の死後、五大老にくわわる）、「五人の者」、つまり石田三成・前田玄以・浅野長政・増田長盛・長束正家が、五奉行である。

五大老と五奉行は、豊臣政権のおわりごろになって、はっきりしたかたちをとった。五大老は、豊臣政権のもとでの有力大名を、政務の顧問格としたものであり、合議によってその運営がなされた。いっぽう、五奉行は、前田玄以がはやくから京都所司代にあたった以外、その職権ははっきりと区別されていなかった。

前田利家(1538〜99)　わかいときは信長につかえ，のちに秀吉につかえた。秀吉の信頼はあつく，家康につぐ実力を，もっていた。

大老の署名　右から小早川隆景・毛利輝元・前田利家・上杉景勝・宇喜多秀家・徳川家康。

むしろ重要なことは、浅野長政は近江の石工などの職人をかかえ、石田三成は計算技術にすぐれた検地衆をかかえ、増田長盛と長束正家は財政勘定にあかるかった、というように、統一政治に必要な技術を組織していた点である。それは、しかし江戸幕府のように、政務の運営が制度としてまとまっていたわけではなく、五人の個人の才能にまかされている面がつよかった。

自殺に追いこまれた関白秀次

一五九五年、文禄・慶長の役のさなかに、関白秀次が謀反のうたがいでその地位を追われ、高野山で自殺した。

この事件は、豊臣政権のゆきづまりをものがたっている。子どものなかった秀吉が、おい秀次を養子とし、彼に関白をゆずったのは、一五九一年一二月のことである。これには、関白の地位を豊臣家が世襲する、という意味がこめられていた。ところが秀次に関白をゆずったあと、秀吉には淀殿とのあいだに秀頼がうまれたため、秀吉がそれをとりかえそうとし、秀次事件がおこったとされている。しかし、たんにそれだけで、この事件の説明がつくものではない。

重要なことは、つぎのことがらではなかろうか。

関白の地位を利用して日本を統一し、その目を明征服にむけたいま、秀吉は、その実力と権威をいちだんとたかめるため、朝廷の官職とは関係のない太閤となって、関白を自分のおもうようにうごかそうとした。

ところが、朝廷から大名たちにあたえられる甲斐守とか、雅楽頭や従五位下などの官職・官位は、関白の権限のもとにあった。こうなると、関白どころか大名たちの統制も、秀吉の意のままにならない。このゆきづまりが秀次事件の真相のようだ。

豊臣棄丸とおもちゃの船　わずか3歳で死んだ秀吉の長子。棄丸の名に，親の愛情がかんじられる。

→
豊臣秀次(1568～95)　秀吉の姉の子。秀吉の養子になり，関白になった。秀吉に自殺させられたが，その真相はよくわからない。

諸大名の統制とそのゆきづまり

豊臣政権のもとでの大名たちは、そのなりたちからみて、つぎのようにわけられる。一つは、秀吉によって大名にとりたてられた者であり、もう一つは、秀吉が信長の部将であったころ、すでに大名であった者である(外様大名)。

このうち、秀吉にとりたてられた大名には、㈠中央の政治を担当し、検地をおこない、農民支配の原則をさだめたりする、いわば官僚的な大名(石田三成らの五奉行)と、㈡加藤清正・福島正則・鍋島直茂・小西行長のように、まとまった領地をあたえられて、軍事の担当に重点をおく者とがあった。

いっぽう、外様大名としては、徳川家康・上杉景勝・島津義弘・毛利輝元・伊達政宗らがあり、五大老はこのグループからでてくる。

外様大名の力はかなり大きく、秀吉の領地(直轄領)が約二〇〇万石のころ、家康は約二四〇万石、上杉と毛利は約一二〇万石をもっていた。これにたいし、秀吉子飼いの大名や取立て大名の力は、よわかった。それだけに、秀吉は、諸大名を統制するため関白の地位を利用し、都市豪商ともむすんで、経済力と軍事力をつよめた。そして、つねに諸大名に動員を強制する軍事体制をつうじて、みずからの政権をかためていった。そのたどりついたところが、朝鮮侵略である。

堺の富と文化

日明貿易でさかえる

信長・秀吉の天下統一は、堺の町の経済力、堺商人の協力なしにはできなかった。

堺は、その名のとおり、摂津と和泉と河内の国境にできた町である。ふるくから、大和(奈良県)とのつながりがふかく、港町としては、鎌倉時代すでに名が知られていた。

応仁の乱で、兵庫が焼けてから、遣明船の発着港が堺にうつされ、大きくさかえるもとになった。京都も焼けたので、公家や商人・職人たちが、堺にうつり住んだ。

このころ、京都では、堺から福の神の女房が一六、七人やってきた、といううわさがたった。ぎゃくに、京都からは貧乏神が五、六〇人も堺へでかけた、という話である。堺の町のゆたかさ、景気のよさをしめしている。

明へむかった船がかえってくると、町じゅうに歓迎の声がひびきわたり、夜もこうこうと燈火がかがやき、天まであかるくなるほどのにぎわいであった。いまとちがって、夜はまっくらな時代である。それは、どんなに人びとの心をはずませたであろう。

船を仕立てるばくだいな費用は、堺商人がひとりで請負った。

「物のはじまりは堺」

おなじころ、いくさで瀬戸内海がとおれなくなったため、紀伊水道から四国と九州の南をとおる南海路が開発された。鉄砲や、琉球の蛇皮線など、あたらしい文物を、まっすぐ近畿地方へはこんだのは、たぶんこの航路であろう。

「物のはじまり、なんでも堺、三味も小歌もみな堺」

堺には、こんな歌がある。そういえば、小歌(隆達節)をうんだ高三隆達も、堺の薬屋の子であった。これよりまえ、日本ではじめて、町人の手で『論語』などの儒書や、医学書の出版がなされたのも堺である。

会合衆の自治

宣教師ザビエルは、堺を「日本最大の都市で、どこよりも多くの金銀がながれこんでいる」と報告している。

この富をうごかす大商人たちが、自治をしいていた。各町に年寄・町代とよばれる人びとがおり、その上にぜんたいをまとめる会合衆が一〇人いた(のち三六人になったともいわれる)。彼らが、「共和国のような政治」をおこなっていたことは、本文にものべられている(→P60)。

町ごとに木戸があり、夜になると門をしめた。西は海だが、他の三方は湿地帯を利用して、堀でかこまれ、外敵にそなえた。

今井宗久の寄進状と南宗寺　宗久が位牌料として、禅宗寺の京都大徳寺大仙院に170貫の大金をよせたもの。宗久ら堺の富商は地もと堺にも禅宗の南宗寺をたてている。

わび茶の母体

会合衆クラスの大商人たちは、屋敷のなかに庭をもうけ、離座敷をたて茶室をしつらえた。せまい場所だが、樹木をうえ、できるだけ自然にちかい感じの小屋にして、毎日の仕事からのがれて、休息する場所にした。

もともと、堺は、海岸の砂がつもりかさなって陸地になったところにできたので、京都のように、周囲の環境にめぐまれていない。大商人たちは、この茶室を「市中の山居」とよび、町の中につくりだされた、いなか風の自然な生活をたのしんだ。

それは、ふつうの人にはまねのできない、ぜいたくであったが、それをおもてにあらわさず、あくまで質素で、かざりけのない、すがすがしさをもとめるところにねらいがあった。

千利休の茶の湯は、このような堺でうまれたのであった(→P164)。

この節を読むにあたって

秀吉は、日本全国の統一をおしすすめているころから、やがては東アジアの国ぐにをもしたがえるのだといっていた。じっさい彼は、琉球や台湾・インド・フィリピンにたいして、つよい態度で服属をせまったが、最後にその野望は、朝鮮をしたがえ、明を征服しようとする侵略戦争をひきおこすこととなった。

どうして、この戦争がおきたのだろうか。この戦争では、どんなことがおこったのだろうか。それをかんがえながら、この節を読んでみよう。

太閤の夢、明・朝鮮への野望

明征服の計画

秀吉の強硬外交　九州征服がおわったあと、秀吉は、東アジアの国ぐにに強硬な外交交渉をもちこんだ。

一五八八年には、琉球に服属と来貢を強要し、一五九一年になると、インドのゴアにいたポルトガルのインド副王にたいし、日本ではキリスト教は禁止しているが、貿易はゆるしているといい、フィリピンのマニラにあるスペイン政庁には、みつぎものをもってこいと通告した。さらに一五九三年には、高山国(台湾)にも、服属せよといった。

このような威嚇的な外交は成功するはずもなく、琉球などは、これまで島津氏をつうじておこなってきた貿易を、やめてしまった。

唐入りの野望　九州を征服したさい、秀吉は、対馬の宗義調・義智父子に、つぎのように命じた。宗氏をいままでどおり対馬一国の領主としてみとめるかわりに、朝鮮国王を日本に服属するようにしむけよ、と。これは宗氏にとって、まさに青天の霹靂であったが、秀吉にとってみれば、周到な計画のうちにはいっていた。

秀吉愛用の扇　右は表で，日本・朝鮮・中国の地図，裏には，上に中国語，下にはその意味を日本語で書いてある。秀吉が中国の日常会話をおぼえようとして，つくらせた。

一五八五年、関白となった直後、秀吉は家臣に、

「日本を統一したら、さらにすすんで明を征服するつもりだ。」

と、もらしている。ついで翌一五八六年になると、キリスト教宣教師に、後世に名をのこすために明を征服するのだといい、そのために朝鮮に兵をだすことを、毛利輝元につたえている。

そのとき、九州征服がスケジュールにのぼり、秀吉は、九州征服のさきには明征服があることを、ほのめかした。

それが、一五八七年になると、いっそう具体化される。島津氏をくだしたあと、秀吉は、

「壱岐・対馬をしたがえ、朝鮮を服属させ、朝鮮に明征服の先導をさせて、明を手にいれるのだ。」

と、いっている。

これまで秀吉は、「敵地ニ近キ方ヲ以テ先手トスル」信長いらいの兵法をつづけてきたが、ここでとんでもない錯覚をしていた。それは、朝鮮を対馬の属国とかんがえていたことである。対馬をしたがわせれば、朝鮮も自分の手にはいるとおもったのだ。さきの宗氏への命令は、この錯覚にもとづいていた。

板ばさみになった宗氏の苦悩　ここでこまったのは宗氏である。だいたい対馬は、耕地がほとんどないところである。だから、米などの穀物は朝鮮にたよっていた。そのために貿易をおこない、朝鮮以外の国ぐにから商品を仕入れ、

対馬の厳原　朝鮮半島を間近にした，宗氏の本拠地。軍港として，朝鮮侵略の前線基地となった。

それを朝鮮にもちこみ、穀物や朝鮮人参と交換した。この貿易がなければ、対馬の生活はなりたたない。
　秀吉の命令は、このような対馬と朝鮮との関係を、無視するものであった。しかし、秀吉の命令にしたがわなければ、宗氏は領主の地位を追われてしまう。
「朝鮮国王に服属をしいるより、自主的に日本へこさせたほうがいい。それは一年さきまでまってほしい。」
　これが宗氏の苦肉の策であった。
　その場はのがれたものの、このままではすまされない。対馬の命運をかけた宗氏は、小西行長と相談したり、いろいろと手をつくし、交渉をかさねたあげく、秀吉の日本統一をいわう使者を、朝鮮から、日本にこさせることにした。
　一五九〇年、聚楽第で朝鮮の祝賀使を引見した秀吉は、それが日本への服属使節であると、ひとり合点してしまった。ここに秀吉の第二の錯覚があった。朝鮮が明征服の先導をするものとおもいこんだ秀吉は、一五九一年、肥前名護屋に本陣をきずき、明征服の準備をすすめた。
　このような事態のなりゆきにおどろいた宗氏と小西氏は、朝鮮にたいし秀吉の命令をすりかえ、「道をとおしてほしい。」と交渉をすすめたが、朝鮮は、「日本は友の国、明は父の国だ。いま日本の要求をききいれると、友あるを知って父あるを知らないことになる。」とことわってきたので、その交渉はいっこうに進展しなかった。

←
名護屋城　佐賀県東松浦郡の北のはしにあり，秀吉の本陣としてつくられた。城のまわりには，物資をとりあつかう職人や商人たちがあつまり，城下町がつくられた。

文禄の役

突如つくられた軍事基地、名護屋

　肥前名護屋城の普請は、一五九一年一〇月、浅野長政を惣奉行に、黒田孝高を縄張り（設計）奉行として、はじめられた。これには、九州の大名が動員され、ばくだいな費用がかかった。
　常陸の大名佐竹氏のある家臣は、「名護屋城の天守閣などは、京都の聚楽第にもおとらない。」といっており、本丸の障壁画は狩野派の絵師によってえがかれ、大手門や櫓などは、秀吉のふるくからの代官や家臣によって、つくられた。
　また、九州の大名たちは、だいたい石垣づくりを命ぜられたようである。すでに大坂城のところでものべたように（→P123）、この石垣普請は専門化された技術を必要とし、その職人は浅野長政らがにぎっていたので、九州の大名たちは、浅野長政らをたよって、技術指導をうけなければならなかった。
　これをきっかけとして、九州でも石垣をもちいた平城がだんだんつくられるようになり、城下に商工業者の町ももうけられるようになる。
　名護屋では、城の東がわ、名護屋湾に面したところに町がつくられた。武器をあつかう兵庫町や刀町、呉服をあつかう茜屋町、食品をあつかう魚町・塩屋町、船乗りのいる水主町、それに材木町・石屋町、さらに遊芸の場である女郎町がおかれた。ここでは船もつ

くられ、多くの人びとがあつまるので、大量の米が売買された。

こうして突如としてできた城下町名護屋は、前後七年間にわたって繁栄した。

侵略の開始

一五九二年四月、秀吉は肥前名護屋にあつめた一六万の兵力を九軍にわけ、宗義智・小西行長のひきいる第一軍から朝鮮へ渡海させた。

釜山浦にたどりついた宗・小西両氏は、朝鮮がわにかさねて、「明にみつぎものをもっていくから、朝鮮の道をとおしてほしい。」といったが、返事はなかった。そのあと、第一軍によって釜山城がおとされ、ここに朝鮮侵略がはじまった。

そのいきおいを駆って、日本軍は東萊府使宋象賢のまもる東萊城にせまった。ここで日本がわは、

「たたかうなら相手になろう。たたかわねば道をとおせ。」

と木札をなげこんだが、宋象賢は、

「死するのはかんたんだが、道をとおすのはむずかしい。」

と木札をなげかえし、勇敢にたたかって死んだ。このあと、国防態勢のととのわない朝鮮軍は、鉄砲で武装した日本軍に撃破され、五月はじめに漢城はおちた。

こうして日本がわは、緒戦に勝利をおさめたが、その理由は、鉄砲で武装した日本の軍事力と、鉄砲をもたない朝鮮の軍事力のちがいだけではなかった。このころ、朝鮮政府のなかでは、役人が二派に分裂しており、日本への対策についても意見が対立し、対応がおくれてしまったのである。

→
名護屋城天守跡（右ページ右）
前にある加部島が玄界灘の荒波をふせぐ入江が，港となった。城は，港を見おろす岡の上にたてられ，朝鮮への物資や兵士をのせた船の出入りが，目の下にのぞめた。

にぎわう町（右ページ左）

文禄の役

日本軍の進路
宗・小西軍の進路
加藤・鍋島軍の進路
黒田軍の進路
小早川軍の進路
朝鮮水軍基地
戦いの範囲

秀吉の大ぶろしき

漢城がおちたときいた秀吉は、大いによろこび、夢のような大帝国建設の考えを、あきらかにした。

それは、天皇を明の北京にうつし、秀吉は寧波に住むなど、壮大な計画であった。そして、

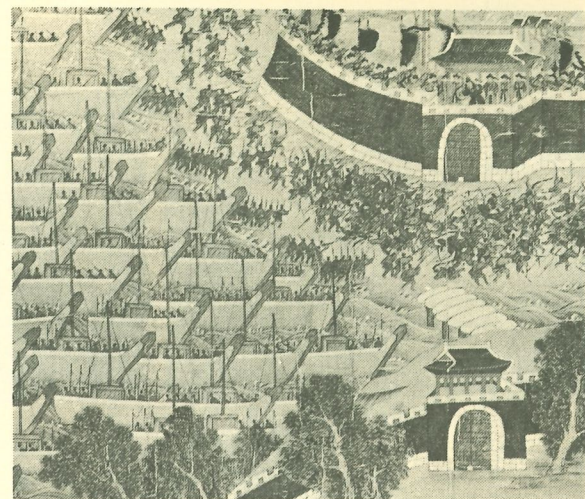
「戦国動乱にあけくれた日本でさえ、わずかな兵でおさえることができたのに、渡海した日本軍が、明を征服できないはずはない。ちょうど山が卵をつぶすようなものだ。」

と豪語した。

そのあと秀吉は、明征服の足場として朝鮮をかためるため、大名たちに、朝鮮八道（全土）をおさえるように指示した。その目的は、朝鮮の役人を味方につけること、農民を村にかえして農業をやらせること、抵抗する朝鮮人があればそれを討ち、治安をまもること、年貢をとり、兵糧米としてたくわえること、などであった。

兵糧米のとりたてと日本語のおしつけ

鍋島直茂の軍団は、はげしい戦いをくりかえしたのち、やがて朝鮮の北東にあたる咸鏡道にはいった。彼らは、秀吉の指示どおり、朝鮮の農民を村にかえさせるようにした。そのうえで、村役人をよびだして、これまでの年貢やめずらしい産物（薬として貴重な朝鮮人参や、麝

釜山城の戦闘　文禄の役は，まず日本軍の，朝鮮半島の南はしにある釜山城の攻撃からはじまった。この絵は，そのときに戦死した朝鮮がわの守備隊長のてがらを記念し，えがかれたもの。

香という高価な香料）がどれほどとれたかをしらべた。そうしておいて、朝鮮の農民から人質をとって牢にいれ、兵糧米をもってくれば、だしてやることにした。

　こうして兵糧米はあつまり、鍋島氏の家臣たちは、とぼしくなった兵糧をみたすことができた。人参や麝香も、おそらくは日本がわにとられたことであろう。

　日本がわの占領政策は、このような兵糧のとりたてだけではない。小早川隆景についていった僧侶安国寺恵瓊は、国もとにおくった手紙のなかで、朝鮮人に日本語をおしえたことを書いている。いや、日本語だけではない。髪の形など風俗まで、日本のものを強制した。ここに、日本の国内を統一した戦争とおなじような考えで朝鮮にせめこんだ、秀吉の無謀さがあった。

朝鮮と明の反撃

　日本の占領政策がすすむにつれ、朝鮮の各地で、民衆の戦いがひろまった。鍋島直茂の軍が占領した地域でも、石や弓を武器にしたゲリラ戦がおこなわれた。

　これとならんで、朝鮮の将軍李舜臣のひきいる水軍が、亀甲船をつかって、日本の水軍をうちやぶり、その補給路を断った。兵と物資の輸送を第一の目的とした日本の船とちがって、亀甲船はうごきのはやい、いくさ専門の小船であり、ここから打たれる火砲によって、日本船は焼けてしずんだ。

　李舜臣によって補給路を断たれた日本軍は、兵糧米と弾薬不足におちいった。秀吉は、兵糧米をたくさんたくわえよ、船をたくさんつくれ、と指令したが、それは焼け石に水と

安宅船の模型　秀吉は開戦の前年，大名にわりあてて，大船をつくらせた。これが安宅船である。

亀甲船　韓国では，秀吉軍をさんざん打ちやぶった亀甲船を，硬貨のデザインとして現在ももちいている。

なってしまった。こうなると、朝鮮にせめこんだ日本軍は、朝鮮農民からの兵糧米のとりたてを、ますますきびしくしていく。

　ところが、弾薬だけはそうはいかない。このころ、朝鮮では鉄砲がつかわれていなかったので、はじめの戦いでは日本軍が勝利したものの、弾薬がなくなると、兵糧米のように朝鮮がわからとりたてることができず、弾薬のない鉄砲は、使いものにならなくなった。

　そればかりではない。日本国内の戦いでは、相手方の情報をさぐって重要な戦力となった忍び者も、ことばのちがう朝鮮では、役にたたなかった。こうして、日本軍にとって戦いに不利な条件が、いくつもでてきたのである。

　いっぽう、朝鮮の援軍としてやってきた明の李如松は、平壌で小西行長の軍をやぶり、そのいきおいで南下したが、碧蹄館の戦いで小早川隆景にやぶれた。この戦局の一進一退が、講和交渉へとむかわせる。

朝鮮ぬきの講和交渉

　このようないきさつによって、一五九三年、日本と明とのあいだで講和交渉がすすめられた。

　ここで、秀吉が明の使いにしめした講和の条件は、つぎの七か条である。

㈠　明の皇帝の王女を、日本の天皇の妃とせよ。
㈡　勘合貿易（→P65）を復活せよ。
㈢　明の大臣と日本の大名は、これから友好関係をむすぶ誓いをたてよ。
㈣　朝鮮の南半分を日本の領土とせよ。

→晋州城　朝鮮半島南部の朝鮮軍の城。川をへだてて，日本軍の城もきずかれた。朝鮮の人びとはこのような城を中心に，日本軍に抵抗した。

明の皇帝からもらった服　文禄の役のあと，秀吉に下賜された，金線入りの豪華な服。

(五)　朝鮮王子を一人、日本へ人質としておくれ。

(六)　すでにいけどった二人の朝鮮王子は、朝鮮にかえす。

(七)　朝鮮の大臣は、これから日本にたいしてまちがいをおこさないとちかえ。

この七か条であきらかなことは、秀吉がもっぱら明を相手として交渉し、朝鮮にたいしては侮蔑的な態度をとっていたことである。もちろん、朝鮮国王は、この講和交渉に反対した。

慶長の役

だまされた秀吉

一五九六年（慶長元年）九月、ようやく明の講和使節が日本にきた。しかし、明皇帝からの返事は、「秀吉を日本国王にする。」というだけで、さきの七か条はまったく無視されていた。

この裏には、小西行長と、明がわからの外交にあたった沈惟敬が、講和のすすめかたについて、腹をあわせていた事情があった。二人は明にむかって、「秀吉は日本を統一したので、国王として明にその地位をみとめてもらい、あわせて貿易もおこないたいといっている。そのため、みつぎものをもって明へはいりたいのだ。」といって、事態をとりつくろった。明は、「秀吉を日本国王としてみとめてやるから、明にくる必要はない。」と判断し、正使として李宗城を、副使として楊方亨をたて、さきの返事をもたせて日本につかわした。

ところが、このからくりを知った正使李宗城は、おそろしくなって、途中でにげてしまった。そこで、とりいそぎ楊方亨を正使とし、かげで演出していた沈惟敬が副使となったのである。

いっぽう、自分の要求が無視された秀吉は激怒して、ふたたび遠征の準備をはじめた。ここで進退きわまった沈惟敬は、母国にうそをつくはめになり、逃亡したが、やがて朝鮮でとらえられて処刑されてしまう。

朝鮮の南半部をねらう

講和交渉がすすめられていた四年のあいだ、秀吉は、ぼんやりと明からの返事をまっていたのではない。「明がなにをいってくるか、ゆだんは禁物だ。」といって朝鮮南部に兵を駐屯させ、講和交渉に反対する朝鮮軍がたてこもる慶尚道晋州城を攻撃し、これをおとしいれている。こうして、朝鮮領土の南半分を実力でとる方針が、講和交渉のかたわら、強行されていた。

秀吉にとってみれば、もう明征服はどうでもよかった。日本のすべての武士を動員し、彼らにばくだいな費用を負担させた以上、その見返りを彼らにあたえなければ、国内のおさまりがつかなかった。そこで、朝鮮領土の南半分がねらわれたのである。しかし、こんどは朝鮮も対策をねって、むかえ討った。

日本軍の城　蔚山の南にきずかれた西生浦城，朝鮮半島の各地に日本軍のきずいた城が，いまものこされているが，とくに南部の海岸に多い。

南原城は、明と朝鮮が連合してまもっていたところである。日本がわは鉄砲隊を先頭にしてこの城をせめたが、鉄砲への対策としてつくられたふかい堀とたかい塀にさえぎられて、鉄砲の威力は発揮できなかった。そこで、城の付近の雑草や稲まで刈り、それを大束にして堀にうめ、城内に突入した。こうして南原城の攻防は日本がわの勝利におわった。

この前後から、朝鮮民衆の大量虐殺と鼻切りが、いっそうはげしくなった。

大量虐殺の証拠

このころのありさまをまとめた朝鮮がわの記録によれば、「丁酉（慶長二年）の禍いは、壬辰（文禄元年）よりひどい。日本兵は、朝鮮人を見ればたちまち殺して鼻をとる。村には火をつけて、南原城のほうへすすんだ。」と書かれている。

だいたい日本ではふるくから、合戦のさいのてがらをしめすものとして、相手の首をとった。しかし、首はおもいので、戦国時代には耳や鼻が多くなった。この朝鮮侵略でも、「てがら」のほどをしめすものとして、鼻切りがおこなわれ、それを塩や酢に漬け、大樽にいれて、大名たちは秀吉のもとにはこんだ。そのさい、つぎのような受取り状がだされている。

1597年（慶長２年）の鼻の受取状

日　付	鼻の数	あて名
8月21日	90	鍋島勝茂
8月25日	264	〃
8月27日	170	〃
9月1日	480	吉川広家
9月4日	792	〃
9月7日	358	〃
9月9日	641	〃
9月11日	437	〃
9月13日	1,551	鍋島勝茂
9月17日	1,245	吉川広家
9月21日	870	〃
9月26日	10,040	〃
10月1日	3,369	鍋島勝茂
10月9日	3,487	吉川広家
?	5,457	鍋島勝茂
合　計	29,251≒函館市の人口の10分の1	

加藤清正（1562～1611）　子どものころから秀吉にそだてられた武将。文禄・慶長の役では先陣をつとめ，鬼とおそれられた。槍の名手で，下は朝鮮で退治したトラの頭骨。城づくりの名人としても有名で，熊本城などをきずいた。

請け取り申す鼻数之事、合せ千弐百四拾五、たしかに請け取り申し候也、恐々謹言、

早川主馬頭長政（花押）

慶長二年九月十七日

吉川蔵人殿

御陣所

以　上

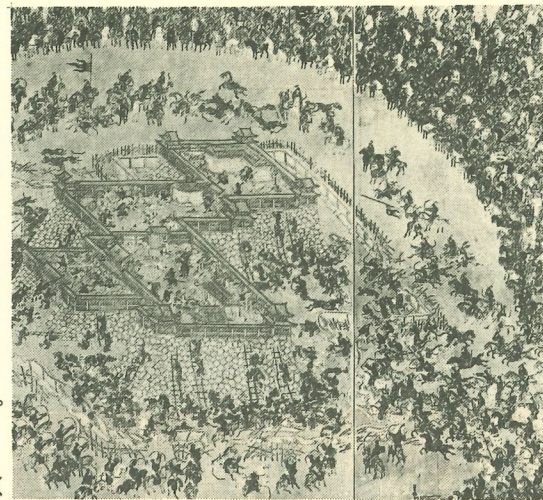
早川長政は秀吉の軍目付であり、吉川蔵人（広家）は毛利氏の一族である。

秀吉は、こうしてあつめられた鼻を京都方広寺の西にうめ、「耳塚」（「鼻塚」）として、みずからの武威を天下にしめそうとした。だからこそ、朝鮮にはいった日本軍は、きそって鼻をとり、その犠牲者は数万から一〇万ほどにもたっした。

このばあい、戦闘する能力のない老人や婦女子までも、まきぞえをくったといわれている。そればかりではない。このこととならんで、たくさんの朝鮮人が、捕虜として日本につれてこられたり、売られたりした。

泗川の戦いと蔚山の籠城

南原城をおとしたあと、日本がわは、全羅道の泗川に島津義弘、慶尚道蔚山に浅野幸長と加藤清正らを、中心として配置した。

これらは海岸線にそったところであり、軍需物資を補給するつごうもあって、とりあえずここが拠点とされたのであろうが、もう一つの理由として、朝鮮民衆の抵抗があって、

泗川の戦い 晋州城の南の海岸にあり，島津義弘の軍1万がまもっていた。島津軍は，明と朝鮮の3万6千の連合軍を打ちやぶり，停戦交渉を有利にした。

かんたんには奥地にはいれなかったことが、あげられよう。

ここでは、鉄砲隊の戦法にみあった日本式の城づくりが、すすめられた。泗川の城は、一五九七年一二月に、二か月の工事によって完成した。この城へ、明・朝鮮の連合軍がおしよせた。島津勢は彼らを城にひきつけ、鉄砲の銃身がまっかになるまで打って、この攻撃をしのいだ。

いっぽう、蔚山のばあいは、城の工事中にせめられたのが悲劇のはじまりであった。明・朝鮮の連合軍にかこまれるなかで、戦いのかたわら、築城の突貫工事がおこなわれたのである。工事には、日本からつれてこられた鍛冶屋・大工・石工などのほか、材木取りなどの雑役には、日本の農民や現地でとらえられた朝鮮人があたった。

材木をとりにいくとき、ゆだんすると、包囲軍に打たれてしまう。命がけでとってきた材木が役にたたないと、もう一度とりにいかされる。このような恐怖のなかで、築城工事がすすめられた。

籠城のすさまじさは、それだけではない。兵糧と水不足が、なんといってもきびしかった。それにつけこんで、水売り商人があらわれる。荷物をはこんだあと不要となった牛馬を、殺してたべるようなことはまだしも、日本兵による朝鮮人殺食まであったという。このようなとき、人買い商人があらわれ、朝鮮人の首をしばってひきたてていった。

従軍僧としてここにいた豊後国臼杵（大分県）安養寺の慶念は、「地獄はよそにあるのではない。目の前にこそある。」となげき、「敵がせめてきて、はやく死んでしまいたい。」と日記に書いている。

朝鮮民衆の抵抗、点と線の日本軍

蔚山の籠城は、やがて日本がわの救援があって、九死に一生をえた。ここから知られることは、泗川の戦いのように、日本がわは城と鉄砲による日本の戦闘ペース、それも点と線の地点でしか、たたかえなかった、ということである。

一歩奥地へはいれば、地理的な感覚もなく、神出鬼没の朝鮮ゲリラには太刀打ちできなかった。武勇で知られる黒田長政や蜂須賀家政でさえも、蔚山を包囲する明・朝鮮軍の後ろにまわって、討つことをためらったほどである。

朝鮮の農民を家にもどし、農耕をさせて兵糧米をとることは、文禄の役からおこなわれた。慶長の役でもその方針はつづけられたが、こんどは相手もだまされなかった。

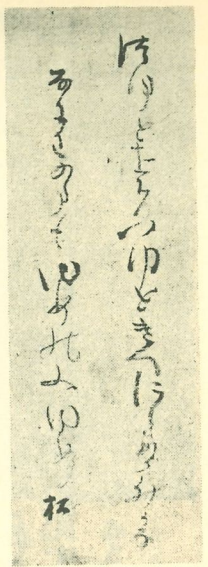
晋州城ちかくの朝鮮農民は、耕作を強制されて、それにしたがっていたが、戦局がかわるや、山ににげこんでゲリラとなった。

全羅道南部にいた島津氏も、やはり朝鮮農民から兵糧米をとろうとした。島津氏は、「山中にかくれているゲリラの指導者を密告したりとらえたりする者に、ほうびをとらせる。」といって、協力する者は、日本の農民なみにあつかおうとしたが、これを信用する朝鮮農民はいなかった。

いっぽう、朝鮮水軍はふたたび李舜臣の指揮するところとなり、日本がわの補給路がと

義娘岩 この戦争で、朝鮮がわは女性もたたかった。加藤清正らの軍が、晋州城をおとし祝宴をひらいたとき、そこに論介という芸者が、酌をするためにつれてこられた。

美貌で知られた論介は、同邦を殺したにくき侵略者に酒をすすめおどりまくった。酔いもまわったころ、彼女は日本兵二人をひっぱりだし、またおどった。その興がたかまったとき、彼女はとつじょとして二人の兵士の頭を両わきにかかえ、宴会場の真下をながれる南江へとびこんだという。

日本兵を道づれに命を絶った論介の祖国愛は人びとに語りつがれ、祠がたてられ、彼女がとびこんだところにある大きな岩は義娘岩といわれている。

だえてしまった。ここで日本がわは海岸にそった地点でくぎづけになる。

秀吉の死　右は秀吉が死にのぞんでよんだ辞世の和歌。
「つゆ（露）とおき　つゆときへ（消）にし　わかみ（我身）かな　なにわ（浪華）の事も　ゆめ（夢）の又ゆめ　松」
左は死の五か月まえに京都郊外の醍醐でおこなった、豪華な花見の図。

太閤の死をかくした朝鮮撤兵

こんなとき、秀吉が死んだ。一五九八年（慶長三年）八月一八日のことである。その年の三月、秀頼らをつれて醍醐寺三宝院で花見をしたのが、秀吉最後の歓楽だった。

「唐・南蛮まで切りしたがえるのだ。」

といって大名たちに朝鮮で苦戦をさせ、「人をうち切り、くさり竹の筒にて首をしばり、親は子をなげき、子は親をたずね」（慶念の日記）るような虐殺をさせておいて、自分は花見とは。いい気なものだといえばそれまでだが、このような男にも、親の心があったのだろうか。死の直前、家康ら五大老に秀頼の将来をたのんで、太閤は夢のまた夢のうちに、その生涯をとじた。

秀吉の死はもちろん秘密にされ、日本がわは、これをきっかけとして朝鮮から撤兵しようとした。しかし、撤兵するにしても日本の体面があり、名目が必要だ。五大老や五奉行のあいだで、「日本の外聞」ということが問題とされた。五大老・五奉行から朝鮮にいる大名たちに、つぎの条件が指示される。

「朝鮮王子を人質とせよ。さもなければ、米・虎皮・豹の皮・薬種・清蜜などを、毎年租税として日本へおさめるようにさせよ。」

しかし、明・朝鮮がわも秀吉の死に気づき、日本がわのかってな条件におうずるどころか、撤兵する日本軍に追い討ちをかけた。朝鮮を去ろうとする小西行長の軍は、李舜臣にはばまれた。それを知った島津義弘は、小西勢をすくうため水軍をだし、李舜臣の水軍とたたかった。これが前後七年にわたる戦争の最後の戦いであったが、李舜臣はここで戦死した。

李舜臣(1545～98)　朝鮮の水軍の名将李舜臣は，日本の水軍をさんざんに打ちやぶった。その勇戦ぶりは，いまの煙草の箱の図案にもなっている。閑山島はその基地。

朝鮮侵略のつめあと

この戦争をつうじて、数万人の朝鮮人捕虜が日本につれてこられた。このうちの多くは農民であった。

このころ、日本の農村では、朝鮮侵略軍の雑役として、農民もかなりかりたてられていて、農村人口がすくなくなっていた。その穴うめとして、朝鮮の農民は農作業を強制された。また、婦女子などは、奴隷として売買された。さらに「縫官女」（刺繍の技術者）は、秀吉のもとにあつめられ、陶工は九州・中国地方の大名のもとにあつめられた。

このほか、捕虜のなかに朱子学者もいたが、江戸幕府が成立してからあと、農民などは朝鮮におくりかえされた。しかし、それもほんのわずかにすぎなかった。

朝鮮の民衆にいたましい犠牲をもたらしたこの戦争は、朝鮮民族のあいだに、「壬辰の悪夢」として語りつたえられ、そのつめあとは、いまもなお、ふかくきざみこまれている。

これにたいし、日本では、戦争の雑役に動員された船員や農民の逃亡による抵抗はあったものの、この戦争はだんだんわすれられていった。それは、江戸時代の中ごろになって、「清正は　人参ばたけ　ふみあらし」と川柳にうたわれる程度になってしまった。

この節を読むにあたって

信長や秀吉よりまえの時代の文化は、ほとんど仏教中心の文化だった。それがこの時代になると、武将や豪商の好みをもりこみ、キリスト教の要素もとりいれた、いきいきとした文化にかわる。

それを城と障壁画・茶道・焼きものなどの工芸品、演劇・思想などをつうじてみてみよう。

この節を読んだら、あらためて城を見にいったらどうだろうか。城はどこにでもある。また、焼きものはどうやって焼くのだろうか、一度見学してみるのもいい。

黄金の文化、わび・さびの文化

城郭と障壁画

安土・桃山時代を象徴するものは、天守閣をもった城郭である。この建築は、信長によってはじめられた。

地上の神の住まい安土城

天下の統一者の居城にふさわしい安土の天守閣については、さきにものべたが（→P 112）、いま一度注目しておきたいことがある。それは、天守閣の各階層の障壁画のなかに、中国の儒者や賢人、インドの釈迦十大弟子などがえがかれ、天守閣の地下一階から三階までは、教会ふうの吹きぬけになっていて、その地下一階に、仏教建築でもちいられる宝塔がおかれていることである。

宣教師のルイス＝フロイスは、この天守閣を、「その構造と堅固さ、財宝と華麗さは、ヨーロッパの壮大な城とおなじだ。」といっているが、天守閣の特徴は、華麗とか壮大にとどまるものではない。それは、キリスト教の要素も、仏教の要素も、そして儒教の要素も、この天守閣のなかにとりいれ、まさにそのうえに信長が「天主」として、金の座敷に君臨していることである。

唐獅子　狩野永徳(1543〜90)がその晩年にえがいた屏風。のびのびとした力づよい画風は，桃山時代を代表する作品。永徳は洛中洛外図屏風(→口絵P 89)をはじめ，多くの屏風やふすま絵をえがいた。

戦国の雄としてその名を知られる北条早雲も上杉謙信も武田信玄も、彼らはことごとく晩年には仏門にはいり、仏の道にすがっている。しかし、信長からは、神仏との関係がぎゃくになった。神も仏も、天下をとった封建領主のもとにおく、そしてキリスト教はやがて追放される。このあたらしい考えの出発が、安土の天守閣の建築にこめられている。

信長は、みずからを地上の神とし、すべての人から礼拝されることをのぞんだ。そのために、安土に摠見寺をたてた。信長はいう。

「この寺に参れば、まずしき者は富を増し、子宝にめぐまれない者は子がさずかる。病はなおり、長生きができる。信長の誕生日を聖日とせよ。」

と。ここには、「阿弥陀を信じれば来世へいってすくわれる。」といった一向宗の教えを否定し、信長を信じる者はこの世でこそすくわれる、という現世利益の主張があった。

雄大な障壁画

仏の世界や花鳥・山水などを題材とした障壁画は、ふるくからあった。

それが、信長や秀吉のころになって、唐獅子や龍・虎、鳳凰や鷹など、鳥獣の王者を題材とするようになって、いっきょに時代の脚光をあびるようになった。

城郭の障壁画にえがかれた鳥獣の王者、これはなにを意味するのだろうか。この鳥獣の王者は、なにも障壁画にかぎったことではなく、戦国大名が文書におす印章にも、とりいれられていた。武田氏の龍、北条氏の虎、上杉氏の獅子など（→P 34）が、それである。印章に鳥獣の王者をもちいることの意味は、「われこそ領国の王者である」ことを人びとにしめすことにあったのであり、大名たちがたんにつよいものをこのむ、といった

だけのことではない。

このような考えをこめた題材が、天守閣の障壁画にとりいれられたことは、まさしく天下を統一した者の精神を、そこにうつしだしているのではなかろうか。

障壁画の絵師といえば、狩野永徳がまずおもいうかぶ。永徳は、安土の天守や御殿に、雄大な障壁画をいくつもかいた。さらに秀吉の時代になると、永徳とその派の絵師は、大坂城・聚楽第、そして肥前名護屋の障壁画をえがいている。

また、水墨画の絵師としては、海北友松や長谷川等伯がいた。彼らは、千利休らとともにまじわり、茶の湯をつうじて身につけた閑静な作品をえがき、これまた秀吉に重用された。

黄金の茶室、草庵の茶室

富と権勢をしめす北野大茶湯会

一五八七年一〇月一日、秀吉は、京都北野の森で大規模な茶会をひらいた。利休の意見もいれたその呼びかけは、つぎのようなものであった。

(一) この茶会にくる者は、自分のもっている名物を、のこらずもってきて見せること。

(二) 茶の湯をたのしみたい者は、町人であろうと百姓であろうと、釜一つ、つるべ一つ、呑物一つ、茶のない者はこがし(米を煎り、塩をいれたもの。これに湯をいれて飲む)でもいいから、もってあつまれ。

茶売り　このころ民衆も茶を飲みはじめた。

ルソンの壺　フィリピンでつくられた茶壺。

→枯木猿猴図（右ページ右）　長谷川等伯の作。中国の名画にまなび，親子のサルの愛情をえがいている。

山水図（右ページ左）　海北友松の作。中国の画風にまなび，水墨画に新しい作風をたてた。

(三) 北野松原での茶の湯の座敷は、畳二畳とする。閑寂をたのしもうとする者は、つぎをあてた畳でも、むしろの座敷でもいい。

(四) 茶の湯をたのしもうとする者は、日本ばかりでなく、中国からもやってこい。

(五) この茶会にでなかった者は、これから茶をたててはならぬ。

茶会の準備は、九月二五日からはじめられ、大工や細工人が、腕によりをかけて、茶湯座敷をつくった。

茶会の当日、会場の中央には一二畳の座敷があって、それが三つにしきられ、秀吉自慢のコレクションがならべられた。

その一番目の座敷には、なすの形をした茶入れ(「にたり茄子」)、利休の師匠武野紹鷗がもっていた水こぼし(「紹鷗備前水こぼし」)などがかざられている。二番目は金の座敷で、ここには大友宗麟から手にいれたひょうたん形の茶入れ(「御茶入ひょうたん」)、青磁の花瓶(「花入蕪無」)など、つづいて三番目の座敷には、「天下四茄子」の一つとして知られる茶入れ「紹鷗茄子」や、南蛮渡来であろうか、象牙の茶杓などがおかれていた。

この一二畳の座敷とならんで、秀吉の茶席があり、そこにも絵画や茶道具がかざってあった。ついで、秀吉の茶席のわきに、千利休・津田宗及・今井宗久ら堺の豪商が茶席をもうけ、絵画や茶道具をかざり、これにならって、茶会にきた公家・僧侶・大名・豪商たちも、それぞれ絵画や茶道具でかざった茶席をつくった。

茶会は秀吉や利休たちの点前で茶をもらったり、秀吉が一つ一つの茶席を見物したりし

千利休(1522～91)　堺の出身で，わび茶をつくりあげた。派手さをよろこぶ秀吉の茶とは，考えかたがちがっていた。左の花入れは利休の作で，なんの飾りもない素朴さに，その好みがあらわされている。

て、盛大におこなわれた。この茶会は、一〇日間ほどおこなわれる予定であったが、一日でおしまいになった。それは、肥後国（熊本県）一揆がおこったことによるともいわれるが、はっきりしたことはわからない。

秀吉と一味ちがう利休のわび茶

北野大茶会の呼びかけは、秀吉の好みと利休の好みが、矛盾しながらいりまじっていた。

名物はのこらず見せろとか、日本人ばかりでなく中国人まで茶会にこいとか、この茶会にこなかった者はこれから茶をたてるな、といった強引なことをいい、金の座敷をつくってその権勢をしめそうとしたのが、秀吉である。しかし、すべてに派手好みの秀吉がよびかけた以上、利休の茶の湯の心は生かされえない。

利休は、釜一つ、つるべ一つ、呑物一つでいい、座敷はむしろでもいい、といった。ある公家は、「茶会にあまりお金がかかるので、一日でおわってほっとした。」と日記に書いている。秀吉は、利休をたいせつにしたわりには、利休の茶道がわからなかったようだ。

利休によってつくりあげられたわび茶の世界、それは、形式にこだわることなく、茶の湯をつうじて閑寂な境地をもとめようとするものであった。

これまでの茶道の一つに、書院の茶があった。これは、中国からつたえられたものであり、台子（茶入れ・風炉・茶碗・水さしなどをいれる、正式の茶道具入れ）をもちい、形式ばかりをおもんじた。これにたいし、もう一つの茶は、寄合の茶である。これは、堺でも豪商たちが寄合の席で飲みかわした、大衆的なものであった。

茶室とその内部(左)　利休がつくったといわれる妙喜庵待庵。にじり口とよばれるせまい入口からはいると，2畳の茶室に1畳の次の間というせまい空間を生かすくふうが，さまざまになされている。

このような茶の湯の流れをくんで、堺の豪商武野紹鷗は、茶の湯の世界にわび・さびをとりいれ、茶の湯の和風化をはかった。紹鷗の教えをうけた利休は、茶の湯の道をきわめ、つぎのような考えにたどりついた。

「茶の湯は形式でなく、心である。茶室は草の小座敷でもいい。ただ湯をわかし、茶をたてて、しずかに飲めばいい。家は雨もりのしない程度、食事は飢えぬほどでよく、これは仏の教えであり、茶の湯の本意だ。」

ところが、秀吉にかかると、利休がきわめたわび茶の世界は、ふっとんでしまう。茶会は、富と権力をもつ者のサロンとなってしまった。茶の湯は形式でない、と利休はいったが、なるほど秀吉は、ふるい形式にこだわらなかった。そのかわり、茶の湯を金ピカの世界にもちこんでしまった。大坂城にも肥前名護屋城にも、秀吉は金の茶室をつくって、富と権力のほどをしめした。

しかし、おなじ大坂城や肥前名護屋城の山里丸に、秀吉は草庵の茶室をつくることもわすれなかった。これは、こと茶の湯については、けっきょく、秀吉は利休の手のひらからでられなかったことをしめしていよう。

ところで、一五九一年、利休は自殺に追いこまれる。その直接の原因は、あたらしい茶道具にたかい値をつけて得意になっていたり、京都大徳寺山門の上に自分の木像をおいたことを、石田三成が秀吉にうったえたからであるとつたえられている。しかし、ほんとうの理由は、もうすこし根ぶかいようだ。

焼きもの・朱子学・歌舞伎

茶の湯がさかんになるにつれて、茶碗などの茶道具が、ひろくもとめられるようになった。利休は、聚楽第で土焼きの陶器をつくり（楽焼き）、信楽・備前などでは、大名の指示によって、焼きものの窯がつくられた。

朝鮮の陶工　このようなとき、秀吉の二度にわたる朝鮮侵略があり、そのさい、朝鮮の陶工は、根こそぎ捕虜として日本につれてこられた。とくに、窯場をもたない九州や中国地方の大名たちは、きそって陶工をあつめた。李朝陶磁器のうつくしい技法にほれこんだ大名たちは、自分の領地のなかで、陶工たちに焼きものをつくらせようとしたのである。

鍋島氏につれられてきた李参平は、肥前の領内を、焼きものに適した土をさがしもとめて、あるきまわった。そして、肥前有田で、白磁の陶土をみつけた。これが有田焼のはじまりとなる。

いっぽう島津氏も、大ぜいの陶工を捕虜としてその領内につれてきた。彼らはやがて、薩摩の苗代川で焼きものをはじめ、島津氏のもとめる焼きものをつくるようになる。

そればかりではない。島津氏の考えによって、彼らは、苗代川で朝鮮人だけの集落をつくり、朝鮮のことばや風俗・習慣をおしとおすように、命ぜられた。苗代川の陶工の神をまつる玉山宮では、朝鮮式の祭礼と踊りがおこなわれ、江戸幕府成立後、島津氏は、参勤

→

日本軍の熊川城跡（右ページ右）　朝鮮半島南端の釜山ちかくの熊川の小山には，城跡がのこる。この地の陶工はとらえられて，平戸（長崎県）におくられた。

故国をしのぶ踊り（右ページ左）　薩摩（鹿児島県）苗代川につれてこられた陶工たちが，玉山宮に奉納した朝鮮式の踊り。

中国の説話を題材にした絵　狩野山楽作。儒教の教訓的な話をえがくことが流行。

交代のさいにたちよって、それを見物したりした。

このほか、長門萩焼（山口県）・筑前高取焼・豊前上野焼（以上福岡県）・肥後八代焼（熊本県）なども、このようないきさつでおこったものである。

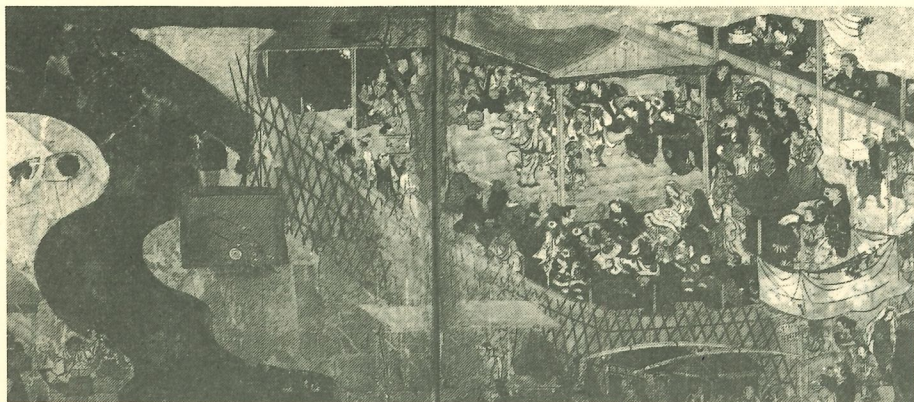
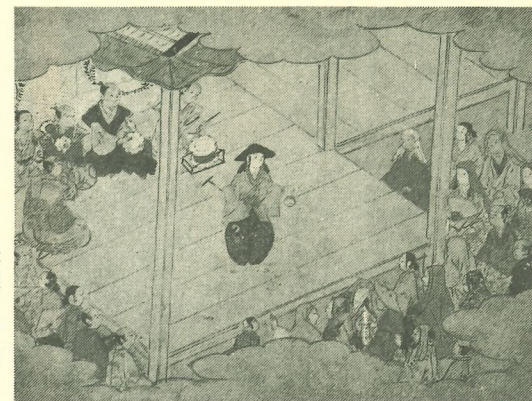
また、朝鮮から手にいれたものといえば、活版印刷の技術がある。これは南蛮人からつたえられたキリシタン版の印刷技術とならんで、その後の日本文化の広まりに大きな影響をあたえた。

捕虜からまなんだ日本の朱子学　捕虜のなかには朱子学者もいた。その一人、姜沆は、日本につれてこられたときのくわしい記録をのこしている。

姜沆は慶尚道晋州の人で、朱子学者であるとともに、朝鮮の高級官僚でもあった。彼は、南原城の戦いのあと、兵糧の運搬を指揮していて、藤堂高虎の兵にとらえられたのである。

彼は四国の伊予大洲につれてこられたが、朱子学者だと知れるや待遇がかわり、やがて京都にうつされた。そこで、日本の朱子学者藤原惺窩との交際がはじまった。

もともと朱子学は、南宋の朱熹によってはじめられ、日本には鎌倉時代のおわりごろつたえられたものである。しかし、君臣の身分区別を重要視する、この朱子学がつたえられた当初、それは五山の僧侶による、机の上の学問にすぎなかった。

ところが、朝鮮では高麗王朝がたおれ、李氏朝鮮が建国されるさい、朱子学は政治思想のなかにとりいれられ、実践的に応用されていた。

阿国と歌舞伎踊り　右は歌舞伎踊りをはじめた阿国が，京都の北野神社前で興行した念仏踊りの場面。左は歌舞伎踊りが演じられている川原。となりには矢場もみえる。武士も庶民もたのしんでいる。

藤原惺窩が積極的に姜沆にちかづいた理由は、君臣の身分区別をたいせつにする朱子学を政治のなかに応用する方法を、姜沆からまなぼうとしたことにある。そのとき、惺窩は姜沆にたいし、捕虜としてではなく、あくまでも師として、礼をつくして教えをうけた。のち、江戸幕府は朱子学を幕府の御用学とし、その学問所は林羅山が担当することとなるが、羅山は惺窩の弟子であった（→P252）。

こうしてみると、朝鮮朱子学者が日本の政治思想にあたえた影響は、まことに大きかったといえよう。

出雲の阿国と歌舞伎の世界

歌舞伎ということばは、もともと、「傾く」ということからきている。わざと人目をひく異様な風体やふるまいを、「傾く」といった。そういえば、信長が斎藤道三に会いにいったときのいでたちも、傾いたものだった（→P97）。この傾いた風体やふるまいは、演劇の世界にもとりいれられる。それをはじめたのが阿国であった。

阿国は、出雲大社の歩き巫女とも傀儡女（流れ芸人）ともいわれていたが、その素性はわからない。阿国がはじめて歴史の記録のなかにでてくるのは、一五八二年五月一八日のことである。『多聞院日記』には、つぎのように書かれている。

「奈良春日神社ノ若宮拝殿デ、八歳ノ加賀ト一一歳ノ国トイウ二人ノ童ガ、ヤヤ子踊リヲシタ。トテモ面白イノデ、沢山ノ人ガ見物ニキタ。」

「ヤヤ子踊リ」とは稚児踊りのこと、阿国はこのとき一一歳である。

ところで、春日神社で踊りをすることは、だれでもできることではない。このころ、大和の雑芸者は、春日神社と縁のふかい興福寺の保護のもとにおかれ、座として興行の権利をもっていた。阿国もその座に属す歩き巫女であった。

阿国はやがて、京都の川原などで興行をはじめる。彼女の踊りはもちろん、室町時代の能の影響をうけていた。能舞台をつかい、能や狂言の趣向もとりいれた。

それだけではない。このころ流行しはじめた念仏踊りや風流踊りも、とりいれられた。この念仏踊りや風流踊りは、神社や寺の祭りの余興として、太鼓・笛・鼓にあわせておどられたものであり、盂蘭盆会などをつうじてさかんとなった。

この踊りには、「夢の浮世じゃ、ただ狂え。」といった気持ちもふくまれていた。それは、いつおこるともしれない戦禍の危険にさらされた、庶民の心情をこめたものであった。阿国の踊りは、このような気持ちにこたえたものである。

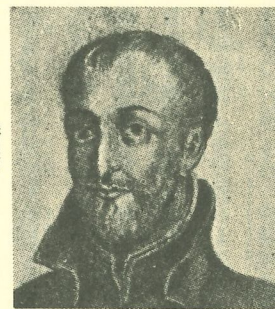
舞台にあがった阿国は、塗り笠に紅の腰蓑をつけたり、大小をさした異風な男装をして傾き、茶屋女とたわむれるようすまでもとりいれた踊りを演じた。これが「歌舞伎踊り」といわれ、日本の演劇の歴史を大きくかえることとなった。

また、歌舞伎とならんで、江戸時代の庶民演劇を代表した人形浄瑠璃も、このころからひろまった。三絃楽器としての蛇皮線が、琉球からつたえられ、それが猫の皮をつかった三味線に改良された。この三味線が、当時語りものとしてはやっていた浄瑠璃の伴奏にもちいられ、人形操りとむすびついて、人形浄瑠璃のもととなった。

はじめてローマを見た日本人
——安土桃山時代の子ども——

少年使節の出発

一五八二年（天正一〇年）一月、長崎の港でいかりをあげた南蛮船に、一四、五歳の少年四人がのっていた。伊東マンショ・千々石ミゲル・原マルチノ・中浦ジュリアンの洗礼名をもつ彼らは、イエズス会の巡察師バリニャーノにつれられて、ローマ教皇のもとへ旅だつところであった。彼らこそ、「天正遣欧使節」として、歴史にその名をのこした人びとである。

さきにものべたように（→P70）、イエズス会はカトリックの教団の一つである。宗教改革のあと勢力をのばしたプロテスタントに対抗して、カトリックは、ヨーロッパ以外の各地に勢力をひろげようとし、イエズス会も、その目的にそってつくられた。バリニャーノは、そのためにアジアに派遣された宣教師の一人であり、布教区域をまとめる巡察師でもあった。

バリニャーノ像（1539〜1606）

一五七九年、日本へ巡察にきたバリニャーノは、二年数か月ほど日本にいたが、日本をはなれるさいに、布教をさらにひろめる方法として、日本からヨーロッパへ使節をおくることをかんがえついた。その目的は、つぎのようなものであった。

(一) ローマ教皇のもとに日本のキリスト教徒をおくり、キリスト教布教の感謝をしめすこと

(二) ヨーロッパのすぐれたキリスト教文化を、日本人の手によって紹介させること

(三) 日本でのイエズス会の業績をしめして、いままで以上の保護と援助を、ローマ教皇からうけること

バリニャーノは、この考えをキリシタン大名大友宗麟・大村純忠・有馬晴信につたえた。そこで彼らは、それぞれゆかりのある少年四人をえらび、自分たちの

使いとして、ローマにおくることとなったのである。日本人には経験のない大冒険に、どうして中学生くらいの少年がえらばれたのだろう。

少年使節たち　右上は伊東マンショ，左上は千々石ミゲル，下段の２人は原マルチノと中浦ジュリアン。

苦難の旅

少年使節たちにとって、ローマへの道はとおく、きびしかった。中国のマカオ、インドのゴアをへて、ポルトガルのリスボンへついたのは、長崎を出帆してから二年半のちのことだった。この間、彼らは嵐にあったり、風が吹かず船がすすまなかったり、暑さのため食物はくさり、船内で病人がでるなどの難行苦行をかさねた。そのうえ、彼らがしたっていたバリニャーノは、イエズス会のインド管区長としてゴアにとどまることとなったので、ゴアからの旅は、見ず知らずの人びととといっしょだった。

一五八四年七月、ようやくリスボンについた少年たちは、ポルトガルをとおってスペインのマドリードにはいり、ポルトガル国王でもありスペイン国王でもある、フェリペ二世に謁見した。彼らは日本の着物を着て宮殿にはいり、大友・大村・有馬三氏の手紙と献上品を国王にさしだした。国王は、彼らを日本の貴公子としてもてなし、ローマへいく便宜をはかってくれたので、彼らはいく先ざきで、ヨーロッパの人びとから、熱烈な歓迎をうけた。

そして、めざすローマについたのが、一五八五年二月だった。日本をでてから三年と一か月たっていた。彼らはバチカン宮殿帝王の間で、教皇グレゴリオ一三世に謁見することとなった。

ローマ教皇の歓迎

帝王の間は、教皇がキリスト教国の国王と会見するところであ

り、その意味で、使節たちは最高の栄誉をうけたものといえよう。
大友・大村・有馬三氏の書状を読みあげ、教皇に、日本での布教のようすを報告して、彼らの目的は、ひとまずここでたっせられた。教皇は、とおい国からきた少年たちをあたたかい抱擁でむかえ、したしくもてなした。しかし、その半月ほどあとには、少年たちは教皇の死を知らされることになる。

インド副王の手紙　キリスト教の保護をねがう。少年使節の帰国のさい、バリニャーノが秀吉にとどけた。

少年たちのローマ滞在は約三か月であった。彼らはローマの人びとに歓迎され、ローマ市民権をもあたえられた。人びとは彼らの着物をめずらしがり、オリーブ色の顔、小さな棒で食事をすることにも、興味をもった。食事といえば、彼らにはヨーロッパの肉食はなじめなかったようだ。お母さんのつくったにぎり飯が、いくたび目の前をちらついたことだろう。

その年の五月、彼らはローマの人びとに別れをつげ、五年後の一五九〇年（天正一八年）六月、長崎にかえりついた。出発してから八年五か月ぶりの日本であった。

そのあいだに日本は大きくかわった。四人が出発して四か月後、本能寺で討たれた織田信長にかわって、天下をにぎった豊臣秀吉は、キリシタンへの圧迫をつよめていた。

その後、キリスト教をすてた千々石ミゲル以外の三人は、遣欧使節の誇りを胸に、キリスト教の布教にその生涯をささげた。なかでも、中浦ジュリアンは一六三二年、長崎で、さかさ吊りの刑によって壮絶な殉教をとげたのである。

江戸の幕府

豊臣秀吉の死後、いよいよ重みをました徳川家康。関ケ原で石田三成らをやぶった三年後には、征夷大将軍に任ぜられて、江戸に幕府をひらいた。

幕府のつよい力のもとで、士農工商の身分制度がかためられた。さらに、参勤交代などによって大名の力をよわめ、天皇や公家の行動も、きびしく統制した。農民の生活も、こまかに制限された。

キリスト教は禁じられ、鎖国がはじまる。

二六〇年にわたる江戸幕府の基礎づくりが、すすめられたのである。

江戸城と天守閣。二重の堀にかこまれた壮大な城と、朝鮮通信使をえがいた江戸図屏風。

大坂夏の陣図。徳川軍のはげしい
攻撃に，落城まぎわの大坂城。

家康の南蛮胴具足。ヨーロッパから
の輸入品を，和風に改装したもの。

家康をまつった日
光東照宮の陽明門。

徳川家康像。狩野探幽筆。

徳川家康
――江戸に幕府をひらく

豊臣秀吉の天下をうけついだ徳川家康は、三河国（愛知県）の小豪族の子としてうまれた。おさないときに父をなくし、人質にされるなど、苦労をかさねたが、しんぼうづよく、自分の出番をまっていた。

関ケ原・大坂冬の陣・大坂夏の陣の戦いなどをへて、豊臣家をほろぼした家康は、この間、六二歳で将軍となり、江戸に幕府をひらいた。

忠実な家臣団をしたがえ、金銀山を直轄にし、大商人から得た富の力をもとに、家康は、徳川家の支配をゆるぎないものにした。

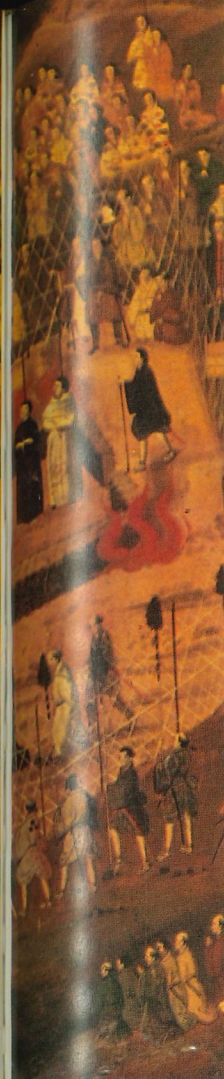
元和の大殉教。1622年，宣教師と，それをかくまった信者55人が，長崎西坂で処刑された。

踏み絵。幕府は信者をさがすため、キリシタンの多い地方で年に一度、聖像をふませた。

キリスト教の禁止

一六世紀の中ごろ、ザビエルらによってつたえられたキリスト教は、西日本を中心にひろまった。信長の援助もあって、京都や安土には、教会もたてられた。

しかし、天下統一をはたしたころから、秀吉は、キリスト教が日本を支配する手段につかわれるのではないかと、うたがいはじめた。

江戸幕府のもと、キリスト教は禁止され、多くの信者が殺されたり、海外へ追放された。信者の抵抗は、島原の乱となってもえあがったが――。乱の平定後、幕府は鎖国にふみきったのである。

島原の陣図屏風。一揆軍は，圧倒的に多勢の幕府軍を相手に奮戦した。本陣のようす。

原城跡。海岸に面した丘陵の上にあり，農民軍は3ヶ月間まもりとおした。

風神雷神図より雷神　宗達作。

黒棚。徳川家光の娘千代姫の嫁入り道具としてつくられた蒔絵棚で、大名の豪華な家具の代表である。

左は，歌舞伎の人気。民衆文化の花形として，歌舞伎の発達はめざましかった。四条河原図。

江戸時代初期の文化

この時期は、安土桃山時代の、力づよくてはなやかな文化のなごりが、まだみられる。それが、だんだん優美で、こまやかな味わいをもった文化に、うつっていこうとする時期であった。

朝鮮出兵のさいにつれかえられた朝鮮の工人は、すぐれた陶器づくりの技術を日本につたえた。

また、このころから、文化のにない手は、町人へとうつっていくのである。

上は，色絵梅月文茶壺　仁清作。桃山時代の障屏画をおもわせる，だいたんな図柄をもちいた茶壺。

舟橋蒔絵硯箱　光悦作。蒔絵に鉛と銀をもちい，「後撰集」の歌でかざっている。もりあがった形もおもしろい。

色絵雉子香炉　仁清作。写実と装飾の技法を，それぞれうまくいかして，洗練されたおもむきをだしている。

桂離宮松琴亭。茅葺入母屋づくりといわれる閑静な茶室。前の池は海の景色を写している。

修学院離宮の霞棚。

楽焼茶碗　光悦作。銘は雪峰。

茶の湯の発達

戦国時代のあらあらしい空気のなかで、心の静けさを得るために、茶の湯がこのまれた。

秀吉につかえた千利休は、豪華な城と対照的な、自然にちかい、かざりけのなさ、すがすがしさをむねとする茶の湯をつくりだした。

江戸時代には、それがさらにみがきをかけられ、ふんいきづくりにも工夫がこらされるようになる。

この節を読むにあたって

豊臣秀吉の死後、ついに天下は徳川家康の手にはいった。

信長・秀吉のもとで、ながいあいだ、じっとがまんをかさねて機会のくるのをまっていた家康は、はじめて主役となり、権力闘争に全力をつくす。

彼は、「たぬきおやじ」ともよばれている。ときには、たぬきのように人をだまし、ときには、きつねのようにずるく人をおとしいれる。

しかし、それだけで天下の主人公となれるものではない。家康のすぐれたところをかんがえるのも、一つの読みかたである。

天下をとった徳川家康

関ケ原の戦い

家康、天下殿になる

一六〇〇年（慶長五年）という年は、きりがよく、おぼえやすい。日本歴史のうえでも、ぜひ記憶しておきたい年である。なぜなら、日本じゅうの武士団が東西にわかれ、だれが豊臣秀吉死後の日本の主人公となるか、実力と実力の戦いで、勝負をけっした年だからである。

これよりさき、前年の春、つまり秀吉がなくなって半年とすこしたったころ、京都伏見城下の屋敷にいた徳川家康は、そこをでて伏見城にはいり、天守にあがった。世間では、これをみて、家康が「天下殿」になられた、といいあった。伏見城は、諸大名が、自分たちの政府をおくところ、とみとめあった城でもあった。その中枢部である天守に家康がはいったことにより、人びとは、つぎの支配者は家康だ、とみたのである。

ところが、さらにこの年の秋、家康は伏見城を二男秀康にまかせ、大坂城西の丸にはいった。ここは豊臣氏の城であり、本丸にはあとつぎの秀頼がいる。伏見・大坂の二城をおさえれば、彼が天下をとったもおなじである。

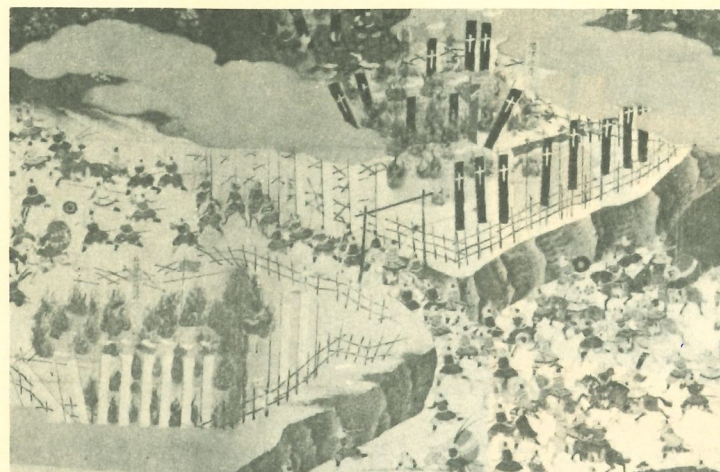
石田三成(1560～1600) 秀吉の子飼いで，五奉行の1人。

細川ガラシア　石田三成は兵をあげたとき、徳川方についた細川忠興の妻も、人質として大坂城にいれようとした。彼女は明智光秀の二女で、名はたま、教名をガラシアとよぶキリシタンであった。
　彼女は夫にめいわくをかけまいとして、三成の要求をこばみ、屋敷に火をかけ、みずからは家来の手にかかって最期をとげた。キリスト教は自殺を禁じていたからである。忠興はこれに勇気づけられ、大きなてがらをたて、小倉四〇万石の大名となった。

どうして、こんなに自由なふるまいにでることができたのだろうか。それは、このすぐまえに、前田利家が病気でなくなったからである。利家は秀吉とはふるい友人で、豊臣政権では、家康とならぶ実力者であった。しかも、秀吉の遺言では、利家に秀頼の教育と保護をたのんでいる。利家の生きているうちは、家康もおもうままにすることができなかったが、いまや、その歯どめがはずされたのであった。

兵をあげた石田三成

　とうぜん、こうした家康の行動に不信をいだいた大名たちも、多かった。しかし、家康が朝鮮に出兵せず、じっくりと関東の領国経営にあたって、力をたくわえていたのにたいし、他の大名は、戦争で力をすりへらし、領内でおこった不満をおさえるのに苦労していた。
　五大老の上杉景勝・宇喜多秀家・毛利輝元らは、みなこうした理由で、それぞれ国もとへかえっていた。前田利家の子利長は、りっぱな大名であったが、家康にたいして謀反をくわだてていると密告され、母を人質として江戸にさしださねばならなかった。大名どうしが人質をとったり、政略結婚をしてはいけない、というのが豊臣政権の掟であったのに、家康はつぎつぎとこれをやぶり、まるで自分が主人のようにふるまった。
　これをみて、ゆるせないとかんがえたのが、五奉行の一人石田三成である。三成は、秀吉にとりたてられた恩をたいせつにおもうとともに、家康が仲間どうしできめた掟を無視することに、がまんができなかった。ちょうど、家康と上杉景勝の対立がふかまり、ぬきさしならなくなったのを機会に、三成は、家康打倒の兵をあげる決心をした。

関ケ原の戦い　午前8時ごろはじまった戦いは，昼すぎに大勢が決した。写真は敗走する西軍を追う東軍。中央上にすてさられた島津家の陣地がみられる。

上杉景勝は領国の会津にかえって、城を修理し、道をつくり、武器をととのえていた。家康は、景勝が謀反をたくらんでいるのではないかとうたがい、伏見へでてくるようつたえた。景勝は、「それでは領内の政治ができない。」と、つよく拒否した。
　家康は、この機会をとらえ、景勝を討つために諸大名に出陣を命じ、一六〇〇年六月、大坂を出発した。彼は、自分のるすちゅうに三成が兵をあげるだろうとみとおして、わざとゆっくり東海道をすすみ、江戸についてもすぐにうごかないでいた。
　三成は七月、大坂城にはいり、徳川方の大名の妻子を人質にした。毛利輝元を大坂城におき、主として近畿から西の諸大名をあつめた。そして、家康が鳥居元忠にまもらせておいた伏見城をせめ、八月一日に落城させた。

東西両軍の決戦

　三成は家康らを、秀吉の掟をやぶり、遺言をまもらず、太閤の御恩をわすれて、秀頼をみすてた裏切り者とよんだ。
　家康と彼に味方した大名たちにとって、この批判はいたいところをついていた。彼らは三成こそ大老にそむく反逆者だと主張したが、多くの大名は秀吉によってとりたてられたので、豊臣氏とたたかうことには、ためらいもあった。
　家康はこれをみて、江戸から会津への途中、諸大名をあつめ、
「大坂へいきたい者はいけ。」
といった。しかし、福島正則が、
「もし、あなたが秀頼様をもりたててくれるなら、よろこんで三成を討ちます。」

とこたえ、黒田長政・山内一豊ら、豊臣氏の恩をうけた大名たちが、賛成した。こうして、家康の東軍はまわれ右をし、東海道を西にむかい、岐阜を占領し、関ケ原の手前に陣をはった。

三成は、このとき大垣城に本陣をおいていたが、東軍のうごきをみて城をで、関ケ原に陣をかまえた。九月一四日夜のことである。東軍の数は約一〇万、むかえ討つ西軍の総数は約八万、といわれている。

関ケ原は、もと不破関(→①巻P266)がおかれたところにちかく、近畿地方へはいる交通の要地にあたっていた。東日本と西日本の境界ともいえ、東西両軍の決戦場にふさわしい、山あいの土地であった。

九月一五日午前中、徳川家康はしきりにつめをかみながら、いらいらとしていた。彼のきげんがわるいときのくせであった。

裏切りでやぶれた西軍

朝からはじまった戦闘は、両軍けんめいの戦いで、どちらが勝つとも負けるとも、見通しがたたなかった。西軍の石田三成・宇喜多秀家らの軍が、よくがんばり、どちらかといえば優勢にみえた。

昼すぎ、たまりかねた家康は、かねて裏切りを約束しておきながら、いっこうにうごかない西軍の小早川秀秋の陣に、いっせいに鉄砲を打ちかけさせた。山上からもようをながめていた秀秋はおどろき、ついに山をかけおり、三成のもっとも信頼する西軍の大谷吉継部隊のよこから、せめかかった。いくら吉継が猛将でも、前からの敵と必死にたたかって

関ケ原(右ページ右)　写真の中央あたりが主戦場であった。むこうに雪をいただくのは，伊吹山。

山かご　関ケ原の戦いのとき，家康はこれにのって指揮したという。

小早川秀秋(1582～1602)
秀吉の義兄の子で，はじめ秀吉の，のち小早川隆景の養子。

いるさいちゅう、味方に横腹をつかれては、どうしようもない。奮戦ののち、吉継は討死にをした。

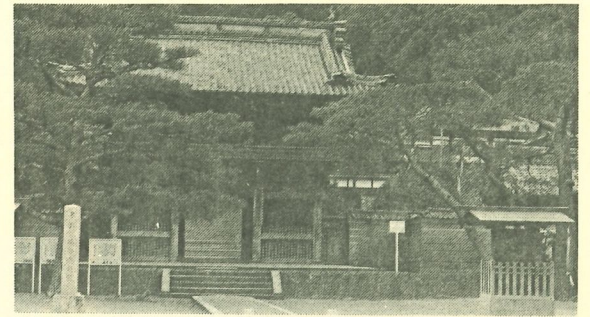
これをきっかけに、東軍は総攻撃をかけ、味方の寝返りに混乱する西軍の各陣地は、つぎつぎにやぶられた。午後四時ごろには総くずれとなり、東軍の勝利が決定した。

石田三成は、伊吹山中にのがれたがとらえられ、おなじくつかまった小西行長らとともに京都におくられ、首をはねられた。宇喜多秀家は、にげのびて、薩摩の島津氏にかくまわれていたが、のち徳川氏の手にわたされ、八丈島にながされた。大坂城にいた毛利輝元は、おとなしく城をあけわたしたので、命はゆるされたが、八か国一二〇万石の領地を、二か国三六万石にへらされた。そのほか、西軍の大名八七人がとりつぶされ、領地をへらされた者とあわせると、石高は六四〇万石におよんだ。

江戸に幕府をひらく

とりあげられた西軍大名の領地のあとへ、東軍の大名たちがおくりこまれた。関東地方で力をやしなってきた徳川氏の譜代の部将たちも、東海道から近畿地方に領地をあたえられ、徳川氏の支配は大きく前進した。

これに反して、豊臣秀頼は一大名として、摂津・河内・和泉(以上大阪府)の三国に六五万石を領有するだけになった。

家康は、全国の大名にたいする恩賞と処罰をおえると、一六〇三年、朝廷の申し出をうけて、征夷大将軍となった。そして、武士団の政治権力を独立させるために、京都をはなれ、彼の本拠である江戸に幕府をひらいた。

臨済寺　家康は6歳から19歳まで，今川氏の人質としてすごすが，そのときにこの寺の雪斎和尚に教えをうけた。

銭五〇〇貫のねうち　このころ銭五〇〇貫だと、だいたい米四〇〇石ぐらい、いまの米価になおすと、一八〇〇万円ぐらいになる。君がこの値段で売られたとしたら、どうおもうだろう。

人質から内大臣へ

信長と秀吉につかえ、そのもとでじっと機会のくるのをまち、ついに天下をとった家康は、「鳴くまでまとう」の句（→P95）にふさわしく、ねばりづよい人物であった。

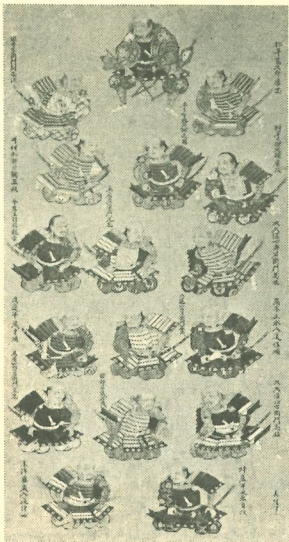
銭五〇〇貫で売られる

家康の先祖の松平氏は、三河国の山あいにある松平郷（愛知県東加茂郡）出身の土豪である。松平氏は、家康の祖父清康のころ、ほぼ三河一国をおさえる戦国大名にまで、成長しようとしていた。しかし、なにしろ東どなりは今川氏、西どなりは織田氏と、それぞれ有力大名にはさまれ、両方から圧迫をうけた。清康は、この争いのなかで暗殺され、子広忠は、かろうじて岡崎城をまもっていたものの、織田氏の攻撃をうけて、今川義元に助けをもとめなくてはならなかった。

義元は広忠に、そのかわり、あとつぎの竹千代を人質として駿府にさしだせ、と要求し、やむなく広忠はこれをうけいれた。竹千代がのちの家康である。当時六歳であった。

ところが、駿府におくられる途中、竹千代は織田方に味方する一族の者にだまされ、敵である織田信秀に売られてしまった。信秀は、この一族の男に銭五〇〇貫をわたした、とつたえられている。そして、広忠にたいし、竹千代をおとりにして味方につけようとしたが、広忠はおうじなかった。まもなく広忠も暗殺され、竹千代はみなしごとなった。

村正の刀　家康の祖父清康も父広忠も、どういうわけか、ともに伊勢（三重県）桑名の刀工村正がつくった刀で殺されている。そのため村正のつくった刀は、徳川家にわざわいをなす、不吉な刀とみなされ、江戸時代には、大名をはじめ武士は村正の刀をささなかった。

家康と16人の武将　家康にふるくからつかえている武将たち。酒井・榊原・本多・井伊など，のちに譜代大名となって，江戸幕府をささえた人びとの名もみえる。

織田氏のもとで三年をすごした竹千代は、やがて、今川氏と織田氏の戦いで人質交換がおこなわれ、駿府の今川義元のもとにうつされる。こうして、義元が桶狭間の戦いでやぶれ、解放されるまで、竹千代は前後一三年間の人質生活をおくったのである。

織田信長との同盟

岡崎城にかえったころ、竹千代は元康と名のっていたが、まもなく家康と名をあらためた。彼をまっていたのが、松平氏に代だい忠節をちかってきた武士団である。彼らは、清康・広忠と二代つづいて主人をうしない、つよい隣国に侵略され、貧乏しながら、ひそかに家康の帰りをまちわびていた。それだけに、ながい人質時代にしっかりと学問をし、りっぱに成人してかえってきた家康を見てよろこび、つよい団結力で、あたらしい主人をもりたてた。

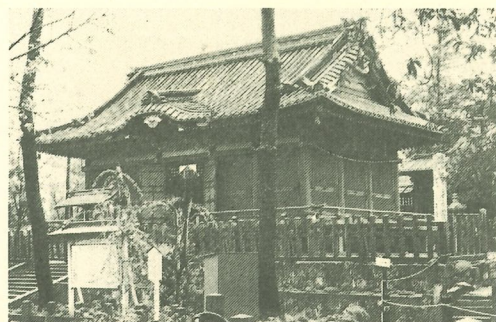
家康ははじめ、今川義元の子氏真に、父のかたきをとるようにすすめたが、氏真がにえきらない態度であったので、見切りをつけ、織田信長と同盟をむすんだ。信長は、

「自分はこれから、京都へせめのぼるつもりだ。松平家は東へすすみなさい。おたがいに協力して、天下を統一しようではないか。」

と語った。この同盟は、信長が死ぬまでまもられた。家康が三河でにらみをきかせていたからこそ、信長は、背後の心配をすることなく、安心して、京都での政治と、統一のための戦いに、専念することができたのである。

三河国を統一する

家康は、ちゃくちゃくと領内の勢力をかためたが、一度だけあぶないときがあった。足もとで一向一揆が蜂起し

葵の紋　三つ葉の葵は徳川家の紋で，一族でも，自由な使用はゆるされなかった。

世良田東照宮　徳川氏発祥の地とされた群馬県新田郡の東照宮。日光からうつされた拝殿。

たのである（→P29）。三河国も一向宗の根づよい地盤で、家康の家来には門徒が大ぜいおり、武士団が分裂するほどであった。岡崎城をおそった一揆とたたかったときなど、槍をふるって突進した家康は、鉄砲で打たれ、さいわいよろいがかたくてたすかったものの、城にかえってみると、具足のあいだから、弾丸が二個もころがりだした。

はげしい戦いののち、和睦をむすぶことになったが、家康は、信長のようにみな殺しはせず、一揆にくわわった家来や僧侶をゆるした。ただ、中心となった寺や道場にたいしては、一向宗をやめて浄土宗になるよう命じ、おうじないとみると、すべてとりこわしてしまった。「もともと野原だった所を、もとどおりにするだけだ。」と、彼はいっている。

こうして、信長が京都にはいるすこしまえごろ、家康は三河国の統一をおえていた。

松平から徳川へ

三河国の主となった家康は、一五六六年、朝廷にたのんで、従五位下・三河守の官位をさずけてもらった。武士は、もともと武勇にすぐれていなければならないが、それだけでは、百姓のなかの力ある者とかわらない。官位をうけることによって、武士であることをみとめてもらう傾向があった。家康も、この機会にそれをのぞんだのである。

そればかりでなく、あわせて「松平の姓を徳川にあらためてください。」とたのんだ。松平は、もともと地名である。それではおもしろくないから、徳川という、由緒のありそうな姓に改称しようとしたのである。

朝廷では、徳川などという姓はきいたこともない、といって、一度はことわろうとした

家康愛用のシダの具足　その形を夢に見てつくらせたといわれ，長久手・関ケ原・大坂の陣と，つねに勝利を得た幸運の具足。

徳川家の守り刀　家康が，西国に切先をむけておくように遺言した名刀。

が、一人の公家が、ある家につたわった徳川家の系図と称するものを、鼻紙に書いてさしだしたので、とうとうみとめることにした。

こうして、松平家康は、清和源氏新田氏の子孫で、折り目ただしい徳川の姓をつぐ大名ということになった。東国では、源氏は鎌倉幕府いらい武士団の尊敬の的であったから、信長との約束にしたがって、東をめざす家康にとっては、たいせつな姓であった。

関東転封

家康は、やがて「海道一番の弓取り」といわれるほどの実力をつけた。本能寺の変のときは堺にいたが、すぐ伊賀（三重県）の山中をとおって脱出し、三河にかえったかとおもうと、ただちに兵をだし、甲斐・信濃の両国をおさえた。そのまえに、信長といっしょに駿河をせめて、これを占領していたので、三河・遠江とあわせて五か国の大大名となり、東海・中部地方にぬきがたい勢力をきずきあげたのである。

それだけに、一五九〇年、豊臣秀吉から、関東転封（→P128）を命じられたとき、家康の家来たちは、自分たちの郷里であり、長年にわたっておさめてきた領国を手ばなすことをかなしみ、

「徳川氏の運命もおしまいだ。」

となげきあった。しかし家康は、

「あわてることはない。関東へいけば領地がふえ、そのぶんだけ兵卒を多くかかえることができる。五万人ぐらいひきいてせめのぼれば、かなう者はいないだろう。」

と、元気づけた。

家康にしても、先祖代だいの地からきりはなされることは、つらかったにちがいない。だが、当時の秀吉の力には、とても対抗できなかった。だまってしたがい、あたえられた関東六か国（武蔵・相模・伊豆・上野・上総・下総）の要地に、譜代の家臣を配置し、軍備をととのえた。関東の領地は二四〇万石ほどであったが、その中にじつに一〇〇万石もの直轄領をおき、いざというばあいにそなえた。

江戸の内大臣　秀吉も、家康の力を無視することができず、なにかあると、「江戸の内大臣をよべ。」と、たよりにした。一五九六年、家康は正二位内大臣に昇進し、豊臣政権で最高の地位にあった。しかし、秀吉の命令があれば、とんでいって奉仕した。そうしながら、諸大名の争いを調停したり、秀吉にしかられた大名をとりなしたり、かげで援助したりして、しだいに「あの人でなくては」という信望をひろげていったのである。

関ケ原の戦いで、多くの大名が東軍にぞくしたのは、家康の実力とともに、ふだん彼からいろいろと恩をうけ、心服していた者が多かったことをしめしている。

駿府の大御所

江戸城をきずく　将軍となった家康は、全国の大名に命じて、江戸に大規模な城をきずくことにした。江戸城は、徳川氏が関東に転封となったとき、一〇〇年以上もまえに太田道灌がきずいたままさびれきっており、石垣は一つもなく、ただ土塁でかこわれているばかりであった。家康は、それにちょっと手をいれただけで、家来の、「みっともないですから、玄関だけでも修理なさっては。」ということばもきかず、もっぱら、関東ぜんたいの領国をつよめることに力をさいた。

しかし、こんどは政治の中心にするのであるから、安土城・伏見城などに負けない、見た目にもりっぱな城をつくらねばならない。それには、石垣と天守が必要である。

まず、豊臣系の多い西日本の大名たちに、石をはこぶ石船をさしださせ、つぎに、その船で伊豆（静岡県）と相模（神奈川県）から大石をはこばせた。黒田長政が一〇四そう、島津忠恒が三〇〇そうをさしだし、最高時三〇〇〇そうの石船が、江戸とのあいだを往来した。

水はけのために、石垣の裏に一五センチくらいの栗石を大量につまねばならないが、これは、東国の大名たちが、武蔵の深谷（埼玉県深谷市）などから、川舟を利用してはこんだ。

天守閣をはじめ城の壁は、かがやくような白壁でぬりかためる。そのための石灰は、いまの青梅市（東京都）でつくらせ、宿から宿へとリレー式に、馬ではこばせた。

二年で、本丸・二の丸・三の丸ができ、三年目に天守閣が完成した。石垣の高さが一九メートル余、広さは約四〇メートル四方。その上に五層の天守がそびえたった。かわらは白色の鉛瓦をもちいたので、遠方からながめると、富

石垣のつくりかた　重い石垣がしずまないように，レールの枕木状にならべた横木の上に大きな角材をのせ，その上に石垣をつんで栗石をつめた。角材の穴は細い杭を打ったあと。最近発掘された大阪府高槻城の石垣。

江戸城と天守のその後　家康のつくらせた天守は一六〇七年にできた。大坂の陣のあと、秀忠が工事をはじめ、神田・お茶の水の堀割や西の丸ができた。家光の代に、さらに大工事をおこない、一六三七年、天守も面目を一新したが、火事で焼け、四〇年に再建された。その後も、六代家宣まで城は拡張されつづけたが、天守は一六五七年の大火で焼け、以後復興されなかった。

1602年（慶長7年）ごろの江戸

武士の住む町　町人の住む町　（ ）は直後にできるもの

士山とならんで雪をいただくかと、見まがうほどであったという。

日本橋　川岸の市場は，江戸の台所として重要であった。

江戸城天守閣　たかい石垣の上にそびえる五層の天守。

日本橋と五街道

家康は、江戸の町づくりも、大名に命じた。石高一〇〇〇石について人夫一人ずつをださせたので、「千石夫」という。

そのころの江戸は、海がいまよりずっと西まではいりこみ、葦のしげる湿地帯がおおっていた。海上には、鯨がゆうゆうとおよいでいるのが見えたという。

家康は、まず運河をほって、海から船が直接城へつけるようにし、ほりあげた土で湿地帯をうめたて、町をつくった。つぎに、「千石夫」をつかって、いまの駿河台からお茶の水にかけての丘陵（神田山）を切りくずし、その土でさらに町をつくった。これで、京橋・銀座など、いまの東京のもっともにぎやかな部分ができあがった。

このあたらしい町の中心に橋をかけ、日本橋と名づけた。それまで西の台地の上をとおっていた東海道をつけかえ、この町の中央にとおした。東海道には宿駅をさだめ、各宿駅には、幕府の使いや通信連絡のために、人と馬をつねに用意しておくよう命じた。のちに、これが東海道五十三次になる。この制度は、ひきつづき中山道・奥州道中など、五街道とよばれる主要道路や、その他の道路におよぼされた（↓P225地図）。

江戸を中心とした交通網はととのい、日本橋は、文字どおり、日本の中心となった。

一六一三年に日本へきたイギリス人ジョン＝セーリスは、東海道の道路が、おどろくほど平坦で、山にぶつかれば切りひらいてあり、砂か砂利で舗装され、一里ごとに一里塚があって、どれだけすすんだかわかるようにしてあると、感心して記録している。

山師　鉱山の経営者が山師である。大町人が多く、数か所の採掘を領主からうけおう者もいた。それをさらにこまかくわけ、掘場を金子に下請けさせる。金子は、技師や坑夫・運搬夫をひきつれて、現場で採鉱にあたった。とれた鉱石は、山師がまとめ、選鉱・製錬業者にわたして、製錬した。

大久保長安(1545〜1613)　金銀の大増産に成功したが，各地の鉱山をまわるときは，召使いの女性を7,80名もつれたという。

佐渡金山と石見銀山

家康は、幕府の財政をささえるため、全国の金山・銀山を直轄領にした。ここで大活躍をしたのが、大久保長安である。

長安は、もと武田氏につかえ、猿楽師（↓③巻P231）から武士にとりたてられた。武田氏がほろびたあと、家康にもちいられ、関ケ原の戦いののち、上杉氏からとりあげた佐渡金山と、毛利氏からとりあげた石見銀山（島根県）の支配をまかされた。

長安が管理すると、とたんに、佐渡金山は毎年一万貫（約三七・五トン）もの金がでるようになり、石見でも一年に三六〇〇貫の銀を、幕府におさめることができるようになった。

家康がよろこんだのはいうまでもない。伊豆・但馬・甲斐の金銀山を、すべて長安に管理させることにした。

長安がこれだけ活躍した秘密は、一つには、鉱山の経営を請負制にし、一定の上納額を確保すれば、あとは山師たちが自由に分け前を配分できるようにしたので、みなが熱心にはたらいたからである、といわれている。いわば、人間の欲望を組織したといえようか。

もう一つは、あたらしい技術の採用である。銀の精錬に水銀をもちいるアマルガム法は「水銀流し」とよばれ、メキシコから輸入されたらしい。これまでの方法にくらべ、経済的にも有利であった。また、佐渡では、それまで竪穴掘りにしていたのを、横穴式を採用したため、排水がかんたんになり、すてられた鉱脈も生きかえったといわれる。

慶長金銀の発行

イエズス会の宣教師は、家康があまりに金銀をためこんだので、伏見の屋敷の床が、その重みでぬけてしまった、と報告している。家康が

死んだのち、彼のいた駿府城の金蔵には、金四七〇箱と銀四九五三箱がのこされていた。
こうした財力を背景に、家康は、金座・銀座をもうけ、金・銀の貨幣を発行した。いわゆる慶長金銀である。秀吉による天正大判（→P135）の発行をうけついで、わが国の貨幣制度統一へのうごきは、大きく前進した。
大久保長安は、そのかげの功労者であった。しかし、家康は、長安が死ぬとすぐ、彼に不正があったとして、長安の子ども全員に切腹を命じ、一族や家来を逮捕し、財産をすべて没収した。
この事件はなぞとされていて、よくわからない点が多いが、長安の自由なやりかたは、金銀産出には役だったものの、徳川氏中心の支配をうちかためようとする家康には、不安をあたえたのではないだろうか。権力者のつめたい一面を、よくしめす事件である。

将軍と大御所

家康は、政治をすべて将軍としておこなったのではない。彼は、将軍になって二年たつと、すぐこの職をやめ、あとつぎの秀忠にゆずった。
これは、徳川氏が政権を代だいうけつぐのだということを、人びとにおもい知らせるためであった。織田・豊臣と、天下は一代かぎりのまわりもち、徳川家康のつぎはおれが、とねらっている大名たちに、もうまわりもちはおしまい、と宣言する必要があった。これが一つの理由である。
そして、自分は駿府にうつり、大御所とよばれた。大御所とは、将軍の父という意味で、ふつうなら隠居ということになるが、家康のばあいはそうではない。

江戸時代初期の通貨　右から慶長大判・小判・丁銀・豆板銀・慶長通宝。このころの貨幣は良質なものだったが，幕府の財政難で，たびたび改鋳された。

←**名古屋城の巨石**（右）　城づくりの名人といわれた加藤清正がはこんだもの。大名の力をよわめるため，多くの城の工事がおこなわれた。
彦根城（左）　譜代大名では最大の井伊氏の居城。西日本に，にらみをきかせた。

一六一四年に日本へきたスペインの商人アビラ＝ヒロンは、家康のことを国王とよび、「王子（秀忠）は、すでに三五歳をこえるおとなであるが、まだ国王が自分で国をおさめている。」としるしている。もう九年もまえに、秀忠が将軍になっているのに、である。だれがみても、家康が国王であり、日本の主人公なのであった。
このことを目に見える形でしめすため、家康は全国の大名に命じて、駿府城をつくらせ、名古屋城をつくらせ、彦根城をつくらせた。いずれも、将軍の居城ではなく、徳川氏が全国を支配するためにおいた城である。大名たちは、うちつづく城づくりに、金も力もつかいはたし、借金に追われ、つぎの天下をねらうどころではなくなってしまった。

後水尾天皇をたてる

信長・秀吉とおなじく家康も、自分が日本国の第一人者であることをしめすためには、朝廷から任命される官職についていては、ぐあいがわるい。無官でいながら、朝廷や大名をうごかす地位にたたなければならない。
これが大御所政治の第二の理由である。
一六一一年、家康は、豊臣秀吉の即位させた後陽成天皇をかえ、第三皇子の政仁親王をたて、後水尾天皇とした。例によって、即位の費用などは、いっさい家康が負担した。
その翌日、家康は、二条城に豊臣秀頼をよびよせ、謁見をあたえた。秀頼は一二年ぶりに京都へでてきたのである。秀吉が生きていたころなら、秀頼が家康に謁見をあたえたのだが、いまや立場が逆転した。淀殿（→P140）が反対したといわれ、も

豊臣秀頼(1593～1615)　秀吉の子。大坂城とともにほろぶ。

二条城　京都の警備，将軍の上京のときの宿舎として建築。

との豊臣系大名たちも、秀頼の身に万一のことがあってはと心配したが、加藤清正と浅野幸長がぴったりとつきそって、秀頼をまもったといわれる。

会見はぶじにすんだが、これによって、豊臣氏が徳川氏の下につくことは、はっきりした。後水尾天皇をたてた効果は、こんなところにもあらわれていた。

東照大権現

目の上のこぶの豊臣氏

徳川氏の豊臣氏にたいする優位は決定的となり、大名のなかにも、家康にたてつこうとする者は、まったくいなくなった。しかし、家康には、どうしても心配でならないことがあった。

家康は、秀忠の娘である千姫を、年わかい秀頼の妻としてとつがせていた。これは、秀吉との約束をまもったからである。たしかに、いまは家康に抵抗する者はいない。だが、自分が死んだあとどうなるか。関ケ原の戦いのとき、福島正則がいったように、秀頼をたいせつにおもう大名は多い。だれかが、秀頼をいただいて、せっかく徳川氏の手ににぎった政権をうばわないともかぎらない。

京都や大坂には、豊臣びいきの町人たちも多かった。このころの落首（詩歌になっている落書→③巻P138）に、

「御所柿は　ひとり熟して　落ちにけり　木の下に居て　ひろう秀頼」

所庶幾者　國家安康　四海施化
君臣豊樂　子孫殷昌　佛門柱礎
英檀之徳　山高水長
旹慶長十九甲寅歳孟夏十六日

方広寺の鐘とその銘　この鐘は巨大なもので高さ約5.5ｍ，口の直径約2.8ｍ，厚さ27㎝，重さは100トンちかいといわれる。

というのがあった。御所柿は家康である。七〇歳をこした家康が、やがて天命をまっとうして死ぬと、あとはしぜんに秀頼の天下になる、というのである。家康は、どうしても自分の生きているあいだに、豊臣氏をほろぼさねばならない、とかんがえるようになった。

鐘につけた言いがかり

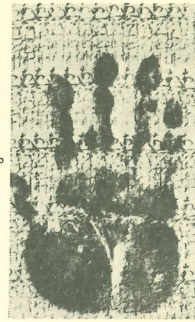
とはいえ、大坂城は、秀吉が一生かかってつくりあげた堅固な城である。長年にわたってたくわえられた金銀もある。

家康はまず、秀頼に、あちこちの寺や神社を修理させることにした。秀頼は、よろこんで、戦乱のあいだにあれはてた寺社の修復工事を、つぎつぎとおこなった。豊臣方のゆたかな資金が、工事のためについやされた。

京都の方広寺大仏殿（京都市東山区、→P133写真）は、秀吉がたてたもので、豊臣氏にとって、とくに重要な寺であったが、一五九六年の大地震で、たおれてしまった。秀頼は、大がかりな工事によって念入りにしあげ、ようやく一六一四年八月、秀吉の一七回忌にあわせて、大仏の開眼供養をおこなうところまで、こぎつけた。

ところが、その直前になって、家康は、寺の鐘の銘によくないことが書いてあると、言いがかりをつけた。「国家安康　君臣豊楽　子孫殷昌」（国がよくおさまり、主人も家来もゆたかにたのしみ、子孫が繁栄するように）とあるのを、家康の名前を引きさいて呪いをかけ、豊臣を君とし、子孫の繁栄をたのしむ、との意味だというのである。むちゃくちゃとしか言いようがない。

家康の出陣　大坂夏の陣にのぞむ家康。よろい・かぶとをつけず，陣羽織をはおった軽装でえがかれている。

家康の手形　72歳のときのもの。小ぶとりの感じがよくでている。書かれている文字は「南無阿弥陀仏」。

家康にこんなでたらめをおしえたのは、おべっか使いの学者や僧であった（→P253）。豊臣方では、おもいもかけない言いがかりにおどろいて、いろいろと弁解をこころみたが、家康のほうは、はじめからけんかを売るつもりであるから、なにをいってもみとめない。秀頼が大坂城をでて他の城へうつるか、淀殿を人質として江戸へおくるか、いずれかをえらべ、と高飛車な要求をつきつけた。

大坂冬の陣

豊臣方にとって運のわるいことに、このころ加藤清正と浅野幸長が、あいついでなくなった。片桐且元が、家康との交渉にでかけたが、右の要求をいれるほかありません、と進言したため、淀殿や他の人びとから裏切り者とよばれ、ついに大坂城をでて、自分の城（摂津茨木城）にこもってしまった。

こうして豊臣氏は、家康とたたかうことをきめた。家康は、この知らせをきいたとき、ひじょうによろこび、気分のわるかったのがなおってしまったほどであった。大坂方では、秀吉の恩をうけた大名たちに味方になるようよびかけた。しかし、おうじた者は一人もいなかった。あつまったのは、関ケ原の戦いでとりつぶされた、もと大名や、浪人たちばかりで、なかには、手当ての金をうけとるとすぐにげてしまう者もいた。

それでも、長宗我部盛親・真田幸村・後藤又兵衛ら、約一〇万の人びとがあつまり、秀頼の家来大野治長の指揮下、家康のひきいる二倍以上の大軍を相手に、たたかった。

戦いは、一六一四年一〇月から一二月まで、約一か月半つづいたが（大坂冬の陣）、さすが天下の名城をほこるだけに、徳川方もせめあぐねた。家康は、石見銀山などから金掘り

大坂城の落城　1615年5月，大坂城はかん落する。勝ちほこる徳川方に追われてにげまどう，豊臣方の武士や女，子ども。(→口絵P 175)

人夫をつれてきて、トンネルをほらせたり、大砲を打ちこんだりしたが、うまくゆかず、ついに講和をむすぶことになった。

講和の条件には、わながしくまれていた。秀頼はそのままいてもよいが、大坂城の外堀はうめること、とつけくわえられていた。

豊臣氏ほろぶ

講和が成立すると、大坂方がゆだんしているすきに、家康は、攻城に参加した大名たちに命じ、外堀ばかりか内堀もうめさせ、あっというまに二の丸の櫓や石垣まで、とりこわさせてしまった。大坂城は堀をうしない、本丸だけが孤立する裸城になった。

ここぞとばかり、家康は、秀頼が大和（奈良県）か伊勢（三重県）にうつるか、でなければ、城中にあつまっている浪人をすべて追放せよ、と要求をだした。豊臣氏としては、とてもうけいれられるものではない。一六一五年四月、豊臣方がこれをことわると、家康は、ただちに諸大名に出兵を命じた（大坂夏の陣）。

こんどは、大坂城がはだかであるから、たてこもってたたかうことはできない。大坂方は城をでて、河内・和泉の各地でたたかい、最後は天王寺口の決戦で、真田幸村隊が、一時は家康の本陣をつきくずすほどの働きをみせたが、多勢にはかなわず、二万人以上が戦死し、大坂城天守閣も炎につつまれた。

大野治長は、家康の孫で秀頼の夫人である千姫を脱出させ、秀頼と淀殿の助命をねがったが、みとめられず、秀頼母子は五月八日自殺した。秀頼は二三歳、淀殿は四九歳であった。八歳になる秀頼の子国松も、城をのがれたところをとらえられ、京都の

「狸親爺」家康は、秀吉からたのまれたにもかかわらず、晩年には秀頼をほろぼし、そのため、腹黒く陰険な狸親爺とみられて、評判はかならずしもよくない。
しかし、わかいころは、実直で約束はまもる「律義者」との評判がたかかった。織田・徳川の同盟のように、きちんとまもられた同盟は、戦国時代ではきわめてめずらしい。

六条河原で首をはねられた。豊臣氏はほろびたのである。

神になった家康

一六一五年七月、家康は、全国の大名を伏見城にあつめ、「武家諸法度」を読みきかせた。内容は、謀反人をかくしてはならない、居城の新築は禁止、修理はとどけでることなど、徳川氏の支配を固定させるねらいがあった。

ついで、「禁中並公家諸法度」をさだめて、天皇は学問に専念することなどをきめ、朝廷を政治に介入させないようにはかった。さらに、おもな寺にも法度をくだし、寺が政治に手をださず、学問と修行をまじめにやるよう、統制をつよめた。

こうして家康は、すべての勢力にたいし、支配と統制をおよぼし、それを法度によってしっかりとかためた。日本の歴史で、武士団の国家が完成したのは、このときである。その力のもとで、以後二六〇年にわたる平和がたもたれた。

家康は翌年四月、七五歳で、駿府で死んだ。豊臣氏がほろんで、はりつめた気がゆるんだのであろう。それでも、まだ死後のことが気になっていたとみえ、

「自分が死んだら、遺体は久能山におさめ、一周忌がすんだら、日光山に小さな堂をたててまつれ。そうすれば、神となって関八州をまもってやろう。」

と、いいのこした。遺言にしたがって、朝廷から「東照大権現」の神号がおくられ、家康は神となった。

こののち、幕府の守り神として、「東照神君」「権現様」などとよばれてあがめられ、また、各地の大名なども、自分の領地にまつるようになった。

この節を読むにあたって

これまでのポルトガルとスペインにくわえ、ヨーロッパのあたらしい勢力であるオランダやイギリスが日本へやってくる。

おとなりでは、明がおとろえて、しだいに力をうしなっていく。

そうしたなかで、家康は平和外交をすすめ、海外との通交を積極的におこなうが、やがて国内・国外のさまざまな情勢から、三代家光のころ、鎖国とよばれるしくみが完成する。

鎖国によって、日本は世界のうごきからとりのこされた、といわれる。

はたしてそうか。また、どうしてそうなったのか。かんがえてみよう。

朱印船から鎖国へ

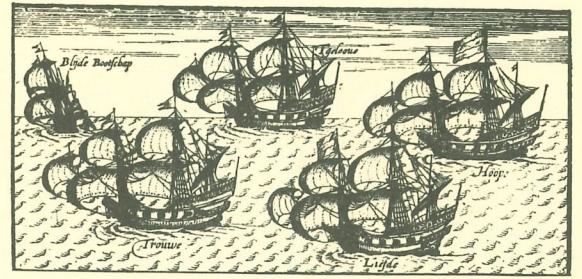
家康のあたらしい外交

ながれついたオランダ船

関ケ原の戦いとおなじ年、一六〇〇年の三月、豊後国佐志生（大分県臼杵市）の海べに、一そうの外国船がながれついた。

乗組員は、やっと二四人が生きのこっていたが、力なくよこたわる者ばかりで、あるける者は五、六人というありさまであった。二年まえ、五そうの船隊をくみ、一一〇人の船員をのせてロッテルダムを出発した、オランダ船リーフデ号であった。

彼らは、毛織物を売ろうと、オランダからアフリカ西岸をへて、南アメリカの南端マゼラン海峡をまわり、さらに太平洋をこえて、日本へながれついたのであった。そのあいだに、船隊は暴風雨でちりぢりになり、あるいはスペイン人やポルトガル人にとらえられ、さらに飢えと疫病におそわれ、アメリカでは現地人に虐殺される、といった苦労をかさねながら、ついにただ一そうとなって、豊後にたどりついた。

家康は、リーフデ号を堺へまわさせ、とりしらべることにした。ポルトガル人やスペイン人とはことなる、べつのヨーロッパ人とのつきあいが、これをきっかけにはじまった。

リーフデ号　1598年，オランダのロッテルダムを出帆した，5隻の東洋探検隊。2年後に右下のリーフデ号だけが，日本に漂着した。

家康のほしかったもの　家康は、秀吉の死んだ翌年、スペインの宣教師に会い、造船技術者・航海士・鉱山技師をおくってほしいとたのんだ。ルソン総督ドン＝ロドリゴとのあいだにも、鉱夫五〇人のほか、水銀などを要求する交渉をすすめたが、実現しなかった。

リーフデ号には、オランダ人にまじって、イギリス人の航海長がのりくんでいた。名をウイリアム＝アダムズといった。

ウイリアム＝アダムズ

アダムズは、大坂城で、家康からたずねられるまま、自分たちがどうして日本へきたか、ヨーロッパや世界の情勢はどうなっているか、などを世界地図をひろげ、説明した。

家康は、このなかで、オランダやイギリスが新教国であって、旧教国のポルトガル、スペインからはなれ、対立していること、旧教国のように、キリスト教をひろめることはかんがえておらず、貿易だけをもとめていることを知って、よろこんだ。そして、アダムズを信頼し、外交顧問としてもちいるようになった。

アダムズも、家康にたいして数学をおしえたり、西洋型の帆船を建造したりして、ヨーロッパと世界のあたらしい知識をつたえた。家康から、三浦半島に領地をあたえられたので、彼は、三浦按針とよばれるようになった。按針とは、航海長のことである。

まもなく、一六〇九年、平戸にオランダ船がきて、家康の許可をえてオランダの商館をひらいた。四年後、アダムズの力ぞえによって、イギリス国王の使いであるジョン＝セーリスが平戸に来航し、イギリスの商館をもうけた。アダムズは、商館の船長として、その後も何度かシャムや安南(ベトナム)にわたり、のち平戸で死んだ。

太平洋をこえて

おなじ一六〇〇年、カトリックの本山であるローマ教皇は、すべての修道会が、日本でキリスト教の教えをひろめてもよい、と宣言した。

これまで、日本へきたのは、ポルトガルのイエズス会だけであった。ポルトガルとスペ

家康愛用の品　右上の西洋ばさみ，右下のコンパス，左はしのスペイン製の時計など，外国品も多い。

インは、キリスト教を世界じゅうにひろめるため、地球上を二つにわける条約をむすんでいた。ポルトガルは、アフリカから東へすすんでインド洋にはいり、マラッカをへて、日本へきた。これにたいし、スペインは、西にむかってアメリカ大陸に進出し、いまのメキシコに植民地をつくり、周囲に勢力をのばしながら、やがて太平洋をわたって、フィリピンのマニラに基地を建設し、日本にすがたをあらわした。フランシスコ会・ドミニコ会・アウグスチノ会などの修道会が、それである。

さきに日本へきたイエズス会は、スペイン系の宣教師をいれないようにしていたが、教皇の宣言で自由となり、つぎつぎとこれらの会がやってくるようになった。しかも、海流の関係で、フィリピンからメキシコへいく船が、しばしば関東地方にながれついた。

そこで家康は、太平洋をこえて、フィリピンやメキシコと貿易をおこなおうと、たびたび手紙をだし、浦賀(神奈川県)をそのための港にしようとした。しかし、アダムズらが、スペイン人の目的は日本を侵略し、植民地にすることだ、といったので、もともとキリスト教のきらいな家康は、この計画に乗り気でなくなり、貿易は実現しなかった。

支倉常長、ローマへいく

このころ、仙台の大名伊達政宗が、フランシスコ会の宣教師ルイス＝ソテロにすすめられ、この太平洋まわりのコースをとおって、家臣の支倉常長をローマにおくった。政宗のねらいも、貿易にあった。

一八〇人の日本人と四〇人のスペイン人からなる一行は、日本人のつくったヨーロッパ風の帆船にのって、仙台にちかい月浦港を一六一三年に出帆し、メキシコにわたり、さら

伊達政宗(1567～1636)　独眼竜とよばれ，戦国末の時代を生きぬいた武将。文化面の関心も深かった。
支倉常長(1571～1622)　主君の伊達政宗の命をうけて，ローマにいった。図ははりつけにされたキリスト像を，おがんでいるところ。

に大西洋をこえてスペインに上陸した。首都マドリードで、国王フェリペ三世に政宗の手紙をわたし、地中海をわたってイタリアにはいり、ローマ教皇パウロ五世に会った。ローマでは、常長を貴族にし、家来にも市民権をあたえるなど、大歓迎であった。

しかし、一行がマドリードにかえると、家康がキリスト教を禁止したという知らせがつたわっていた。また、スペインがわには、メキシコと日本のあいだに貿易をひらくと、マニラの商人が打撃をうけるという事情もあり、政宗の計画は、これまた実現をみなかった。常長が、メキシコからフィリピンをへて、むなしく日本へもどってきたのは、一六二〇年のことであった。

朝鮮との仲直り

家康は、秀吉とちがって、外国とは平和なつきあいをする方針であった。それには、なによりも、朝鮮にたいする侵略戦争のあとしまつをしなければならない。対馬の大名宗氏は、島がまずしいので、朝鮮との交易がうちきられると、やっていけなくなる。宗氏の願いと家康の希望が一致し、宗氏は、家康の方針にそって、朝鮮との講和交渉をすすめた。朝鮮も、秀吉にかわった家康にはうらみをもたなかったので、一六〇七年、仲直りが実現した。

その後、対馬と朝鮮とのあいだにも条約がむすばれ、日本と朝鮮の使者の往来や貿易についても、とりきめた。朝鮮がわは、釜山に倭館をひらいて、うけいれの役所とした。しかし、そこからさきの国内には、日本人がはいれないようにしていた。

やがて、日本軍が朝鮮からつれかえった捕虜の送りかえしも、すこしおこなわれ、朝鮮

←
朝鮮使　江戸時代のはじめ，家康をまつった日光の東照宮に参けいする朝鮮通信使一行。

琉球使　朝鮮使とおなじく，将軍の代がわりのさいに，使いを江戸におくった。その異国風俗は注目をあびた。

にとってうらみかさなる豊臣氏がほろびたことなどから、両国の交渉はうまくすすみ、三代将軍家光の時代以降、将軍の代がわりごとに、通信使がくるようになった。

琉球の征服

家康は、朝鮮と仲直りしたうえで、明との関係をもとどおりにしたい、とかんがえたが、うまくいかなかった。そこで琉球（沖縄県）をとおして明と交渉しようとしたが、これも、琉球が思いどおりにはうごかなかった。

そこで、以前から琉球とふかい関係をもっていた島津氏は、一六〇九年、家康のゆるしをえて琉球に出兵し、これをしたがわせた。家康は、琉球を島津氏にあたえ、島津氏は、貿易の利益をえるために、表むきは琉球と明との関係をもとどおりにしておき、じっさいは、役人をおくって島津氏の支配下におくという、二面的な方針をとった。

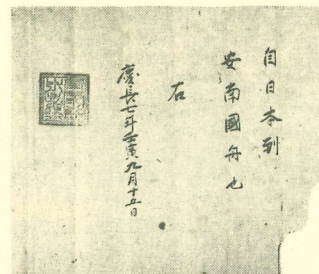
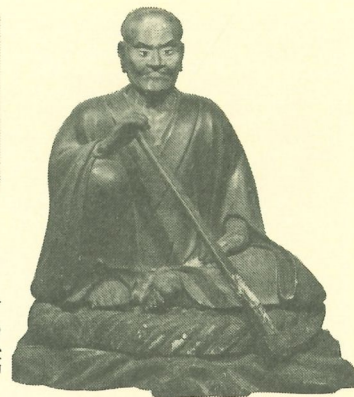
明との国交は、けっきょく回復しなかったけれども、家康は、貿易にくる船はたいせつにあつかったので、しだいに明船の数もふえ、長崎をはじめ九州の各地に住みつき、唐人町（中国人の町）をつくる者もあらわれた。

銀と生糸と鹿皮

東南アジアへむかう朱印船

家康は、関ケ原の戦いのあと、安南（ベトナム）・呂宋（フィリピン）をはじめとする東南アジアの諸国に手紙をおくり、「こんど自分が日本を支配することになった。これからは平和になるから、安心して商売

←**朱印船**　ツーランの港（ベトナム）にはいった，京都の豪商，茶屋四郎次郎の朱印船。乗組員は300人余。

朱印状　100万石の大名，前田家につたわったもの。書類の左かたには，家康の朱印がおされている。→

角倉了以(1554～1614)　土倉の家にうまれた朱印船貿易家。高瀬川ほかの水運もひらいた。→

ができる。ついては、日本からそちらへ渡航する者には、この手紙におした印を証拠としてもたせる。印をおした文書をもたない者には、貿易をゆるさないでいただきたい。」とつたえた。この印をおした文書が朱印状であり、朱印状をもつ船が朱印船である。

秀吉の侵略外交におびえていた東南アジア諸国は、この手紙を見てよろこんだ。日本人は、いくさのすきな、乱暴な国民とみられていた。朱印船なら、海賊をはたらくこともなく、安心して交易をおこなうことができるであろう。

たしかに、国と国との貿易には、朱印船はすぐれた制度であった。しかし、日本人にとっては、朱印状がないと海をわたれないのであるから、海外貿易は、すべて家康の統制下におかれてしまったことになる。

朱印船貿易をおこなったのは、京都の茶屋四郎次郎・角倉了以、大坂平野の末吉孫左衛門、長崎の末次平蔵らの大商人、九州の島津家久・加藤清正・有馬晴信らの大名、それにアダムズのような日本に住んだ外国人もふくまれていた。

こうして、朱印船の時代ははじまった。その後、約三〇年間のあいだに、すくなくとも三五〇そう以上の船が、南方へ渡航している。

季節風を利用して

朱印船は、平均二〇〇～三〇〇トンほどで、大きいものは七〇〇～八〇〇トン、小型は一〇〇トンぐらいのものもあった。構造にヨーロッパ式をとりいれた帆船である。水夫をふくめ、三〇〇人ぐらいが乗船した（→P218）。

一一月から三月のあいだに、冬の北風を利用して日本を出帆する。東シナ海を南下し、

だいたい呂宋なら二〇日、安南・交趾・カンボジアなどインドシナ方面なら、四〇～六〇日でつく。現地で取り引きをすませると、五月から七月にかけて吹く南の季節風を利用して、日本へかえってくる。

その間、船の位置は、星や海の深さでたしかめた。航海術は、ヨーロッパのほうがすすんでいたので、海図や羅針盤の技術をまなんだほか、ポルトガル人・オランダ人・中国人らの航海士をやとうことも多かった。

各地にできた日本町

季節風を利用した航海のため、もし取り引きがおくれて帰国の時機をのがすと、つぎの年までまたなくてはならない。そこで、現地で商品を買いあつめ、船が到着したときに、すぐ品物の積みこみができるよう、日本人の男女が住みついて、はたらくようになった。

とくに、朱印船が多くわたったフィリピンのマニラ、インドシナ半島のツーラン、フェフォ、カンボジアのピニャールー、シャムのアユタヤなどには、大きな日本町ができた。町には頭がいて、朱印船と国王との連絡など、貿易上の仕事をとりしきっていた。

彼らは、商人や職人ばかりでなく、徳川氏にとりつぶされた大名の浪人や、のちには、国内の禁教により、信仰をつらぬくため海外へ脱出した人びとも、多かった。なかには、長年のいくさの経験を買われて、ヨーロッパ人や現地の国王などに、護衛兵としてつかわれた者もいた。

蒔絵　上はツタの葉の文様を蒔絵した，当時流行の南蛮趣味の唐櫃。右は蒔絵の製作風景。

シャムの山田長政

アユタヤ日本町の頭であった山田長政は、もとは駿河（静岡県）でかごかきをしていたといわれるが、しだいにすぐれた能力をみとめられ、シャム国王につかえ、おもくもちいられた。

このころ、日本とシャムとの交通がすすみ、朱印船貿易が順調に発展した裏に、両国のあいだをとりもった長政の力を、みのがすことはできない。

一六二八年、国王が死ぬと、あとつぎをめぐって争いがおきた。長政は、八〇〇人の日本兵と、二万人のシャム兵を指揮してたたかい、年わかい王子をたすけ、王位につけた。しかし、反対派の王族は、長政を都からとおくはなれたリゴール地方の太守に任命し、彼がいなくなると、あたらしい国王を殺し、自分が王位についた。

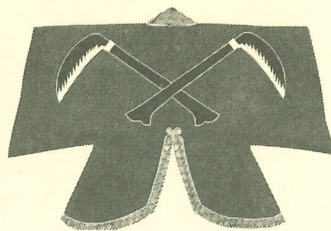
そして、うわべはしたしくみせかけながら、ひそかに長政のもとへ裏切り者の家来をおくりこんだ。長政はすこしも知らず、たまたま、隣国との戦いで足をけがしたとき、その家来が傷口に毒をぬりつけたため、ついに殺されてしまった。

長政が死ぬと、アユタヤの日本町は焼き討ちされ、日本人の勢力はおとろえた。

銀と生糸と鹿皮

朱印船が日本から輸出したものは、銀である。一六世紀末から一七世紀はじめにかけて、日本は、世界じゅうの銀の三分の一にもあたる量を産出する、指折りの銀産国であった。ヨーロッパ人や中国人が、日本との貿易をのぞんだ最大の理由も、ここにあった。

このほかの品物としては、銅・鉄・硫黄のほか、扇子・蒔絵・屏風などの工芸品、なべ・

糸印　輸入生糸のある量ごとにつけられ，受領書にこの印をおした。

ラシャの陣羽織　輸入した毛織物でつくった，大胆なデザインの陣羽織。小早川秀秋のものといわれる。

マカオの日本人　イギリス人の写生。

かま・やかんなど日常雑貨品があった。工芸品のなかには、東南アジアの諸国をへて、ヨーロッパやアメリカ大陸の各地にまで、輸出されたものがある。

当時、日本の国内ですぐれた職人技術をもつ産業は、京都とその周辺に集中していた。輸出用の美術工芸品・雑貨品も、ほとんど京都を中心とする近畿地方で生産された。

アダムズの手紙には、彼が京都まで蒔絵の注文にでかけたこと、彼の取り引きした蒔絵師は、五〇人の職人をかかえ、昼も夜もはたらいていることが、しるされている。

輸出のほか、京都の商人・職人たちの得意先は、おもに大名や豪商たちであった。彼らは、軍需品をはじめ、高級織物や美術工芸品を、このんで買いもとめた。

輸入品の中心は、この高級織物の原料である生糸、甲冑や刀の袋にもちいる鹿皮、刀の柄などをかざる鮫皮、戦闘時の服装となる木綿、おなじく陣羽織や鉄砲の包みにもちいた毛織物などであった。また、南方産の漆・象牙・珊瑚珠など工芸品の原料や、染料・香木・薬種、火薬の原料なども輸入された。

生糸貿易の統制

なかでも生糸は、そのころ日本でできなかったため、中国からの輸入にたよっていた。中国との復交がうまくいかなかったので、日本船は中国の港にはいれず、台湾・呂宋・安南などの港をなかつぎにして、大量に買いいれた。

生糸をはこんだのは、朱印船ばかりでなく、はやくはマカオに基地をもっていたポルトガル船が、イエズス会とむすんで長崎へ年ねんはこびこんでおり、また、中国や他のヨーロッパ諸国の船も、多くつんできた。

切支丹の迫害　切支丹は，俵づめにして火をつけられたり，水ろうにつけられたりしたが，なかなかその信仰をすてなかった。

ころび　キリスト教徒であった者が、改宗して仏教徒になることを、「ころび」といった。これにたいして、いったん改宗した者が、ふたたびキリシタンにもどることを、「立ち上がり」という。

家康は、生糸貿易の利益に目をつけ、一六〇四年、堺・京都・長崎の商人に命じ、長崎へくるポルトガル船の生糸をすべて買い占めさせることにした。のちに江戸と大坂がくわわって五か所の商人となったが、彼らが輸入生糸の値段をきめ、のこらず買いとり、それを国内各地の商人に売りわたした。この取り引きのしくみを、糸割符とよんでいる。

糸割符は、のちに中国船やオランダ船にも適用されることになり、長崎貿易を幕府の統制下におくうえで、重要な役割をはたした。そればかりか、家康は、買い占めた生糸を、国内の生糸値段のあがったときに売りはらわせたので、大きな利益をえることができた。

キリスト教の禁止

慶長の禁教令　秀吉とおなじように、家康も、貿易はつづけたいが、キリスト教が人びとのあいだにひろまることには、警戒の念をもっていた。

ところが、一六〇〇年以降、信者の数は急速にふえ、これまでみられなかった関東・東北地方にまで、宣教師や信者がゆきわたるようになった。

たぶん、アダムズの意見などにもよるのであろう。家康は、一六一二年、メキシコへの国書の中で、「貿易はよいが、布教は禁止する。」とのべている。翌一三年、全国にわたって、禁教令を発した。

京都・大坂・堺など幕府直轄都市を中心に、教会はとりこわされ、宣教師が追放され、

NIFON NO
COTOBA TO
Historia uo narai xiran to
FOSSURU FITO NO TAME-
NI XEVA NI YAVA RAGUETA-
RU FEIQENO MONOGATARI.

IESVS NO COMPANHIA NO
Collegio Amacusa ni voite Superiores no go men-
qio to xite core uo fan ni qizamu mono nari.
Go xuxxe yori M.D.L.XXXXII.

高山右近(1552～1615)　戦国時代の武将。豊臣秀吉らにつかえたがキリスト教信仰をすてなかったため，1614年，マニラに追放された。

キリシタン版　イエズス会によって印刷された『平家物語』。そのほかに『日本・ポルトガル辞書』『伊會保物語』などがある。

信者のうち信仰をすてない者は、とらえられた。彼らは、むしろや俵を着せられ、さらしものにされ、辱めをうけ、「ころべ、ころべ。」と、信仰をすてるよう強制された。

武士のばあいは、主君にたいする忠節を第一とする立場から、とくにきびしい追及がおこなわれ、あらためない者は、武士の身分をうばわれ、額に焼印をおしたり、指を切ったりするむごい罰をうけた。有名なキリシタン大名であった高山右近は、秀吉の弾圧で大名の身分をうしなっていたが、こんどは、一四八人の信者とともに、フィリピンのマニラに追放されてしまった。彼は、翌年、その地でなくなった。

元和の大殉教　家康の死後、二代将軍徳川秀忠は、さらにきびしい取締りを命じた。大坂の陣にさいし、大坂城にあつまった浪人たちのなかに、キリシタンの宣教師や信者がかなりいた。彼らは、豊臣氏が勝てば弾圧がやむだろう、と期待したのである。しかし、豊臣氏はほろび、その結果かえって、キリシタンは反逆者・謀反人ということになった。

こうしてキリシタンは、盗賊といっしょにならべて、はりつけにされることになった。一般の町人は、宣教師に宿を貸さないよう誓約書をださせられ、違反してかくまった者は、本人はもちろん、近所の五人組（→P231）全員が首をはねられた。各地で、転向しない信徒が、つぎつぎと火あぶりになった。

ここに一つの事件がおきた。台湾海峡で、スペインやポルトガルの船を待ちぶせしていたオランダとイギリスの連合船隊が、日本の朱印船一そうをつかまえたのである。堺の平

「元和の大殉教」を見まもる信者　処刑場にあつまった群集のなかには，日本人だけではなく，南蛮人や黒人もみえる。

奉書船　江戸幕府は、渡航を制限するため、一六三一年には、朱印状だけではなく、そのつど、老中のだす許可書（老中奉書）がないと渡航できないようにした。老中奉書をあたえられた船が、奉書船である。

山常陳を船長とする船で、マニラから日本へむかう宣教師二名がのっていた。

オランダとイギリスは、さっそく幕府に彼らをひきわたし、スペインやポルトガルが日本を侵略しようとしているから、朱印船でも気をつけなければならない、と警告した。船長の常陳と二人の宣教師は火あぶりとなり、他の乗組員は首をはねられた。

この事件をきっかけに、一六二二年（元和八年）、長崎西坂の丘で、宣教師一八人をはじめとする二五人が火刑に、三〇人が斬首の刑に処された。スペイン人・イタリア人・日本人・中国人・朝鮮人がふくまれ、七歳以下の子ども六人いた。これをキリスト教会では「元和の大殉教」といっている（→口絵P177）。

大殉教の前後から、幕府の取締りはいちだんときびしくなり、大名たちも、領内でキリシタンにたいする迫害をつよめた。

海外との往来を禁止する　いくら取締りをきびしくしても、信仰にもえる宣教師の潜入をとめることは、できなかった。むしろ、マニラなどでは、いっそうふるいたって、日本へわたろうとするありさまであった。

幕府はこの状況をみて、一六二三年、日本船がマニラへいくことを禁止した。翌年、マニラから、交易をもとにもどすため、使いがきたが、幕府はこれを追いかえしてしまった。マカオのポルトガル人との貿易も、このあとしばらくして、数年間とだえた。

イギリスは、旧教国にたいしては、おなじ新教国のオランダと手をむすんで対抗したが、日本では、オランダとのはげしい貿易競争をおこなっていた。しかし、競争にやぶれ、

一六二三年、平戸の商館を閉鎖してしまい、イギリスとの国交もとだえた。

オランダだけが、ちゃくちゃくと東アジアに勢力をのばし、台湾に基地をきずいた。このため、台湾へでかけた朱印船と争いをひきおこした。しかし、オランダは、日本との貿易が大きな利益をあげるのに目をつけ、これを独占しようと、幕府にたいしては頭をさげて、忠節をつくす態度をしめした。幕府はこれをよろこび、むしろ朱印船が台湾へわたらないようにして、争いを解決した。この結果、三代将軍家光のころには、日本船の海外への渡航の道は、しだいにせばまっていった。一六三三年、幕府は、奉書船（朱印船）のほかは、外国へ船をつかわすことも、日本人がいくことも、また、外国に住んでいた日本人がかえってくることも、すべて禁止し、違反する者は死罪とさだめた。しかし、このときはまだ、五年以内に帰国した者は事情によりゆるす、などの条件がついていた。

一六三五年になると、外国への日本船の渡航をいっさい禁じ、日本人の帰国も、すべて死罪となった。朱印船貿易はこれでおわった。貿易は、朝鮮と琉球をのぞけば、長崎にくるオランダ船と中国船を相手にのみ、おこなわれることになった。

天草・島原の一揆

たちあがった一揆　一六三七年（寛永一四年）の秋、九州の島原半島と、そのとなりの天草島で、はげしい一揆がおきた。島原では、百姓・町人・浪人

オランダのねらい　オランダは、日本へもちこんだ商品で、もとの値段の二倍から四倍の利益をあげ、アジア貿易ぜんたいのなかで、日本貿易はいちばんもうかっていた。

そのため、すこしぐらいの犠牲をはらっても、ながい目でみて日本貿易を独占することをねらい、それを実現したのである。

日本とオランダの争い　1628年，オランダの台湾総督をおそった，朱印船船長の浜田弥兵衛。

のまじる一揆が城下におしよせ、城を包囲し、町を焼いた。天草でも、一揆は、本渡の戦いに領主軍をやぶり、富岡城にせめよせた。

島原も天草も、かつてはキリシタン大名の領地であった地方で、人びとのあいだには、キリシタンの信仰が、なお根づよい力をもっていた。

あたらしい領主は、キリシタンを根絶やしにするために、きびしい弾圧をくわえた。信徒を雲仙岳につれていき、煮えたぎる硫黄の熱湯のそばで、転向せよという。信徒がきかないと、背中を切っては湯をそそぎこみ、じわじわと責める。それでもきかないと、熱湯につけたりだしたりし、最後は湯口になげこんで殺した。これを「山入り」とよんだが、このほか、口にすることもできない、むごい拷問をつぎつぎとくわえた。

それだけでなく、きびしい年貢のとりたてをおこない、いろいろな税をかけた。窓に窓銭、棚に棚銭、戸口に戸銭、死人がでれば穴銭、子がうまれると頭銭をとったといわれている。

税をおさめられないばあいは、「みの踊り」といって、その百姓をしばりあげ、みのでつつんで火をつけた。あつさにたえきれず、百姓はとんだり、はねたり、地面に体をたたきつけ、ときには、自分から水に身をなげて、死をえらんだ。

一揆の直接の原因は、人間を人間とおもわないこのような弾圧に、ついにがまんしかねた百姓たちが、たちあがったところに、もとめられる。

→ 雲仙岳のごう問(右) 信者は，背中を切りさいて硫黄の熱湯をかけるなどの仕打ちをうけた。原城の旗(左) この旗のもと，4万ちかい信者がたたかった。

← 金の十字架 信者の最後の抵抗場所となった，原城の本丸跡から，近年発見されたものである。

天草四郎

だが一揆が、いっせいに、たくさんの人びとをたちあがらせたのには、もう一つの要素があった。

彼らは、十字架をえがいた旗のもとに団結し、天草四郎（益田時貞ともいう）とよばれる一六歳の少年を、総大将としてあおいだ。四郎は、弾圧によりすがたをけした宣教師にかわって、傷ついた農民たちの心に、信仰のなぐさめをあたえた。彼は、小さいときから才知をうたわれた、やさしい、女のような美少年であった、とつたえられている。

四郎をささえる浪人グループがいて、四郎こそ、人びとをすくうため天からつかわされた使いである、いまに世の中は火の地獄となるが、四郎とともにキリシタンだけがすくわれるのだ、と人びとに説いた。

たまたまこのころ、朝夕、空が異様に赤くてりはえる現象がおき、人びとはしだいに、このうわさを信じるようになった。

こうして、約三万七〇〇〇人の島原と天草の一揆が合流し、島原半島のふるい城跡である原城を修理して、たてこもった。といっても、彼らのうち、戦闘に経験のある武士(浪人)は、わずか四〇人ばかり、たたかう力をもった者が二万三〇〇〇人、それもほとんど具足もつけていないありさまで、あとは老人・婦人・子どもたちからなっていた。

三万七〇〇〇の首

幕府は最初、たかが百姓の一揆、とかんがえていた。しかし、原城は、前は沼地でかこまれ、海がわは、屏風をたて

原城の戦闘　石がきをよじのぼる幕府軍を，むかえうつ一揆軍は，石などをおとしてたたかう。

ようなきりたった断崖の上にあり、なかなか手ごわい（→口絵P176）。

一二月からせめにかかり、元日には総攻撃をかけたが、ぎゃくに、総大将の板倉重昌が鉄砲でうたれ戦死するなど、多数の死傷者をだして、しりぞかねばならなかった。

そこで、あらためて老中の松平信綱を総大将とし、北九州の大名たちを中心に、一二万五〇〇〇人の兵を動員し、包囲をかため、兵糧攻めにかけた。

この間、オランダ人をよんで、海上から強力な大砲を打ちこませたりした。これには、オランダ人が、ほんとうにキリシタンとたたかうかどうか、たしかめるねらいがあったのであるが、城中から矢文がおくられ、日本人どうしの戦いに外国人の助けを借りるやりかたを非難され、また、大名のなかにも反対があったので、とりやめた。

二月末、城中の兵糧は底をつき、弾薬もなくなったところをみはからい、幕府軍は総攻撃をかけ、ついに城はおちた。天草四郎はじめおもな指導者は、すべて討ちとられ、生きのこった者も、男女を問わず、すべて殺された。城外の田にかけならべられた首だけでも、一万をこえた。みな殺しであった。

鎖国とその功罪

天草・島原の一揆が鎮圧されると、幕府は、キリシタンの取締りをいっそうきびしくし、ポルトガル船が日本へくることを禁じた。また、全国の海岸線をもつ大名に、外国船の警備と検査を命じた。

幕府は、キリシタンが信仰によって団結すると、大きな力を発揮するのをおそれ、国外から連絡がつけられないようにしようとはかった。長崎に住んでいたポルトガル人は、マ

長崎の出島　1636年完成，面積は約13000平方メートル。1本の橋で長崎とむすばれているだけだった。

マリア観音像　観音ににせたマリア像をつくり，キリシタンはそれをおがんで，代だいひそかに信仰をまもりつづけた。

カオへおくりかえされ、ポルトガル人と結婚した人や、その子どもたちも、追放された。

やがて、オランダ人たちも、平戸から長崎にうつされ、せまい出島にとじこめられた。彼らも、日本で子をもつことはゆるされず、オランダ人と結婚した婦人や、混血の子どもたちは、ジャワへ追放された。

ヨーロッパとの通交は、出島の小さな窓口をとおしてだけ、おこなわれることになった。中国人だけが、長崎の町で自由に取り引きしていたが、のちには、これも唐人屋敷とよばれる地区にまとめて住まわせ、きびしくとりしまった。

こうして鎖国とよばれるしくみが完成した。東南アジアの日本町はとりのこされ、ながい年月のあいだにきえていった。さまざまな国の人びととの自由なつきあいはできなくなり、日本人の大部分は、島国の中で、おなじ日本人の顔だけをみてくらすことになる。キリスト教の信仰は、表面からすがたをけし、わずかな人びとが、「かくれキリシタン」「はなれキリシタン」などのかたちで、ひそかに信仰の燈をまもりつづけた。

鎖国は徳川幕府の支配をうちかため、二六〇年という、世界でも例のないながい期間、日本の社会を平和にたもった。戦乱をまぬがれて、人びとの生活はゆたかになり、日本独自の文化がそだち、根をおろした。

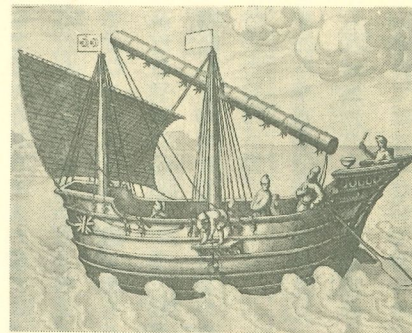
しかし、それらが、島原で殺された三万七〇〇〇人の農民、さらに、たびかさなる弾圧で、火あぶりにあい、首をはねられた無数の人びとの犠牲のうえになりたっていることを、わたくしたちは、けっしてわすれてはならないであろう。

遣明船から朱印船へ

——船の歴史(2)——

あたらしい技術をいかした船

中世の海運は、それまでの荘園の年貢の輸送から、地方で生産される商品の輸送にかわってゆくが、船そのものは、一四世紀になっても古墳時代とかわらない丸木船を船底とする船（→②巻P88）が主力であった。また、源平合戦や元寇などの海戦では、専用の軍船がないため、ふだん海運や漁業につかわれている船に、兵をのりくませてたたかう程度のものにすぎなかった。

室町時代になって、商品の流通がふえてくると、大きな商船が必要となった。そこで、古墳時代いらいの船を発展させて、幅ひろい板と太い梁とでくみたてる日本独自のあたらしい構造をもつ船がつくられた。これは、日本の船の歴史上、大きなできごとで、明の国の産物や文化をもとめて中国へわたった遣明船の貿易も、この船なしにはかんがえられないものである。

ヨーロッパ人の見たジャンク（16世紀末ころ）

そして一五世紀には、千石積前後の大型商船が、国内海運に登場するほどになっていた。

遣明船は、当時の民間商船を借りて改装したもので、大きさは前期で千石積（約一五〇トン）級、後期には二千石積（約三〇〇トン）級の大型船を使用した。しかし、千石積級で、船員をあわせて一五〇人前後ものりこむため、積荷はその三分の一程度にへっていた。

航海技術も進歩した。遣明船の航路は、かつて遣唐使船がくるしめられた東シナ海横断の航路だったが、遣明船は季節風の利用や磁石の使用によって遭難することもなく、たやすく航海していた。

こうしてうまれた日本式のあたらしい船は、戦国時代をむかえると、軍船の発達にむすびついた。とくに安宅船（→P108）とよばれた軍船は、戦国水軍の象徴的存在で、攻撃力・防御力とも、群をぬいた大型軍船であった。当時の水軍は、この安宅船を中心に、快速の関船や小早をはじめ、使用目的におうじて開発された大小の軍船をもって、編成されていたのである。

朱印船の活躍

一六世紀後半から一七世紀になると、東南アジアを舞台に、日本の貿易船が活躍する。こうした大航海になると、遣明船のような日本式の大型商船でもまだ、心もとない。

最初のうちは、中国のジャンクなどを買っていたが、一七世紀になって朱印船制度（→P205）がおこなわれるころには、日本前とよばれる国産の大型商船がおもにもちいられた。長崎の末次船や荒木船などはその代表で、おもな特徴は、中国式の船体と帆装をもとしながら、西欧のガレオン船の技術を大幅にとりいれて、すぐれた航洋船としたことにあった。

大きさは、だいたいの寸法から五〇〇トン前後とみられるけれども、資料不足で正確なところはわからない。しかし、大型船になると、三〇〇人から四〇〇人もの多人数がのりくんでいるし、航海期間の長さをかんがえれば、すくなくとも五〇〇トンはないと貿易船としてなりたたなかったにちがいない。

ともかく、日本前に代表される朱印船は、日本としてははじめての本格的航洋船だったが、徳川幕府の海外渡航禁止令のため、その技術もほろびてしまった。

荒木船　安全性やスピードは，ガレオン船におよばなかった。

この節を読むにあたって

戦乱の世は、まったくおわり、二六〇年にわたる平和の時代がはじまろうとしている。
江戸幕府は、実力でかちとった支配を、うちかため、ながくつづかせるために、世界でもまれにみる、ととのった社会のしくみをつくりあげた。
朝廷や寺院を統制し、大名をおさえこみ、庶民にたいしては、きびしい身分制度をしいた。
平和はなによりもすばらしい。
しかし、そのかげで犠牲にされたもののあることも、わすれてはなるまい。

士農工商の世へ

つよい将軍

江戸幕府は、家康のあと、秀忠・家光とつづく三代将軍までが、きわめてつよい態度で政治をおこない、幕府に反抗しようとする勢力や、法度に違反した者などをびしびしと処分した。これを武断政治とよんでいる。以下にのべる紫衣事件も、その一つの例である。

ながされた沢庵和尚

紫衣とは、紫色の法衣と袈裟のことで、たかい地位の僧にだけ、とくに朝廷がゆるしてあたえることにしていた。ゆるされた者は、礼金をさしだすのがたてまえであるから、朝廷にとっては、だいじな収入源でもあった。

しかし、幕府は、「禁中並公家諸法度」(→P200)によって、紫衣や上人号は、やたらにあたえてはならず、よく人物をえらぶようにさだめ、大徳寺・妙心寺などの重要な寺については、ことにきびしくきめた。ところが、後水尾天皇は、これまでどおり、幕府に相談することなく、自分の手で紫衣の許可をあたえていた。

一六二七年、幕府は、ちかごろ右の法度がないがしろにされているとして、過去一〇年余の紫衣や上人号の許可をすべて無効にする、と発表した。幕府は、朝廷が自由にふるまうのをおさえるとともに、寺院にたいする統制を徹底させようとしたのであった。

大徳寺は寺をあげて反対し、将軍家光にうったえた。なかでも、沢庵宗彭は、寺の修行に干渉しようとする幕府のやりかたに、堂どうと正面から対決し、反論をのべ、ついに説をまげなかったため、出羽国上山(山形県上山市)にながされてしまった。

女帝をたてる

後水尾天皇も、幕府の処置に腹をたてた。天皇がこれまでにだした紫衣の許可状が、七、八〇通も無効となったのである。この事件が一つの動機となって、一六二九年、幕府にとどけないで位をしりぞいてしまった。

幕府は、この機会をみすましたように、満六歳一〇か月の興子内親王をたて、明正天皇とした。天皇は、秀忠の娘和子(東福門院)が、後水尾天皇とのあいだにうんだ女の子で、秀忠にとっては孫にあたっていた。

和子と後水尾天皇の結婚は、家康がかんがえだしたことで、宣教師ロドリーゲスがしるしているように、「徳川一家が将軍の職務につくことを、永久につづくようにするため」の、一つの手段であった。秀忠は、将軍の父、天皇の祖父となった。将軍家光からみると、あたらしい天皇は、めいということになる。

女帝の例は、奈良時代に六人、江戸時代にもう一人あるだけだが、いずれも成年であり、まえの天皇の皇后であったか、またはそれに準ずる地位の皇子の妃ばかりで、こんな幼女の即位は、前後に例をみない。幕府は、朝廷を思いのままにうごかせるようになった。

沢庵宗彭(一五七三〜一六四五) 禅宗の僧侶。但馬(兵庫県)出石の出身で、一六〇九年には大徳寺の住持になっている。紫衣事件のため出羽にながされたが、のちにゆるされ、三代将軍家光におもくもちいられ、江戸に東海寺をひらいた。沢庵漬は彼がはじめたともいわれている。

後水尾天皇（1596〜1680）
多難な江戸初期に在位。

二条城二の丸御殿　いまは修学旅行の名所（→P196）。

小普請　役職につかない御家人は小普請組にいれられた。小普請というのは、城のちょっとした修理などをてつだうということであるが、じっさいには、これといってすることがない。戦時はともかく、平和がながくつづくと、毎日ぶらぶら日をおくることになる。

幕府は表面では朝廷をとうとぶようにみせながら、京都に所司代やその他の役人をおいて監視させ、朝廷が政治的な力をもたないようにした。朝廷は、これによって、儀礼的な飾りものの地位におかれた。

親藩・譜代と、旗本・御家人

つよい将軍をささえたのは、幕府を中心にがっちりとスクラムをくんだ、大名・旗本の勢力であった。

まず、親藩である。徳川将軍家の親類といってよいだろう。家康の子が三人、それぞれ尾張（愛知県）六一万石・紀伊（和歌山県）五五万石・水戸（茨城県）三五万石の大名となり、城をかまえた。これを御三家といい、徳川の姓を名のった。御三家以外の親類が御家門とよばれ、松平の姓を名のった。御三家と御家門をあわせたのが、親藩である。

つぎに譜代は、代だい徳川家にしたがった家柄の大名である。家康の三河時代から、苦労をともにしてきた家来たちが多く、関ケ原の戦い以後、六八名が大名にとりたてられた。最高は、彦根藩井伊氏の三五万石で、五万石以下の者が多いが、幕府の政治を担当する老中や若年寄などの役人は、ほとんどすべて譜代大名からえらばれた。

関ケ原以後に徳川氏につかえた大名は、外様大名とよばれ、幕府政治には参加をみとめられなかった。

幕府は、江戸の周辺をはじめ、近畿・東海など全国の重要な地域に譜代大名をおき、政治と軍事のかなめとした。外様大名は、東北・九州・四国など、江戸からはとおい地方におかれ、勢力も分散させられた。

江戸幕府のしくみ

- 将軍
  - 大老（いつもおいたわけではない）
    - 老中
      - 大番頭
      - 大目付
      - 町奉行（江戸）
      - 勘定奉行
      - 城代
      - 奉行
      - 関東郡代
    - 若年寄
      - 書院番頭
      - 小姓組番頭
      - 目付
    - 寺社奉行
    - 京都所司代
    - 大坂城代

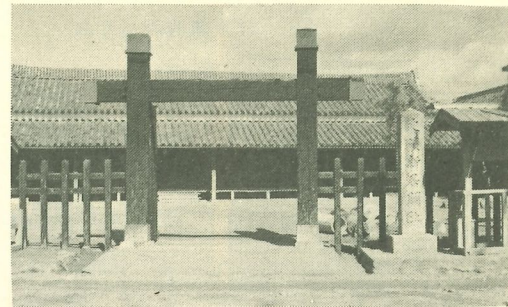
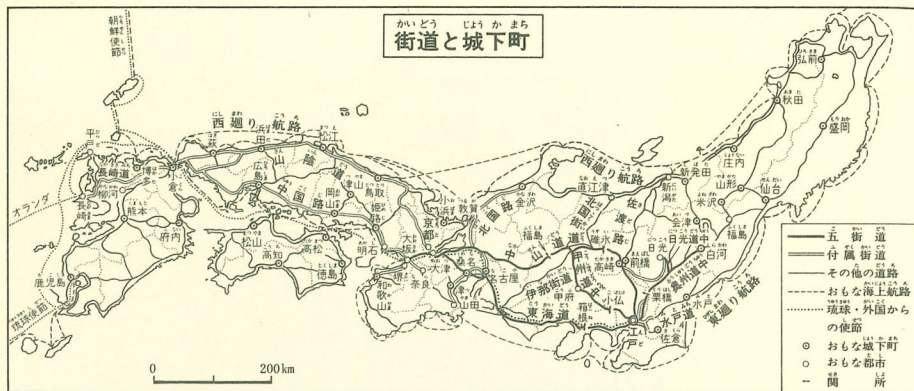
将軍直轄の軍団をかたちづくったのが、旗本・御家人である。一万石以下で、将軍にお目見えする資格をもつ者を旗本、もたない者を御家人といった。小姓組・大番・書院番など、組や番に編成され、二万数千人いた。彼らが、自分の家来たちをつれて出陣してくると、その数はぐんとふえるので、「旗本八万騎」とよびならわされた。

旗本・御家人のなかには、大名に準ずる扱いをうける者もいたが、大部分は三〇〇〇石以下からなり、なかには十数石の知行取りもいた。彼らのおよそ半数が、幕府のさまざまな役職につき、行政・裁判など政治の実務を担当した。

天領四〇〇万石

将軍が、もともとは大名でありながら、全国を支配することができたのは、他のだれよりもひろい領地をもったこと、その領地が、いい場所、重要な場所に集中していたことによっている。

将軍の領地は、勘定奉行のもとで、郡代や代官によって支配された。これを天領とよんでいる。天領は、関ケ原の戦いと、大坂の陣の二度の戦争と、諸大名のとりつぶしによって、しだいに拡大し、一八世紀前半には四〇〇万石以上にたっした。これに旗本領をくわえると、全国の石高の四分の一をおさえたことになる。

天領は、農業生産力のたかい、ゆたかな地方におかれていた。江戸・京都・大坂の三都をはじめ、長崎・堺・伏見・駿府・奈良などの重要都市は、すべて幕府の手ににぎられていた。佐渡（新潟県）・石見（島根県）・生野（兵庫県）などの金銀鉱山、足尾銅山（栃木県）も、天領であった。

関所と関所手形　上は東海道新居の関所(静岡県)。左は武士の手形。性別や職業で手形もことなる。

これらを背景に、幕府は、貿易を独占してその利益をおさめた。金貨・銀貨についで、三代将軍家光のときには、銅貨として寛永通宝を発行し、はじめて中国通貨からの完全な独立をはたすとともに、諸大名の貨幣鋳造を禁じ、全国経済の実権を手にした。

入鉄砲に出女　幕府は、江戸から各地につうじる五街道を直轄支配とし、江戸の周辺や街道の要所に関所をもうけ、通行人をとりしらべた。

関所では、手形(証明書)がないと、とおれない。とおる人は、関所の前で、かならず頭巾や笠をぬぎ、顔を見せなければならない。乗物にのっているばあいは、戸をひらかねばならない。あやしい者は、荷物もしらべられる。手形なしにわき道をとおろうとするのは、関所やぶりとして、みつかれば、はりつけである。

「入鉄砲に出女」といって、江戸に鉄砲などの武器をもちこむことと、人質のかたちで江戸にいる大名の夫人や子どもたちが、ひそかに国へかえることは、とくにきびしくとりしまられた。

「箱根八里は馬でもこすが、こすにこされぬ大井川」とうたわれたように、大井川(静岡県)をはじめ大河川は、橋のないものが多かった。技術的に未熟なために、橋をかけるのがむずかしいという理由もあったが、それよりも、幕府に謀反をおこす大名があらわれたばあい、橋がなければ、川を自然の障害物として、攻撃をふせぐことができる、という理由のほうがおもであった。

軍事・治安の面で、江戸は二重・三重にまもりをかためていた、ということができる。

鉢植えの大名

大名のとりつぶし　一六一九年四月、将軍秀忠が京都にでかける準備にあわただしい江戸で、ひそかなうわさがながれた。広島城主福島正則が、幕府にとどけないで城の修理をしたため、取調べをうけている、というのである。

大名が自分の城を自由に修理することは、幕府に反逆をくわだてるものとして、「武家諸法度」によってきびしく禁じられていた。大名たちは、幕府がいよいよ福島氏の処分に手をつけようとしている、と感じ、身のひきしまる思いにかられた。

正則は、豊臣氏にとりたてられた大名のうち、生き残りのもっとも有力な一人であった。関ケ原の戦いののち、毛利氏が萩(山口県)にうつされたあと、安芸広島にはいり四九万石の大名となっていた。わかいころから、武勇のほまれたかい人物であった。

正則がわびたので、事件はいったん解決したかにみえたが、将軍が伏見城にはいった六月、幕府は、正則の領地である安芸・備後の両国を没収し、津軽(青森県)にうつらせると発表した(のち信濃川中島に変更)。石高は一〇分の一以下の四万五〇〇〇石にへらされた。

幕府の発表によると、正則は、修理した城をとりこわすと約束したにもかかわらず、かたちばかりで実行しない。子の忠勝に秀忠の供をさせるといったが、秀忠よりおくれてきた。孫二人を人質にだすといいながら、まだ江戸に到着していない。これらが処分の理由

広島城と福島正則（1561〜1624）　秀吉が子どものころからそだてた猛将の正則も，江戸幕府のもとでは，没落した。その居城の広島城は，1945年（昭和20年）におとされた原子爆弾で，焼けてしまった。

であった。福島勢は、たたかおうにも、正則は江戸、忠勝は京都、そして国もとの家来たちと、勢力を三分されていた。

江戸の福島屋敷は、松平忠明以下三万の軍勢がかこみ、広島城は、加藤嘉明・蜂須賀至鎮・山内忠義・毛利秀就・池田忠勝ら、中国・四国の外様大名が出陣を命じられ、一〇万人が包囲したとつたえている。

正則は、城をあけわたし、わずか三〇余人の家来とともに、父子で川中島にうつった。

外様も譜代も区別なし

幕府は、福島正則のあとに、和歌山にいた浅野長政の子の長晟を広島城主としておくりこみ、和歌山へは家康の一〇番目の子である徳川頼宣をいれた。

これによって、尾張・水戸についで紀州徳川家が成立し、御三家の体制がかたまった。頼宣のいた駿府は直轄領となり、幕府は、江戸から大坂までを、がっちりとおさえこんだ。

正則の領地であった備後は、鉄の集散地があるので、外様の浅野氏からきりはなし、福山に城をきずいて譜代の水野勝成をいれた。

二代将軍秀忠は、三九人の大名をとりつぶした。家康が四〇人であるから、数のうえでもおとらない。三代将軍家光は、じつに四三人をとりつぶしている。

しかも、家康のとりつぶしは外様大名が多いのにたいして、秀忠・家光の時代は、外様大名にかぎらず、譜代大名もどしどしとりつぶしている。それだけ徳川氏の支配が安定し、将軍の権力がつよくなったことをしめしているといえよう。

武鑑　大名や旗本の氏名や石高などをしるした書物。ここにのせたのは，綱吉（5代将軍）・御三家・加賀の前田家とその分家のぶん。

外様では、田中忠政・蒲生忠郷・加藤忠広・加藤明成らの有力大名、親藩・譜代では、越後の松平忠輝、越前の松平忠直、家光の弟忠長、家康の側近であった本多正純らが、つぎつぎとりつぶされた。そのやりかたは、おおむね福島正則のばあいとおなじであるが、とりつぶしの理由としては、法度違反のほかに、あとつぎがないということが、よくあげられた。

とりつぶされた大名のあとに、徳川氏の一門や譜代大名がおくりこまれた。大名は、幕府の手で、鉢植えの木のようにうつしかえられた。とくに譜代大名は、その時どきの幕府政治の必要によって、ぐるぐるとうつることが多かった。とても、おちついて領国経営にあたることはできず、したがって力がつかなかった。

江戸と国もと

大名が、幕府から命じられた大規模な普請役を負担しなければならなかったことは、すでにみたとおりである（→P192）。それにくわえて、大名をつかれさせたのが、参勤交代であった。

参勤交代は、家光のとき、大名の義務として「武家諸法度」にさだめられた。江戸に屋敷をかまえて妻子を住まわせ、一年間はそこでくらして、江戸城につめる。つぎの一年は国もとの領地にもどって、自分の城で政治をとるのである。交代の時期と往復の道すじは幕府がきめた。

一年おきに、大ぜいの家来をひきつれて、江戸と国もとのあいだを往復しなければならない。たいへんな費用がかかる。それに、江戸でのくらしは、どうしても派手になりがち

である。幕府には忠誠のしるしをしめさねばならないし、大名どうしの競争や、意地のはりあいもあって、国もとにいるときにはつかう必要のない金がでてゆく。

毛利氏の例でみると、江戸・京都・大坂での支出は、大名財政ぜんたいの六割をしめている。だいたい、どの大名も、江戸では、国もとにいるときの二倍の金をつかった。

さらに、福島正則のばあいにみたように、大きな大名のとりつぶしには、幕府から出陣を命じられる。そのときは、石高におうじた軍役がかかる。しかし、戦争もないのに、たえずその準備をしておくのは、たいへんである。九州の島津氏でも、せめてさだめられた数の半分ぐらいは準備しておこうと、大騒ぎをしたことがある。

こうしてまた大名は、京都・大坂などの商人に、ばくだいな借金をおうことになった。

年貢のための農業

死なぬように、生きぬように

この時代、武士が農業生産からきりはなされて、都市でもっぱら消費生活をおくることになったので、社会をささえる役割は、農民の肩にずっしりとおわされることになった。この点、武士が村に住んで、農民を支配していた時代とは、ようすががらりとかわってきた。

その実情をよくあらわしているのが、徳川家康のいったとつたえられる、つぎのことばである。

本多正信(1538～1616)　ふるくからの家康の家来で，家康が心をゆるした，政治むきの相談相手。のちにその子の正純は，3代将軍の家光の暗殺をはかったとして，とりつぶされる。これが有名な宇都宮のつり天井事件。

→ **参勤交代**　殿様は多くはかごにゆられて道中した。つきしたがう家来の数は，加賀の前田家では2500人にもたっしたという。1万5千石の小大名でも，供は約170人になったというから，巨額な費用がかかった。大名をつかれさせよう，という幕府のねらいは，まんまとあたったのである。

「百姓どもを、死なぬように、生きぬようにと、よくこころえて、年貢をとりたてよ。」

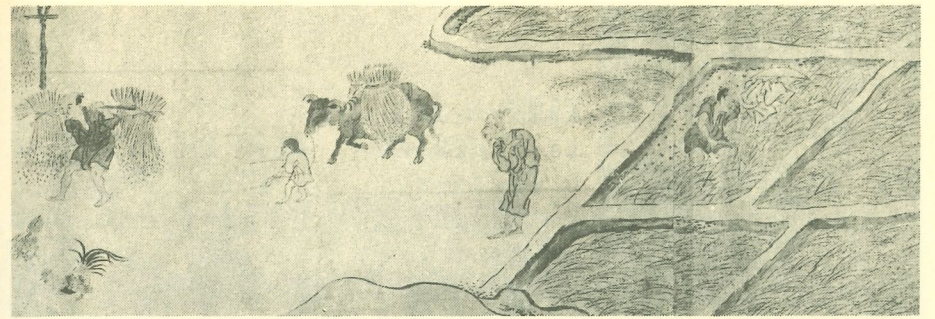
つまり、百姓（農民）は年貢をおさめる道具なのだから、とりすぎて殺してしまっては、元も子もない。といって、あまり裕福にして力をつけるのも、よくない。年貢をおさめて、かつがつ生きていける程度にしておくのがよい、といっているのである。

家康の重臣であった本多正信も、「百姓は、財のあまらぬように、不足なきように おさめること、道なり。」とのべている。どちらも、農民を人間とおもわない、つめたいことばである。しかし、それだけというわけではない。

これまでは、年貢をおさめられないばあい、身売りをし、牛や馬のようにこきつかわれるか、あるいは、島原の農民のように（→P214）、領主の手でいためつけられ、殺されることもまれではなかった。それにくらべると、家康や正信の考えかたは、ともかく生産のにない手である農民を殺さないようにしようとする点では、前進していたといえる。

村の支配

年貢・夫役のとりたては、郡奉行や代官がおこなったが、彼らは、ときどき村にまわってくるだけであった。村のなかで、じっさいに支配にあたったのは、村役人である。村役人の長は、おもに東日本では名主、西日本では庄屋とよばれ、また肝煎とよんだ地方もある。

名主・庄屋は、ふるい家柄で、村の有力者であることが多かった。年貢を一人一人の農民にわりつけ、領主におさめる責任をおうほか、戸籍の異動や土地の売買を確認し、村民の願いや訴えの書類に目をとおすなど、こんにちの税務署・警察署・市役所・裁判所など

取りいれ　春の田植とならんでいそがしい取りいれの季節は，一家総出で子どもまで，はたらかなければならなかった。

の職務にあたる仕事を、一人でひきうけていた。

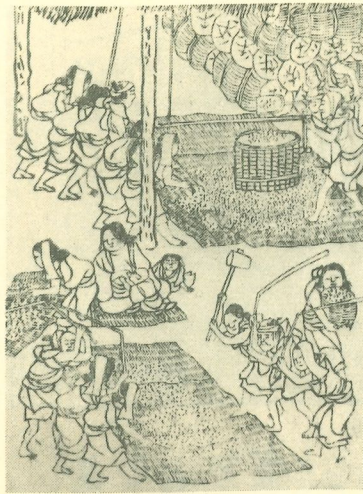
名主や庄屋の仕事をてつだったのが、組頭や年寄である。また、村民を代表する百姓代というのもあって、名主・組頭の仕事がただしくおこなわれているかどうか、監視する役目をあたえられていた。名主・組頭・百姓代を、村方三役とよんでいる。

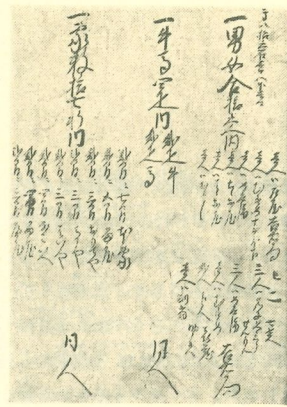
田畑の売買を禁止する

農民は殺さない、というたてまえになってはいたが、この時代ながくつづいた戦乱によって、田や畑はあれ、米づくりに必要な池や川などの用水の整備も、おろそかになりがちで、農業生産の条件はわるくなっていた。このため、ちょっとした気候の変化によって、凶作や飢饉がおこりやすかった。

いっぽうで、幕府が大名にかける普請役・軍役・参勤交代などのばくだいな負担は、けっきょく農民の肩にかかってくる。大名が、そのたびに農民をよびつけてつかうため、労働力がたりなくなって、農業ができず、かけおちする農民も多かった。

農民は、年貢をおさめられないときには、名主・庄屋など村の有力者から借りておさめた。凶作がつづいたりすると、借金高も利息もふえ、身を売るか、田畑を売るかすることになる。そうすると、ますます有力者の土地はふえ、小農民の没落がすすむ。

そのころ、年貢をおさめて、家族の生活も維持していくためには、およそ田畑一町歩（一〇反＝約一ヘクタール）が必要とかんがえられた。幕府は、農民の経営がこれより小さくなったり、没落したりすることをふせぐために、田畑の売買を禁じ（田畑永代売買禁止令、一六四三年）、また、田畑を二男や三男にこまかくわけることを禁止した（分地制限令、一六

→**人畜改帳**　農民は，人口はもちろん，家畜の頭数まで，しらべあげられた。

←**もみすり**　上は唐臼によりもみがらをとりのぞいて，玄米をとりだす作業。下はからさおをつかい，もみの穂先ののぎをとりのぞく。

七三年）。あくまで、年貢をとる必要からであった。

しかし、凶作や飢饉、それにきびしいとりたてがつづくと、小規模な農民のなかには、土地を売ることができないため、田畑を有力農民に質入れし、自分はその田畑の小作人となる者も多かった。

五人組と宗門改め

田畑をもち、年貢をおさめる義務をおう農民を、本百姓といった。村には、本百姓のほかに、土地をもたず他人の田畑を小作する水呑百姓や、地主など有力農民の家ではたらく下人や、下人の家族がいた。

幕府は、これらの農民に五戸ずつの組をつくらせ、たがいにたすけあって耕作し、年貢がおさめられるようにした。五人組である。

五人組は、助けあいのためであるとともに、おもい負担にたえかねた農民がにげないよう、たがいに監視させ、組のなかから犯罪人がでると、五人組ぜんたいが罪になることにして、犯罪をふせぐ目的をもっていた。幕府に反抗的な浪人の取締りや、キリシタン禁令などには、五人組ごとに誓約書をさしださせた。

島原の乱前後から、キリシタンの取締りのために宗門改めがおこなわれるようになった。はじめは、キリシタンではないことを証明させるだけであったが、一七世紀後半から、一家の一人一人について、信仰をとりしらべることになった。

この帳面を宗旨人別改帳といい、毎年、家ごとに家族の名と年齢、うまれたところ、奉公先などをしるし、寺が、自分の宗派の仏教徒にまちがいないことを証明

絵踏み　キリストや聖母マリアの像を（口絵P177）一人一人にふませた。ふむことができなかったり，ためらったりすると，信者としてきびしい取調べをうけた。正月に長崎をはじめ，九州各地でおこなわれた。シーボルトのかいた絵。

し、村ごとに領主に提出する。九州地方では、宗門改めのときに、絵踏みをおこなったところもある。

宗門改めは全国的に実施され、こんにちの戸籍のように、領主は、一人一人の農民をしっかりとつかむことができるようになった。農民は、うまれるまえから仏教徒となる運命がきまっていた。これは、信仰という点からかんがえると、ふしぎなことではないか。

「慶安の御触書」　一六四九年（慶安二年）、幕府は、農民にたいして三二か条からなる触書をくだした。

「百姓は、さきざきのことをよくかんがえないから、秋になると、収穫した米や雑穀を、妻子にまでむだにたべさせてしまう。いつも年貢をおさめたあと、食料のすくない正月・二月・三月ごろの気持ちで、食べものをたいせつにし、麦・粟・稗・菜・大根、そのほかなんでもよいから雑穀をつくり、米を食いつぶさないようにせよ。」

「夫は耕作し、妻は麻を織り、夜も仕事にはげみ、夫婦ともにはたらかなくてはならぬ。きれいな妻でも、夫の世話をせず、お茶ばかり飲んで、寺参りや遊びのすきな妻は、離婚せよ。」

「朝はやく起き、肥料にする草を刈り、昼は田畑を耕作し、夜は縄をない俵を編め。」

「屋敷のまわりに竹や木を植え、その枝や落ち葉を燃料にし、薪代を節約せよ。」

「肥料をつくるために、せっちん（便所）の甕をひろくつくること。……庭に穴をほり、ごみや草などをいれ、堆肥をつくれ。」

年貢をおさめる　収穫した米は，まず領主におさめなければならない。はこびこまれる年貢を，一人はそろばんをいれ，一人は帳面につける。年貢は，ふつう収穫高の4～6割を，おさめることにさだめられていた。

これをひとくちでいうと、夫婦で耕作する小農民でも、雑穀をたべ、生活をきりつめ、朝から晩までしっかりはたらき、すこしの田にも肥料を多くいれる心がけがあれば、年貢の米をおさめることができ、飢饉にも安心して生活ができる、というのである。

幕府は、本百姓のなかでも、没落しやすい小農民の経営をささえるのに、けんめいであった。触書は、最後にのべている。

「年貢さえすましたなら、百姓ほど安楽なものはない。よくよくこのことを心がけ、子孫までも申しつたえ、精をだしてはたらくように。」

身分と職業

町と村のながめ　一六世紀の末から一七世紀のはじめにかけて、日本にきていたスペインの商人アビラ＝ヒロンは、日本の都市について、およそつぎのようにしるしている。

「殿様のいる都市では、まず城がある。城のまわりかそのちかくに、知行をあたえられた武士と、その家来たちの家があり、一軒ごとに垣と堀でかこまれている。つぎに、すこしはなれて、町人の住む町があり、そのむこうに漁民が住んでいる。

……どの町も、このようにもっともよい場所に、もっともたかい身分の人が住み、ついで役人たちが住み、商人はまたべつの町に住む。金銀細工師はべつの町に、刀剣の研ぎ師

江戸の町並み　通りに面して，皮屋・かぎ屋・扇屋などがみられる。この部分では，通行人は武士が多いが，天びんで荷をかついだ商人のすがたも，見うられる。

はべつの町に、大工はべつの町に、またべつの町には鍛冶屋たちが、べつの町には足袋の職人が、べつの町には着物をつくったり、売ったりする者が……。
……こういう順序で、すべての職業が、それぞれ特定の町をもっている。」

こんにちでも、もと城下町であった都市などでは、鍛冶(屋)町・鉄砲町・塗師屋町・車屋町・大工町・呉服町・魚屋町など、ふるい由緒をもつ町名がのこっている。職業ごとに集団で町をつくっていたなごりである。

士農工商　ヒロンが「こういう順序で」といっているのは、領主にとって必要なもの、たいせつとかんがえられる順序である。士農工商といって、支配する武士の身分はいちばんたかく、米をつくり人びとの生活をささえる農民は、そのつぎとされ、さまざまな道具をつくりだす職人が、これについだ。つくったものを売るだけで金をもうける商人は、いやしい身分として、農工の下におかれた。

この身分のちがいが、そのまま町のながめになってあらわされているところに、江戸時代の特徴があった。町だけではない、社会ぜんたいがそうなっていた。

町には、武士と、その装備や経済をまかなう職人・商人が住み、村には農民が住んでいた。それぞれ、自分のきめられた職業の必要以外に、ゆるしを得ないで町や村をはなれることは、かたく禁止されていた。ぎゃくにいえば、住んでいる場所によって、身分や職業の見当がついたのである。

士農工商　もともと士農工商ということばは、中国の隋・唐の時代につかわれていた。ただし中国では、士は日本とことなって、読書階級＝国の官僚になる階級をさしている。

徳川幕府は支配をより強固にするため、中国の儒教、とくに朱子学をおもくもちいたが、士農工商という身分をあらわすことばにも、それがあらわれている。

身分と人口の比率

身分	比率
将軍	
武士	7%
公家・僧侶	2%
農民	84%
工・商	6%
えた・非人	1%

苗字をゆるされない庶民　身分のちがいをしめすしるしは、ほかにもあった。江戸時代には、武士や公家をのぞいて、一般の庶民は、苗字を名のることはゆるされなかった。

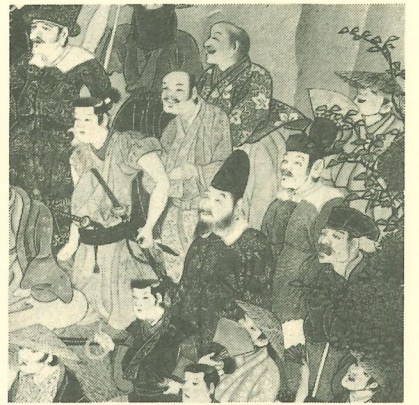
農民は「長篠村百姓甚左衛門」、町人は「両替町家持吉兵衛」などのように、住所と名前を名のった。武士だけが、「天野駿河守家来斎藤景左衛門」というように、主人の官名と自分の苗字・名前を名のった。

農民や町人が、みな苗字をもたなかったというわけではない。ふるい由緒のある家など、苗字をもっていた者も多い。しかし、領主の前にでるときや、役所への届けなど、公式の場でもちいることは、ゆるされなかったのである。

刀も同様である。武士だけが、大小二本の刀を腰にさすことができた。「苗字帯刀御免」といって、農民や町人が、苗字を名のったり、刀をさしたりできるのは、とくべつの功労がみとめられ、ゆるされたばあいにかぎられていた。

ちょんまげと身分制度　宣教師のルイス＝フロイスが、おもしろいことをいっている。

「ヨーロッパ人は、名誉と優越をあごひげによってあらわすが、日本人は、頭の後ろにむすんでつけている小さな髪によってあらわす。」

もちろん、ちょんまげのことである。ちょんまげの形、髪の結いかたも、身分によってことなっていた。だれでも、自由にすきな髪型にすることはゆるされなかった。元結いの糸も、大名は絹を、家来の武士は木綿をもちいるというように差があり、一般の農民は、

月代　江戸時代の男は、一般に頭の頂を、かみそりでそっていた。これが月代で、もとは武士がかぶとをかむると頭がむれるためそったのである（写真中央上）。戦乱がつづいて、武士はつねにそるようになり、やがて武士以外の者もまねるようになった。このため、床屋が発達した。江戸時代、月代をそらなかったのは、公家・医者など一部の人にかぎられていた。

わらでたばねておくのがふつうであった。

このように、身分のちがいが、すがたかたちではっきりと区別されているのも、江戸時代の社会の特徴である。

そして、これらの身分は、親から子へ代だいうけつがれていくのが、たてまえであった。才能があっても、百姓の子は一生百姓としてくらす。武士の子は、すこしぐらいできがわるくても武士であり、支配者である。年貢をおさめる者と、うけとる者とのちがいは、うまれたときにきまっており、死ぬまでつづいた。

このようなきびしい身分制度がしかれたのは、武士の支配する封建社会の秩序をまもるためであった。生産からはなれて、都市の消費生活者となった武士は、この社会のしくみをくずさないために、どうしても、米をつくる者、道具をつくる者、商業に従事する者を、身分として固定しておく必要にせまられていたのである。

身分制度の犠牲者　百姓や職人・商人のさらに下におかれ、最下層の身分とされたのが、えた（穢多）・非人である。彼らこそ、身分制度の最大の被害者であったということができる。

えたとよばれた人びとは、町はずれや村はずれ、川原・谷あい・山すそなど、日あたりや水はけのわるいところ、あるいは、洪水などの災害にあいやすい、くらしの環境としては最低の場所に、住まわされていた。そして、わずかな土地をたがやすほか、死んだ牛馬のとりかたづけや、皮をなめす仕事、それに木や竹の細工を職業としていた。

こじき　非人の多くは，物ごいをしてくらしていた。図は，京都の賀茂川の橋の上で。

非人も、すまいの条件はわるく、多くはこじきをしてくらしていた。年貢がおさめられないで村をにげだした百姓や、貧乏のためおちぶれた町人などのほか、罪をおかした罰として、非人身分におとされた者もいた。

非人は、えたより下の身分であったが、おちぶれてなった者などは、一〇年以内に親類の保証があれば、もとの身分にもどることができた。この点が、生涯その身分をぬけだすことのできなかったえたとは、ことなっている。

えた・非人は、髪は結わないでざんばら髪のまま、頭巾などのかむりものをゆるされない。また帯はつかわず、腰に縄をしめるなど、服装も百姓・町人とはちがったなりをするよう、強制された。

幕府や大名は、えた・非人にいろいろな番人の仕事をさせ、警察の手先につかって、百姓・町人をスパイさせたり、犯人をとらえたり、処刑するときの下働きをさせたりした。

えた・非人とよばれた人びとは、鎌倉時代からいたけれども（→③巻P223）、幕府や大名は、これをいちばんひくい身分とさだめ、人のきらう仕事をさせて、百姓や町人と対立させ、その職業をもっともいやしいものとし、みじめなくるしい生活をおしつけた。

そのねらいは、すでにみたきびしい身分制度をまもるため、百姓や町人が社会に不満をもっても、まだその下にひどいくらしの人びとがいるとおもって、みずからなぐさめる気持ちをおこすよう、また、にくしみを幕府や大名でなく、えた・非人にむけるよう、しむけるところにあったとかんがえられている。

この節を読むにあたって

幕府は、農民のくらしを飢饉からすくいだすかわりに、日常生活のすみずみまで干渉する法令をだした。

京都・大坂などは、幕府の保護をうけて、さらに、にぎわいをまし、商工業もますますさかんとなった。また、江戸の町も、その基礎ができあがった。

文化の面では、桃山文化の流れをくんで、京都の公家や町衆が、王朝の古典文化を再興し、茶の湯・書・建築・絵画・陶芸などに、さらにみがきをかけた。また、武士や民衆の文化もさかんになった。

この五〇年間は、現代の生活や文化のもとがつくられた時代でもあった。その点に気をつけて、この節を読んでほしいとおもう。

民衆の生活と、伝統文化の復興

村のくらし、都市のくらし

寛永の大飢饉　一六三七年（寛永一四年）におこった島原の乱は、あいつぐ凶作にもかかわらず、領主たちがきびしく年貢をとりたてたのが、原因の一つだった。一六三二年からずっと凶作がつづき、一六四二年にはついにそれが頂点にたっして、大飢饉となった。

当時の書物は、「二月から五月にいたり、天下は大飢饉で、飢え死にする者が町まちにみち、百姓や町人でこじきとなる者幾千万、着るものもなく赤はだかとなって、むしろ・こもを身にまとい、道ばたによこになっている。」とのべている。また老中酒井忠勝は、「こんな飢饉は五十年百年のうちでもまれなことだ。」となげいたほどである。

家族を売り、田畑を売り　農民は、大飢饉のなかで、ワラビや、クズの根をほって、でんぷんをとり、ようやく飢えをしのぐありさまであった。しかし、そんななかでも、田植えをし、米をつくって、年貢をおさめるのが百姓のつとめである。だが、その米もとれなかったときは、どうしたのだろう。

夕涼み　一日の農作業をおえた農民の一家が，庭さきのヘチマ棚の下で，夕食後の一時をすごしている。17世紀中ごろ，久隅守景によってえがかれた。

山形藩領のある村では、屋敷をもつ農民が六〇名もいたが、かれらは年貢さえおさめることができず、一六三九年から四二年までの四年間の年貢を、四三年になってようやくおさめた。しかし、そのために、子ども・弟妹、あるいは親まで身売りして、その代金をあてたという。その数じつに六〇名、一戸一人の割合となり、代金は合計一二七両、ぜんぶ年貢として上納された。

また、田畑を売ってしまえば、生活がたちゆかないのに、売りわたしてしまう農民もいた。伊豆の漁村長浜村（静岡県沼津市）では、一六四二年から四三年にかけての田畑の売買証文がのこされている。その一つ、八助という百姓の売渡し証文には、「今年の年貢をおさめることができませんので、いろいろ借金などをたのみましたが、ぜんぶうまくいかず、こまってあなたさまにおねがいしました。何度もおことわりになったのを、むりにおねがいして、この畑を永代売りわたしました。わるい土地で買い手がつかないところを、あなたさまが買ってくださり、ありがたく存じております。」とある。買いとったのは、大川四郎左衛門という、この村の網元であり、名主でもある有力者であった。

幕府の対策　日照りや水害・冷害は、気候の異変が原因ではあるが、それが飢え死にする者までだすような大飢饉になるには、支配者のがわにも原因があった。

一七世紀のはじめ、幕府や大名は、それぞれ領国をかためるため、きびしい検地をおこなって、農民の支配をつよめた。また、一六三五年にさだまった参勤交代の制度は、最初から藩の財政を圧迫し、大名はその費用を農民から年貢をふやすことによって、まかなお

検　地　藩の検地役人が農村へきて，検地竿で田畑の面積や石盛りをしらべているようす。

うとした。

しかし、この寛永の大飢饉は、幕府や大名に、農民から力ずくで年貢をとりたてるだけではなく、農村の実情におうじ、農業の条件をととのえるなど、きめのこまかい農民支配をかんがえなければならないことを気づかせた。

一六四二年、幕府は衣食住をぜいたくにしてはならない、本田畑にはタバコをつくってはならない、などと命じるとともに、草とり、用水の配分、仕事の助けあいなどにも気をつけるように命じたが、これは幕府がいよいよ一人一人の農民の農業経営にまで干渉しはじめたことをしめしている。

翌年三月には、「田畑永代売買禁止令」（→P230）をふくむ農民への触書「土民仕置覚」が発せられた。それは、田畑の永代売買などを禁止することによって、本百姓を基本とする農村のしくみをくずさぬようにすることが、最大のねらいであった。

一六四九年（慶安二年）に幕府からだされた「慶安の御触書」（→P232）のこまかな生活への干渉も、そのもとには、寛永の大飢饉のにがい経験があったからであった。しかし、それは農民の生活をゆたかにのばそうという気持ちからではなく、「飢饉のときをおもいだして、豆の葉、いもの葉などをたべても、米をくいつぶさず」、年貢としての米を確保させる目的からだったのである。

京都のにぎわい

関ケ原の戦いから三年後に完成した二条城は、京都の人びとにも、あらためて徳川氏の時代がやってきたことをさとらせた。豊臣氏がほろ

京都の町並み　ゆきかう人びとのなかには，荷物をかついだり頭にのせた商人，犬をつれた子どももいる。中央左よりの店は，呉服屋か染物屋であろうか。家いえは中二階になり，この横町には桶屋・枡屋など職人の店がならんでいる。

んだ大坂の陣も京都にはほとんど関係なく、京都は幕府の支配と保護のもとに、ますます発展した。京都には、茶屋四郎次郎・角倉了以らの特権商人が多く、彼らは、朱印船貿易や幕府御用の呉服師などをつとめて、大きな利益をあげていた。また大名も、高級絹織物や工芸品などを京都に注文したので、商工業が発達し、町がひろがり、京都の戸数は、一六三四年、三万五〇〇〇戸をこすほどになった。

このころの京都のようすをしめす「洛中洛外図屏風」を見ると、戦国時代の町屋（家）とはかわって（→P22）、中二階の町屋が多く、つくりもよくなり、店には多くの商品がならべられ、職人がたちはたらき、通りには、荷をかついだ行商人や、米俵などをつんだ牛馬がさかんに行き来しているようすがえがかれている。また、四条河原や六条の遊び場などでは、歌舞伎やさまざまな芸能が、はなやかにくりひろげられた。

しかし、幕府は、このような京都の繁栄をしっかりとにぎり、朝廷や西国大名のうごきを監視するため、所司代や町奉行をおいて、統制をつよめた。

かつて自治をになった町の年寄たちは、所司代などの下役として、めんどうな仕事をおしつけられるため、なりてがすくなくなり、行政の事務は、町がやとった町代や用人にまかされるようになった。町衆は、自治の世界から、文化の世界へ関心をつよめていった。

大坂の復興

大坂の陣で焼かれた大坂は、あたらしく領主となった家康の孫の松平忠明のもとで、復興しつつあった。忠明は、町並みをあらため、ととのえるとともに、もとの大坂城の三の丸の地に伏見の町人をまねいて市街をつくり、京町堀・江戸

大阪の呼び名　大阪は、室町時代に蓮如がたてた石山本願寺の寺内町がそのはじまりであるが、彼の手紙には「小坂」とあり、その小坂の小が大にかわって大坂になったといわれる。

　秀吉時代の大坂は、東横堀から東をさしたが、大坂夏の陣のあと東横堀から西もさすようになり、これが南北両組にわかれ、さらに大川から北の天満もくわえて、大坂三郷というようになった。

　大阪の阪は、いまはだれも阪の字を書くが、江戸時代には坂の字をもちいた。明治になって、坂ではころがるからと、阪の字をもちいるようになった、と俗にいわれている。

堀をひらき、道頓堀をひろげるなど、大坂の町の発展につとめた。

　一六一九年、大坂は幕府の直轄領となり、一六三四年には、将軍家光が土地にかける税を免除したので人びとがながれこみ、一六六五年には、人口約二七万人といわれるほどになった。

　京都や堺が海外からの輸入原料にたより、大名などの需要におうじる高級品の生産が中心だったのにたいし、大坂の手工業は、近郊の農村で生産された木綿類の加工に代表されるように、国産の原料を中心に、庶民の必要におうじるものが多かった。そのうえ、寛永ごろから諸藩の年貢米が大坂に回送・販売されるようになり、大坂は「天下の台所」となる条件をしだいにそなえていった。

　京都の町人でも、こうしたうごきをよみとった者は、大坂へ進出しはじめた。銅のあたらしい製錬法で成功した住友家は、一六二四年ころ京都から大坂にうつり、その技術を人びとにおしえて、大坂一の銅の貿易商となり、のちには両替商（金融業）をもいとなむようになる。

江戸図屏風の世界　家康が江戸にはいったのは、一五九〇年であったが、江戸城が完成したのは、家光の時代であった。三代四七年間をかけて、ようやく完成したのである。六〇メートルちかい高さをもつ五重の大天守を中心とする江戸城は、きわめて豪壮華美なものであった（→口絵P173）。

　また、江戸城をとりまいてたちならぶ大名屋敷も、江戸城におとらず豪壮なもので、大

たちならぶ大名屋敷　江戸城の桜田門外にたてられた大名屋敷。上から彦根の井伊家，広島の浅野家，米沢の上杉家，山口の毛利家など大大名の屋敷がならんでいた。

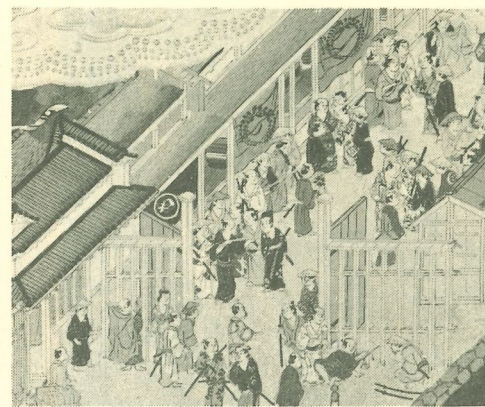
道寺友山は『落穂集追加』という書物のなかで、つぎのようにのべている。

「三宅坂にある井伊家の上屋敷は、自分が子どものころじっさいに見物したことがあるが、それは玄関をはじめ、来客用のおもだった部屋の襖は、ことごとく金襖に絵をえがいたものであった。表門は一八メートル以上もの幅のある櫓造の大門で、小さな馬ほどの大きさの金箔ぬりの犀の彫りものが五ひき、かざりにつけてあった。そのほかの国持大名の屋敷も、たいていは二階門造にして、いろいろな彫りものがかざってあり、五万石以上もの大名であれば、玄関や書院を金襖にしない者はなかった。なかでもりっぱだったのは、江戸城内にあった御三家の屋敷で、将軍をむかえる御成門は唐破風造、ぜんぶ金箔ぬりに彫りものがしてあった。また、江戸城の大手先にあった松平忠昌の屋敷の御成門はことにみごとで、世間では『日暮らしの御門』とよんでいた。」

　「日暮らしの門」とは、一日じゅう見ていても、見あきないという意味で、家光のたてた日光東照宮の陽明門がふつうそうよばれるが、それとおなじような華麗な門が、当時の大名屋敷には数多くみられた。いわばこの時期の江戸の大名屋敷は、大名たちがその勢威をしめすために、城の一部を江戸にうつしつくったともいえるのである。

　「江戸図屏風」は、まさにこのようなすがたを絵にえがいたものであった。

江戸は諸国のいれこみ　しかし、江戸はいっぽうで、参勤交代によって、全国の武士があつまってはじめてできた都市である。ことばも

けんか　戦国の名ごりで，けんかがたえなかった。
刀市　江戸の京橋わきでひらかれている刀市。

習慣もちがう他国者どうし、ささいなことからも争いがおこった。また、工事に故郷からかりだされてきた人夫、気のあらい職人、さらには一旗あげようと地方からながれこんできた人びとで、江戸の町は活気にあふれてはいたが、殺伐とした町でもあった。

『慶長見聞集』には、「江戸大橋に毎日刀市立事」として、

「江戸大橋のあたりに、なんとなく刀を売ろうともちだしたが、近年は、貴賤を問わず多くの人びとがあつまり、刀市がひらかれ、刀をぬきつらねて、ものすさまじいありさまである。かたきのいる人などは、この道をとおるとろくなことがないだろう。そのうえ、大盗人が多くたちまじっていて、とらえて御奉行へつきだせば、火あぶり・はりつけにしてしまう。」

と、のべている。「江戸図屛風」も、京橋のたもとで、刀をぬいて品定めする人びとのすがたをえがいており、街頭で刀市がたつほどあらあらしい空気が、江戸の町にはあふれていたのである。

このような江戸の雰囲気は、幕府の統制がつよまるにつれて、しだいにおさまっていったが、なおその後もしばらくは、旗本奴・町奴など「かぶき者」や、男伊達のすがたとしてのこったのである。

城下町と鉱山町　将軍の城下町である江戸の町は、いちおう家光の時代にかたちをなしたように、大名の城下町も、そのころから大改造がおこなわれて、藩の政治・経済の中心地としての性格をつよめていった。

佐渡の金山　16，17世紀に金銀山はさかえたが，日光のあたらない地下ではたらく，不健康さから，人夫はつぎつぎに死んだ。図の右は排水，中央は金をほりとっている場面。

たとえば、水戸では、一六二五年、城の東の低地に田町をひらき、それまで城の西郭内にいた町人をここにうつした。江戸街道などの起点がここにおかれ、多くの問屋が軒をならべた。城下町は、武士とそれに付属する商工業者の町から、藩領ぜんたいの政治・経済の中心都市へと、その性格をかえたのである。

また、一七世紀前半は、日本産の銀が世界の銀の産出額の三分の一をしめ、最大の輸出品であっただけに、銀をほる鉱山町もたいへんさかえた。佐渡・延沢（山形県）・院内（秋田県）などの銀山には、鉱山の経営者や労働者のほか、商人・遊女が住み、延沢などは、山の中の小さな町でありながら、最盛期の人口が二万八〇〇〇人もあったといわれる。

このほか、参勤交代の制がさだまった寛永ごろから、東海道・中山道などには、宿場町があたらしくうまれるようになった。

王朝文化の復興

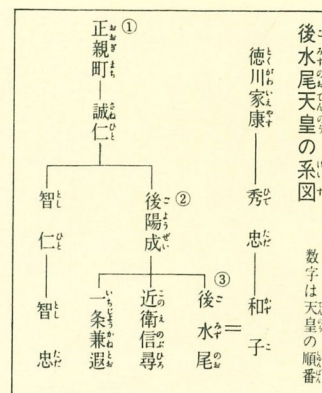
後水尾天皇をめぐる人びと　一六二九年、いわゆる紫衣事件（→P220）で、後水尾天皇は位をしりぞいた。天皇はもともと学問・芸能にすぐれ、和歌や歌学をはじめ、多くの著作をのこしているほか、茶・花などもこのみ、宮廷文化の中心人物であった。

後水尾天皇のまわりには、血のつながる人びとだけでも、すぐれた文化人が何人もお

大徳寺の孤篷庵　小堀遠州が，自分の隠居所としてたてた。18世紀末に一度焼けている。

後水尾天皇の系図　数字は天皇の順番

徳川家康―秀忠―和子

①正親町―誠仁―②後陽成―③後水尾＝和子
　　　　　　　　　　　　　―近衛信尋
　　　　　　　　　　　　　―一条兼遐
　　　　　　　―智仁―智忠

り、おたがいにしたしいまじわりをもっていた。

天皇の中宮東福門院（秀忠の娘和子）も絵や茶・花を趣味とし、ながい京都での生活のあいだに、京都の宮廷趣味を身につけていた。また、桂離宮をつくった八条宮智仁親王は天皇の父後陽成天皇の弟にあたる。本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに寛永の三筆の一人とされた近衛信尹は、天皇の母方の伯父にあたっていた。そのほか、茶人でもあり書家としても有名な関白近衛信尋（信尹の養子）も、摂政一条兼遐も、ともに後水尾天皇の弟であった。

これらの人びとは、また、それぞれが本阿弥光悦・俵屋宗達のような町衆や、小堀遠州・金森宗和・千宗旦らの茶人たちとしたしくまじわり、寛永期の京都には、後水尾天皇を頂点とする、すそ野のひろい文化社会が形づくられていたのである。

小堀遠州の世界

それでは、まずその文化社会への入口を茶の世界にもとめてみよう。千利休が秀吉の怒りにふれて、自殺させられたことは、まえにのべたが（→P165）、その弟子で将軍秀忠の茶の師範役であった古田織部も、大坂の陣のとき、豊臣方に内通したというたがいをかけられ、自害した。

その弟子小堀遠州は、幕府の作事奉行として、二条城や、後水尾天皇（上皇）の仙洞御所をつくったりしたが、もっとも有名なものは、京都大徳寺孤篷庵の茶室と、庭園である。遠州のことばに、「春は霞、夏は青葉がくれの郭公鳥、秋はいと淋しさまさる夕の空、冬は雪の暁、いずれも茶の湯の風情ぞかし。」と、『枕草子』をおもわせるものがある

東福門院の入内　2代将軍秀忠の娘和子は，1620年，後水尾天皇の妃として入内した。

が、遠州のもとめた境地は、まさに王朝的な世界であった。

このような遠州の世界は、「きれいさび」とよばれた。「わび」が、自然の世界のなかでわすれられ、とりのこされた、わびしいものへの共感をたいせつにしたのにたいし、「さび」は、金属のさびからでたことばで、みがけば光をとりもどすような状態をさしていた。遠州のきれいさびは、文字どおり、「さび」にみがきをかけたうつくしさを、さすものであった。

姫宗和と乞食宗旦

古田織部が切腹した大坂の陣で大名の地位をすてた人物に、金森重近がいる。彼はその後、大徳寺にはいって僧になり、宗和と号した。彼も、利休の子道安の弟子で、茶の道で名を知られ、近衛信尋・一条兼遐らをつうじて宮廷に出入りするようになった。その茶はきめこまかく、「姫宗和」とよばれて、公家たちに愛された。東福門院も彼の茶の弟子となり、さらに後水尾天皇や、その皇子・皇女も、彼から茶をまなんだ。

平安時代いらいの由緒をもつ御室（京都市右京区）の仁和寺は、ながくあれたままであったが、幕府の助けで御所のふるい建物をうつし、再興された。この御室で、宗和の指導のもとに陶器づくりをおこなったのが、京焼の祖といわれる野々村仁清であった。仁清の焼きものがもつあたたかな感覚は、宗和の茶の世界と共通するものがあったのだろう。仁清はここで多くのすぐれた焼きものをつくりあげ、京焼の伝統を花ひらかせた（→口絵P178）。

いっぽう、利休の理想とする「わび茶」をまもりつづけたのが、利休の孫千宗旦であっ

修学院と桂　右は修学院離宮の中御茶屋楽只軒庭園。上は桂離宮松琴亭一の間の石畳模様。

た。彼は、祖父利休が秀吉につかえたばかりに、切腹しなければならなかったことをおもい、権力者とむすびつくことをしなかった。近衛信尋が宗旦の隠居所をたずねたとき、宗旦はふつうの茶道具で茶をだしたので、信尋が茶の作法とことなるではないか、とたずねたところ、貴人がこのようなあばらやをたずねることはないことであり、むしろふつうの茶道具でさしあげたほうが、心をおなぐさめすることができるとおもったからだ、とこたえたという。宗旦が、このように信尋のような人物をも貴人あつかいせずに、わび茶の点前をおこなったところに、「乞食宗旦」といわれた理由がある。

しかし彼も、東福門院のまねきにおうじて、茶道具一式を献上したとき、女官たちのために紅色の茶巾を考案して、茶碗についた口紅で茶巾のよごれるのを、目だたぬようにしたという。このような心づかいもまた、わび茶の世界であったのかもしれない。

桂離宮と修学院離宮

いままでにもみてきたように、宮廷の人びとがあこがれたのは、平安時代の王朝文化であった。

京都の西、桂の里は、平安時代の貴族の遊楽の地で、藤原道長もここに桂山荘をたてた。また、『源氏物語』の「松風の巻」の舞台となったほか、多くの歌にもよまれた有名な場所である。

細川幽斎に歌学をまなんで、王朝にあこがれた八条宮智仁親王は、一六二〇年ごろから、すべての資産をつぎこんで、この地に桂離宮をつくりはじめ、その皇子智忠親王が、一六四五年ごろに完成させた（→口絵P180）。

光悦懐紙（右）　金泥の下絵の上に書かれた美しい書。
嵯峨本つれづれ草（左）　本が１個の芸術品であった。

桂離宮の造営は、『源氏物語』の桂殿の再現をめざしていたが、いっぽうでは、この時代になって完成した書院造と、茶の湯につながるさまざまな意匠が基本となっていた。

後水尾天皇は、譲位ののち、京都の北に、いまも円通寺としてそのおもかげをとどめる幡枝御所をいとなみ、さらに、皇女梅宮の草庵のあった修学院で、離宮の造営にかかった。修学院離宮は、一六六一年に完成したが、上・中・下の三つの茶屋を中心に、比叡山を背景としたこの離宮の規模は、たいへん雄大なものであった。

嵯峨本の世界

町衆の世界に目をうつしてみよう。朱印船貿易に活躍し、大堰川・高瀬川などをひらいた角倉了以（→P206）の子素庵は、父とともに家業にはげむいっぽう、儒学や漢詩文に興味をもち、儒学者の藤原惺窩ともしたしかった。のちにのべる林羅山を惺窩に紹介したのも素庵である。彼は和歌をたしなみ、本阿弥光悦を師として、気品のたかい書をのこしている。

素庵にとってわすれられない大事業は、そのすまいの嵯峨（京都市右京区）にちなんで名づけられた嵯峨本の出版であろう。一六〇四年から一五年ごろまでつづいたこの事業は、本阿弥光悦の協力をえて、『伊勢物語』『方丈記』『徒然草』などの古典や、『観世流謡本』などの芸能書をおもに出版したものであった。それまでは、漢文の書物しか出版されなかったが、嵯峨本はひらがなまじりの和書であり、わが国の和書出版のさきがけでもあった。しかも、そのすべてが、謡曲など王朝文学やその影響をつよくうけたものだったことは、注目してよいだろう。

舟橋蒔絵の硯箱 光悦作。鉛で橋をかけ，銀で歌の文字をあらわした，独創的なデザインが目をひく。

不二山 光悦作。光悦の茶碗は，大胆ななかにもこまやかさをもっている。

嵯峨本は、あわい色あいの色紙に、四季の花や鳥や蝶、あるいは月・波・橋などを雲母刷りした上に、光悦が版下を書いた木活字を刷りあげたもので、いかにもみやびやかなものであった。なお、その装飾風の下絵をえがいたのは、光悦の従妹の夫である俵屋宗達ではなかったかといわれている。

本阿弥光悦と鷹ケ峰の人びと

光悦のでた本阿弥家は、室町初期から、刀の鑑定や研ぎでは最高の権威をもつ名家であった。しかし、光悦を有名にしたのは、刀ではなく、寛永の三筆といわれたほどの書であり、陶芸であり、蒔絵であった。光悦流とよばれる、のびのびとした和風の書体、力づよさとあたたかさをあわせもつ「不二山」などの茶碗、目をみはるような新鮮なデザインの「舟橋蒔絵硯箱」（口絵P178）などの蒔絵。これらは、経済的になんの不足もなかった光悦が、金や名誉をめあてにつくったものではないだけに、見る人の心をうごかすものをもっている。

また、光悦が生涯の友としたのは、茶であった。彼は古田織部に茶の湯をおそわり、小堀遠州とは友人であったが、彼がもっとも尊敬したのは千宗旦であった。「名利にはしらぬ宗旦」と、へつらいごとがきらいだという光悦とは、かよいあうところが多かったにちがいない。

晩年、子孫に皇室の御用をそまつにしてはならないと説き、藤原惺窩のもとをはなれ、江戸へくだって幕府おかかえの儒学者となった林羅山を、「今時めける（調子にのる）林道春（羅山）」とはげしく非難し、羅山が『徒然草』や『源氏物語』をばかにするのは、朱子学にかぶれたもので、こっけいなことだ、とわらったのも光悦であった。

一六一五年、大坂夏の陣のあと、光悦は、家康から京都の北の鷹ケ峰に領地をあたえられ、一族の者や、紙屋宗二・筆屋妙喜・蒔絵師宗沢らとともに、そこへうつり住んだ。茶屋四郎次郎や、光悦のおいで、元禄時代に活躍する光琳・乾山の祖父にあたる尾形宗柏も同行した。

いずれも、当時一流の文化人であった。それればかりでなく、彼らは、かつて京都の自治をになった日蓮宗の信者で、つよい法華信仰にささえられた人びとばかりであった。光悦は一六三七年、八〇歳でなくなるまで、ここに住んで、書や茶碗の制作にあたり、権力にへつらうことも、またひるむこともなく、ゆうゆうと一生をおわった。

俵屋宗達

光悦にくらべて、彼とならび称せられる俵屋宗達については、その伝記はまったくといってよいくらいわかっていない。宗達は、扇絵をはじめ、色紙や織物の下絵をかく店の主人であったらしく、京都町衆の一人であったことはたしかである。

宗達は、広島城主の福島正則から、厳島神社の「平家納経」（→②巻P204）の修理をたのまれ、いくつかの絵をかいて、王朝美術からその技法をまなんだとおもわれる。その後、光悦としたしくして、たがいにその腕をみがいていった。

やがて、雁金屋とよばれた尾形宗柏が東福門院出入りの呉服師であったことから、その注文をうけるようになったとかんがえられ、一条兼遐が兄後水尾天皇にあてた手紙にも、

舞楽図 宗達作。口絵の風神雷神図とともに，宗達の代表作とされる。金箔をはりつめた空間に，あざやかな色彩の舞人をえがく。

藤原惺窩（1561〜1619）　歌学の名門で貴族の冷泉家の生まれ。わが国の儒学の基礎をきずいた。日本古典の教養にもひいでていた。

もの知りの羅山　一六〇五年、家康は京都の二条城に、平安時代から儒学を家の学問にしていた清原秀賢や、五山の一つ相国寺の学僧の承兌らをまねいた。

そのとき、家康はきゅうに「後漢の光武帝は、前漢の最初の皇帝の高祖から何代目か。」とか、「中国の戦国時代、楚の国の屈原が愛した蘭の種類はなにか。」など、中国のこまかな知識を質問した。一座の者が、だれもこたえられなかったのに、末席にいた羅山だけがすらすらみなこたえた。

それからのち、羅山は家康に信任されて、幕府につかえることになったのである。

林羅山（1583〜1657）

宗達の屏風三双が宮中の文庫にあるといっている。このような公家とのまじわりが、『源氏物語』に題材をとった「関屋澪標図屏風」や「舞楽図屏風」などをうみだし、平安時代の大和絵を、町衆としてのあたらしい感覚で復興させていったのである。

多様化する文化

博識を買われた林羅山

江戸時代、学問といえば、儒学（→P167）をさすようになるが、その基礎をきずいたのは、光悦から「今時めける林道春」と非難された林羅山であった。

室町時代の儒学は、五山の禅僧が禅をまなぶかたわら教養としてまなんだものか、公家の家に、秘伝としてつたえられたものであったが、五山の一つ相国寺の僧だった藤原惺窩は、儒学の専門家として、儒学の理想をじっさいにおこなおうとかんがえた。彼の考えに共鳴したのが、建仁寺の僧であった羅山である。羅山は惺窩の弟子となり、僧衣をすて、髪をたくわえて、公開の席で論語を講義し、秘伝とされてきた権威をうちやぶった。

そののち、学問好きの家康は惺窩をまねこうとしたが、惺窩はことわり、羅山が家康につかえることになった。しかし、家康は、羅山の博識を買ったのであって、彼の奉じる朱子学に共鳴したわけでも、見識を評価したのでもなかった。彼のもっている儒学や歴史の知識のなかに、政治のうえで参考になるものがあれば、それを得ようとかんがえただけである。だから、仏教は益がなく、むしろ害があると批判した羅山も、ふたたび頭をそって、道春という僧名でつかえさせられたのである。事実、羅山が家康の時代に活躍したのは、大坂の陣の発端となった京都方広寺の鐘の銘が、家康をのろうものと、言いがかりをつけたことぐらいであった（→P197）。

むしろ、この時期には、黒衣の宰相とあだ名された京都南禅寺の僧、金地院崇伝のほうが、「武家諸法度」を起草するなど、はるかに大きな力をもっていた。

勢力をひろげる朱子学

しかし、がまんをしていたかいはあった。一六三二年、家光は羅山を学問の師とし、その年、尾張藩主徳川義直は、江戸忍岡に孔子をまつった聖堂を羅山のためにたてた。これが元禄時代、幕府の手によって湯島にうつされ、こんにちまでつづくことになる。

一六三五年の武家諸法度は、元和のそれをあらためたものであったが、こんどは羅山が起草した。そして、諸大名も惺窩や羅山の門人を召しかかえるようになり、朱子学はしだいに武士の教養の学問として、その地位をかためていくことになるのである。

権力の象徴、東照宮

大坂夏の陣の翌年（一六一六年）、家康はなくなり、駿河（静岡県）の久能山にほうむられた。幕府は、秀吉がなくなったのち、豊国大明神としてまつられたのに対抗し、その翌年、「東照大権現」の神号を朝廷からもらって、日光（栃木県）に改葬した。これが日光東照宮である。さらに、祖父家康をたいへん尊敬していた家光のとき、大改築がおこなわれた。

女歌舞伎　江戸時代のはじめに全盛となったが，まもなく幕府によって禁止される。観客のはばはひろく，南蛮人もすがたをみせた。

権現造の日光東照宮は、陽明門をはじめ、一つ一つの部分をとれば、たいへんみごとな装飾ではあるが、豪壮という感じはうけない。桃山時代の城や屋敷にくらべれば、それらをせいいっぱいちぢめてつくりあげたという感じさえする（→口絵174）。政治とのかかわりをすてた八条宮の桂離宮が、自然ととけあってうつくしさをかもしだしているのと対照的に、幕府の権威をしめそうと政治を全面におしだした東照宮は、この時期の文化のもう一つの側面をみせているともいえよう。

若衆歌舞伎から野郎歌舞伎へ

さて、最後に民衆芸能に目をむけてみよう。桃山文化の時代に成立した歌舞伎踊り・人形浄瑠璃などは、家光の寛永時代にはいると、さらにいちだんとさかんになった。しかし、女性が男のすがたをしておどり、しかも遊女がしだいに主役をつとめるようになったことは、支配者のがわからみれば、にがにがしいことであった。幕府は、一六二九年、ついに女歌舞伎を禁止した。

その結果、女歌舞伎のかげにかくれていた若衆歌舞伎が、にわかに人気をあつめるようになった。若衆歌舞伎というのは、前髪をまだそりおとさず元服していない美少年が演じるものだったが、当時の社会では、男性が男性をかわいがる風潮がさかんであったので、風俗をみだすという点では、女歌舞伎とかわらなかった。そこで幕府は、一六五二年、ふたたびこれも禁止した。

その結果、歌舞伎は前髪をそりおとしたおとなの男がするものとなった。これがいまおこなわれている歌舞伎の前身、野郎歌舞伎である。それと同時に、歌舞伎は、踊りから劇へとかわり、女形という、男性でありながら女性の役を演じる俳優が登場してくることになる。

野郎歌舞伎　女歌舞伎・若衆歌舞伎があいついで禁止され，男のおとなが演ずる野郎歌舞伎がはじまる。それまでの踊り主体から，演劇主体にかわった。これがいまもつづく歌舞伎のはじまりである。
←

麻から木綿へ

いままで、ずっとみてきたように、一七世紀前半、とくに寛永という時期（一六二四年〜四三年）は、書院造にしても、茶や花、あるいは歌舞伎などの民衆芸能などにしても、多かれ少なかれ変化をうけ、そこでできあがったものが、現代にも伝統的文化として生きつづけている。そうした意味で、寛永期は、現代につながる伝統的文化の起点であるとかんがえられる。

また、これまでながいあいだ、日本人の大部分は、麻の着物を着ていて、木綿は貴重品であったが、この時期、綿の栽培が国内で急速にひろまり、庶民まで木綿を着るようになった。木綿は、紺や紅に染めやすく、日本人の衣服は、墨色の世界から、あざやかないろどりの世界へとかわった。風俗の革命であった。また、農業生産力が安定するにつれ、人びとの食事が二食から三食にかわったことも、わすれてはならないだろう。

このように、一七世紀前半は、庶民の生活史という点からみても、大きな転換期となったのである。

四年間、一枚の着物
——戦国の女と子ども——

城をのがれて

関ケ原の戦いにさいし、西軍の石田三成のまもる大垣城から、ひそかにぬけだした夫婦とその娘、家来四人ばかりがいた。

城は東軍に包囲され、ふつうならとてものがれられるものではない。しかし、たまたまこの夫は、むかし徳川家康に習字をおしえたことがあった。東軍からの矢文で、にげるならたすけよう、とのすすめをうけた一家は、はしごと縄をつたって石垣をおり、たらいにのって堀をわたった。

一キロもいかないうちに、身重の妻は緊張とはげしい運動のせいか、きゅうに産気づき、赤ん坊をうみおとした。

しかし、どうすることもできない。田の水で産湯をつかい、赤ん坊は家来がだき、妻は夫の肩におわれて、そのままにげのびた。

兄と妹と

このときの娘が、年をとってから子どもたちに話してきかせた物語が、つたわっている。

彼女は近江（滋賀県）のうまれであったが、小さいころは着物もなく、一三歳のときはじめて、手づくりの花染のひとえものを着せてもらった。花染は、露草のしるでそめたうす桃色の、女の子らしい色である。だが、それ一枚しかなく、一七歳になるまで着ていたので、すねがでてはずかしく、せめて、すねのかくれる着物を着たいとおもった。

そのころは、「昼飯などくうということは、夢にもないこと」であった。朝夕に、雑炊をたべていた。

彼女に兄がいて、ときどき山へ鉄砲を打ちにでかけた。その日は、朝とくに菜飯をたき、昼の弁当にもっていく。すると、彼女も菜飯をたべさせてもらえる。それがうれしくてならないので、兄さまに、たびたび鉄砲打ちにいってほしいとねだった。

三〇〇石の知行をうけていたという武士の娘の、これが子ども時代の生活であった。

話は、もとにもどる。大垣の城には、

戦いのなかで

大ぜいの女や子どもが籠城していた。もともと、戦いになると、大名は、寝返りをふせぐ人質の意味もあって、家来たちの妻子を城にいれた。

戦闘がはじまると、女たちは老いもわかきも天守にあつめられ、鉄砲の弾丸をつくる作業に動員された。鉛のかたまりを鋳鍋にとかしこみ、小さな、まるい玉にするのである。

首の化粧　戦場で討ちとった首の化粧は女の仕事だった。

天守には、味方がとった敵の首がならべられる。武士にとっては、戦いでてがらをたて、知行をふやす証拠となるものであったから、それぞれ札をつけておいてある。「おはぐろ首」といって、歯を黒くそめたのは、たかい地位にある武士の首で、それだけてがらも大きい。そこで、味方の武士のなかには、女たちに、白歯の首におはぐろをつけてほしい、とたのむ者もいた。血のにおいにつつまれて寝起きしながら、なれると、

「首もこわいものでは、あらない。」

と、彼女はいっている。

ときどき、敵方のはなった石火矢（大砲）で、櫓がゆらゆらとゆれる。ひかったかとおもうと、地もさけるようなすさまじい音がおそう。気のよわい女は、たちまち目をまわしてたおれる。「生きた心地もなく、ただものおそろしや、こわやとばかり」われも人も、おもった。

落城の日がちかづき、一家に脱出をすすめる矢文がきた日、一四歳になる弟は、敵の鉄砲の玉にあたり、苦しさに体をよじらせながら死んでいった。

アジアの諸帝国と民衆の動き
——明の貿易統制から大航海時代へ——

ここでは、本巻があつかう時代の世界のうごきをかんたんにまとめてみた。

中国社会のうごき

日本で応仁の乱がおこり、戦国の動乱をへて、やがて江戸幕府の支配がかたまっていくまでのあいだは、日本社会の大きな転換期であり、民衆の活動もさかんであった。おなじころ、中国の社会にも変化がおこり、やはり民衆の活発なうごきがみられたのである。

中国では、一四世紀後半から明王朝(一三六八～一六四四年)が成立していたが、この時代には、とくに中国の中部や南部で、大地主制が発達した。地主たちは、農民に土地を貸しして耕作をまかせ、農民の支払う小作料にたよって、生活していた。彼らのなかには、都市にうつり住んで、官吏になったり、商業に手をだしたりして、ますます金持ちになり、土地の所有をふやしていく者が多かった。

これにたいして、農村の農民たちも、手をつないで地主に反抗した。こういうばあい、地方の役所はたいてい地主の肩をもったので、小作料への不満からおこった農民の反抗が、大規模な反乱に発展した例もある。

明代には、各地の特産物が商品として売買されたので、農民たちの生活も大きくかわって、商品作物をつくり、貨幣を手にするようになった。とくに、経済がもっともすすんだ長江(揚子江)下流地帯では、農民たちは綿花を栽培して、綿糸や綿織物をつくり、あるいは蚕を飼って、生糸や絹織物をつくった。

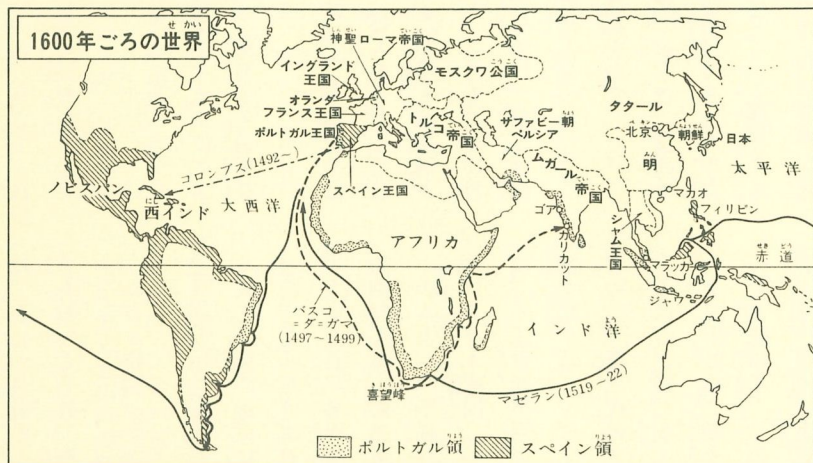
この地方の中心の都市には、織機を何台もそなえた工場もあった。農民の家いえや都市の工場でつくられた織物は、商人の手で全国に売りだされた。もちろん、これによっていちばん勢力を得たのは商人であるが、農民も力をたくわえて、地主に反抗することができるようになったのである。

倭寇と貿易

中国民衆の活動は、海上でもさかんになった。前巻でのべたように、明ではじめ、中国人の海外渡航を禁じ、朝貢貿易によって政府が貿易を独占していた。しかし、一五世紀後半には、浙江(チョーチャン)・福建(フーチエン)・広東など、中国南部海岸地方の商人たちによって密貿易がさかんとなり、一六世紀には、倭寇が再発することになった。

倭寇ははじめ、元の末ごろから、日本の海賊が朝鮮・中国の沿岸をあらしたものであるが、これらは日明貿易がはじまると、いったんしずまった。明の中ごろ以後再発した倭寇は、明の貿易統制に反抗して武装した中国海岸地方の貿易商人が、主としてひきおこしたものである。

もちろんこのころは、日本人の海外活動もさかんになり、ポルトガル人もアジアにあらわれるようになっていたので、倭寇には、これらの人びともくわわった。

1600年ごろの世界

倭寇は、一六世紀後半に鎮圧されたが、そのあと、福建の密貿易商人からでた鄭芝竜が、明政府のうしろだてを得て、日本から東南アジアにいたるひろい海域の貿易を、一手ににぎった。この鄭芝竜と、日本の平戸の女性との間にうまれた鄭成功は、のちに中国の清王朝に反抗して、はなばなしい活躍をするのである。

民衆の反抗

一六世紀末、戦国の動乱を統一した豊臣秀吉は、日本人の海外活動を奨励するとともに、朝鮮侵略にのりだした。しかし侵略は、朝鮮民衆の抵抗や水軍の活動、明の援兵などによって、失敗におわった。

明ではおなじころ、辺境で反乱がおこり、朝鮮出兵とかさなったので、

軍事費がかさんで、国家財政がくるしくなった。そこで、政府は、役人を各地に派遣して、税をとりたて、民衆をくるしめた。

経済がすすんだ長江下流地帯では、とりたてもとくべつにきびしく、役人たちは、かたっぱしから財産をまきあげてあるいたから、おりからの不況とかさなって、倒産する織物業者が多かった。

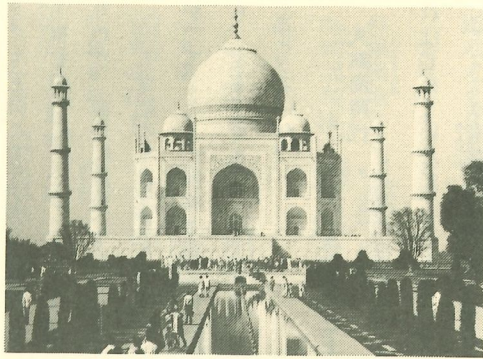
この地方の中心の蘇州（スーチョウ）では、一七世紀のはじめ、失業した労働者らが暴動をおこし、役人をさがしては殺してまわった。政府のやりかたを非難した知識人が逮捕されると、民衆は役所にすわりこんで抗議し、これもついに役人を殺す暴動になった。蘇州のまわりの農村では、農民は団結して、地主に小作米をださないことを約束しあった。また、地主の家の奴隷たちも、自由をもとめて反乱をおこした。

北中国では、貧乏な自作農が多かったが、彼らは、破産すれば流民となるほかなかった。陝西北部の農民であった李自成らは、これらの流民をひきいて反乱をおこし、土地を平等にわけようではないかと、農民らによびかけた。その部隊は、長江から北の全域をあらしまわり、一六四四年には、北京をおとしいれ、明王朝をほろぼしてしまった。

ムガル帝国とオスマン帝国

西方のイスラム世界では、一六世紀はじめ、チムール帝国（一三七〇～一五〇〇年）が崩壊して、中央アジアにはトルコ系ウズベク族の国ぐにが、イランにはサファビー朝（一五〇二～一七三六年）がうまれた。サファビー朝は、アラビア人の征服いらい、長年異民族の支配をうけてきたイラン民族が、独立を回復したものである。

チムールの子孫バーブルは、国を追われてインドにはいり、ムガル帝国（一五二六～一八五八年）をたてた。インドでは、一三世紀いらいイスラム教徒が支配し、インドの民族宗教を信ずるヒンズー教徒と、イスラム教徒との対立がつづいていた。第三代のアクバル帝は、両教徒の対立をゆるめるようにつとめ、全インドを統一する強大な国をつくった。

アクバルは、都をデリーから東南のアグラにうつしたが、一七世紀前半、この地にタージ＝マハルがたてられた。タージ＝マハルは、第五代皇帝のシャー＝ジャハーンが、妃の墓

タージ＝マハル　18年の歳月をかけた大理石づくりの廟。

をおく廟としてたてたもので、世界でももっともうつくしい建物の一つにかぞえられている。

小アジア（いまのトルコの地）には、はやくからオスマン＝トルコが国をたてていたが、この国は一四五三年、コンスタンチノープル（いまのイスタンブール）を占領して、東ローマ帝国をほろぼし、東ヨーロッパ・北アフリカに進出して、アジア内陸から地中海東部にいたる貿易路を、手中におさめた。

ヨーロッパ文明との出会い

しかし、ポルトガル人のバスコ＝ダ＝ガマは、アフリカの南をまわってインド洋をわたり、一四九八年、インド西岸に到達した。まもなくヨーロッパ人は、中国や日本にもあらわれ、貿易や布教に活動するようになった。

イエズス会のフランシスコ＝ザビエルは、日本に布教したのち、中国にわたろうとして、中国南方の島で病死した。そのあと、イタリア人のマテオ＝リッチらが中国にやってきたが、中国ではキリスト教に改宗する者はすくなく、中国人は、宣教師たちがつたえたヨーロッパの科学、とくに数学・天文学・地理学・砲術などに、興味をしめした。

実用的・民衆的な文化

一七世紀前半の中国では、絵入りで農業・工業・鉱業の技術を説明した『天工開物』をはじめ、多くの科学技術書ができた。民衆の力が向上した明代には、このような実用的な書物が、よく読まれたのである。

中国を代表する長編の口語小説、『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』などが、民間でひろく読まれるようになったのも、この時代である。

支配層の学問の儒教でも、一六世紀のはじめ、王陽明がでて、実行をおもんじる陽明学をはじめた。これは、朱子学とともに、江戸時代の日本にも影響をあたえた。

ヨーロッパの近代化

スペインとポルトガル

スペインやポルトガルのあるイベリア半島は、八世紀にイスラムに支配されてから、イスラム文化がさかえていた。

しかし、一一世紀以後、キリスト教徒による国土回復運動がおこされ、しだいにイスラム教徒を駆逐して、ここにポルトガル王国とスペイン王国の二王国がうまれた。両国とも、王権を中心に、一つにまとまっていたが、ポルトガルは、とりわけ、海外に雄飛しようとつとめていた。

一五世紀のポルトガル王国に、エンリケ航海王子という人がでて、とくに探検や航海術の研究に熱心であったことから、ポルトガルは、アフリカの西海岸の探検を、国の力でおこなっていた。

大航海時代

第三巻でふれたように、羅針盤の発明や造船技術の発達によって、帆船がひろくもちいられはじめていたが、ヨーロッパ人は、一四八八年には、ついにアフリカ南端の喜望峰にたっした。

ポルトガルがこのようにして、アジアを目前にしていたころ、スペインでは、カスティーリャの女王イサベラが、イタリア人のコロンブスに三せきの船をあたえ、大西洋を西へむかうことによって、アジアにおもむく試みがなされた。地球がまるいということが、ようやく信じられはじめていた。

一四九二年、コロンブスは、アメリカ大陸の一部であるカリブ海の島に到着した。彼は、そこがインドであると信じていた。しかし、もとめていた香料はみつからず、アメリカ=インディアンの吸っていたタバコなどをもちかえった。

いっぽう、ポルトガルは、一四九八年に、バスコ=ダ=ガマがインドのカリカットに到着し、インド航路は、ついにポルトガルのものとなった。中世いらい、ヨーロッパ人がほしがっていた香料を、ヨーロッパ人の手で直接もちかえることができるようになった。香料貿易を独占したポルトガルは、これまで繁栄していた地中

バスコ=ダ=ガマ（1469～1524）

海のイタリア諸都市にかわって、貿易の中心となった。

さらにポルトガルは、インドのゴアを占領して、東洋貿易の根拠地とし、東進して、マラッカ海峡を支配下においた。マラッカは、当時、東南アジアの貿易にもっとも重要な所であった。

いっぽう、アジア貿易でおくれをとったスペインは、一五一九年、マゼランに命じて、大西洋を横断し、南アメリカの南端をまわって太平洋にでる、世界一周の航路の探査をおこなわせた。マゼランは、フィリピンに到着し、ここで殺されたが、彼の部下は、ついに故国へたどりつき、ここに人類ははじめて、世界周航に成功した。フィリピンはスペインのアジア貿易の根拠地となった。

日本とヨーロッパ

ヨーロッパ人の大航海時代の開始より一〇〇年ほどふるくから、日本人は、海上で活躍していた（→P66）。倭寇とよばれた海賊が、朝鮮半島から、中国の沿岸に出没していた。また、中国も明の初期に、鄭和にひきいられた大艦隊が、東南アジアから東アフリカにかけて遠征したことがある。

ヨーロッパ人が、東南アジアに進出してきたころ、日本人も、おなじく東南アジアに進出していたから、ヨーロッパ人も、日本の名は、いちはやく耳にした。日本に最初に到着したのはポルトガルの船で、これが鉄砲伝来の年にあたる一五四三年のことである（→P44）。

宗教改革の時代

ヨーロッパの大航海時代は、東洋の香料をもとめる商業的な動機のほかに、キリスト教の布教という宗教的な熱情に根ざしていたことも、特色の一つである。

ポルトガル船が種子島に漂着してから六年後の一五四九年に、フランシスコ=ザビエルという、イエズス会の宣教師が、鹿児島へきたのも、日本にキリスト教をひろめようとしたからであった。日本だけでなく、中国や東南アジア・新大陸に、多くの宣教師がわたっていた。ここでヨーロッパの宗教界の事情について、ふれておこう。

中世のヨーロッパを支配したローマ教会については、その腐敗と堕落を非難するさまざまな批判が生じていた。一五世紀のはじめころから、教会内部で、改革のための会議が何回

かひらかれたが、いずれも失敗におわった。このローマ教会にたいして、ルネサンス期の人文主義者とよばれた人びとが、するどい批判をくわえていた。彼らは、聖書研究をとおして、ローマ教会のありかたを批判したのである。

ところが、一五一七年、ドイツの大学の神学教授であったマルチン＝ルターが、当時ローマ教会が、ローマの聖ピエトロ寺院の改築のために販売していた免罪符を批判して、九五か条にわたる公開討論状を発表したことから、いわゆる宗教改革がはじまった。

ルターの考えかたは、人文主義者とはことなり、ローマ教会の教義を否定するものであった。このルター改革は、当時のドイツの政治的なうごきともつながり、ルターを支持するドイツ諸侯と、ローマ教会を支持する皇帝がわの対立に、発展していった。これに、民衆のうごきがくわわって、宗教改革は、ヨーロッパの大きな社会問題となった。

さらに、ジョン＝カルビンという、あたらしい宗教改革者が、スイスのジュネーブで運動をおこし、それがフランスやオランダへとひろがったので、ヨーロッパのキリスト教界は二分され、対立が深刻化した。

日本にやってきたザビエルは、ローマ教会がわにたつイエズス会の会士である。宗教改革で窮地にたったローマ教会のなかにあって、その刷新と、新天地への布教をめざしたのが、イエズス会創立の趣旨であった。ヨーロッパで批判の多かったローマ教会も、このあたらしいイエズス会の活躍で、たち直りをみせ、新大陸やアジアでは布教に成功した。イエズス会がすぐれた人材を擁していたことによるのである（↓P70）。

宗教改革　ルターと教皇とカルビンが，あいあらそっている風刺画。

ヨーロッパ諸国の盛衰　大航海時代のはじまりとともに、東方貿易を独占して繁栄したポルトガルは、中継貿易に終始し、国内の産業が未発達であった。そのため、国内はインフレーションでくるしみ、おとろえて

いった。

かわって、スペインが登場する。スペインの支配した新大陸で、大量の銀が発見され、これがスペインの繁栄のもととなった。しかも、これまでヨーロッパをおびやかしていたオスマン＝トルコの艦隊を、一五七一年レパント沖でやぶり、スペイン無敵艦隊は、ヨーロッパ最強の艦隊となった。スペインは、当時のヨーロッパでもっとも商工業の発達していた、オランダ・ベルギー地方をも支配していたので、その繁栄は、ゆるがないようにおもわれた。

アルマダの海戦　1588年，無敵艦隊はドレイクらのひきいる英国艦隊にやぶられた。

しかし、さきほどふれた宗教改革の影響で、オランダはカルビン派が多くなり、スペインのローマ教会がわにたつ政策と衝突した。オランダは独立戦争にふみきった。ローマ教会と絶縁して独自の宗教改革をおこなったイギリスも、スペインと対立し、一五八八年、スペイン無敵艦隊を、よもやとおもわれた小艦隊でやぶり、壊滅させた。

その後、オランダ・イギリスが台頭しはじめる。とくにオランダは、一六〇二年、東インド会社をつくって東洋貿易にのりだし、ポルトガルを駆逐し、日本との貿易をも独占するまでにいたった。東洋における貿易では、日本との交易がもっとも利益の多いものであったから、これをうしなったポルトガルの衰退は、みじめであった。

日本・世界の歴史年表

(1) 太字は、日本歴史のうえで、とくに重要なことがらをしめす。
(2) 天皇・年号は、とくにことがらに関係あるものだけをとりあげた。

社会	年	時代
原始社会	紀元1	弥生
	200	
古代社会	400	古墳
	600	飛鳥
		奈良
	800	平安
	1000	
	1100	
封建社会（前期）	1200	鎌倉
	1300	南北朝
	1400	室町
	1500	安土桃山
封建社会（後期）	1600	江戸
	1700	
	1800	
近・現代社会	1900	現代

西暦	日本年号	天皇	将軍	日本
一四六七	応仁 一	後土御門	義政	**応仁の乱おこる**（〜一四七七）〔日明貿易により、明から銅銭が多く輸入される〕
一四八五	文明 一七		義尚	**山城に国一揆がおこり**（〜一四九三）、国人を中心に自治をおこなう
一四八八	長享 二			**加賀の一向一揆にせめられ**、守護富樫政親が敗死する
一四八九	延徳 一			足利義政が銀閣をたてる
一四九一	三		義稙	伊勢長氏（北条早雲）が伊豆を占領する
一四九五	明応 四		義澄	宗祇が『新撰菟玖波集』をだす
一四九九	八			蓮如が死ぬ 京都の龍安寺の石庭ができる 〔このころ土一揆が各地でおこる〕

中国：明
朝鮮：朝鮮

世界

- 一四八八　バーソロミュー＝ディアズが喜望峰を発見する
- 一四九二　コロンブスが新大陸を発見する
- 一四九八　バスコ＝ダ＝ガマがインド航路を発見する
- 一四九九　アメリゴ＝ベスプッチが南アメリカを発見する
- 〔このころ、レオナルド＝ダ＝ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロらが活躍〕

西暦	日本年号	天皇	将軍	日本
				〔このころ城下町が各地にできる〕
一五三六	天文 五	後奈良	義晴	天文法華の乱がおこる
一五四三	一二			〔このころから日本の銀産出量がふえる〕 **ポルトガル船が種子島に漂着、鉄砲をつたえる**
一五四七	一六		義輝	武田信玄が「甲州法度之次第」をさだめる
一五四九	一八			**フランシスコ＝ザビエルが鹿児島にきて、キリスト教をつたえる**
一五五二	二一			細川晴元が部将の三好長慶に追われる
一五五三	二二			**信濃の川中島で武田信玄と上杉謙信がたたかう**（一五六四年まで五回）
一五五五	弘治 一			〔このころまた倭寇の活動がさかんとなる〕 毛利元就が厳島に陶晴賢を急襲し、ほろぼす 〔堺などで鉄砲の製造がさかんとなり、町がおおいにさかえる〕
一五六〇	永禄 三	正親町		**尾張の桶狭間で織田信長が今川義元をやぶる**
一五六七	一〇			ポルトガル船が長崎に来航する 松永久秀が三好三人衆を東大寺にやぶる
一五六八	一一		義栄	信長が足利義昭を奉じて上京する
一五六九	一二		義昭	信長が宣教師ルイス＝フロイスの京都居住をみとめる 信長が関所を撤廃する

中国：明
朝鮮：朝鮮

世界

- 一五一〇　ポルトガル人がゴアを占領する
- 一五一七　ルターが宗教改革をとなえる
- 一五一九　マゼラン一行が世界一周にでかける
- 一五二六　ムガール帝国がインドにおこる
- 一五四一　カルビンが宗教改革をとなえる
- 一五四三　コペルニクスが地動説を発表する
- 一五五八　イギリスのエリザベス一世が即位する
- 一五六六　ポルトガル人がマカオ市を建設する
- 一五六八　オランダ独立戦争がはじまる

西暦	日本年号	天皇	将軍	日本	中国	朝鮮	世界
一五七〇	元亀 一		義昭	信長が姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍をやぶる	明	朝鮮	
一五七一	二			信長が比叡山を焼きうちする			一五七一　スペインがマニラに東洋貿易の根拠地をおく。レパントの海戦で、スペインを中心とする艦隊がトルコをやぶる
一五七三	天正 一			室町幕府がほろぶ。信長が浅井・朝倉氏をほろぼす			
一五七四	二			信長が伊勢長島の一向一揆を鎮圧する			
一五七五	三			**信長が三河の長篠に武田軍をやぶる**			
一五七六	四			信長が安土城をきずき、ここにうつる			
一五七七	五			信長が安土城下を楽市とする			
一五八〇	八			石山本願寺が降伏し、一向一揆が鎮圧される			一五八〇　スペイン王フェリペ二世が、ポルトガルを併合する
一五八二	一〇			**信長が本能寺で明智光秀のために殺される** 豊臣秀吉が山崎の戦いで明智光秀をほろぼす **秀吉が山城の検地をおこなう** 九州の大友・大村・有馬の三キリシタン大名が少年使節をローマ法王へ派遣する（天正の遣欧使節）			一五八一　オランダがスペインから独立を宣言する ガリレイ、振子の等時性の原理を発見
一五八三	一一			秀吉が近江の賤ケ嶽の戦いで柴田勝家をほろぼす 秀吉が大坂城にうつる			
一五八四	一二			徳川家康が秀吉を尾張の小牧・長久手でやぶる			
一五八五	一三			**秀吉が関白となる**			
一五八六	一四	後陽成		秀吉が太政大臣となり、豊臣の姓をうける			

西暦	日本年号	天皇	将軍	日本	中国	朝鮮	世界
一五八七	一五			秀吉が九州を平定する 秀吉がキリスト教の布教を禁止する	明	朝鮮	
一五八八	一六			後陽成天皇が聚楽第に行幸する **秀吉が刀狩をおこない**、海賊禁止令をだす 天正大判が鋳造される			一五八八　イギリスがスペインの無敵艦隊をやぶる
一五八九	一七			秀吉が朝鮮に来貢をうながす			
一五九〇	一八			**秀吉が小田原の北条氏をほろぼし、全国の統一をなしとげる**。徳川家康が関東にうつり、江戸城にはいる 天正の遣欧使節が帰国する。印刷機がつたわる			
一五九一	一九			千利休が自殺する 秀吉が諸国の検地をおこなう 秀吉が武士と百姓・町人の身分のちがいをさだめる			
一五九二	文禄 一			秀吉がフィリピンに来貢をうながす **秀吉が朝鮮出兵をおこなう（文禄の役）** 〔このころふすま絵・屏風絵がさかんにつくられる〕 〔このころ茶の湯が完成する〕			一五九三　ヌルハチが中国東北部を統一する
一五九五	四			マニラの近郊ディラオに日本町が建設される 秀吉がおいの関白秀次を自殺させる			一五九五　オランダ人がジャワ島にくる
一五九六	慶長 一			秀吉がキリスト教徒二六人を長崎で処刑する			
一五九七	二			**秀吉がふたたび朝鮮出兵をおこなう（慶長の役）**			

西暦	日本年号	天皇	将軍	日本	中国	朝鮮	世界
一五九八	慶長三			秀吉が死んで、朝鮮から兵をひきあげる	明	朝鮮	一六〇〇　イギリスが東インド会社をつくる
一六〇〇	五			**徳川家康が関ケ原の戦いで石田三成らの西軍をやぶる** オランダ船リーフデ号が豊後に漂着する			一六〇一　マテオ＝リッチが北京にはいる
一六〇一	六			家康が東海道に伝馬制度をもうける。また、慶長金銀を鋳造させる。**朱印船制度をさだめる**			一六〇二　オランダが東インド会社をつくる
一六〇三	八		家康	家康が征夷大将軍となり、**江戸幕府をひらく** 出雲の阿国が歌舞伎をはじめる			一六〇四　フランスが東インド会社をつくる
一六〇九	一四		秀忠	島津氏が琉球を征服する オランダが平戸で貿易をはじめる			一六〇九　ガリレイ、望遠鏡を発明
一六一二	一七	後水尾		幕府がキリスト教を禁止する 〔このころ朱子学がさかんとなる〕			
一六一三	一八			イギリスが平戸で貿易をはじめる 伊達政宗の遣欧使節として支倉常長らが出発する			〔このころ、シェイクスピアが作品をつぎつぎに発表する〕
一六一四	一九			大坂冬の陣がおこる 高山右近らキリシタン一四八名がマニラ、マカオに追放される			
一六一五	元和一			**大坂夏の陣がおこり、豊臣氏がほろぶ** 幕府が「**武家諸法度**」・「禁中並公家諸法度」・「諸宗			

西暦	日本年号	天皇	将軍	日本	中国	朝鮮	世界
				諸本山諸法度」をさだめる	明（みん）・後金（こうきん）・清（しん）	朝鮮	
一六一六	二			ヨーロッパ船の来航を平戸・長崎に制限する			一六一六　ヌルハチが位につき後金（のちの清）をおこす
一六一七	三			日光の東照宮ができる			
一六二〇	六			秀忠の娘和子（のちの東福門院）が入内する			一六一八　三十年戦争（～四九）
一六二三	九		家光	イギリスが平戸の商館を閉鎖する 〔このころから処刑されるキリシタンがふえる〕			一六一九　オランダ、ジャワ総督をおき、バタビヤ市を建設する
一六二四	寛永一			スペイン人の来航を禁止する			
一六三〇	七	明正		山田長政がシャムで毒殺される			一六二〇　イギリスの清教徒が北アメリカに移住する
一六三一	八			**海外渡航船に朱印状のほかに奉書を交付する**			
一六三三	一〇			奉書船以外の海外渡航を禁止し、海外渡航者の帰国を制限する			一六二七　後金、朝鮮に侵入 一六二八　イギリスで「権利請願」がだされる
一六三五	一二			すべての日本船の渡航を禁止し、帰国者は死刑とする 「**武家諸法度**」**の改訂で、参勤交代制が確立する**			一六三二　インドのタージ＝マハルの築造がはじまる
一六三六	一三			ポルトガル人を出島にうつす			
一六三七	一四			**島原の乱がおこる**（～一六三八）			一六三六　後金が大清国とあらため、朝鮮を服属させる
一六三九	一六			ポルトガル人の来航を禁止する（**鎖国**）			
一六四一	一八			オランダ商館を平戸から長崎にうつす			一六四二　イギリスで清教徒革命がおこる（～四九）
一六四二	一九			冷害凶作のために大飢饉がおこる			
一六四三	二〇	後光明		「田畑永代売買禁止令」をさだめる			一六四四　明がほろびる
一六四九	慶安二			「慶安の御触書」がだされる			

■愛　知　県

愛知県農業総合試験場農業民俗館〈歴史・民俗〉　〒480-11　愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峰　☎05616-2-0085

医王寺民俗資料館〈民俗〉　〒441-16　南設楽郡鳳来町長篠字弥陀前　☎05363-2-0136　休無休

一宮町郷土資料館〈民俗〉　〒441-12　宝飯郡一宮町大字一宮字上新切31　☎053393-3111　休月・水・金

犬山城〈歴史〉　〒484　犬山市北古券65-2　☎0568-61-1711

伊良湖自然科学博物館〈民俗〉　〒441-36　渥美郡渥美町大字伊良湖字宮下3000-65　☎05313-5-6631　休無休

岡崎市郷土館　〒444　岡崎市朝日町3-36　☎0564-23-1039　休月・祝

岡崎城〈歴史〉　〒444　岡崎市康生町　☎0564-22-2122

奥三河郷土館〈考古・民俗〉　〒441-23　北設楽郡設楽町大字アラコ15　☎05366-2-1440　休火

切支丹遺蹟博物館〈歴史〉　〒460　名古屋市中区橘1-21　☎052-321-5307　休月

小牧市歴史館（小牧城）〈歴史〉　〒485　小牧市大字小牧633-1　☎0568-72-2101

瀬戸市歴史民俗資料館〈考古・民俗〉　〒489　瀬戸市東松山町　☎0561-82-0687　休日・祭

田原町郷土博物館（崋山文庫）〈歴史〉　〒441-34　渥美郡田原町大字田原字巴江12-1　☎05312-2-1700　休月・祝翌

津具村立民俗資料館〈民俗〉　〒441-26　北設楽郡津具村字見出原　☎053683-2304　休日・祝

東栄博物館　〒449-02　北設楽郡東栄町大字本郷字大森1　☎05367-6-0437

徳川美術館〈歴史〉　〒461　名古屋市東区徳川町　☎052-935-6262　休月

豊田市郷土資料館　〒471　豊田市陣中町1-21　☎0565-32-6561　休月・祝

名古屋市蓬左文庫〈歴史〉　〒461　名古屋市東区徳川町2　☎052-935-2173　休月・祝

〃　豊清二公顕彰館〈歴史〉　〒453　名古屋市中村区中村町字茶の木　☎052-411-0035　休火

博物館明治村〈歴史〉　〒484　犬山市字内山1　☎0568-67-0314　休無休

鳳来町立長篠城趾史跡保存館〈歴史〉　〒441-16　南設楽郡鳳来町長篠字市場22　☎05363-2-0162　休無休

■三　重　県

伊賀流忍者屋敷〈歴史〉　〒518　上野市丸之内　上野公園内　☎05952-3-0311

海の博物館〈民俗〉　〒517　鳥羽市鳥羽1-23　☎05992-5-5141　休6/28〜6/30

神宮徴古館農業館〈歴史・民俗〉　〒516　伊勢市倉田山　☎0596-22-1700　休月（祝日は開館）

芭蕉翁記念館〈歴史〉　〒518　上野市丸之内117　☎05952-2-2219　休月・祝翌

三重県立博物館　〒514　津市広明町147　☎0592-28-2283　休月・祝翌・月末日

本居宣長記念館〈歴史〉　〒515　松阪市殿町1536　松阪城跡内　☎0598-21-0312　休月・祝翌

四日市市立郷土資料庫〈考古〉　〒510　四日市市日永東1-2　☎0593-46-1817　休火・祝

■滋　賀　県

井伊美術館〈歴史〉　〒522　彦根市金亀町　彦根城内　☎07492-2-5657　休12/20〜12/31

近江神宮時計博物館〈歴史〉　〒520　大津市神宮町　☎0775-22-3725　休無休

近江八幡市立郷土資料館〈歴史・民俗〉　〒523　近江八幡市新町2丁目　☎07483-2-7048　休月・水（午後）

滋賀県立近江風土記の丘資料館〈考古〉　〒521-13　蒲生郡安土町大字下豊浦　☎074846-2424　休月

〃　琵琶湖文化館〈歴史・考古〉　〒520　大津市打出浜　☎0775-22-8179

七りん館〈民俗〉　〒526　東浅井郡浅井町鍛冶屋677　☎07497-6-0455　休降雪期

彦根市開国記念館〈歴史・民俗〉　〒522　彦根市金亀町3-2　☎07492-2-2742　休無休

豊会館〈歴史・民俗〉　〒529-11　犬上郡豊郷町下枝56　☎0749-35-2356　休金

■京　都　府

京都国立博物館　〒605　京都市東山区茶屋町527　☎075-541-1151　休月

京都府立総合資料館〈歴史・民俗〉　〒606　京都市左京区下鴨半木町　☎075-781-9101　休日・祝

〃　丹後郷土資料館　〒629-22　宮津市国分　☎07722-7-0230　休月

金比羅絵馬館〈歴史・民俗〉　〒605　京都市東山区東大路松原上ル下弁天町70　☎075-561-5127　休月（祝日は開館）

じゅらく染織資料館〈歴史〉　〒602　京都市上京区寺之内通り新町東入ル　☎075-441-4141　休日・祝

豊国神社宝物館〈歴史〉　〒605　京都市東山区大和大路正面茶屋町530　☎075-561-3802　休無休

西陣織会館〈歴史〉　〒602　京都市上京区堀川通今出川下ル　☎075-451-9231　休無休

風俗博物館〈歴史〉　〒600　京都市下京区堀川通新花屋町角　☎075-351-6750　休月

平安博物館〈考古・歴史〉　〒604　京都市中京区三条通高倉角　☎075-222-0888　休月

第5巻には，大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県・鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県がのります。

☆ 歴史の勉強に役だつ，身近の博物館と資料館 (4)

＝この表の見かた＝① 館名のあとの〈 〉は，どの分野を中心におさめられているかを，あらわす。なにも書いていない館は，全分野にわたる。

② 休は，休館日。無休と書いてある館以外は，年末年始は休館する。祝翌は，祝日の翌日は休館の意味である。

■岐　阜　県

揖斐川町立郷土資料館〈歴史・民俗〉 〒501-06 揖斐郡揖斐川町三輪1300 ☎05852-2-0219 休月・祝

岩村町郷土館〈歴史〉 〒509-74 恵那郡岩村町99 ☎057343-3057

大垣城郷土博物館〈歴史〉 〒503 大垣市郭町2-13 大垣公園内 ☎0584-78-7907 休月・祝翌

大野町民俗資料館〈民俗〉 〒501-05 揖斐郡大野町黒野 ☎05853-2-0675 休日・祭

奥美濃郷土館〈民俗〉 〒501-42 郡上郡八幡町柳町一の平485 城山公園内 ☎05756-5-3916 休平日（8月は無休）・12月

可児郷土歴史館〈歴史・考古〉 〒509-02 可児郡可児町久々利 ☎05746-4-1120 休月・祝翌

岐阜県陶磁器陳列館〈歴史〉 〒507 多治見市陶元町 ☎0572-23-1191 休月・祝翌

〃　博物館〈歴史〉 〒501-32 関市小屋名 岐阜県百年公園内 ☎05752-8-3111 休月・祝翌

岐阜県立歴史資料館〈民俗〉 〒500 岐阜市夕陽ケ丘 ☎0582-63-6678 休土(午後)・日・祝

岐阜城・岐阜城資料館〈歴史〉 〒500 岐阜市金華山山頂 ☎0582-63-4853 休無休

旧遠山家民俗館〈民俗〉 〒501-55 大野郡白川村御母衣125 ☎057695-62 休無休

郷土玩具館〈民俗〉 〒506 高山市上一之町33-2 ☎0577-32-1183

日下部民芸館〈民俗〉 〒506 高山市大新町1-52 ☎0577-32-0072 休金（$^{12}/_{1}$〜$^{2}/_{28}$）

下呂温泉合掌村〈民俗〉 〒509-22 益田郡下呂町森字柿ケ平 ☎05762-5-2239 休無休

国府町歴史民俗資料館〈考古・民俗〉 〒509-41 吉城郡国府町西門前 ☎057772-3111 休月〜金，11〜3月

春慶会館〈民俗〉 〒506 高山市神田町1 ☎0577-32-3373〜5 休無休

白川郷合掌村〈民俗〉 〒501-56 大野郡白川村鳩谷 ☎057696-1 休無休

関ケ原ウォーランド〈歴史〉 〒503-15 不破郡関ケ原町 ☎05844-2-0302

関ケ原町立郷土館〈歴史・考古〉 〒503-15 不破郡関ケ原町2674 ☎05844-2-1289 休月

高原郷土館〈歴史〉 〒506-11 吉城郡神岡町城ケ丘 ☎0578-2-0253

高山市郷土館〈歴史・民俗〉 〒506 高山市上一之町75 ☎0577-32-1205 休日・祝

高山陣屋〈歴史〉 〒506 高山市八軒町1-5 ☎0577-32-0643 休水

〃　屋台会館〈民俗〉 〒506 高山市桜町178 ☎0577-32-5100 休無休

内藤記念くすり博物館〈歴史〉 〒483 羽島郡川島町 エーザイ川島工園内 ☎058689-3111（内線540） 休月

八幡城〈歴史〉 〒501-42 郡上郡八幡町島谷524-6 ☎05756-7-1122 休$^{12}/_{1}$〜$^{2}/_{28}$

飛騨工匠館〈民俗〉 〒506 高山市大新町1-98 ☎0577-33-1837 休木（$^{12}/_{1}$〜$^{2}/_{28}$）

飛騨民俗考古館〈考古・民俗〉 〒506 高山市上三之町82 ☎0577-32-1980 休無休

飛騨民俗村〈民俗〉 〒506 高山市上岡本町2680 ☎0577-33-4714

峰一合遺跡中部山岳考古館〈考古〉 〒509-22 益田郡下呂町森字峰一合1808 ☎05762-5-4174 休無休

明方村立博物館〈民俗〉 〒501-43 郡上郡明方村気良 ☎057587-2119 休日・祝翌

民俗資料館荘川の里〈民俗〉 〒501-54 大野郡荘川村新淵 ☎05769-2-2681 休木・$^{12}/_{1}$〜$^{3}/_{31}$

■静　岡　県

新居町関所史料館〈歴史〉 〒431-03 浜名郡新居町 ☎05359-4-3615 休月・祝翌

伊豆長岡町郷土資料館〈歴史・民俗〉 〒410-22 田方郡伊豆長岡町260 ☎05594-8-6190 休無休

磐田市立郷土館〈歴史・考古〉 〒438 磐田市馬場町2452 ☎05383-2-4511 休火・第3日曜・祝

久能山東照宮博物館〈歴史〉 〒422 静岡市根古屋390 ☎0542-37-2437 休無休

静岡市立登呂博物館〈考古〉 〒422 静岡市登呂5-10-5 ☎0542-85-0476 休月・祝翌・月末日

下田開港記念館〈歴史〉 〒415 下田市東本郷1-3-2 ☎05582-2-1211 休無休

韮山町立郷土史料館〈歴史・考古〉 〒410-21 田方郡韮山町韮山2 ☎05594-8-0127

沼津市歴史民俗資料陳列館 〒410 沼津市下香貫島郷2802-1 沼津御用邸記念公園内 ☎0559-32-6266〜7 休月・祝翌・月末日

浜松市伊場遺跡資料館〈歴史・考古〉 〒430 浜松市伊場町2-22-1 ☎0534-54-1485 休月・祝翌・$^{7}/_{1}$

浜松市立郷土博物館〈歴史・考古〉 〒430 浜松市元城町49-2 ☎0534-53-3872

〃　蜆塚分館〈考古〉 〒432 浜松市蜆塚4-22 ☎0534-53-4387 休月・祝翌・$^{7}/_{1}$

戸田村立造船郷土資料博物館〈歴史〉 〒410-34 田方郡戸田村御浜 ☎055894-2384 休無休

三島市郷土館〈歴史・民俗〉 〒411 三島市一番町19-3 楽寿園内 ☎0559-71-8228 休第1木曜

は 行

ま 行

や 行

ら 行

わ 行

た　行

な　行

か　行

さ　行

ジュニア 日本の歴史

第 4 巻

戦国の争い

1978年10月10日 初版第1刷発行
1982年4月20日 第8刷発行

定価は ケースに
表示してあります。

執筆者 朝尾直弘
藤井学
北島万次
池上彰彦

発行者 相賀徹夫
特漉本文用紙 王子製紙株式会社
印刷・製本 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館
〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
振替口座 東京 8-200番
電話 編集 東京 03-230-5686
製作 東京 03-230-5333
販売 東京 03-230-5739

6321-293004-3068

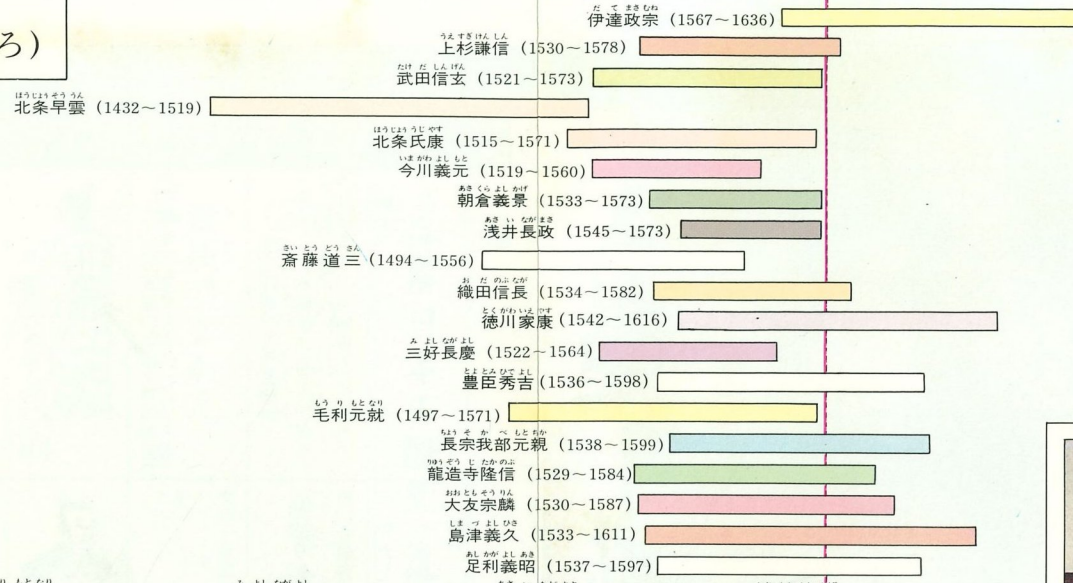
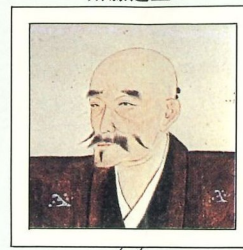
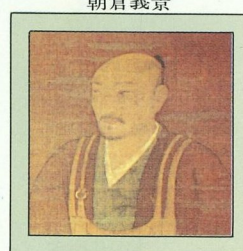
さくいん

・太い数字は，くわしい説明のあるページをしめす。
・＊印は，写真・図版のあるページをしめす。
・歴史上の人物には，生没年をいれた。
・──→印は，別の項目であつかったことをしめす。
・⇨印は，関連項目をしめす。

あ 行

生活文化史年表(4)—室町時代後期〜江戸時代初期

世紀	15	16	17
時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代
衣服と服装	武士の服装 直垂にかわって、肩衣がもちいられる (小袖に肩衣袴) 木綿がひろくもちいられるようになる 身分による服装のちがいがせばまり、小袖中心になる 武士 小袖に袴 女子 小袖	(小袖に腰巻) (小袖被) 毛織物が輸入される 金襴・緞子・ビロード	南蛮風の服装がはいってくる マント・カッパ・カルサン (南蛮(ポルトガル,スペイン)人)
食物	貴族の食事 一日三食となる 戦国大名の食事 玄米食・鳥けもの肉・野菜 携行食—乾飯・味噌 (一汁三菜) 庶民の食事 一日二食に間食がくわわる。 ただし、仕事によって食事の回数もことなる 雑炊・菜飯・汁かけ飯	京の町に飯屋ができる (飯屋) 茶をのませる店や、立売りの茶屋ができる (立売り茶屋)	貴族や上級武士のあいだで、調味料に油・砂糖がもちいられる てんぷら風の料理もできる 南蛮風のカステラ・コンペイトウ・ぶどう酒など 農村でも、うどん・ひやむぎをたべるようになる
住居	戦国大名の館・城 山の上に城、ふもとに町 京に町家(店)が多くならぶ (町家) 大名の城 山城から平城にかわる 小田原などの城下町ができる	安土城がつくられる 七層の天守閣 (安土城) 南蛮寺(三階)が京にできる (南蛮寺)	江戸の町づくりがすすむ (江戸の市街)
風俗・生活	土一揆・一向一揆が、各地でしばしばおこる 全国的に飢饉がしばしばおこる 鉄砲がつかわれる (鉄砲足軽) キリスト教がひろまる 南蛮貿易がさかんにおこなわれる	(朱印船) 全国に、統一された検地(太閤検地)がおこなわれる。農民と土地が村ごとにまとめられる (農民)	煙草(きざみ)が、九州から京・江戸にひろまる かぶき踊りが流行する (歌舞伎踊り)

＊この表は、本巻で書かれている時代の生活や文化の代表的うつりかわりをまとめたものです。

戦国の群雄（1575年ごろ）
地図は，1575年(天正３年)，織田信長・徳川家康の連合軍が，三河長篠に武田勝頼をやぶったころの，全国の大名の領国をあらわしている。◎でかこんだ武将は当時活躍中の人物，□は，すでに死亡している武将。
1400年
1450
1500
1550
1575
1600
1650
伊達政宗（1567～1636）
上杉謙信（1530～1578）
武田信玄（1521～1573）
北条早雲（1432～1519）
北条氏康（1515～1571）
今川義元（1519～1560）
朝倉義景（1533～1573）
浅井長政（1545～1573）
斎藤道三（1494～1556）
織田信長（1534～1582）
徳川家康（1542～1616）
三好長慶（1522～1564）
豊臣秀吉（1536～1598）
毛利元就（1497～1571）
長宗我部元親（1538～1599）
龍造寺隆信（1529～1584）
大友宗麟（1530～1587）
島津義久（1533～1611）
足利義昭（1537～1597）
毛利元就
三好長慶
浅井長政
朝倉義景
斎藤道三
龍造寺隆信
大友宗麟
島津義久
織田信長
徳川家康
今川義元
武田信玄
北条早雲
伊達政宗
上杉謙信
浪岡
南部
秋田
斯波
小野寺
葛西
武藤
最上
大崎
上杉
伊達
畠山
相馬
芦名
田村
岩城
宇都宮
佐竹
小田
古河公方
江戸
北条
千葉
里見
畠山
富樫
一向一揆
椎名
神保
村上
朝倉
武田
三木
小笠原
諏訪
浅井
織田
木曽
武田
徳川
今川
吉良
神戸
北畠
筒井
松永
滝川
関
六角
京
波多野
赤松
宇喜多
山名
尼子
毛利
三好
十河
河野
長宗我部
一条
畠山
城井
松浦
龍造寺
大村
大友
有馬
相良
伊東
島津